

七武海ですが麦わらの一味に入れますか？

赤坂緑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

野生の転生オリ主七武海が麦わらの一味に入りたそうにこつちを見ている………！

目次

王下七武海加入編

天竜人に嫌われたけど生きられますか？	1
悪魔の実が当たりだったので調子に乗っていいですか？	5
調子に乗ってしまいましたですが命は助けてくれませんか？	12
何でもするのでいい加減に助けてくれませんか？	18
海軍サイド：今後の方針	26
色々やらかしましたが七武海入れてくれますよね？	33
先輩は後輩のお願いを聞くものですよ？	43
男には仕事よりも大事なことがありますよね？	48
俺に勝てるのか思っていないですよ？	57

王下七武海 怪物キリア	67
-------------	----

番外編

人物設定	79
モネの恋【前編】	83
モネの恋【後編】	91

ワノ国編

お酒が全部悪いですよ？	100
暴力は良くないですよ？	109
憧れは止められないですよ？	123
勘違いは良くないですよ？	136
修羅場とかお呼びじゃないですよ？	146
修業は少年漫画の基本ですよ？	155
四皇 百獣のカイドウ	172
伝説の男	188

鬼の子、人の子

—————

207

人に迷惑掛けちゃいけませんよね？

—————

229

どうせ皆さん暇なんでしょ？

—————

245

海賊女帝ボア・ハンコック

—————

260

七人の海賊

—————

277

開戦

—————

290

王下七武海加入編

天竜人に嫌われたけど生きられますか？

憧れであるワンピースの世界に転生したと気が付いたのは、父が「天竜人」に殺されたという一報を受けた瞬間のことだった。

それまでなんかぼんやりしていた頭がはつきりと覚醒し、「えっ、ここワンピ？」なんて間抜けな感想を呟いたことを覚えている。

この世界の父はごく普通の会計士であり、ごく普通の人格者だった。

母も普通の人で、父が巨大カンパニーの会計士ということもあつてか専業主婦をしており、それなりに裕福な家庭だったと思う。

間もなく弟も生まれようかという平和な一般家庭。

だが、そんな平和は一瞬でぶち壊された。

先程も言ったように父が天竜人に殺されたのだ。

詳細は俺も知らないが、父はあろうことか天竜人の機嫌をえらく損ねてしまったらしく、その場で処刑を言い渡されて銃で頭を撃ちぬかれたそうだ。

そこまではいい。いや、全然良くないが、この世界では父の方が悪いことになるのだから、天災に巻き込まれたとして割り切ることもできた。

だが、よほどヤバいことをしてしまったのか、父を殺したにも関わらず天竜人の機嫌は一向に治らず、その場で宣言してしまったのだ。
一族郎党皆殺しを。

そこからは正に地獄だった。俺たちは何も悪いことをしていないのに、適当な罪状で海軍に命を狙われ続ける日々。

中には「こんな理不尽がまかり通るなんて許せない！」って言うてこつそり逃がしてくれる人の良い海兵もいたが、大多数の海兵は上からの命令に従うだけの兵士だ。

まず、祖父母が速攻で殺された。

親戚も全員殺された。まだ十歳にもなっていない従妹も殺された。

一緒に逃げていた母もあっさり殺された。

もちろん、お腹の中にいた俺の弟もこの世に生を受けることは叶わなかった。

俺はその当時8歳。

何も知らない餓鬼だったらそのまま捕まって殺されていただろうが、生憎と中身は世界こそ違うもののそれなりに人生経験を積んでいた青年だ。

幸運が味方してくれたこともあり、何とかギリギリで逃げ回ることが出来ていた。

ある時は海賊団の下っ端として働き、またある時は父から教わっていた会計術と前世の数学知識を利用して幼いながらマフィアの金庫番をやり、またある時は今にも死に掛りで無害そうな物乞いのふりをした。

俺は定期的に自分の容姿を変装で誤魔化し、喋り方も変え、性格も変え、あの手この手であちこちに潜り込んで短期間だけ居座つてすぐに姿を消し、海軍の目を欺き続けた。

ニコ・ロビンではないが、何でもやった。

そうして10年ほど経過したが、まだ海軍は諦めない。

上司（天竜人）の突き上げが激しいのだろう。実際に働いている本人たちはどうでもいいと思っていて、もう他の仕事に労力を割きたいと思っただけでも、上方のつまらないプライドがそれを許してくれない。

前世がサラリーマンだった身の上だから必死の形相で探し回る海兵諸君の気持ちはよくわかる。

まあ、追われる身として敵に同情したところでどうにもならないのだが。

そうやって根無し草の生活を送っていたある日のこと。

俺は滞在先になっていたとあるマフィア組織の中でこの世界恒例のアレと出会うことになる。

「へ、へへへ悪魔の実っすか？」

俺は卑屈さ最優先の笑顔を浮かべながら目の前の気持ち悪い模様

の果実をガン見していた。男はニヤニヤと笑いながらそれを手でもてあそぶ。

「ああ。クソ馬鹿なお前も聞いたことくらいはあるだろ？ 食ったら悪魔みたいな力を手に入れられるかわりに海に嫌われるっていう実さ」

「まあ、聞いたことはあるっすけど……そんな大物がどうしてうちに？ それ、滅茶苦茶高いんですよね？」

「今度の裏オークションに掛けられるんだとよ。だが、勿体ねえよなあ、悪魔の力が手に入るなら俺様が食ってやりたいところだぜ」

食ったら殺す

「で、でも勝手に食ったら親分が怒るんじゃないすかね……？」

「バカが！ わかってるつの！」

痛てて……急に殴るな馬鹿が。

「うちの大事な資産だからよ、しっかり管理を頼むぜ金庫番。まあ、テメエみたいな雑魚に限ってないとは思うが、なくしたり盗んだりしたら——分かってるな？」

「了解っす」

その日の晩、俺はありったけの金と悪魔の実を盗んでから組織を抜けた。

あくどい人身売買と薬物で儲けていたしようもない組織だ。

罪悪感は一切ない。ついでにこれまでの悪行の全てを丁寧に記載したノートを海軍に提出しておいたから、明日から楽しい楽しい組織解体作業が始まることだろう。

この日の為にこっそり購入しておいた小型の船に乗り込み、すっかり慣れた手順で夜の航海を始めながら俺は手元に転がり込んで（盗んで）きた実を天に掲げ、まじまじと眺めた。

悪魔の実は食ったら最後、他の能力と交換は出来ないし、黒ひげのように特殊な事情がない限りは能力を併用することもできない。

黒ひげと同じことが出来るなら問答無用で食うのだが、本編で明らかにされる前に向こうの世界をお陀仏してしまったため、再現性がなく他の実を食うことができないのが現状だ。

「悪魔」の実というだけあって、とんでも能力が手に入るメリットは既に確約されているが……代わりにデメリットもかなり大きい。

「泳げなくなるのはヤバイよな……俺、逃走中の身の上だし」

これまでも気づかれそうになったところを咄嗟に海に飛び込んでやり過ごした経験があるため、逃走手段が一つ消えるのは非常に痛い。

「でも、これを食えば『戦う』っていう選択肢が増えるかもなんだよな……」

何度でも言うが、悪魔の実の力は絶大だ。

例えそれが外れ能力だとしても、ないよりはマシ、という能力の方が多いことを俺は原作知識で知っている。

これを金に換えて新たななる逃亡資金にする手もあるが……これを逃せば一生出会えない気もしている。

「うーん、良し。明日、晴れてたら食おう」

考えるのが面倒になったので思考放棄し、夢の世界へと旅立った。

そして次の日。

空はこれでもかというくらいに晴れていて――

「ええい、ままよー」

俺は勢いのままに悪魔の実をかつ食らったのだった。

もちろんクソ不味かった。

能力？ そりゃあ、もちろん――

悪魔の実が当たりだったので調子に乗っていいですか？

あの悪魔の実を食ってから2年。

俺は襲い掛かってくる追手を難なく撃退しつつ、適当な海賊を襲って財宝を奪い取る海賊狩り専門の海賊みたいなことをしていた。

賞金稼ぎになることも考えたんだが、俺自身が賞金首である以上、賞金を貰いに行つて逆に命を狙われるという可能性もある。

変装すればいいという意見もあるかもしれないが、長期潜入するわけでもないのに変装するのは非常に手間が掛かるし———なにより、魂に刻まれた海軍への苦手意識が拭えず、能力の鍛錬も兼ねて独力で海賊を狩り続ける生活を送っていた。

さて、悪魔の力を手に入れたことで久々(約12年ぶり)にゆとりある生活を手に入れた俺の中にはある一つの夢が生まれていた。

「麦わらの一味に入つて冒険をする」

この世界に生まれ変わったのであれば、誰もが一度は考える夢だと思う。

もちろん、原作のお邪魔をするつもりは一切ない。

強いて言えば、敵幹部との戦闘が俺のお陰でちよつとだけ楽になるかもしれないが、それ以外は基本的に原作通りに進んでいつてもらいたいと思つている。

ド至近距離で麦わらの一味に扮して感動を味わいたいのだ。

仕入れた新聞によれば、まだ麦わらのルフィは表舞台に現れてはいないから原作前であることは間違いない。

だが、決して時代が前すぎるといふこともなく、大海賊ゴール・D・ロジャーは既に処刑された後。つまり、世は正に大海賊時代真っ只中。

あと数年我慢すればルフィが頭角を現し始めるはず。だから今のうちに力を蓄えておくのだ。

合流はバラティエ辺りを考えている。

「ご飯おいしそうだし、悪魔の力を手に入れた今の俺なら鷹の目ともかく他の連中に手こずることもないだろうし。」

あと、ナミすわんと仲良くなれるイベントが間近に控えているし
(ゲス顔)

あの日食った悪魔の実は結果から言えば大当たりだった。

原作には登場していないが、間違いなくこの世界の中でも強力な能力を手に入れられたと思う。

その説明は後程するとして、今は――

「おい何してる?! さっさとあの化け物を殺せっ!」

「無茶言うな! あんな化け物をどうやって……!」

「クソ! なんで俺たちがこんな目に……!」

のんびりと飛行している最中に見つけた海賊船。

見るからに品がない船長のあほ面は手配書の写真と見事に一致。

平和な島を襲っては略奪を繰り返している節操のない無法者たちだ。

――いいね。

叩きのめしていい理由を用意してくれる奴は好きだ。

「お頭! 　また消えました!」

「またか……! 　野郎ども! 　周囲を警戒しろ! 　奴がくるぞ!」

不安そうに辺りを見渡す海賊たちを上から見下ろしつつ、俺は決着をつけるべく動き出した。

風を切り、真っ逆さまに降下する。

巨大な質量の塊と化した俺は海賊船のど真ん中に着弾し、数人を巻き添えにしながら甲板をぶち破った。

「「ぎゃあああああああ!」」

流石にこれ以上力を籠めたら底をぶち抜いて自分から海水に飛び込むダイナミック自殺となるため、絶妙な力加減が肝心だ。海賊船を三隻ほど沈めてようやく適切な加減を学ぶことが出来た。

「う、撃て! 　奴は今真下にいるんだぞ!! 　早く撃て!」

船長命令で上から銃弾が撃ち込まれてくるが、痛くも痒くもない。そこまで精度が高いわけではないが、武装色の覇気を纏っているか

らだ。

偶然にも覇気を使う海賊と海軍の戦いを目撃する機会があり、それを参考にちよつとずつ練習していくうちにそれっぽいことは出来るようになってきた。

俺、この世界では結構才能あるほうなのかもしれない。

ただ、幾ら覇気を使えるとは言え、上から撃たれ続けるのも鬱陶しいだけなのでそろそろ上がることにする。

◆◆名もなき海賊視点◆◆

それは、突然やって来た。

見張り役の俺がマストの上でブーツと空を眺めていた時のことだ。

なんか、妙な鳥が飛んでいるなど思ってた望遠鏡をのぞき込み、そいつと目が合つちまつたのが運の尽きだった。

急に進路を変えたそれは凄まじい速度で俺たちの船に降り立ち、船長目掛けて襲い掛かって来たんだ。

咄嗟に部下を突き飛ばして盾にしたおかげで船長は生きながらえたが、正直な話、全滅するのは時間の問題だと俺は思っていた。

「撃て！ 撃ちまくれ！ 弾丸は全部使つちまつて構わねえ！ アイツを殺すんだ！」

皆、青ざめた顔で大きな穴が開いた甲板の下に向けて銃を撃ちまくる。

多分、無駄だと数人は気が付いていると思う。

あんな怪物に銃が効くはずがねえ。

でも、そうするしかないんだ。

みんな、絶対的な恐怖を前にして出来ることは泣きながら引き金を引くことだけなんだから。

バキッ

板が割れる乾いた音と共にそれは甲板の下からのっそりと現れた。

まず目につくのは黄金の鬘。

猛々しいそれは獣たちの王者の証。

こんな海にいるはずのない獅子が牙をむいていた。

胴体もまた殆どが獅子だった。

人間など軽く引き裂けるであろう大きな爪、たくましい筋肉の集合体である胴体。

だが、その後ろ脚だけは黒く、奇妙なことに山羊のものと思われる形をしていた。

さらにもっと奇妙なことに尻尾は巨大な蛇となっており、ビビリ散らす俺たちのことを冷酷に睨みつけている。

そして最後に、その翼。

空を悠々と飛んでいたそれは、俺の認識が間違っていないければ「竜」のそれだった。

獅子の顔と胴体、山羊の後ろ脚、蛇の尾。

そして禍々しい竜の翼。

この世ならざる異形の怪物。

それを知識ある人々はこう呼ぶ。

キマイラ、と。

「ひっ?! ば、化け物……」

『酷いことを言うじゃねえか。傷つくぜ』

「「しや、喋った?!」」

『ああ、喋れるぜ。だが、お前らが喋れるのはこれが最後かもな』

ニヤリとその顔が歪んだように見えた。

銃を撃つ。剣を叩きつける。拳で殴る。

その全てが効かない。

ある者は爪で引き裂かれて、ある者は蛇に噛まれて毒で倒れ、またある者は山羊の後ろ脚に蹴られて気絶する。

『どうして……どうして、こんなことに……』

男は絶望のままに呟いた。

船員の数が片手で数えて足りるくらいになったところだった。

船長はとつくの昔に前脚で殴られて気絶している。

『運がなかったのさ。俺も大概だが、お前らはもっとうついでなかったな』

返事を期待したわけではなかったが、怪物は律儀にそう返した。

「そうか……そうだな。この海では運がない奴から死んでいく。俺たちは、ついてなかったんだな。——なあ、最後に一言いいか？」
『なんだ？』

最後まで妙なところで律儀な怪物を可笑しく思いながら男は言った。

「テメエにとっておきの悪運を!!」

『最悪の遺言だなオイッ!』

だが、最高に海賊らしい言葉だった。

——試してみるとするか。

怪物は敬意を込めて彼を最近ようやく完成した最強の技で葬るところにした。

大きく開かれた獅子の口から火炎が溢れ出る。

それを放出することなく口内で一つのエネルギー体として凝集させ、的を睨みつける。

『獅子竜王砲』

やがて放たれた極太の熱量は海賊船の大部分を消し飛ばしながら海を真っすぐに突き抜けていった。

◆◆海軍サイド◆◆

「奇妙な怪物が次々と海賊船を沈めている……?」

とある海軍少将は海賊への尋問を終えた部下からの報告を聞き、怪訝な表情を浮かべた。

「はい。獅子の顔に竜の翼、蛇の尾を持つこの世ならざる怪物とこのとで……」

「なんだ、その全部盛りみたいな適当な姿は」

「ですが、生き残った海賊連中に聞き取り調査をしたところ、全員がそのように回答しておりまして、信憑性はかなり高いかと思われまます」

「ふーむ……何らかの悪魔の実の能力者か」

「はい。聞いたこともない能力ですが、そう考えるのが妥当かと」

海軍少将は頭を抱えた。

「海賊を勝手に狩ってくれるのはいい。寧ろ、我々が感謝すべきなの

だろうが……」

「はい。今は時期がまずいですね——」

「ああ。考え得る限り最悪の時期だ」

手元に置かれている資料を手取る。

そこにはこう記載されていた。

【天竜人航行ルート 警備強化の件】

「せめて、その件の怪物が海賊だけをターゲットにしてくれていれば非常に助かるのだが……」

「その怪物にも手配書を出しますか？」

「いや、下手に刺激して、それこそ天竜人の船を襲撃されてはたまったものではない。今は放っておこう」

「承知いたしました」

部下が退出したのを見届けた少将は窓の外の穏やかな海を眺め、そっと呟いた。

「頼むから。大人しくしておいてくれよ、怪物」

◆◆主人公サイド◆◆

「よーし、大漁、大漁」

一狩り終えた俺は拠点にしている島で先ほどの海賊から奪った財宝を数えながらにんまりと笑っていた。

「いやー、それにしても見事に悪魔の実ガチャに勝ったな」

これまで集めた財宝の整理を尻の上辺りから生やした蛇に任せながら呟いた。

竜の翼で飛行可能、胴体は獅子というだけあって頑丈で素早く、尻尾の蛇は毒持ちで口からは火炎と破壊光線を打てる。

正直、この能力頼みで結構上の方まで上り詰められるくらいには当たり能力だと思う。

……完全変身した際の見た目の恐ろしさだけがネックだが。

名前はなんだろう？ 『動物系幻獣種 ネコネコの実 モデル キ

マイラ』とかかな？

まあ、悪魔の実凶鑑なんて持ってないので知りようはないし、強け

りやどうでもいいので、その辺りは気にしていない。

あれから悪魔の実と我流で習得中の武装色でごり押ししてきたが、この海ではほぼ敵なしだと思う。

「まあ、よほど変なことをしない限りはこのまま稼ぎ続けられるな。うし、もうちよつと貯めたら奮発してデカイ船でも買つて、東の海に行くとするか！ いやー、夢が広がるぜ！」

この馬鹿が間違えて天竜人の船をビームで焼き払い、海軍大将と地獄の鬼ごっこに興じるまであと一日。

君らはもう蒸発しちゃったんだから海軍大将なんて呼ばなくていいじゃんよ！

平和にいきましょう！

あつ、今なんかピカって光ったような――

◆◆海軍サイド◆◆

その日、海軍は上から下まで大騒ぎだった。

この世で最も高貴な血筋（とされている）天竜人。

彼らの船が襲撃を受け、乗船していた五名の天竜人全員が死亡したというのだ。

前代未聞の重大件を受け、海軍は急ぎ状況の確認を行うと共に、下手人をひっ捕らえるべく海軍大将「黄猿」の派遣を決断。

現着した黄猿は目撃情報と優れた見聞色の覇気をもとに下手人を現場から逃走した奇妙な怪物と推定。捕縛、もしくは処刑すべく追跡を開始した。

そして調査開始から数日後――

「うわっ?! あ、危なッ! おい! どのどいつが――き、黄猿?!」

「おやく、わっしのこと知ってるのかい?」

「逆に知らない奴がいるかよ?!」

「まあ、ともかくお前エ、わっしと来てもらおうよ」

現場からかなり離れた小さな島に怪しげな住民を発見。

見聞色で天竜人襲撃犯と直感的に悟った黄猿は普段のどろい仕草が嘘のような俊敏さで油断なく捕縛を試みるも初撃を躲かれ、戦闘へと発展。

『誰が一緒に行くか馬鹿野郎ッ!』

「んく、こんな奇妙な生き物を見たことがないね」

睨みあうこの世ならざる怪物キマイラと、ピカピカの実を食べた光人間の化け物。

二人の因縁はここから始まった。

◆◆主人公サイド◆◆

黄猿半端ないってもおー!

ビーム強いし痛いし、竜の翼で雲の上まで逃げても月歩とピカピカで追いかけてくるし、

武装色で殴りかかっても練度違いすぎてこっちの攻撃全然通らないし、何とか撒いたと思つて人の多い街に潜伏しても速攻で変装見破つてくるもん…

そんなんできひんやん普通、そんなんできる？

言つといてや、できるんやったら…

地獄の鬼ごっこも始まってから1か月が経過しているが、冗談抜きでそろそろ殺されてしまうかもしれない。

こっちは逃走キャリア12年の技をフル活用し、さらに悪魔の実の力も手に入れてから初めてというくらいの本気で使っているが、全然歯が立たない。

手の内は全て晒してしまつたし、次に見つかつて戦闘に発展したら確実に負ける。

「修行だ。修業が必要だな…」

こういう時は修業が必要だつて、俺たちの聖書ジャンプにも書かれてある。

さらに我流に限界を感じた俺は師匠が必要不可欠であると考えていた。

ワンピース×師匠といえばあの人と相場が決まっている。

覇気のことなら何でもござれ。

未来の海賊王を育てた究極のイケおじ。

シルバース・レイリーさんだ！

というわけで黄猿との追いかけてっこをしながらも何とかつきましたシャボンディ諸島。

ここで覇気を鍛えてもらつて、何とか黄猿を追い払えるぐらいのレベルになりたいものだ。

……ていうか、レイリーさんに追い払ってもらう方が早いか。

「さて、あの人はどこにいたかな？ 流石に細かい場所はもう思い出せないなあ…」

この世界で長く生きていると原作知識も細かいところは全然思い

出せなくなってきた。

大まかな出来事は何とか覚えてはいるのだが……

「しかも、普段は気まぐれで色んなところをフラフラしていたような……本当に見つけられるのかな？　流石に今の実力で大将とやり合うのは限界が——」

「八咫鏡」

「うわっ！　危なッ！」

死地の連続でようやく目覚めてくれた見聞色の覇気が危険を知らせてきたので急いで頭を下げると、先ほどまで俺の頭があった位置を何かで高速で駆け抜けていった。

全力で前に飛び、地面を転がりながら振り向けば、すっかり見慣れたグラサン黄色スーツが。

「やっと見つけた、今回は随分と手こずらせてくれたねえ、怪物くん」

「……あんた、人様の修業は邪魔しちゃいけないって、ジャンプで習わなかったのか？」

「相変わらず何を言っているかさっぱりだねえ、だが、この茶番も今日までだよ、天竜人を殺した罪、償ってもらおうか」

皆大好き、ちよつと実力の底が見えない黄猿先生だ。

「前にも説明したけど、あれは事故だったんだって！　俺は天竜人を殺すつもりなんて一切なかったんだよ！」

このタイミングで見つかるとはマジでついてねえ……。

無駄だとは分かっているが、念のため言い訳をしておく。

「殺すつもりはなかったっていうのは戦う中で何となく分かってはきたがねえ……だが、お前さんが殺したっていう事実は消えんでしょう？　ましてや相手は言い訳なんて一切聞かない天竜人だよお？」

「……」

ぐうの音も出ないド正論。

黄猿もあくまで上からの命令に従っているだけなんだから、こうして俺の言い訳を聞いてくれるだけまだマシな方なんだろう。

「ていうかあんた、最初の頃と比べたら随分と優しくなったな。前な

んて俺に口を開くことすら許さなかつただろ？」

「まあ、わつしも伊達に海兵を長くやってはないからねえ。戦つてれば相手のことは少しくらい分かつてくるもんだよお」

「へえ、意外だな。あんたはもつと——」

「だが」

空気が変わった。

ゾツとするほど冷たい空気が潜伏先の山を包む。

「そろそろ捕まってくれねえと、うちの面子が立たねえのよ。加えて、戦えば戦うほどこちらに適応して強くなつていくお前さんの異常な成長速度。この先、生かしておくには厄介すぎる」

あれ、なんか声がガチ……

「天竜人を殺して、海軍大將から1か月生き延びた。その功績を誇りに思つてあの世へ行くんだねえ！」

いやいやいやいや！

「八尺瓊勾玉」

ちよつ、待——



余談：シルバース・レイリー

「うん？ この気配は……黄猿か？」

かつて伝説のロジャー海賊団で副船長を務めていた男、シルバース・レイリーは小銭の入った袋を手元で転がしながら懐かしい気配を感じ取っていた。

「ただの海賊狩り……にしては随分と気合が入っているようだな」

銭を稼がせてもらったカジノの中で立派な髭をさすりながら目を閉じてさらに気配の様子を探る。

「海賊の方は……若そうだな。荒々しく、瑞々しい気配だ。だが、良くない流れを背負っているようにも思える」

思うところがないわけではない。

かつて自分も海賊として名を馳せた男だ。

若い海賊が圧倒的な力の差で抵抗虚しく海軍に敗れるというのは面白い展開ではない。

「若い芽を摘むな、と言いたいところだが、海軍が海賊を追いかけるのは世の理」

だが残念ながら、シルバース・レイリーという男は良くも悪くもリアリストで、さらに言う気まぐれな男である。

顔見知りでもなければ名前も顔も知らない若い海賊の為に命を懸けるほどお人好しではない。

「――さて、私も感づかれる前にさっさと退散するとするか」

こうして、キリアが土下座してでも師匠になって欲しかった男はあっさりと姿を消してしまったのだった。

何でもするのでいい加減に助けてくれませんか？

『クソっ！ 今日の特にしつこいな！』

「わっしも暇じゃないんでねえ。いい加減に捕まってもらおうよお〜」
黄猿との追いかかけっこは熾烈を極めていた。

海軍の面子がどうたらは結構ガチ目の話らしく、いつも以上に気合を入れて襲い掛かってくる。

海軍大将相手に一か月生き残っているだけでも凄い！ って思われるかもしれないが、それはあくまでも逃げに徹した場合だ。

反撃なんてとんでもない。今の俺では逃げ回るので精いっぱいだ。
まあ、あの黄猿から逃げられているだけで凄いかもしれないが。

「天岩戸」

「うおっ!? ちょっと！ 勝手に島を破壊しまくっていいのか!?!」

「ん〜、君が避けたせいだねえ」

「ちよっ!? 俺に負債を全部負わせる気か!?!」

「総額幾らだろうねえ〜?」

「これが海軍のやり口かよ……!」

獣人形態で飛んでいたら後ろから極太ビームが飛んできたので咄嗟に躲すと、目の前でヤルキマンマンングローブが大爆発を起こして折れてしまった。

背中から生やした竜の翼を全力で動かし、さらに上を目指す。

そうだ。先に撃ってきたのは向こうなんだから、こつちにも撃ち返す権利くらいあるだろう。

撃つていいのは撃たれる覚悟ある奴だけ。ちなみに俺に覚悟はない。

『竜王砲』

右腕を竜の頭に変形させ、下にいる黄猿に向かって極太ビームを放つた。

覇気もきつちり乗せていたが、案の定さくつと躲されてしまう。

ちえっ、何でもこつちが有利なはずの空中戦でも向こうが有利なんだ

か。

その後もジグザグと地面から生えている巨大なマングローブを避けながらシャボンディ諸島を滑空し、黄猿とレーザーの撃ち合いを繰り返す。

某スペースファンタジーばりにビームが飛び交っているが、これが人間による仕業というのだから恐ろしい。片方は俺だが。

だが、流石に痺れを切らしたらしい黄猿は戦いの中で八咫鏡を発動。

不規則にマングローブの間を高速で移動し、集中力が落ちた俺の見聞色の覇気をすり抜けて背後を取られた。

『しまっ——』

「光の速度で蹴られたことはあるかい？」

あんたのであれば何度も。

なんて軽口を言う暇もなく強烈な蹴りを叩きこまれる。

俺はインパクトの瞬間、咄嗟に完全獣状態へと移行した。

身軽なのは獣人形態の方だが、防御力と生命力はこつちのほうが上だ。

凄まじい速度で地上に落とされる最中、少しだけ残っていた良心が人混みを避けろというのでグルグルと回る視界の中で人が少ないところを選んで落下した。

『痛っ……容赦ないなあ……ん？』

猛烈な痛みに耐えながら起き上がると、そこは市街地の真ん中。

辺りには俺を遠巻きに見る群衆の姿があった。

彼らは顔面蒼白で俺の方を指さしている。

……まあ、確かに完全獣状態の俺は凄い見た目してるけどさ、そんなに怖がることはないんじゃない？

一人なんて、完全に涙を流しながら俺の下を見て——

下？

そういえば、人混みはきつちり避けていたんだが、衝突の瞬間は視

界が地面ではなく

空中にいる黄猿の動向を捉えていたので人がいたかどうか確認できていなかった。

後、今少しだけ前脚を動かしたんだが、肉球の先にべちよつとした感触があった。

「……」

恐る恐る下を見る。

なんか、もの凄い見覚えのある金魚鉢みたいなヘルメットが転がっていた。

「……」

うん。見間違いだな。

血と肉がこびりついた前脚で目をこすってからもう一度下を見た。

なんか、もの凄い見覚えのある金魚鉢が転がっていた。

『なんだ、やっぱり金魚じゃないか』

「いや、違うだろ——!?」

群衆から息の合ったツツコミを頂きました。

でも、ちよつと待つてほしい。

これ、明らかに金魚鉢だろ。こんな変な形の被り物をする人類がこの世界にいるはずがない。

バツキバキに割れた金魚鉢の向こうに赤い肉の塊みたいなのが見えるが、これもどうせ金魚だろう。

金魚鉢の中にいるのはだいたい金魚。これ、グランドラインの常識ね。

金魚を殺したところで罪には問われない。

俺は人なんて殺してない。

いいね？

「や、やりやがった!?! 怪物が天竜人をぐしやりと潰しやがった!?!」

「お、おやおやお前さん、またやつちまったのかい?」

ピカッと光って地上に降り立った黄猿はちよつと震える声で俺を指さしながらそう言った。

おい、お前が引いてどうする。

『ああ、やつちまった……おい、この金魚誰のだい? 俺が弁償するよ』

「二「テメエはいい加減に現実を見ろツ!!」」

民衆の息の合ったツツコミを再度頂きました。

『金魚』ごときで騒がしい民衆だな。俺は動物園から逃げ出してきたただのしがないうライオンだ。もう帰るから、コントはその後でやってくれ』

「二「お前みたいなライオンがいてたまるかツ!!」」

失敬な。今どきのライオンは全員こんな感じだ。多様性の時代だぜ? そりゃあ、背中から竜の翼は生えるし、尻尾は蛇だし、後ろ脚は山羊のライオンくらい普通にいる。

だから、俺はこれで失礼を――

プルルルル、プルルルル、プルルルル、

『……電伝虫なってるぞ、黄猿。その左腕のやつだ』

「はいはい、腰のだね。もう騙されないよおくと、逃げようとしたら

撃つからね〜」

『ちっ』

「はい、こちら黄猿う〜」

不意について逃げ出したかったが、黄猿の指はきっちり油断なく俺を狙っている。

ここは被弾覚悟で逃げ出すべきか。

痛いのは嫌だが、どうせすぐに再生するんだ。

ここを切り抜けたらレイリーさんと合流して、さっさとこんな島おさらばしよう。

修業のためとはいえ、やはり天竜人がいる島をうろつくのはアウトだ。

俺自身が天竜人に思うところは……まあ、人生を壊された相手なのでそれなりにあるが、だが少なくとも殺すつもりなんて一切なかった。

なのに、ちよつと着地に失敗しただけでこの仕打ち。

多分だが、俺はこの世界で天竜人と徹底的に巡り合わせが悪いのだろう。

そうに違いない。きつと、敵に向かって撃ったレーザーも天竜人が近くにいればそっちに90度の角度で曲がって命中するくらいの因果律を感じている。

ついてないぜクソツタレ。

だが、やっちゃまったもんはしょうがない。

また海軍大将に追いかけられる日々が始まるが、なーに、やることはこれまでと何も変わらない。

今まで通り、黄猿から逃げ回れば――

「――つきましては海軍大将、青雉がシャボンディ諸島に出撃されました。大将二名で協力し、何としても怪物を捕縛せよとのことですよ！」

『今なんて?』

なんか、聞こえてはいけない単語が聞こえた気がする。

青雉、大将二名で協力。

「……お前さん、いよいよ終わったねえ〜どうやら、怒らせちゃいけないところを本気で怒らせちゃったみたいだよお〜?」

『』
「おや〜、顔が死んでるね〜」

そりゃあ、死刑宣告されれば誰だつて顔は死ぬ。

未だかつてない状況に頭が追い付いていない。

なに? ここは頂上戦争でつか?

ははっ、頂上戦争も見てみたかったなあ……

でも、俺はここまでだ。ここで死んで、麦わらの一味にも会えずに新聞の一面を飾って死ぬんだ——

『いや、まだまだ』

「ん〜?」

『俺には、夢がある。夢が出来たんだ。ここで死ぬわけには、いかない!』

「……随分と、生意気な目をするねえ。大将二人を相手にして生き残れるとでも?」

『今はまだあんた一人だろ? ここであんたを潰せば残りは一人。やることは、これまでと何も変わらない』

「——怖いねえ。その若さ、自信、潜在能力。ここで摘まないと、後々面倒なことになる。死ぬ覚悟はできたかい? 怪物」

『だから、死ぬのはあんた——』

「あらら、こんな衆目が集まる場所で天竜人の死体を踏んづけて……なかなか豪胆な奴じゃないの」

ゆつくりと後ろを振り返ると、そこには海軍大将の一人、青雩がいた。

「青雩い〜、なんでもうここにいるんだい〜?」

「この格好を見て分からねえか? あれだ、あれ……なんだったかな?」

「二ハッキリしろよ！ どうせ休暇だろ!!」
「あく、それだ、それだ」

アロハシャツにサングラス、右手に大量の買い物袋を持っていれば
目的は一目瞭然だ。

民衆からのツッコミでシャボンディ諸島来訪の目的を思い出した
海軍大将「青雉」はサングラスを外し、トレードマークのアイマスク
を装着してから休暇の邪魔をしてくれやがった犯人を睨みつけた。

「それで、こいつが天竜人を殺した犯人か？ 黄猿」

「そうだよお、随分と手こずらせてくれたけど、その悪運も今日まで
だね」

「――」
思えば、数奇な人生だった。

せっかく憧れの世界にやって来たと思っただら天竜人のせいで台無しにされ、ようやく麦わらの一味に合流できると思っただらやっぱり天竜人のせいで台無しにされ、それでも逃げ切れるかと思っただらやっぱりやっぱり天竜人のせいで台無しにされ――

あれ？ 俺の人生これでいいのか？

目の前で何やらごちゃごちゃ言っている海軍最高戦力二人を前に
思う。

誰にも（天竜人以外）迷惑掛けていないのに、善良な人間であるこの俺が理不尽にもここで殺されて終わる？

ダメだろ、そんなの。

「……やってやろうじゃねえか」

「ん〜？」

「あん？」

光と氷の化身に向かって俺は叫んだ。

「雑魚大将が二人揃ったからってなんだってんだ！ 海軍も天竜人も
全員クソだ！ 俺は絶対に生き残ってやる
るううううううううううう！」

「……怖いねえ、その絶対に折れない精神力。クザン、油断しちゃダメ

だよお、コイツ、凄い速さで強くなるから」

「やれやれ、バカンスは終わりか。——仕事の時間だ」

怪物が竜の翼を広げ、獅子の顔が雄叫びを上げる。

どっちつかずの正義を掲げる中立の男が破滅の光を指先に宿し、

だらけきった正義を掲げる誰よりも熱い男が氷河時代を具現化させる。

怪物VS海軍大将二名による衝撃の大怪獣バトルのゴングが鳴らされた。

やめて！ 勢いで啖呵切ったけど、青雉の氷で足止めされて黄猿のビームを撃たれたらいくらタフとはいえ、身体が燃え尽きちゃう！

お願い、撃たないで黄猿！ あんたが今ここで本気出したら、麦わらの一味との再会の約束（してない）はどうなっちゃうの？ ライフはまだ残ってる。ここを耐えれば、（逃走前提で）海軍大将二人に勝てるんだから！

次回、「キリア死す」。デュエルスタンバイ！

海軍サイド：今後の方針

◆◆海軍本部 マリンフォード◆◆

大事な会議が開かれる際に使用される最も大きな会議室には、所狭しと大勢の海兵たちが集っていた。

大将赤犬を始め、中将以下招集可能な海兵は全員集められている。

「——全員揃っているな」

遅れて会議室に現れたのはこの場において最も権限が高い男。

海軍元帥 仏のセンゴクである。

センゴクは近くの海兵に命じて全員にある資料を回させた。

そこに記載された名を見た瞬間、全員の顔が引き締まる。

海兵であれば——いや、海兵でなくともその名を知らぬ者はいないだろう。

「怪物キリア。もう皆も把握していると思うが、今一番世界を騒がせている最悪の犯罪者だ」

センゴクは仏という異名が間違っつけられたのかと思われるほど恐ろしい鬼の形相でその名を呼んだ。

会議室が暗くなり、電伝虫がプロジェクターのような形で大きな写真を皆の前に投影した。

そこに写っているのは屈託ない笑みを浮かべる幼い金髪の少年だ。

世界政府と協力して資料を作った、と前置きしつつセンゴクは説明を始めた。

「奴の名を昔から知っている者もいるだろう。奴は幼少期より天竜人に対して強い憎悪を抱いており、絶えず天竜人暗殺未遂事件を繰り返してきた最悪のテロリストだ」

本人が聞いたら何のこと?! とツツコミを入れそうな内容を淡々と話すセンゴク。

「これは奴が8歳の時に出回った手配書だ」

露骨に表情に出すことはなかったが、何名かの海兵は複雑な思いを抱いた。

こんな純粹な笑みを浮かべる少年を銃を手に大人たちが追い掛け回したという事実。

そして、その結果として生み出された今の怪物。

彼はもしかしたら世界の歪みによって生み出された存在なのかもしれない。

「そしてこれが――」

電伝虫の映像が切り替わる。

そこにいたのは金髪をオールバックにし、凶悪な笑みを浮かべた少年の写真。

事情を知らない海兵たちが誰の写真かと首を傾げる中、センゴクは告げた。

「奴が10歳の時の写真だ」

海兵たちの間に動揺が広がった。

8歳から10歳までの間に何があったのか。

痛々しいものを見るような目をする海兵もいる中、さらに写真が切り替わった。

そこにいたのは、綺麗な笑みを浮かべる金髪の少女。

誰だこの子？

電伝虫が間違えた映像を出力したのかと皆が疑問に思う中、センゴクは真顔で告げた。

「これは、奴が11歳の時の写真だ」

「「えっ」」

確かに11歳というのはまだ明確に性の区別がでにくい年齢ではあるが……それともこのキリアという少年は所謂、精神が女性だったというタイプだったのだろうか。

だが、そこまで思い至った海兵たちは同時に現在のキリアのことを思い出した。

違う！ 奴は今、明確に男として振舞っている。

それ即ち――

「もう分かっただろう？ 奴は幼い頃より確かな知性と狡猾さを持つて何年も世界政府と我々を欺いてきた知能犯だ」

さらに、と続けながらセンゴクは手元の資料を手で叩いた。

「奴は父親譲りの計算の素早さと会計士としての知識を利用してマフィアに取り入り、信頼を獲得してからその金品を強奪して姿をくらませるといふ行為を何度も繰り返している。幼少期よりその頭のキレと豪胆さは恐るべきものだっただけだ」といわけだ」

さらに、と手元の資料を血管が浮き出る手で握りつぶしながら続けた。

「悪魔の実を手に入れてからの奴は空と海を主な活動範囲とし、我々が手を焼いていた海賊を襲っては金品を奪って逃走するという、海軍の面子を舐め腐ったような行動を繰り返す愉快犯と化した！」

海兵たちの認識は改められた。

脳とは単純なもので、屈託ない笑顔を浮かべる手配書の少年が悪魔に見えてくる。

「そして、現在進行形で奴が起こしている凶悪事件の数々はお前たちも耳にしているだろう。航行中の天竜人の船を襲い5名を殺害。さらにシャボンディ諸島でも天竜人を1名殺害し、ついぞと言わんばかりにとあるオークション会場を完膚なきまでに破壊。中にいた商品たちが大勢脱走し——」

「すいません、センゴク元帥。中にいた商品たちが脱走したというのはどういう——」

まだ海軍に入隊して日が浅い怖いもの知らずの新人が拳手して尋ねるが、

「聞くなッ！」

センゴクは鬼のような形相で一喝した。

古くより海軍に努めてきた猛者の強烈な覇気に思わず黙り込む新人。

その施設は職業安定所として認知されているが、その中身はこの世の闇を詰め込んだような非道の場所だ。

センゴクは内心の苛立ちもあったが、敢えてこの場で追及することはないだろうと判断した。

元帥は苦虫を噛み潰したような顔をしながら続ける。

「奴の勢いはとどまるところを知らない。確実に奴を仕留めるべく、黄猿と青雉が出撃していることは皆知っていると思うが、つい先日など奴の逃亡に革命軍が手を貸したという情報も出ている」

「革命軍が……？」

「何の躊躇もなく天竜人を殺すような狂人だ。今の世界をひっくり返したい連中にとって、これ以上ないほどの有益な武器となるのだろう。奴のサポートだけしておけば、勝手に暴れて邪魔な連中を排除してくれるんだからな」

「なるほど……」

怪物は誰の下にもつかず、また誰も従えない一匹狼だったが、既にその存在そのものが大局を揺るがす巨大な嵐の目となりつつある。

嬉々として天竜人を殺す男など普通なら近づきたくもないが、逆にそれを利用してやろうと近づく連中も現れ始めている。

センゴクは頭を抱えた。

「さらに恐るべきはその驚異的な成長能力だ。先日、黄猿の報告によれば、奴は悪魔の実を覚醒させたらしく、現状のふざけた防御力と生命力がさらに増したとのことだ。それに、この姿を見ろ」

電伝虫が次の写真を映し出した。

そこには獅子の顔と山羊の顔、そして竜の顔という三つ頭に。

獅子の身体、竜の翼、蛇の尾を持つこの世の終わりのような生物が写っていた。

「これは……一体……」

「今の奴の姿だ。獅子の顔と竜の頭の二つからビームと火炎を放ち、蛇の尾には猛毒があるという。どうだ？ お前たちにこいつが捕まえられるか？」

一様に黙り込む海兵たち。

ここは海の正義を司るものとして意地でも可能だと答えなければならぬ場面とは分かっていたが、それでも写真越しでも伝わってくる強烈な威圧感が口を閉ざさせる。

センゴクは黙り込んだ海兵たちを見渡してからそつと口を開いた。

「……実は、世界政府の中で奴を七武海に推薦する声が上がっている。」

倒せないのであれば、飼いならせばいいとな」

少しの沈黙の後、会議室はすぐに騒々しい声に包まれた。

「あり得ない！」

「あんな理解不可能の狂人が我々と肩を並べて戦うというのですか!!
気に食わないからとこちらが襲われるに決まっています！」

「ここまで我々の面子をコケにされておいて大人しく味方になれというのですか!!」

「分かっておるっ！ 静まれ！」

再び炸裂する元帥の一喝。

流星のカリスマ性で会議室はすぐに静寂を取り戻した。

「なかなか仕留めきれない現状に業を煮やした面子だけを気にする連中から上がった意見だ。皆の意見は今、ハッキリと分かった。無論、私も皆と同じ気持ちだ。我々は秩序を守る者。暴虐の限りを尽くす悪徒を見逃すわけにはいかん。だが——」

皆を見渡し、元帥は苦々しい表情で現実を口にする。

「現状、海軍大將を2名派遣してもなお、奴を捕まえるには至っていない。寧ろ、黄猿の話では奴は戦えば戦うほど異常な速度で進化を続けるのだという。このまま長期戦になれば不利になるのは我々の方とまで言っていた」

ゴクリ、と生唾を飲み込む海兵たち。

海軍大將。それは海兵の一つの到達点だ。

世界の秩序を成り立たせている圧倒的な「個」であり、彼らの出撃は海賊にとって冒険の終わりを意味していた。

これまでは。

「青雫はもう少しで捕らえられると言っているが、残念ながら先ほども言ったように革命軍の動きが活発化してきている。中には天竜人を直接狙う凶悪なテロリストも出現してきているという話だ」

怪物の投じた石が世界という水に波紋を広げている。

「天竜人に逆らってもいいのか？」

「俺たちは理不尽に立ち向かってもいいのか？」

「なんだ、天竜人に逆らっても大丈夫じゃないか」

「偽りの竜を本物の竜が地に引きずり降ろしたんだ！」

「勝てる……勝てるぞ！」

「武器を取れ！ 俺たちも戦えるんだ！」

「奪われ続けている俺たちの尊厳を取り戻すんだ！」

「あの黄金の獅子に続け！」

「戦え！ 戦うんだ！」

「……いつまでも大将2名をたった一人の追跡の為に派遣しておくことは出来ない。事実、世界政府加盟国から大将の派遣要請がいくつも来ている有様だ。中には怪物の滞在歴があつたというだけで派遣を要請してきている国もある」

深い……とにかく深いため息をついてから、センゴクはようやく本題を切りだした。

「さて、以上のことから大将青雉は怪物の追跡を中止し、急遽別の国へ派遣されることとなった。黄猿一人でも圧倒はできているようだが、あいつもここ数か月戦っぱなしで疲れ切っていることだろう——したがって、ここに王下七武海の出撃を正式に宣言する」

大将ならもう一人ここにいるのでは……？

そんな海兵たちの視線がセンゴクの横で腕組をして黙りこくっていた最後の大将に向けられる。

視線に気が付いたのか、大将赤犬は目深に被っていた帽子の下から眼光を覗かせ——

「ああん？ なんじやい？」

「いえ、何でもないです……」

あれは多分、自分が行きたくてしようがなかったが、どこかの国から呼び出された顔だなと悟った海兵は下を向いた。

「七武海への招集は？」

「既に掛けている。招集に応じた七武海は3名。距離の問題もあり、そのうちの2名を急遽派遣することとなった」

「その2名とは？」

◆◆とある島◆◆

「フッフッフッフ、会いたかったぜえ、怪物野郎」
「旅行するなら、どこに行きたい？」

満身創痍の男、キリアは真顔で答えた。

「天竜人と海軍大将がいないところ」

色々やらかしましたが七武海入れてくれますよね？

海軍大将2名との戦いで消耗しきった怪物キリア。

そこへ止めを刺すべく派遣された王下七武海――

「天夜叉 ドンキホーテ・ドフラミンゴ」

「暴君 バーソロミュー・くま」

上記2名は休養のため撤退した黄猿の情報をもとに怪物を追跡。

人気がない島で同じく休養していた対象を発見。

命令に従い、交戦を開始。

満身創痍に思われた怪物キリアだが、極限状態から暴走した悪魔の
実の力に振り回され、島を一つ沈めるほどの大暴れを繰り広げる。

派遣された七武海2名は追い込まれるも、苦し紛れにくまのニキユ
ニキユの能力で遠方に弾き飛ばすことに成功。

王下七武海2名は今度こそ確実に止めを刺すべく、怪物キリアの追
跡を開始した――

「――フッフッフッフ、ま、こんなところか」

特徴的な笑い声と共に何やら電伝虫とブツブツ話していたドフラ
ミンゴが帰って来た。

「よう、待たせたなあ。上の馬鹿どもには適当な報告をしておいたか
ら、数日は安泰だろうさ、フッフッフッフ」

「悪いな。何から何まで」

「気にすんな。大事な客人だ。もてなしをさせてくれ」

そう言つて特徴的なサングラスを光らせながらドフラミンゴは笑つた。

さて、どうして俺を殺しにやって来た筈の七武海が友好的なのか。そして俺はどうして彼が治める国、ドレスローザにいるのか。話しは数日前まで遡る。

◆◆とある島◆◆

「旅行するなら、どこに行きたい？」

「天竜人と海軍大将がいないところ」

馬鹿真面目に答えた俺は正直言つて疲労困憊であり、この二人を相手に勝てる未来など欠片も想像できない状況だった。

何とか隙を見つけて逃げ出そうと思つていたが、俺の回答を聞いたくまが手袋を外したあたりで四肢の一本くらいくれてやる覚悟を決めていた。

だが――

「フッフッフッフ、まあ待てよ、くま。せっかく向こうが要望を出したんだ。できるだけ希望通りの場所に飛ばしてやろうじゃねえか」

「天夜叉……何を考えている？」

「俺か？俺は単なるスカウトだ。アイツを殺すつもりなんて一切ない。お前はどうか？」

「……似たようなものだ」

「利害の一致だな。――おい、怪物野郎！」

「なんだ？」

「情熱の国は嫌いか？」

「大好きです」

こうして俺はドレスローザに飛ばしてもらふこととなったのだつた。

もちろん、しっかりと俺が戦つた証を残すために名もなき島にはしっかりと犠牲になつてもらつた。

◆◆ドレスローザ ドフラミンゴ所有の秘密の屋敷◆◆

「フッフッフッフ、この国はどうだい？ 気候、女、酒、食べ物、全部が最高の国だ。海軍大将もいないし、お前の希望には沿っていると思うが？」

「……まあ、悪くはないな。だが、何を考えているのかは知らねえが俺が簡単に油断すると思うなよ」

「その割にはさつきから死ぬほど俺の金で飲み食いしているようだが」

「気のせいだ」

「……フッフッフッフ、気のせいか。ま、いいだろう。ここは俺の国だ。何をしようと俺の言ったことがルールになる夢の国なのさ！」

両手を広げ、自慢げに語るドフラミンゴ。

その様は生粋の悪党でありながら確かに国王としての威厳的な何かを纏っているようにも見えた。

「七武海ってのは便利なものなんだな」

「おお？ どうした。興味がわいてきたか」

「ああ、割と興味はあるな。特に海軍大将から追われなくなるってのが最高だ」

「フッフッフッフ、お前はよくやったよ。あの化け物2人を相手によく生き延びたもんだ」

「かなりギリギリだったけどな。正直、アンタらが来た時にはもうくたばり掛けていてね、真面目にやっていたら殺されていたよ」

「ごちそうさまでした。

さて、本題に入るとしよう。

「で——アンタら、どうして俺を助けた？」

ちなみにこの豪華な屋敷の中には俺とくまとドフラミンゴ、そして口が堅いという彼の使用人しかない。

くまは別室で待機しているらしい。
後で「俺も話がある」とだけ言っていた。

「俺は世界政府の上と伝手があつてな、色々とお前の過去のことを調べさせてもらった」

そう言つてドフラミンゴはソファに置いてあつた資料を俺に投げて寄越した。

「怪物キリア——フッフッフッフ、なかなかどうして数奇な人生を歩んでいるようだなア」

そう言つて俺のこれまでの経緯をつらつらと語り出すドフラミンゴ。

8歳で賞金首になり、20歳で天竜人を5人殺害し、海軍大将に狙われても生き延び、さらに懲りずにまた天竜人を殺し、海軍大将2名を相手にまだ生き残っている。

……まあ、なんだ。

不本意ながら俺のこれまでを客観的に見た場合、かなり気合の入つた狂人だなこれ……

「フッフッフッフ、俺も長く海賊稼業をやっているが、ここまでイカレた奴には会つたことがねエ。——なあ、教えてくれねえか？ 何がお前を突き動かしている？ お前の人生を滅茶苦茶にした天竜人への復讐心か？」

「天竜人」、復讐、その二つの単語には強い感情が込められているように感じた。

あるいは、期待のようなものも。

「そんなんじゃないさ。俺はただ、生き残りたいだけだ」

「……天竜人を6人も殺しておいて言うセリフじゃねえなア」

表情には出さなかつたが少し失望したような雰囲気を感じた。

だが、それはそれとして訂正しておかなければならない点がある。

「おい！ 言つておくが、俺が殺したのは5人だけだ。1人は完全に黄猿のせいだからな！ 何故か紙面に載らないからこれだけはハッキリと言つておく！」

「数の問題か……？　だが、天地がひっくり返っても黄猿がやったことにはならねえよ。残念ながら奴らの方が正義、だからな」

「ちっ、これだから海軍は……」

まあ、ドフラミンゴに言われるまでもなくそんなことは分かっていた。

一応、世界で一番自由なジャーナリスト——世界経済新聞のモルガンズにもこの事実を記事にしてくれとお願いをしたが、逆に取材をさせてくれと言われて取り合ってもらえない始末。

おい、こんな面白そうな記事他にないだろ。えっ？　俺がやったことにした方が面白い？　もつと殺してくれ？　そういうのいいから……。

「で、話がそれたが、結局アンタはどうして俺を助けたんだ？」

「フッフッフッフ、俺が期待していたタイプとは少し違うから言うのを躊躇っていたが、まあ、これはこれでいいだろう——」

そしてドフラミンゴは言った。

「お前、俺の仲間にならねえか？」

「……どうした急に？」

「誰にだって野心つてのがあるもんだろう？　俺には俺の野心があり、そのためにお前のように頭のネジがぶつ壊れた奴が欲しいのさ」
「……アンタにはたった今恩が出来ている最中だが、会って一日も経ってない奴に仲間になれと言われてもな……」

「話は最後まで聞くもんだぜ？　フッフッフッフ、まずとびつきりの好待遇を用意しよう。好きなものはなんだ？　金か？　酒か？　女か？」

「全部だ」

「フッフッフッフ、強欲な奴だ。だが正直者は嫌いじゃない。それに加えて俺の国にあるものは全てお前の好きにしている」

「……好きにしているとは？」

「気にいらぬ奴がいれば殺すもよし。気にいった奴を玩具にするもよし。文字通り、お前の好きにしていることさ」

「……悪趣味な奴め」

「あと、来るべき日が来るまで海軍大将に見つからないようにこの国に——」

「それは最高に魅力的だな」

「……」

あまりにも俺が真剣だったからか、ドフラミンゴは少し引いているようだ。

おい、そんな顔をするなよ。こっちは死活問題なんだ。

「まあ、さつきも言ったように来るべき日が来た時にはお前に働いてもらうからそのつもりではいろよ?」

「おい、まだ俺は仲間になるとは言っていないぞ」

「これだけの好条件を積んでまだ首を縦に振らねえのか? ——もう少し賢い奴かと思っただがな」

残念そうな表情を浮かべるドフラミンゴ。

条件は完璧。海軍大将に追われている今の状況を考えれば断るなんて選択肢が思い浮かばないくらいに魅力的な提案ではあったのだが……俺には譲れない夢がある。

「悪いが、もう入りたい海賊団は決めているんだ。魅力的な誘いだが、断らせてもらうよ」

「ほう? どこだ、聞かせろよ。白ひげか? カイドウか? ビッグママか?」

「来るべき日が来たら教えるよ」

「! フ——フッフッフッフ! コイツは一本取られたぜ!」

ドフラミンゴは誘いを断られたにも関わらず機嫌良さそうに笑った。

ぶつちやけ、断った時点で戦闘になるかと思っていたが、現状では襲い掛かってくる様子はない。

「——で、話つてのはそれで終わりか?」

「おいおい、冷たい奴だな。仲間にはなれなくとも、俺の同盟相手つてのはどうだ? 条件は多少落ちるが、お前の望む楽園を用意してやることはできるぞ?」

「悪いがそれもお断りだ。……やけに熱心に勧誘してくるな」

「フツフツフツフ、お前、自分の持っている影響力のデカさに気が付いていないのか？」

「影響力のデカさ？」

「やれやれ仕方ないな、と言いながら説明大好きドフラミンゴおじさんは話し始めた。」

「今、お前を巡って世界政府、海軍、革命軍の連中が必死こいて動き回っているのは知っているな？」

「ああ、特に海軍のしつこさは身に染みているよ……あと、革命軍つて連中も前に大将から逃げる時に手を貸してくれた記憶があるな」

「その革命軍は今、天竜人への反逆に際してお前を旗頭にしようとする動きがあるようだ」

「俺を……？ この間初めて会ったくらいだが……」

「フツフツフツフ、奴らは明確なシンボルが欲しいだけなのさ。例えそれがお前という、怖いもの知らずの化け物でも構わねエ。それで革命が成されるなら幸せなのさ」

「ふーん……」

「世界政府は革命が伝播していく今の状況を恐れているようだ。なんせ、お前を七武海に招こうという動きも出ているくらいだ」

「俺を七武海に？ ……自分で言うのもなんだが、俺、天竜人殺しだぞ？ 本当になれるのか？」

「どうだろうな……だが、案外不可能ではないのかもしれないねエ。それくらい、世界政府は今必死だ。お前を七武海に招き、実質的に世界政府に屈服すれば革命の動きを抑えられると考えてもおかしくはない」

「俺が七武海、か」

「フツフツフツフ、もし本当に七武海になれた時は先輩として歓迎してやるよ」

取り敢えず、ドフラミンゴの話はここで終わりらしい。

俺は招かれておきながら相手の提案を全部断った立場なのだが、意外にも寛容なドフラミンゴはこの屋敷を出るまでは客人として扱うことを約束してくれた。

「俺がもてなすと云ったんだ。もてなしをさせてくれ」とも。
なんか、意外といい奴だったな……。

その後、ドフラミンゴに言われるままに「くま」の話聞くべく彼が滞在している部屋を訪ねたが、

「急用で席を空ける。明日の午後には戻ってくる」とだけ書き置きが残されてあった。

「……ま、久々の休みだ。ゆっくりするか」

ここは海軍大将が来ない楽園の地。

同じく暇しているらしいドフラミンゴと二人で飲むことになった。

美味しい酒を飲み、美味しい飯を食い、話をする。

ごく普通の行為だが、俺はこの普通を追い求めていたんだと今更ながら気が付いた。

ドフラミンゴなんて本編での所業を知っているので全然仲良くするつもりなんてなかったのだが、なんか妙に話が合う。

「——で、俺は黄猿師匠に言っっちゃったんだよ。流石は天竜人を殺した蹴り」つつつてな！」

「フッフッフッフ！ いいねエ！」

アホな話で盛り上がりつつ、ひたすら酒を飲みまくる。

いやー、最高！ クソ楽しいっすわ！

「……なあ、ちよつと聞きたいことがあるんだがいいか？」

「なんだ？」

お互いに話すこともなくなってきたタイミングでドフラミンゴは切り出した。

「——天竜人を殺すつてのはどんな気分だ？」

口元は笑っているように見えるが、サングラス越しの視線は真剣だった。

「気分……気分ねえ……」

自分の中でいろいろと考えてみたが、結局答えは出なかった。

「——ふん。気分も何もあるか。俺の進行方向にアイツらがいただけだ。悪いとは思っているが、人には寿命つてもんがあるだろ？ 俺にも来るべき時がきたら同じように死ぬだけさ」

「フッフッフッフ、そうか。そんなもんか……」

もつと苛烈に反応をするかと思っていたが、意外と穏やかな様子。もしかしたらアルコールが回ってきたのかもしれない。

……チャンスだな。

「で、どうしてそんなことを聞くんのだ？」

「フッフッフッフ、なーに、単に興味があっただけだ」

「アンタが元天竜人だからか？」

「――」

弛緩していた空気が張りつめる。

部屋の空気が凍った。

さーて、正念場だぞキリア。

気合い入れろ。

「ドンキホーテ……どつかで聞いたことある名前だと思っていたんだが、その反応を見る感じ、当たり前だったようだな」

「……鎌をかけたつてのか。この俺に」

「ああ、あのドンキホーテ・ドフラミンゴにな」

ドフラミンゴの額に血管が浮き出る。

それと同時に、強烈なプレッシャーのようなものが全身を襲い掛って来た。

これは……霸王色の覇気か。

コントロールしていた酔いがすっかり醒めてしまった。

「なんだ、威嚇か？俺も吠えた方がいいか？」

「……フッフッフッフ、随分と年上を舐め腐った奴だ。生意気な奴は嫌いじゃないが、流石に鬱陶しいな小僧オ……！」

「おいおい、そう本気になるなよ。俺はただ事実確認をしただけだ。何もアンタを脅しているわけじゃない。楽しくいこうぜ、スマイル、スマイル」

「ツ!! ……なるほど、俺の期待していたタイプじゃねえが、なかなかいい性格をしている……!! いいぞ、小僧。好きに話してみろ。ただし俺が気に食わない内容だったら殺す」

おーおー、物騒なこつて。

俺は裏社会で会計士をしていた時のことを思い出しながら口を開いた。

「取引をしよう。ドンキホーテ・ドフラミンゴ」

「……取引、だど？」

「お前の欲しいものをやる。そして、お前にとって不都合な事実については口外しないことを約束しよう。その代わりに——」

「代わりに？」

俺は望みを口にした。

「俺を七武海にしろ」

先輩は後輩のお願いを聞くものですよね？

「俺を七武海にしろ」

俺のお願いを聞いたドフラミンゴは呆気にとられたような顔になった後、自分を落ち着かせるためか豪華なソファアに座り直し、テーブルの上に置いてあったワインを一気に飲み干した。

さつきまで死ぬほど機嫌が悪かったが、あまりにも俺の言葉が予想外だったのか、どうして怒っていたのかも忘れてしまったようだ。

「……急に何を言い出すかと思えば、七武海にしろとはな……何を考えてやがる」

「アンタが七武海やっていて楽しそうだったんでね。急になりたくなったんだ」

「ふん。海軍大将が怖いだけだろう」

「その通りだ」

「そこは否定しておけよ」

もう開き直っているので別に恥ずかしくもなんともない。

怖いものは怖いんだ。

あの人たち、マジで強いもん。

「で、どうなんだ？ アンタなら出来るんだろ？ さつきも言っていたじゃないか。政府の上に伝手があるってな」

「そうだなア……」

額に手をやって暫く考え込んだ後、ドフラミンゴは答えた。

「……席を用意してやることはできる」

「おおー！」

「だが！」

喜ぶ俺に釘を刺すように彼は言った。

「断言する。その席は長くは持たねえ」

ドフラミンゴは俺のグラスにワインを注ぎながら言った。

「俺の言っている意味、分かるよな？ 俺のお膳立てで無理やり七武海になったとしても、お前を快く思わない連中が多すぎるって話だ。

遠くない将来、お前はその席から強制的に引きずり降ろされることになる」

「あー、なんだ。そんなことか。」

「構わないよ。どうせすぐに抜ける予定だし」

「なに？」

「訳が分からないといった顔をするドフラミンゴ。」

「まあ、目の前の男は七武海制度をフルに活用して今の地位を確立した経緯を持っている。」

「当然、俺も同じようなことをするつもりだと思ったのだろう。」

「だが、俺が欲しいのは今から麦わらの一味に加入する間までの安全保障だけだ。」

「逆に言えば、それ以上の関係性には興味がない。」

「特に抜けるのが大変そうな海賊団はお断りだ。」

「その点、七武海ってのは申し分ない。」

「その気になればすぐに辞められるし、そう遠くない未来に七武海制度自体が（主に目の前の先輩とワニ先輩のせいで）崩壊することを知っている俺からすれば、長期プランを見据えて加入するようなものでもないからな。」

「俺が目指しているのはもつと先。」

「未来の四皇。やがて海賊王にいたる男、麦わらのルフィ。」

「彼の仲間になり、麦わらの一味補正でハッピーエンドを迎えること。」

「それが俺の夢の果てだ……！」

「……どうした。気持ち悪い顔をして」

「ん？ いや、何でもない。ちよつとOPでの決めポーズを考えていただけだ」

「……まあ、何でもいいが、忠告はしたぞ？」

「あいよ。すっかり聞きましたよつと。——さて、今度は俺があんたに提供できるもんだな」

「フッフッフ、楽しみだな。何を提供してくれるんだ？」

「そうだな……俺のサインかな」

「ぶち殺すぞテメエ」

「ふへへ、先輩怖いっすよ。冗談だつて——冗談だからその手を下ろしましょうか」

危ない、危ない。ちよつとからかいすぎた。

すーぐ本気にするんだから。

「そうだな……逆に言えばアンタ、何が欲しいんだ？」

「……何も考えてないのに俺に取引を吹っ掛けるとは舐めた野郎だ」

「いいや、考えてはいるし、知ってもいる。だが、先にアンタが俺を七武海にできるのかを知りたかつただけだ」

「……頭のイカレた野郎に見えて意外と考えてやがる。おい、やっぱりお前本気で俺の仲間にならねえか？」

「だからならねえつて。いいからさっさと欲しいものを言ってくれよ」

「欲しいモノ……欲しいものねえ……」

額を手に当てながら思考するドフラミンゴ。

先程まで余裕なさそうだったが、今はニヤニヤと笑っている。

あつ、あの顔はあれだな。

絶対に俺が用意できないものを言おうとしているな。

性格悪っ！

「なあ、思いつかないなら俺の方から試しに提案してみてもいいか？」

「フッフッフッフ、好きにな。だが、甘く見るなよキリア。俺は生半可なものじゃ欲しいとも思わな——」

「古代兵器とかどう？」

「——」

絶句。

そんな感じだった。

唇の端を吊り上げた状態で暫く固まっていたドフラミンゴだったが、数十秒経過してからようやく再起動を果たし、のろのろとソファーに座りなおした。

「……おい」

「ん？」

「テメエ……何者だ？ まさか、世界政府に追われているのは……」
「いや、それは馬鹿な天竜人のせいだ。俺が知ってるのはあれだ、偶然だ」

「偶然で知れる代物じゃねえだろツ!!」

全身全霊でツツコミを入れるドフラミンゴという珍しい景色が見れた。

麦わらの一味としてローに会った時に自慢できるかもしれない。

「ハア、ハア、いかん……完全にコイツのペースに？ まれている……」

「まあ、落ち着けよ。時間はたっぷりあるんだからさ」

「……そのクソ度胸。知識。強さ。お前、四皇でも目指した方がいいんじゃないかねえか？」

「だから、入りたい海賊団があるんだって。四皇なんて興味ないよ」

「……変な奴だな」

呆れたように溜息をつくドフラミンゴ。

だが、俺は内心結構冷や汗を掻いていた。

頭の片隅に「この人何でも知ってるし、古代兵器の場所も全部知ってるんじゃない？」という疑念があったからだ。

でも、この様子だと存在自体は知っていても具体的な隠し場所は知らないようだ。

「……で、どれを知っているんだ？」

「プルトン」

実際にはもう一つの場所も知っているが、しらほし姫のことを言わない程度の理性は持っている。

彼女は俺が恋人にする予定だからね。

ドフラミンゴパイセンにはやらん。

「ちっ、マジで知ってやがるのか……」

「アンタもな。——だが、最初にも言ったがこれは取引だ。アンタが俺を七武海にしてからしか場所は言わない」

「おいおい、じゃあ、お前が七武海になってから口を閉ざしたらどうする？ 今教える」

「嫌だよ。今教えたら絶対殺しに来るじゃん。俺を七武海にしてから

だ」

「交渉の仕方つてのを知らねえのか？　こういうのはお互いに譲歩が大事なんだ。そうだなア……じゃあ、こうしよう。俺がお前を七武海にできる力の一端を見せてやる。お前はそれに準じて古代兵器に関する情報を開示していく。そして——」

「俺が七武海になった時、古代兵器の在処をアンタに話す」

「その通り。どうだ？」

「契約成立だ」

俺とドフラミンゴは同時に立ち上がり、がっちり握手を交わした。

「これからよろしく頼むよ、先輩」

「おいおい、まだなれてねえのに気が早い奴だな。後輩」

「フッフッフッフ!!」

こうして、ここに史上最悪のパートナーシップが結ばれたのだ。た。

男には仕事よりも大事なことがありますよね？

世は正に大海賊時代！

俺の青春は暗黒時代！

今となつては七武海！ ↑まだなつてない。

ふへへ、いきなり気持ち悪いラップで失礼。

もうすぐ七武海になれるかと思うとテンションが高ぶつてしまつた。

さて、ドフラミンゴ先輩と七武海にさせてもらう約束をした俺だが、もちろんなりたいからといってすぐになれるようなものでもない。

パイセン曰く、色々段階を踏んでいく必要があるそうさ。

「ステップその1。世論を味方につける」

「世論を？」

「ああ。七武海任命権を持っているのは上の連中だが、それでも世論を軽んじることはできねえ。その気になれば無視もできるが、今は革命が盛んな時期だ。嫌でも世論の声を気にしているだろうさ」

そう言つて悪い顔で笑うドフラミンゴ先輩。

一体何をするつもりなのやら。

とはいえ、この分野に関して俺に出来ることなんてほとんどない。

大人しく屋敷でお世話になるしかないのだが、パイセンは（俺のため）裏工作で忙しそうさ、少し暇になつてしまった。

別に俺は軟禁されているわけではないので好き勝手にドレスローザへ遊びに行つていいのだが、一応、逃走中の身の上なので街へ出る時には変装を忘れないようにと釘を刺されている。

ただまあ、何となくまだダラダラしていたいので、暫くこの屋敷の中で食っちゃ寝生活を満喫しておくかあ……なんて思っていたらすっかり忘れていた用事を思い出した。

「そういえばアンタも俺に話があるんだつたよな。バーソロミュー・くま」

急用で席を外していたという七武海にして革命軍幹部の彼が帰って来たのだ。

アロハシャツでくつろいでいる俺に少々面食らったようだが、くまは感情の見えない静かな声で言った。

「……俺の話は単純だ。お前に会ってほしい人がいる」

「なるほど……まあ、何となく察しはついたよ」

この状況で俺に会いたい人なんて一人しかいない。

しかし、気軽に会いに行つていいものなんだろうか。

多分、俺がやろうとしている七武海加入は彼を怒らせるだけな気がするんだが……

「まあ、ここまで逃がしてくれた恩もあるわけだし、無下にするわけにもいかないか。ドフラミンゴ先輩、取り敢えずこっちの用事を先に終わらせてきていいかな？」

「勝手にしろ。こっちはお前の加入準備を進めておいてやるよ、後輩」

「ありがとう。さて、行こうか。くま先輩」

「……行くぞ」

俺の先輩呼びにツツコミを入れることもせず、くま先輩は手袋を外してから能力を発動し、短い空の旅行が始まった。

しかし、マジで便利だなこの能力。

黒ひげみたいに人の能力を奪えるんなら真っ先に手に入れたい能力の一つだ。

移動にはそこまで時間はかからなかった。

体感、1時間くらいだ。

恐らくドレスローザの近くまでわざわざ足を運んでくれたのだろう。

便利なくま先輩の能力で着地した人気のない島には予想通りの人物が待ち構えていた。

「会いたかったぞ。混沌の獣よ」

なに、その呼び名。

カッコいいのでそっちを正式名にしていいかな？

「アンタほどの男に会えるなら世界中どこでも（くま先輩の能力で）飛

んでいくさ。革命家ドラゴン」
俺の船長のお父様が堂々たる立ち姿でそこに待っていた。

◆◆翌日——再びドレスローザの屋敷◆◆

「ただいまー」

「なんだ、随分と遅かったじゃねえか。七武海入りを革命軍の連中に引き留められでもしたか？」

「いや、その逆だったよ」

「なに？」

ニヤニヤと新聞を眺めていたドフラミンゴ先輩の対面に座り、テーブルの上に置いてあったラム酒をぐびっと飲み干した。

「ぶはー！今の状況は革命軍上層部が望んだものとは少し離れているらしくて……コントロールされた混沌ではないやら、タイミングじゃないやらどうのこうの……まあ、なんかよくわかんないけど七武海入りは好きにしろって感じだったよ」

「ほーう、それは意外だな。話はそれだけだったのか？」

「うん。革命軍のコアラっていう可愛い子ちゃんをナンパしていたら思ったより時間が掛かってね。呆れてくま先輩は途中で帰っちゃやし、仕方ないから自力で飛んで帰って来たんだよ」

「アホか……」

心底呆れた様子のだフラミンゴ先輩。

……まあ、今言ったの殆ど嘘なんだけどね。

あの場にコアラはいなかったし、俺は純粹にドラゴンとの話で時間を食っていただけだ。

後は、公にできない契約を幾つか結んできた。

にしても、このナンパなキャラはいいかもしれないな。

いい感じに用事を誤魔化せるし、向こうも深くは突っ込んで来ないから。

「しかし、あれだな。お前、その優男風の見たとイカレた中身で女好きなのか？」

「大好きですねぇ」

「そういえば、うちのファミリーにもモネっていう美人がいるんだが……」

「是非紹介してください」

「うちのファミリーに入るなら紹介してやるのもやぶさかじゃないんだが……」

「前向きに検討させていただきます」

「マジかコイツ」

まあ、モネちゃんのこととは本当に心の底から好きだから、ナンパキヤラとか関係ないんだけどね。

えっ、しらほし姫？ いや、彼女のこととも心の底から好きだから（r

y

閑話休題。

「さて、数日前から仕込んでいたステップ1が実を結んできたぞ。これを見る」

そう言っただけ読んでいた新聞に加え、さらに複数社の新聞を纏めてこちらに投げて寄越すパイセン。

言われた通り広げた新聞たちには次の文面が記載されていた。

“怪物キリア、世界政府に屈服か!? 七武海入りの報道あり!”

“お騒がせ男、怪物キリアが七武海入り!?”

“近々、世界政府が正式な発表を行う予定か”

“革命軍は誤った情報を発信していると憤慨”

“キリアは自分たちの味方であると革命軍は主張”

“しかし情報の出所は世界政府の高官か”

“確かな情報”

“怪物キリアは好条件を提示した世界政府に下るつもりか”

“海軍元帥は急ぎ世界政府へ確認するとコメント”

「おーおー、好き勝手言いなされる」

俺は届いた新聞を広げながらびっくりしていた。

すげー、紙面のほとんどが俺に関する事で埋め尽くされている。

「ちよつと伝手のある幾つかの新聞社に情報を流しただけでこの騒動。フツフツフツフ、人気者だな、キリア」

「わー、うれしー(棒)」

「だが、革命軍のコメントが気になるな。昨日会ってきた連中は気にするなど言っていたんだろう?」

「うん。でも、コントロールされた革命がどうたらは最高幹部くらいしか知らないらしくて、下っ端が俺の七武海加入で騒ぐ分には気にしてなさそうだったよ」

「なるほどな」

ドラゴンは何やら熱心に語っていたが、正直言って微塵も関心がわかなかつた。

もう少し具体的に話してほしいもんだ。

上期までに革命成功国目標15国とか、そんな感じで。

「ま、提示された条件は悪くなかつたからある程度は引き受けたけどさ。」

「さて、キリアよ。俺は力の一端を見せたぞ。今度はお前の番だ」

「えー、新聞会社に情報を流すだけで力の一端? そんなの俺にも出来るじゃん」

「お前なア……俺が築き上げたコネクションと地位があるからここまですぐに出来ているんだぞ。半端な奴だつたらすぐに世界政府に情報握りつぶされて一文字だつて紙面に載ることはなかつた」

「本当にいゝ?」

「ぐだぐだ言わずにさっさと教えろ。プルトンつてのは何だ?」

まあ、情報を流すだけなら俺だけでもできるかもしれないが、俺の七武海入りが当たり前、みたいな流れをつくるのは俺だけじゃ無理だったのかもしれない。

というか、この案を思いついて実行した時点でパイセンの勝ちだ。

仕方ない。ちよろつと教えてください。

「……宇宙戦艦ヤマトって知ってます?」

「知らん」

普通に戦艦だって教えた。

◆◆数日後◆◆

出かける準備をしている最中のことだった。

「おいキリアー！ 出かけるぞ！ ……何してんだ、お前?」

俺が寝泊まりしている個室のドアがパイセンによってノックもなしにいきなり開けられた。

ちよつと、プライベート侵害でっせ?

「何って……正装ですけど」

ドレスローザで購入したとびつきり高いスーツを着こなし、自慢の金髪をきつちりセットすればほら、男前の完成。

ちよつと顔立ちが中性的な感じが物足りないが、まあこれはこれで需要あるだろう。

今はもう無理だが、幼い頃は女装で海軍の目を誤魔化したりしてたし。

おつと、変装用の眼鏡を忘れていた。

「なんだ、見聞色で未来でも見たのか? なら話は早い。さつさと行くとしようぜ」

「ああ! この日をどれほど待ちわびたことか! 気合いは十分ですぜ! 先輩!」

「フッフッフッフ、頼もしいこつて。さて、それじゃあ行くとしようか」

「うっす! いざ——」

「世界政府へ!」「モネちゃんとのデートに!」

「……………」

暫くの沈黙の後、俺は首を傾げながら訪ねた。

「世界政府ってなんすか？」

「おいちよつと待て。その前にモネとのデートってのは何だ？ アイツは確かに今ドレスローザに居るが、お前に紹介した記憶はねえぞ？」

「あまりに会いたかったので見聞色で見つけました」

「気持ち悪っ」

パイセンに本気で引かれた。

「というか、よくあのお堅いモネを口説けたもんだな。しかもデートの約束までこぎつけたのか？」

「ふふん、しかも既に2回目のデートだ！」

「お前……本当に気持ち悪いな」

「なんで?! ここ褒めるとこじやないんすか?!」

俺は某サンジと違ってTPOを弁えた本物の紳士だ。

顔もいいし、性格もいいし、モテるのも当然だと思っんですけど！

「ハア……いかん、またお前の意味わからんペースに巻き込まれるところだった。おい！ 悪いが今日はデートの約束はキャンセルだ！

さつきも言ったが世界政府に行くからな」

「どうしてです？」

「フッフッフ、ステップ2さ。上の説得。俺が今からお前の七武海入りのキーマンに会わせてやる。ちよつどいいことに正装だしな、その格好で俺についてこい」

「嫌です」

「ああ?! 何言ってやがるテメエ！ いいからさつきと来い！」

「嫌だ！ 俺はこれからモネちゃんとのデートがあるんだ！」

「おまつ——七武海とデートどつちが大事なんだ！」

「デートですー！」

暫くフリーズしていたパイセンだが、数秒後に深い……深いため息をついてから言った。

「……俺はどうしてコイツを仲間にしようとしたんだ……」

知るか。そっちが勝手に言い出したただけだ。
そんなことよりも今はモネちゃんだ。

俺の脳みそは今、恋の熱で沸騰している——！
プルルルル、プルルルル、プルルルル、

ん？ この電伝虫は……モネちゃんだ！

「えー、ゴホン。ちよつとパイセンは黙っててくださいよ。——もし
もし！ モネちゃん？」

『ええ。約束前に突然ごめんなさいね、レオンさん。まだお昼まで時
間はあるけれど、あなたに会うのが待ちきれなくて……』

「レオン……？」

「しっ！ 静かに！」

パイセンが首を傾げているが、これは俺の偽名だ。

ていうか、ドレスローザに遊びに行く時は身分を偽れっていったの
はそっちでしょ全く。

「俺もだよモネちゃん。寧ろ俺の方から待ちきれなくて電話しそうに
なっていたくらいなのに……」

『レオンさん……』

「モネちゃん……」

「……」

彼女との運命的な出会いを思い出す。

そう。あれはドレスローザでぶらぶらと探索していた時のこと――

「おい、モネ。俺だ」

『わ、若っ!』

ちよつと若！ いいところなのに邪魔しないでよ！

なに急にモネちゃんの上司顔でカットインしてきてるんすか！

俺はドフラミンゴのピンクジャケットを引っ張りながら抗議する
が、完全に無視を決め込んだパイセンは電伝虫に語り掛ける。

「いいか、モネ。こいつはこれから俺と一緒に大事な商談があるんだ。
悪いが、今日の予定はキャンセルにしてくれ」

「ちよ、ちよっ——！」

こ、コイツ……人の心がないのか!?

愛し合う男女の仲を容易く引き裂くなんて……

『はい。分かりました若！ レオンさん、若どのお仕事頑張ってくださいね!』

「モネちゃん……」

楽しみにしてくれていたのに、わざわざ俺のことを応援してくれるなんて……!

「うん！ 任せて！ 若どの仕事頑張ってくるよ！ デートはまた今度行こうね!」

『ええ。楽しみにしているわ!』

ガチャっ

「……つたく、世話の掛かる——」

「何をしているんです、ドフラミンゴ先輩」

「あん?」

「さつさと世界政府へ行きますよ。下らん雑務はさつさと終わらせて、俺はモネちゃんとのデートに戻るんだ」

「……」

この時、ドフラミンゴはこう思っていた。

コイツ、マジでぶち殺したろうかなー、と。

俺に勝てるのか思っていないですよね？

◆◆聖地マリージョア◆◆

世界政府の要職につくその男にとって、その日は正に最悪の厄日だった。

『——ちよつと話がある。明日、向かう』

厄介ながらも使える取引相手であるドフラミンゴから一方的な連絡があつた時点で嫌な予感はしていた。

だが、どうせしようもない儲け話だろうと高を括っていたのが良くなかつた。

奴が連れてきた男を見た瞬間、男は本気で眩暈がした。

「フッフッフッフ、よう、久しぶりだなア。忙しいだろうに急に悪いな」

全く悪びれる様子なんて見せずにトレードマークのピンクジャケットとサンングラス姿で登場したドンキホーテ・ドフラミンゴ。

そして——

「こっちは俺の後輩になる予定の男だ。今日はアンタにコイツのことを紹介したくてねエ……ほらキリア、挨拶しろ」

「フッフッフッフ、キリアだ。以後よろしくう」

ドフラミンゴの色違いのような派手な金色の羽毛ジャケットを羽織り、似たようなサンングラスを掛けたスーツの男がニヤニヤ笑いで挨拶をしてくる。

怪物キリア。

最近の頭痛の種がドフラミンゴそっくりな格好で目の前に現れたのだ。

男は眩暈に加えて吐き気をこらえるのに必死だった。

ダブルドフラミンゴシステムとか卑怯だろお前……！

動揺しきりの男を前に、勝手にソファアードでくつろぎ始める2人。

最初にインパクトを与えて交渉を有利に進めるつもりだと悟った男は何とか主導権をこちらに手繰り寄せようとするが、それよりも先

にドフラミンゴの一方的な話が始まった。

“今の世界情勢”

“怪物キリアの危険性”

“だが、彼は条件次第では世界政府に忠誠を誓うと言っていること

”

“彼を仲間にするには今しかないということ”

「——そういうわけで、コイツを俺の後輩にしたいんだ。構わねえだろ？」

「ふざけるな！ 七武海はそう軽々しくなれるようなものではないぞ！」

「軽々しくないさ。新聞見てねエのか？」

「あれもどうせ貴様の仕業だろうが……！ 海賊風情が、あまり調子に乗るなよ！」

「——おい、言葉遣いには気を付けろよ」

ドフラミンゴは男の机まで詰め寄り、机の角に腰を掛けてその掌を男の顔に向けた。

「俺が興味あるのはテメエの権力だけだ。四の五の言わずにさっさと上を説得してコイツを七武海にすりゃあ、いいんだよ。テメエにできないならさっさと首を飛ばして別の奴に頼むだけだ」

「きよ、脅迫か……？ こんなことをしてただで済むと思っっているのか……！」

「ああん？ まだ状況が分かってねえのか？ おいキリア、お前の今の気持ちを教えてやれ」

「うーん、そうだなア……」

勝手に部屋のウイスキーを飲んでいた怪物がグラスを置き、ドフラミンゴと同じように机まで詰め寄って来た。

「なんか今、無性に暴れたくなってきたっすわ」

「ッ！！」

「おいおい、それだけか？」

「あれっすね。復讐心が燃え上がって来たっすわ……天竜人、もつと殺っちゃおうっかな？」

「ッ!?!」

「フッフッフッフ、そりゃあ、まずいな。コイツはやると言ったらやる男だ。どうする? お前の決断一つで救われる命があるんだぜ?」

「い、いや……そういわれても……」

確かに自分のコネクションを使えば七武海に推薦することも可能だが……それにしたって上への説得が……労力が……。

そんな男の葛藤を見抜いたのか。ドフラミンゴは先程までと打って変わって優しい声で語り始めた。

「——逆に考えようぜ。今ここでコイツを七武海にすりゃあ、お前は制御不能の怪物を手懐け、天竜人の命を守り、革命の動きを抑えた英雄になれるんだぜ?」

「だぜ」

「えい、ゆう……」

男の脳裏に様々な人間から祝福される様が思い浮かんでくる。

それに、ドフラミンゴの言っていることは決して嘘ではない。

怪物は理解不能で、制御不能で、殺せないからこそ恐れられている。

逆に言えば、理解はできず海軍大将で殺すことができなくとも、制御することさえできれば世界政府としての面子は保てるのだ。

……これから自分が説得しなければならぬ人間を考えれば今すぐにも断りたい案件ではあるが。

「よく考えてみる」

「みる」

「これはまたとない絶好の機会なんだぜ?」

「だぜ?」

「冷静に自分のキャリアを考えるのであれば」

「あれば」

「ここで乗らない手はねエ」

「ねエ」

「キリア、お前はちよっと黙っておけ」

「OK」

交互にダブルドフラミンゴが語り掛けてくる。

(片方はドフラミンゴの語尾を復唱するだけだが)

男は必死に頭を回転させた。

ふざけた奴だが、世界に与える影響力は尋常ではない。

手間は掛かるがやるしかないのだろう……。

「……分かった。上に取り合ってみよう」

「そこなくつちやなア！ よろしく頼むぜ！」

「頼むぜ！」

「邪魔したなア！」

「なア！」

「フッフッフッフ」

「フッフッフッフ」

こうして、嵐のような2人は上機嫌で男の元を去っていったのだ。た。

ステップ2完了。

◆◆ドフラミンゴの屋敷◆◆

「さて、最後のステップ3……に移る前にだ」

「はいはい。プルトンに関する情報でしょ？ 何を知りたいんですか？」

パイセンから渡されたクソださグラサンとコートを脱いだ俺はソファアでくつろぎながら答えた。

「そうだなア……戦艦というくらいだ。そのプルトンとやらには設計図が存在してるんじゃないかねえのか？」

「まー、あるらしいっすね……」

「その設計図の場所を知ってるのか？」

「いや、そっちは知らないっす。俺が知ってるのは現物がある場所だけなんで」

「ちつ、何だよ。使えねー奴だな。……だが、現物が手に入るなら設計図もいらねえか。せつかくなら手っ取り早く量産させようと思ったのによオ……」

「……」
何て恐ろしいことを考えるんだこの人。

これは設計図の場所を言わなくて正解だったな。

流星にトムさんを始め、ウォーターセブンの方々が命懸けで守り抜いた設計図を売るほど非道になったわけではない。

ま、どうせフランキーが燃やしちゃう設計図ではあるんだけどね。

そして現物の方が、パイセンが死ぬほどビビり散らかしているカイドウが治めるワノ国にあるうえ、海底に封印された状態で取り出し方が俺にもよく分からないような状況だ。

（開国がキーワードだっけ？ ワノ国編最後まで見届けられずに死んじやったからよく分からないや）

もしパイセンが海底からの取り出し方を思いついたとしても、かなり大掛かりな作業が必要になるだろう。

つまり、ワノ国に眠っているプルトンを手に入れるには次の条件が必要になる。

① 具体的にワノ国のどこにプルトンが眠っているかを探る。

（俺は海底に眠っていることまで伝えるつもりはない）

② ワノ国を開国させ、海底から戦艦を浮上させる。

（……良く分からないけど多分無理そう）

③ 作業の邪魔になるカイドウの排除。

（パイセンには無理でしょ）

ドフラミンゴ先輩が思ったよりしつかりと俺の七武海加入に向けて動いてくれているのはありがたいが、残念ながらパイセンには泣きを見てもらう必要がありそうだ。

ま、場所は教えるとは言ったけど、使えるなんて一言もいってないし、ここは早とちりをしたパイセンの方が悪いってことで一つよろしくう！

世界を滅ぼすなんて物騒なこと言っちゃダメっすよ。

◆◆数日後◆◆

モネちゃんとの2回目のデートも無事に終えた次の日。

またもやノックなしでドアが開いてパイセンが入って来た。

プライベート（ry

「出掛けるぞキリア、ステップ3だ。……今日はデートの約束入ってねえだろうな」

「大丈夫っすよ。どこへ行くんです？」

パイセンはニヤリと笑って言った。

「海賊狩り」

【ステップ3：政府への忠実性の確認】

俺とパイセンは今、並んで空を飛んでいた。

流星に本気を出せば俺の方が圧倒的に速いので、雲に糸を引っかけて移動しているパイセンに俺が合わせている形だ。

どうせならと「獣状態の背中に乗りますか？」と聞いたんだが、

「お前の変身後の姿気持ち悪いから嫌だ」というシンプルな悪口で断られたので、並んで飛んでいる。普通に凹むんだが……。

さて、ステップ3についての詳細だが内容としては簡単で、世界政府が手を焼いている新世界の海賊を退治し、俺にきちんと任務遂行能力と忠実性があるかどうかを確認したいらしい。

ちなみにドフラミンゴ先輩は七武海の先達として俺がきちんと任務をやるかどうか監視する役だそうだ。

まあ、パイセンが俺に不利な報告をするはずもないので、これは殆ど出来レースってやつですな。

「おい、見えたぞキリア。あれがターゲットの海賊船だ。新世界で好き勝手に暴れては略奪行為を繰り返している連中だ。出来る限り生け捕りでいけ」

「ういっす」

まあ、これも七武海になるためだ。

さっつくり終わらせませるか！

◆◆ドンキホーテ・ドフラミンゴ◆◆

強い。

俺は雲に引っかけた糸に腰かけ、眼下で繰り広げられている一方的な戦いを眺めながら素直にそう思った。

今下で戦っているのは俺が適当にでっち上げた理由で海賊と戦っているキリアだ。

空を飛んでいる間は普通に竜の翼を生やしていただけだったが、海賊を見つけて俺からゴーサインが出るや否や、すぐさま異常な姿に変身して海賊船へ突撃していった。

完全獣形態は見たことがあり、その時点で十分に化け物だと思っていたが……今の姿も大概だな。

「あ、悪魔……悪魔だ！」

下から聞こえてくる海賊の声に同意する。

アレは、悪魔だ。

竜の頭に変形した右腕に、獣の凶悪な爪が生えた左腕。

こめかみ辺りからは山羊の角が2本、悪魔のように生えている。

そして背中には大きな竜の翼。

上半身は鍛え上げた肉体がそのまま晒されており、下半身は黒色の体毛で包まれ、脚は山羊のように変形している。

さらに毒を持った蛇の尾まで生えてやがる。

金色の髪を靡かせ、獅子のような牙を？き出しにして嗤う姿は正に悪魔の如し。

「あー、はいはい。悪魔ですよつと。——どうでもいいけど早く沈んでくれない？」

竜の頭に変形した右腕から熱線が放たれる。

ただの一撃で海賊船に致命的なダメージが入り、海賊旗が一瞬で燃え尽きる。

「デメエ……良くもー」

ここは新世界。それなりに腕の立つ連中が生き残っている場所だ。

当然のように覇気を使える連中が反撃に打って出る。

剣で切りかかるが、獣のように変形した鋭利な爪に受け止められ、逆に山羊の脚で強烈な蹴りを入れられて吹っ飛んでいった。

「クソツタレ！」

覇気を込めた銃弾が放たれる。

「ちよつと！ 痛いじゃないか」

「う、嘘だろ……傷が一瞬で」

攻撃を受け、被弾しようともすぐさま回復する様は自然系の理不尽さを思い起させる。いや、ダメージを受けてから超回復を行っているからそれ以上か。

「ふざけんな化け物がアアア！」

「おつと。その刀、鈍らだね。替えた方がいいと思うよ」

さらに、そもその身体が異常に頑丈だ。

生半可な剣では傷をつけることも出来ない。

そして極めつけは――

「バカ野郎！ ただの能力者だ！ 致命傷を受けりやあ、死ぬに決まってるんだろ！ いいから撃ちまくれ！」

「ああ、悪いけど、アンタの覇気は身体が覚えたんだ。もう殆ど効かないと思うよ」

「はあ……？ 何を言ってるやがる！ そんなことが――」

「ほら」

先程は身体を貫通した筈の弾丸はしかし、容易くキリアの左手で受け止められていた。

これだ。この初撃以降の同攻撃に対する異常な適応能力。

各地に派遣しているスパイたちに命じてコイツに関する資料を片っ端から入手したが、黄猿と青雉という海軍最強戦力2名がコイツへ猛攻を仕掛けるも止めを刺しきれなかったのは、この異常な能力のせいらしい。

一度食らった攻撃は効かない……というほど理不尽なものではないらしいが、少なくとも初撃よりも威力が落ちるのは間違いないらしい。

それは防御力／回復力の両方に作用し、能力者の攻撃を受けても2

回目はダメージが通りにくくなり、さらに回復速度も速くなるそう
だ。

……化け物だな。

少なくとも、初撃で大ダメージを与えられなきや、それ以降は圧倒
的に向こうが有利になる。

同じ技の定義が曖昧だが、生憎とコイツは誰の技を食らっても五体
満足でいる強烈な生命力がある。

一度命懸けで戦えば、次の戦いからは殆ど全ての攻撃に対する耐性
を得ているとみて間違いないだろう。

俺はコイツに勝てるのか？ 自問自答するが……正直言って、厳し
い気がする。

認めるのも癪だが、アイツの力は反則級だ。

それにプルトンの件もある。

“今は”戦わずに味方にする方が得策だろう。

「……今、か」

アイツと接触してからずっと続いている奇妙な関係性に思いを馳
せる。

出会ってからまだ一週間も経っていないが、アイツが何か隠してい
ることには気が付いている。だがそれは構わねエ。俺だって似たよ
うなものだしな。

俺たちはお互いの腹の内を（雑に）隠しながら自分の利益だけを追
い求めている。

アイツは厄介だし、面倒だが、使える男だ。

“今は”先輩顔をして仲良くしておくに越したことはないだろう。

『ドフラミンゴ先輩』

誓って言うが、情が湧いたわけじゃない。

アイツは仲間ではないし、ましてや友人ではない。

ただの……クソ迷惑な後輩だ。

だが、暫くは面倒を見てやってもいいかもしれない。

今は、今だけはそう思っている……。

「あつ、モネちゃんから電話だ！ ストップ！ みんな一回戦闘ス
トップをお願いします！ もしもし、モネちゃん？」
「……」

この時、ドフラミンゴはこう思っていた。

コイツ、本当の本当にマジでぶち殺したろうかなー、と。

王下七武海 怪物キリア

◆◆海軍本部 マリンフォード◆◆

「ふぎけるなッ！ なんだこの通達は！」

その日、仏のセンゴクはぶち切れた。

「おー、どうしたんじやあ？ ついにハゲてきたか？」

「ガープ！ 私の頭髪は見ての通りまだまだ現役だ！ 見て分かったのか！」

あまりの大声に海兵たちが何事かと動揺する中、呑気に煎餅をかじりながら登場したのは海軍の英雄、ガープ。

センゴクと長い付き合いの彼は、尋常ではない盟友の様子から何か大事が起きたことを察していたが、敢えて普段通りのノリで接することを選んだ。

「がっはっは！ まだまだ鬱陶しいくらい生えているのお！ 育毛剤が必要になつたらわしに言え！」

——で、髪じゃないなら何があつたんじや？」

「これを見ろ」

そう言つてセンゴクが手渡した書面には次の文言があつた。

【怪物キリア 王下七武海登録の連絡】

「あの世間を騒がせておる小僧が七武海入りか。上の連中、よほどコイツが怖くなつたのかのお……この煎餅美味いな」

「呑気に煎餅をかじっている場合か！ 私は聞いていないぞ！ 世界政府は何を考えている……！」

「温かい茶はないか？」

「話を聞けっ!!」

「こちらに！」

「お前も渡すな！」

怒りが収まらない様子 of センゴクに対し、ガープはいつも通り大口を開いて笑つた。

「そう騒ぐな。奴が一般市民に被害を出した話はないと聞く。下手に

放置して暴れさせるよりも、首輪をつけて飼いならせるならそう悪い話でもないじやろう」

「だが！」

「それに」

ガープは強靱な顎で煎餅をまとめて3枚砕いてから笑った。

「——奴が何かやらかしたのなら、次はわしが出よう」

「ガープ……」

「奴の能力は青雫たちから聞いておる。確かに強力だが、わしなら相性は良さそうだ。ようは、耐性を付けられる前に仕留めればいいんじゃないやろう？」

数多の海賊を沈めてきた老兵の拳に血管が浮かび上がる。

初撃以降の攻撃に対する圧倒的な適応能力。

確かに強力だが、攻略方法がないわけではない。

1つは適応能力を超える手数の方で圧倒すること。

そしてもう1つは、強烈な初撃による1発決着。

「……分かった。少し動揺しすぎていたようだ。皆、すまなかった」

センゴクはその場にいた皆に謝罪をした。

「ん、センゴクさん。ちよつといいですかい？」

「黄猿……どうした？」

最も長く怪物と戦ってきた海軍大将黄猿は相変わらず感情の読めない、いつも通りの態度で尋ねた。

「今七武海の席は7人で埋まっていますが、その点はどうするつもりなんで？」

「なんでも、特例事項として8人目の七武海として認めるらしい。正式名称も王下七武海ではなく、『王下特務 番外七武海』だそうだ。

……まあ、中身は8人目の七武海ということで変わりないから、どうでもいい話だな」

「ん、そうですね」

「……すまん、黄猿。お前も思うところはあろうが、この決定は私の力では覆せそうもない……」

「あ、いえいえ、わっしのことはお気になさらず。元はと言えば、奴

を仕留めきれなかったあつしの責任ですから」

「黄猿……」

「しかし、我々が迂闊に手を出せない立場まで逃げられてしまった以上、今後さらに面倒なことになりそうですなぁ」

「とうとう？」

黄猿はサングラスの向こうに感情を隠しながら呟いた。

「本人に暴虐を働く意思があるようには見えませんが、アレはただ息をしているだけで災害をばら撒くタイプの人間です」

そして、未来を予知するかのようにそつと呟いた。

「荒れるでしょうなぁこの海は」

◆◆ドフラミンゴの屋敷◆◆

海軍が慌ただしくなっている中、巧みな情報操作と豊富なコネクションで前代未聞の七武海入りを達成した二人組はというと――

「おいテメエ……覚悟はできてんだらうな？」

絶賛喧嘩中だった。

電撃加入が決定した新たな七武海怪物キリアは、同じく七武海であるはずの同僚、ドフラミンゴによつて胸元を掴まれて脅されていた。

「ちよ、ちよつと落ち着いてくださいよ先輩、約束はちゃんと守ったじゃないですか」

「ふざけるなツ！ プルトンはワノ国のどつかにあつて、しかも封印されていて、すぐに使えるかどうかも分からねえだア？」 古代兵器

を渡すつていう条件に反しているんじゃないやねエのか、おい！」

「俺は渡すなんて一言も言っていないすよ！ ただ、場所を教えるつて言っただけで……」

「クソツタレが！ この俺が尽力してお前を七武海にしてやったつてのにこの仕打ちか！ 仁義はどうした？」

「仁義がどうこう語るのはいせんのキャラ的にどうかと思うんですが」

「否定はできん」

掴んでいた俺の服を離し、パイセンは深いため息をついてからソファーに腰を下ろした。

「クソ……腹が立つ……何が一番腹立つって、俺がこのクソアホにまんまと嵌められたという事実が一番腹立つ……！」

「とりあえず、俺の七武海加入祝いにBBQしません？」

「ちよつと黙つてろ！ それから俺はBBQが嫌いだ！」

「肉とか買いに行かなきゃなあ……」

「話を聞けツ!!」

パイセンには悪いけど、今俺の口は肉のモードに切り替わってしまった。

とてもではないが相談ごとに乗れるような状況ではない。

「クソ……どうする……」

あーでもない、こーでもないと悩んでいる先輩は放置しておくとして、俺は取り敢えず肉の調達を優先することにした。

数十分後。

「……あれ？ まだ悩んでたんすか？」

俺が買い物に出かけてから帰ると、パイセンはまだプルトンに頭を悩ませているらしく、テーブルの上に色んな資料をぶちまけて考え事に耽っていた。

「ああ……テメエの寄越したクソ情報のせいだな。せめて正確な隠し場所ぐらいは把握しておけよ」

「まあ、この広い海の中で隠し場所が分かっただけでも良かったじゃないか。——カイドウの縄張りだけど」

「それが問題なんだ馬鹿がツ!!」

おーおー、荒れてますなあ。

そんなにカイドウが怖いなら諦めればいいのに。

「戦うのが嫌ならカイドウにお願いしたらどうです？ 古代兵器がここに埋まっているはずなんで調査させてくださいって。仲いいんでしょ？」

「バカかテメエは。そんなこと言った日には、カイドウが自ら手に入れようとするに決まっている。……いや、知っているからこそワノ国に居座っているのか？」

そこら辺は最後までよくわからなかったんすよねえ。

ま、どつちにしろカイドウが邪魔ってことになるんだろうけど。

「クソツタレめ……どうしてよりもよってワノ国なんだ……おい、念のためにもう一度だけ聞いておくがワノ国ってのは間違いないんだな？」

「それだけは誓って間違いないすよ。なんなら、五老星にでも鎌かけてみたらどうです？」

「……まあ、そこまで言うからにはマジなんだろうな。クソ……ワノ国か」

「あつ、肉焼けましたよパイセン。食べます？」

「ああ……って、テメエは何ナチュラルに俺の目の前でBBQしてやるんだ？」

あんまりにも長く一人で悩んでいたので勝手に庭で始めてしまった。

前世からの習慣で、お祝い事は肉焼いて食うって決めているんだ。

これだけは絶対に譲れない。

「パイセン……好き嫌いは良くないすよ」

「トラウマがあるんだよ！ ギャグで流せねえレベルのな！」

「ふーん、かわいそうに（棒）。じゃあ、この肉は俺がもらいますね」

「でもそれは俺に超越せツ!!」

めんどくさいなあ、この先輩……。

結局、やけになったように網の上で焼いていた肉を片っ端から食い始めたパイセン。

ちよ、ちよつと！ それだと俺の分まで……クソ！ ならこつちだつて負けじと肉を拾ってやるもんね！ あれ、肉が網から取れない……コイツ！ イトイトの力を使って――

閑話休題。

「……で、結局どうするつもりなんすか先輩」

「……どうするか……」

山ほど買ってきた肉を二人で死ぬほどかつ食らい、もう動けなくなった俺たちはソファアの上に寝そべっていた。

うええ……食いすぎた。マジで気持ち悪い……。

ていうか、なーにがBBQ苦手だ。俺より食ってたじゃん。

「カイドウ……カイドウか……」

「まだ悩んでるんすか？ もう諦めたらどうです？ どーでもいいじゃないすか。古代兵器なんて」

「ふぎけるな。俺が苦勞して提供した七武海の地位に対してテメエからの対価がこれじゃあ、納得がいかねエ」

「今食った焼肉で良くないすか？」

「テメエの肉でBBQするぞゴラア」

BBQに抵抗はなくなったんだ。

「おい、言っておくがもうちよつと手伝えよ。流石にこれは対価としては納得いかん」

「えー……まあ、始まるまでは暇だから別に良いですけど……俺に出来ることあります？」

「カイドウを殺してこい」

「無茶ぶりにも程があるでしょ」

アンタ、俺のことなんだと思ってるんだ？

「俺戦ったことないすけど、どれくらい強いんすか？ 四皇って」

「少なくとも、海軍大将よりは強いんじゃないか？」

「史上最強じゃないすかそんなの」

「お前の海軍大将に対する厚い信頼は一体何なんだ？」

「そんな言うならパイセンも戦ってみたらどうです？ マジで引くぐらい強いっすよ」

「結構だ」

まあ、原作でもビビッて青雉から逃げてたし、パイセンじゃあ、勝てないでしょうね。

「あー、クソツタレめ……中途半端な情報与えやがって……これじゃあ、今後の取引も面倒になるだろうが……カイドウの軍団強化なんて馬鹿らしくてやってられねエぞ……」

「何をブツブツ言ってるんです?」

「どうする? 本当にヤルならアレの生産計画は寧ろ俺にとって邪魔になる。だが、こんな訳の分からない奴が言った古代兵器の情報の為だけにこれまでの努力を棒に振るのか……?」

「あー、ドフラミンゴ先輩?」

あまりにも情緒不安な様子から心配になって声を掛ける。

先輩はギロリと俺を睨みつけてから言った。

「おいキリアー! テメエ、プルトンの情報は本当に間違いないんだろ
うな!! 本当にワノ国に現物があるんだろろうな!!」

「だから! 何度もそう言ってるじゃないすか!」

「誓えるか?」

「はい?」

急に何を……。

ソファアから立ち上がったドフラミンゴ先輩は真剣な表情で俺を見つめながら言った。

「お前の一番大事なものに誓えるか?」

「……誓えますよ」

「何に誓う?」

目覚める前の——いや、目が覚めてからもキリアという人間が一番大事だったもの。

「亡くなった俺の母と、生まれてくることが出来なかった俺の弟に」

「——」

ドフラミンゴ先輩は暫くの間立ち尽くしていた。

やがてゆつくりとソファアに座り直し、額に手を当てながら絞り出

すような声で言った。

「……分かった。お前の言葉を信じよう」
「……」

俺は急に酒が飲みたくなつた。

無言でラム酒を取り出してきてグラスに注ぎ——ついでに先輩の分も注いでから一気に飲み干した。

先輩も同じように向かいで飲み干した。

気を取り直して再びソファーに座りなおした先輩はまたブツブツ言い始めた。

「ワノ国……ワノ国か……海楼石の産地、政府も手出ししない鎖国の地……侍とかいう戦力……悪くない」

「だが……カイドウには勝てねエ……いや、勝てねエって考えが間違つてるんじゃないのか？」

「この馬鹿も使つて……俺の力の全てを使つても……五分か……？」
「いや、五分じゃねエ。分が悪いのは明らかに俺たちだ。だが……このアホがいればあるいは……」

なんか時々アホとか馬鹿とか聞こえるが、多分俺のことではないだろう。

「ふわぁ……眠っ」

あー、ダメだ。

満腹になつた上にアルコールを入れたせいで眠くなつてきた。

お風呂も入りたいけど、もう明日の朝でいいかなあ……

「おいキリアー！」

「う、うつす」

「お前、コイン持つてるか？」

「まあ……ありますけど……」

「寄せ」

何だ急に？

取り敢えず、懐から取り出したコインをパイセンに投げて渡した。

「……表だ」

「じゃあ、俺は裏でお願いしやす」

「テメエは関係ねエよ。答えは殆ど決まっているが、偶には最後の1押しを天に聞いてみるのも悪くないかと思つてな」

そう言つてパイセンはコインを親指で宙に弾き飛ばした。

キーン、

クルクルと宙でコインが回る。

何故か、このコインが世界の命運を握つていような、そんなあり得もしない感覚に襲われた。

黄金の金貨は程なく重力に引かれて落ちてくる。

先輩は落ちてきたコインを手で蓋をするように左手の甲に叩きつけた。

そして、ゆつくりと被せた右手を左手の甲からどかしていく。

……なんか、俺関係ないはずなのにやたらとドキドキするな。

「——」

「……どうだったんです？ 表でした？ 裏でした？」

「……返すぞ」

「おっとっと」

ノールックで弾き飛ばされてきたコインをキャッチする。

そしてドフラミンゴ先輩は再びソファーに横になった。

「先輩？」

「……取るか」

「何をです？」

ドンキホーテ・ドフラミンゴはソファーに横になりながら言った。

「カイドウの首を」

「ああ、カイドウの首つすか。いいんじゃないすか？ 別にカイドウを倒したところで俺には何の関係も——今なんて？」

「だから、カイドウの首を取るつったんだよ。長期的な商売相手として見据えていたが、もう止めだ。面倒だ。プルトンがそこにあるなら、ワノ国ごと手に入れてやる」

「いや、流石にそれはちよっと——」

「アイツを殺して」

王下七武海 天夜叉ドンキホーテ・ドフラミンゴは宣言した。

「俺が四皇になる」

「……」

いや、いやいやいやいや。

何を言ってるんですこの人は？

カイドウを殺す？ パイセンが？

無理でしょ。勝てるわきゃない。

それに第一、原作はどうなる？

ドレスローザ編は？ パンクハザード編は？ 何よりワノ国編は

？

俺が一味の皆と一緒に冒険するはずの旅はどうなるんだ。

「おい、キリア」

「……なんですか？」

「フッフッフッフ、俺ア、久々に『野心』ってやつを思い出したよ。小難しいことを考えず、ただ成り上がることだけを考えていたあの時をな。ああ、若い頃に戻ったみてエだ……」

「……………」

あつ、ダメだ。

パイセンの発言がアレすぎて、脳のキャパシティを超えたみたい。い。

さっきのコイントスで目が覚めたと思ったけど、また眠くなってきた。

うん。さっきのパイセンの発言は、一端忘れよう。

どうせ一時の気の迷いだろう。

風呂もどーでもいいや。

もう寝よう。

「ドフラミンゴ先輩」

「あん？」

「俺、もう寝ますね」

「ああ、分かった」

あつ、そうだ。最後に一つだけ忘れていたことを伝えておかないと。

「ドフラミンゴ先輩」

「あん？」

「七武海入りの件、色々とありがとうございました。感謝してます」

「……おう」

あー、眠い。色々と考えることはあるけれど、一先ず今は眠るとしよう。

俺はようやく手に入れた安寧を享受しながらゆっくりと目を閉じたのだった。

【超余談】

二人で馬鹿ほど肉を食っている最中のことだった。

「あつ、そういえばドフラミンゴ先輩。ちよつといいですか」

「なんだ？ ……おい、それは俺が育てていた肉だ。触るんじやねえ」

「いやいや、パイセンのは隣のやつでしょ。勝手にすり替えないでください」

「いや、絶対にそっちが俺のだ。糸を引っかけているから間違いない」

「もうその反則やめてくださいよ」

だが、羨ましくもある。

俺の能力はこういう日常で役立つような利便性がないからなあ……。

「おっと、話が逸れた。肉じゃなくて、聞きたいことがあるんすよ」

「なんだ？」

「先輩、歳は幾つなんですか？」

「なんだ急に？」

「いいから教えてくださいよ。41歳つすか？」

「……38だが」

2年後の新世界編でのパイセンが41歳だから……原作開始時は39歳のはず。

つまり今は原作開始1年前つてことか。

「ありがとうパイセン。参考になったつす」

「????」

「誕生日になったら教えてくださいつす。派手に誕生日パーティーを

開きましょう」

「お、おう……????」

「楽しみつすね……先輩が41歳になる日が」

「????」

番外編

人物設定

キリア

本名：キリア

異名：怪物（一部界限では竜殺しと言われている）

年齢：20歳

身長：185cm

血液型：F型

悪魔の実：動物系幻獣種　ネコネコの実　モデル　キマイラ

武器：素手

好きな物：BBQ、金、女、酒、ぐーたらな生活、冒険、麦わらの

一味

嫌いな物：天竜人、海軍大将

【人物】

ワンピース世界に転生した男。転生を自覚した瞬間には人生詰んでいた結構可哀そうな男。

だが、そこから淡々と理不尽を受け流しながら生き延びた結果、大概のことに対して無関心で且つ、自分の意志だけを突き通せる究極の凶太さを手に入れた。（開き直ったとも言おう）

本人の行動原理と周りとの理解に乖離が生じた結果、“狂人”として認識されることも少なくない。

見た目は爽やかな金髪イケメンだが、中身は残念な女好き。サンジとキヤラが被っていることを気にしており、髪を染めることも考えている。

幼少期より麦わらの一味の活躍を（画面越しに）見て育ってきたため、一味に対してかなりの憧れがあり、自分が何をやらかしても最終的には（自分が加入した）麦わらの一味が何とかしてくれると思っている。

でも、最近様子がガラッと変わったパイセンを見て事態の深刻さに

気が付きつつある。

現状、暫定的にドフラミンゴ一味みたいになっているが、本人は麦わらの一味に入ること諦めていない。

一味に入る為なら上述のキャラ被りを防ぐべく、自分の性格を改造してもいいとさえ思っている重度の麦わらの一味オタク。

妄想癖と思ひ込みが強く、そのうち勝手に麦わらの一味を名乗りかねない。

憧れは止まらないけどお前は止まれ。

【特技】

アホだが（会計的な意味で）計算は得意。

馬鹿だが（腹芸的な意味での）計算も得意で、自分の有利になるように交渉を誘導する強かさもある。

変装も得意で、その気になれば名優さながらの演技もできる。

幼少期より世界政府と海軍に追われながらも一度も捕まることがなかったため、その瞬間、瞬間を生き抜く力はかなりのものだが、逆に言うと長期を見据えて計画を立てるのは苦手。

【能力】

キマイラに変身できる動物系の能力者。

空中戦闘と遠距離攻撃を得意とする当たりの能力で、驚異のタフさと防御力を誇っている。

獅子の頭と竜の頭の両方から火炎とビームを放つことができ、蛇の尾からは猛毒を発射することができる。

何段階か変身形態を会得しており、能力も覚醒済み。

『初撃以降の同攻撃に対する異常な耐性』を持っており、二度目以降は身体が勝手に攻撃に対して防御力を引き上げ、回復力も上昇させる反則じみた能力を持っている。

大抵の相手には初戦を生き残れば余裕で完封できそうな能力だが、これに悠々とついてくる海軍大将の強さはやはり異常。

キリア本人がメンタル的に苦手意識を抱えていることもあり、黄猿師匠とは相性が悪い。

【人間関係】

ドンキホーテ・ドフラミンゴ

↓頼りになる先輩。慕っているし、一生レベルの恩もあるし、絶賛居候中の身だが、仲間になるのは嫌だ。最近、自分と同じファッションをするよう勧めてくることを鬱陶しく思っている。ダサイし。

黄猿

↓怖い。死ぬほど怖い。ぶっちゃけ、攻撃はほぼ全種類食らっているので耐性はあるはずだが、それでも余裕でダメージ通してくるので本気で怖い。

青雉

↓怖い。でも、黄猿よりは能力的に相性が良いので結構舐めてかかっている。

赤犬

↓会ったことないけどもう怖い。

モネちゃん

↓可愛い。美人。好き。でも最近、ドレスローザの女の怖さを感じて別れることを検討中。

麦わらのルフィ

↓頼りになる船長。

ドンキホーテ・ドフラミンゴ

言わずと知れた悪のカリスマ、天夜叉の兄貴。

天竜人殺害という世界のルールを真っ向からぶち壊してかかるキリアに興味を持ち、利用するべく声を掛けた結果、逆に脅されて七武海入りのために尽力することになった38歳。

意味わからない言動と凶々しいが過ぎる性格に振り回され続け、最近ギャグキャラと化しつつある。

自分を憎まず服従せず、敵でも味方でもないという、今まで出会ったことがないポジションと性格の男に困惑しつつ、ちよつとだけ情が湧きかけては「やっぱ殺そう」の間を反復横跳びしている。

人造悪魔の実スマイルを製造し、カイドウに売りつけるべく計画を進めていたが、ワノ国に古代兵器プルトンがあることを知り、計画を中断。(カイドウの軍団を強化するだけのため)

プルトンをワノ国ごと手に入れるべく、カイドウと敵対することを決意。

再び火が付いた野心に心を燃やしつつ、四皇の座を狙って躍動を始めた。

最近、後輩がやたらと誕生日を聞いてくることに困惑している。

モネの恋【前編】

最悪の境遇にあった私と妹を救ってくださった若様。
彼には計り知れない恩がある。
若様のお役に立つこと。それだけが、私の人生の意義だった。
彼が現れるその日まで。

時は怪物キリア七武海入りより少し前まで遡る――

その日、外で長期にわたる任務を終えてからドレスローザに帰還した私は若様の元へ報告に向かっていた。

「――以上のことから、スマイル製造工場の候補地は申し上げた3箇所が適切かと考えます」

「……」

「……若様？」

「ん？ ああ、そうだな。ご苦労だった。いい資料だ。参考にする」

「ありがとうございます」

どこか上の空のように見えたが、若様はいつも通り王に相応しいカリスマ溢れるオーラを身に纏っておられる。

褒められて嬉しくなった私は内心の照れを隠しながらクールぶって返事をした。

「後はこっちで考えておく。暫くの間はドレスローザでゆっくりしていてくれ」

「はい。ありがとうございます。では、私はこれで――」

「ああ、ちよつと待て。少しだけお前に聞きたいことがあるんだ、モネ」

「？ なんででしょうか？」

書類に不備があつたのだろうか？

モネが背筋を伸ばして待機する中、ドフラミンゴの脳裏では最近の

悩みの種であるクソ馬鹿との会話が蘇っていた。

『そういえば、うちのファミリーにもモネっていう美人がいるんだが……』

『是非紹介してください』

『うちのファミリーに入るなら紹介してやるのもやぶさかじゃないんだが……』

『前向きに検討させていただきます』

『マジかコイツ』

ドフラミンゴは頭を抱えた。

「あのアホ、本当にモネを紹介したらうちに入るのか……？　だが、それだと流石に俺の立場が……いや、これであの化け物を飼いならせるなら安いもんか……クソ！　腹が立つ。何が腹立って、こんなしようもないことに頭を使っているという事実が一番腹が立つ……！」

「あの、若様？」

「……モネ」

「は、はい」

そして、モネの敬愛する主は思いも寄らないことを聞いてきた。

「お前、今恋人はいないのか？」

◆◆ドレスローザ 街中 とあるカフェ◆◆

「ええ!!　若様がおねえちゃんに恋人がいなか聞いてきた!!」

「ええ……急なことだからびつくりしちゃって、『いません』とだけ答えただけ……」

「急にどうしちゃったんだろう?　変な若様」

二人が困惑するのも無理はない。

基本的に（ベビー5のような例外を除き）若が個々人の恋愛事情に踏み込んでくることなど殆どなかったからだ。

「べへへー!　んねー、モネエ、恋人いないなら俺の恋人になれよお」

「嫌です。あと近いです。トレーボル様」

シユガーの護衛役を務めているトレーボルがぬるつとモネのことを口説こうとするが、あえなくフラれてしまった。

「キモい、きたない。おねーちゃんに近付かないで、害悪」

「誰が害悪だクソガキイ！ ていうか、いつにもまして口悪くないかあ〜？」

「あたりまえでしょ。せっかくの姉妹水入らずの時間をこんなキモいやつに邪魔されるなんて……さいあく」

「べへへ！ それが護衛役に対する態度かあ〜？」

「わたし、弱くないもん」

「べへへ！ お前の強さは関係ないよお〜、最近、調子こいた海賊団がこの辺りをうろついているらしいからなあ〜、このトレーボル様がお前を守ってやってるんだ〜」

「あー、はいはい。じゃあ、せめて邪魔にならないように死んでおいて」

「死んで護衛はできねエだろツ!!」

ギヤーギヤーと騒ぎ出す二人。

モネはシユガーの言う通り、姉妹水入らずの時間が取れないことを悔やみつつも、久々に会ったファミリーの様子がいつも通りで安心していた。

「そういえば変な若様で思い出したけど、おねえちゃん知ってる？」

最近若様があんまり王宮に顔を出さなくなったの」

「いえ、知らないわ。何かあったの？」

「私も詳しくは知らないんだけど、なんか大事な客人在るらしくて、ずーっとその対応に追われているんだって」

「大事な客人？ 政府の要人か何かかしら……？」

「分かんない。でも、その客人がまたすつごい我儘な人らしくて、王宮に顔を出してもいっつもイライラしているんだ」

「あの若様が？」

にわかには考え難いことだ。

ドンキホーテ・ドフラミンゴは誰かに支配されることを嫌い、自分

のペースで生きることが好む泰然自若とした人だったはず。

そんな彼が誰かに振り回されているなんて、とてもではないが想像できる光景ではない。

「トレイボル様、何かご存知ですか？」

「べへへ！　それが俺も誰が来ているのか知らないんだよなあ、ドファイに聞いても『知らない方がいい』の一点張りで、『代わってやろうか？』って提案しても凄いや顔で睨まれるだけだしなあ」

「最高幹部も知らないなんて……一体何者なのかしら？」

3人は首を傾げた。

だが、ドフラミンゴが言わないというスタンスを貫いている以上、部下の自分たちが騒ぎ立てたところで迷惑になるだけだ。

その後、カフェで暫く談笑した後、ドレスローザで仕事があるシユガー及びトレイボルは去っていった。

「さて、一気に暇になっちゃったわね。服でも買いに行こうかしら。あつ、任務で壊れた新しい眼鏡も買わないと」

妹にいつも眼鏡のセンスを酷評されているモネだが、自分のセンスが正しいと信じている彼女はいつもと同じ眼鏡を購入すべく馴染の店に向かうことにした——のだが。

「……しくじったわ」

「なあ、いいだろ姉ちゃん？　ちよつとその店で一杯やるだけだ」

「こんな路地裏を一人で歩いていたんだ。そういうつもりだったんだよな？　ギヤはははは！」

「ドレスローザは女の質が高いが、こんないい女はなかなかお目に掛かれねえ。いい拾いものしたなあ！」

ちよつとでもショートカットをしようと思つたのが間違いだつたようだ。

ここは彼女の主、王下七武海ドンキホーテ・ドフラミンゴが治める王国。

生半可な海賊では表を歩くことすら許されないが、トレイボルが言っていた身の程をわきまえない質の悪い海賊団に運悪く引つか

かかってしまったようだ。

面倒だが、適当にあしらうしかないだろうと判断したモネは理由を付けて先に進もうとするが、男たちは引かない。

ここがドレスローザであり、自分はドフランミンゴの部下だと伝えても「愛人か？」と侮蔑と共に笑われる始末。

これにはモネもカチンときてしまった。

雪の中に生き埋めにしてやろうと能力を発動させようとしたが、それよりも先に事態は動いた。

「――品がないな」

芯の通った声が路地裏に響き渡る。

「ああん？ 誰だテメエ？」

海賊たちが振り向く。

そこには白いシャツに黒いズボンを履き、眼鏡を掛けた優男が立っていた。

「女性を口説くときは紳士的な態度で臨めとママに教わらなかったのか？」

一瞬固まった海賊たちだったが、次の瞬間には大口を開けて優男を嘲笑した。

「おいおい！ 見ろよ！ ヒーロー気取りの雑魚様ご登場だ！ 良かったな姉ちゃん！ 俺たちの相手が済んだらあつちに相手してもらえよ！」

「弱そうなくせして俺たちに声を掛けた度胸だけは認めてやるよ！」

「馬鹿だなく、お前」

海賊たちに同意するのは癪だったが、モネも同意見だった。

あの男は馬鹿だ。

勇ましく海賊に立ち向かう姿勢は確かに女性から見てもかなり好意的に映るが、残念ながら相手は武器を持った海賊。

それも、この新世界の中で生き残ってドレスローザまでたどり着いた確かな実力者だ。

生半可な使い手では声を掛けたことを後悔するような目に遭わされること間違いなしだろう。

一方、嘲笑された男はというと、黙って掌を上にして右手を前に突き出した。

そして一言。

「お手」

「……あん？ 何してんだお前？」

いきなり理解の及ばない行動をされた海賊たちは流石に困惑した様子で尋ねる。

男は爽やかに笑って言った。

「ああ、あまりにもワンワン煩いんで、犬かと思ったんだ。ほれ、お手してみな。いい子だから」

「ツツ!!」

ブチつと海賊たちの血管が切れる音がモネにも聞こえた。

挑発の中でも最も屈辱的に聞こえるであろう口上。

迷惑を掛けられていたモネは胸のすくような思いになったが、海賊からすればプライドに唾を吐きかけられたようなもの。

「——おい、もつとマシな自殺方法は考えられなかったのか？」

「なんだ。お手は苦手なのか？ じゃあ、伏せ」

「ツ!! いい度胸だテメエ！ 八つ裂きにして犬の餌にしてやるよツ!!」

「危ない——!」

モネは海賊だ。主であるドフラミンゴの命に従い、何人もの命を奪ってきた。

誰かの死には慣れているし、今更同情するような良心は持ち合わせていない。

だが——自分を助けようとした親切な人が殺されるのは流石に我慢ならなかった。

急ぎ能力を発動させようとするが、海賊たちが振り上げた刃が届くのが先だ。

「やれやれ。野良犬はこれだから——」

命の危険を前に男は落ち着いていた。

ゆつくりと右手で眼鏡を取り——裸眼が晒され美しい黄金の瞳で

海賊たちを睨みつけた。

「伏せ」

その瞬間、場を支配したのは海賊たちの暴力ではなく、格が違う生き物による絶対的な力だった。

ビリビリと大気を揺らす謎の波動。

勢いよく剣を振り上げていた海賊たちの動きが止まる。

やがて、その手から武器が地面に滑り落ちる。

優男の命令に従うかのように野良犬たちは白目を剥きながら地面に倒れ伏した。

「いい子だ」

「う、嘘……」

霸王色の覇気——！！

モネは震えていた。

これこそは、王の資質を持った者にのみ許された力。

彼女の敬愛する主と同じく強者のための武器。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

底知れない力を持つ男は眼鏡をかけなおし、爽やかにモネに笑いかけてくる。

先程は野蠻な男たちの背中が邪魔でよく見えなかったが、男は覇王色を放ったとは思えないほど優しい顔立ちをした美男子だった。

あつ、結構タイプかも……。

「え、ええ……」

「この国の治安は表向き結構いいと思っていましたけど、どこの国にも柄の悪い連中はいるものですね」

「そうですね……でも、彼らは恐らく外から入って来た海賊だと思います」

「ん？ そうなんですか。そういう貴女はこちら出身の方で？」

「出身ではないですが……ここでの暮らしは長い方です」

「ああ、どうりで」

「？」

「いや、ドレスローザの女性らしい魅力に満ちているなと思ひまして。」

コイツらが貴女を口説こうとしたのもよく分かります。とても——
美しい方だ」

「そ、そんな……私なんて……」

「しかも謙虚だ。信じられない、この海にまだこんなに素晴らしい女性
性がいたなんて！」

「や、やめてください……」

まさかの褒め殺しにモネは恥ずかしそうに赤面した。

男は決してモネに近寄りすぎないように一定の距離を保ちながら続
ける。

「私、最近この国に来たばかりの新参者でして、色々と教えて欲しいこ
とがあるんです。美しいお嬢さん。もし良ければ——」

この次に言われる言葉はモネにも何となく分かった。

「私と一緒にお茶でもしませんか？」

ニツコリと微笑む金髪の貴公子。

紳士的な態度の影で見え隠れする「男」の視線。

それと同時に、モネは本当の意味で自分が今どこにいるのかを思い出
した。

ここは愛と情熱の国 ドレスローザ。

『お前、今恋人はいないのか？』

何故か、主の言葉が脳裏に過った。

モネの恋【後編】

断ることもできた誘いだ、気が付けばモネは自分を助けてくれた男と一緒にカフェのテラスに座っていた。

霸王色を持つ彼はレオンとだけ名乗った。

「モネさんと言うんですか。素敵なお名前ですね」

「あ、ありがとうございます」

落ち着いた雰囲気の際は手慣れた様子で注文を頼み、華麗な話術でモネのことを楽しませてくれる。

これまで海賊や王族など様々な相手と接してきたモネの人物観察眼はかなりのものではあるが、正直彼の正体が全く見えてこない。

どこかの王族？ 貴族？ 霸王色を持つくらいだから人の上に立つ存在だとは思うのだが……

楽しさと警戒心の両方でグラグラ揺れる心を内側に仕舞いこみながらモネは尋ねた。

「レオンさんはどういった目的でこの国に？」

「本当は来る予定はなかったんですが……まあ、運命の導きつてやつですかね。暫くは観光目的で滞在していますが、今は貴女と仲良くなるのが最大の目的です」

「……結構グイグイ来られるんですね。普段からそうやって色んな女性を口説いているんでしょう？」

「まさか！ モネさんがあまりにも素敵な人だから声を掛けたんです」

「どうだか……」

「グイグイ来られるのはお嫌いですか？」

「嫌い、と答えたらどうします？」

挑発するようなモネの言葉に対し、レオンは真剣な瞳で彼女を見つめてから言った。

「逃げたら1つ。進めば2つ手に入る」
「？」

「私が好きな（他作品の）言葉です。今ここで撤退すればこれ以上貴女に嫌われることなく親切な人で終われるかもしれない。でも、嫌われることも覚悟して前に進めば——」

「進めば？」

「愛と幸福が手に入るかも」

「ッ!!」

あまりにも気障な台詞にモネの顔が真っ赤に染まる。

「失礼。ちよつとカッコつけすぎたかな？」

「い、いえ……素敵な考え方だと思います」

「それは良かった。では今度、ヘタレ中二破滅願望者の知り合いにも同じこと言っておきますね！」

「???」

◆◆同時刻 ドレスローザ王宮◆◆

「ハ——クシヨンツ!!」

「どうしたドファイ？ 風邪か？」

「いや……どこぞの誰かが俺の噂話でもしているんだろう。……だが、妙にイライラしてくるのは何故だ？」

「最近お前の言う客人とやらに振り回されているせいじゃないか？」

「そうかもしれないな……だが、それさえ済めば俺たちは巨大な力を手に入れることができる。待っているよ、ダイヤモンド。もうすぐだ。もうすぐで直接世界をぶっ壊すことができる——！ 俺たちの新時代がやってくるのさ！ フツフツフツフ！」

若がクソ情報のせいでカイドウ討伐を決意することになるまで後5日。

◆◆ドレスローザ カフェ◆◆

場所は移り、再び若い男女2人。

「しかしモネさん、私が褒めたただけで面白いくらい動揺してく

れるんですね」

「……そういうのに耐性がないんです。笑うなら好きに笑ってもらって結構よ」

「笑うなんてとんでもない。とても可愛いらしいですよ」

「ッ！ そうやってすぐにからかう！」

「からかってないですって！」

ここは愛と情熱と玩具の国、ドレスローザ。

愛が故に男が女に刺されることもしばしば。

修羅場が原因で人が死ぬなんて日常茶飯事。

だが、そんな国にあつてどこかピュアなやり取りをする2人の男女は周りから見てもかなり好意的に受け入れられていた。

「でも本当に不思議ですね。モネさんくらい素敵な女性だったらこういった口説きには慣れていると思つたんですが……ドレスローザの男性は見る目がないのかな？」

「……自慢じゃないですが、口説かれたことは何回かありますよ？」

でも、私は任務の関係でドレスローザの外に行く機会が多くてあまり1つの場所に留まる機会が少ないですし、それに——」

「それに？」

少し言うことに躊躇はあつたが、モネは心の内を打ち明けた。

「私、今の仕事がとても大事なんです。それこそ、私の命なんかよりもずっとずっと大事なんです。だって、私を救ってくれた人が私を信じて任せてくれたものだから……」

「……」

「だから、例えば男性とそういう関係になつたとしても、私はきつと仕事の方を優先すると思うんです。そんなの、男性側からしたら耐えられないことですよ？ だから私、そういう機会があつてもいつも自分で台無しにしています……」

「素敵じゃないですか！」

「えっ……」

てつきり嫌な顔をされるかと思つていたモネは面食らつた。

レオンは彼女の予想に反して目をキラキラさせながら言った。

「モネさんは律儀で一途な方なんです。女性として——いや、人としてこんな素晴らしいことはない」

「そして何より、モネさんを救ってくれた人が素敵な方なんです。ね。貴女、その人に恩を返せることが楽しくて仕方ないって顔をしてる」

「……」

彼女たちが彼によって救われなければ、今頃どこかで野垂れ死んでいたことだろう。

モネは嬉しかった。

自分の価値観に家族ではない他者から共感してもらえることが本当に嬉しかった。

「レオンさんにもそういう人いるんですか？」

「ええ、いますよ。直接会ったことはないですが」

「？」

直接会ったことがないのに救われたとはどういうことだろうか。

モネは不思議に思ったが、彼にも大事なものがあると分かって何故か嬉しかった。

「ところでレオンさん」

「なんででしょう？」

話しているうちに距離が近づいたように感じたモネは思い切って尋ねることにした。

「違っていたら申し訳ないんですが……もしかしてレオンさんは、若——ドンキホーテ・ドフラミンゴ様の関係者の方だったりしませんか？」

「ドンキホーテ・ドフラミンゴ？ ああ、彼ですか。一応、関係者ということになるんですかね？」

「やっぱりそうか！」

妹が言っていた不思議な様子、そして自分の前に現れた覇王色の覇気を操る謎の青年。

「では、もしかして若様の客人とは——」

「ええ、私のことだと思えますよ。彼にはお世話になっています」「やっぱりそうだったんですね!」

モネは予想が的中したことと、若の客人が彼であるという事実の両方が嬉しくて笑った。

「若様ということから察するに、貴女の主はまさか……」

「ええ。ドンキホーテ・ドフラミンゴ様です」

「おお! これはすごい偶然ですね! では、貴女のことを救ってくれた人と言うのも……」

「はい……若様です」

「そうでしたか。彼には俺もお世話になっています。——聞かせてくれませんか? モネさんが尊敬する彼のこと」

「……いいんですか? 話長くなつちやいますよ?」

「モネさんの話なら三日三晩聞いていられますよ」

「もう! 調子の良いことばかり……」

だが、尊敬する若様について語っていいと言われてモネが我慢できるはずもなく、結局彼女は長々と彼の魅力について初対面の男性に語ってしまったのだった。

後から振り返れば自分を口説いている男性の前で別の男性の話をするのはどうかと思ったが、それでもレオンは嫌な顔一つすることなく絶妙なタイミングで合いの手を入れて彼女に楽しく話をさせてくれた。

「——というわけで若様は……ごめんなさい。私ばかり長々と話すぎですよね……?」

「いえいえ、とんでもない。俺もお世話になっている人のことが知れて嬉しいですよ。それに、楽しそうに話しているモネさんを見ているとこっちも楽しくなってきましたから」

「レオンさん……ありがとうございます」

ニッコリとモネは微笑んだ。

その笑みは彼女の献身性を表す慈愛と幸福に満ちた笑みで、レオン改めキリアをして一瞬本気で見惚れるほどに可憐だった。

「……好きだな」

「えっ!？」

「モネさんのその笑顔」

「……レオンさん、よく女たらしって言われませんか？」

「今日初めて言われたよ」

「嘘つき」

嘘じゃないと言いなながらレオンは笑う。

「モネさんの方こそ男たらしって言われるんじゃないですか？」

「ええ、よく言われます」

「嘘つき」

「ちよつと！ それどういう意味ですか！」

「冗談ですって」

2人は笑った。

楽しいな。2人は思った。

だが、残念ながら時間というものは有限である。

レオン改めキリアは若様に七武海入りの件で作戦会議があるため、日が落ちたら帰ってくるように言われていたことを思い出した。

クソツタレめ。やっぱり若ってクソだわ。デートの邪魔しやがって。

いいところ一つもねえじゃねえか。

「おつと、もう日が落ちてきましたね。そろそろ帰らないと」

「えっ……」

「もう帰らないといけないの？」

モネは驚いた。そんな時間になるまでずっと話続けていた事実もそうだが、何よりももう帰らなければならぬことを残念がっている自分自身に心底驚いていた。

「……」

「モネさん」

そんな彼女の本心を見抜いたのか。

「ちよつと歩きませんか？ 良ければ家まで送っていきますよ」

レオンは穏やかな顔でそんな提案をした。

並んで2人で夕暮れのドレスローザを歩く。
くつつきすぎず、離れすぎずの距離を保って歩く2人の間でポツポツとあてもない会話が繰り返される。

このまま別れて終わりなのか。

「ねえ、レオンさん」

気が付けば、モネの口は勝手に動いていた。

「ん？」

「……レオンさんは、何者なんですか？」

彼に出会ってからずっと気になっていて、ついぞ聞けなかったこと。

霸王色の覇気——それも、モネだけ気絶させない技量の高さ。

しかし覇気に見合わぬ穏やかな人格。

若様が客人として気を遣っているという事実。

明らかに、モネよりも格が幾つか上の人間だ。

そんな人間がこのドレスローザで何をしているのか。

もし——もしも、彼が——

「敵」

「えっ?」

「俺が君の慕う若の『敵』と答えたらどうする?」

「ツ!!」

想像していた最悪の事態にモネの顔色が悪くなる。

だが、自分の信念に嘘をつくことは出来ない。

モネは琥珀色の瞳で隣の男を睨みつけ、絞り出すような声で言った。

「……殺します。若様の為なら」

「そうか」

レオンは穏やかな顔で微笑んだ。

「安心したよ。君に殺されるなら悪くない」

「——」

「でも、君も安心していいよ。俺は若様の敵じゃない。今はね」
「今は、ですか」

「ああ。未来は誰にも分からない。今は仲良しでも、ずっと先の未来では殺し合いをしているかもしれない。この海じゃ不思議なことではないでしょ?」

「……ええ、そうね」

でも、今は敵じゃない。

モネはその事実には酷く安心して、嬉しく思っている自分がいることに気が付いた。

やっぱり今日の自分は少し、変だ。

「——で、はぐらかされたけど、結局あなたは何者なの? レオンさん」

「知りたい?」

「そりゃあ、もちろん——」

隣を歩いていたレオンの腕がモネの右肩を掴み、グツと彼の方へ抱き寄せられる。

鼻と鼻がくつつきそうな距離感で彼は言った。

「俺のこと、知りたい?」

本物より価値がありそうな黄金の瞳がモネを貫く。

「……ええ」

モネは熱に浮かされたような顔でうなずいた。

「——よし。じゃあ、明日のお昼に今日と同じカフェに集合しよう」

「え、ええ……」

急に元のレオンに戻ったことに驚きつつ、モネは頷く。

「じゃあね、モネちゃん。今日は楽しかった」

「ええ。私も凄く楽しかったわ」

「おっと、忘れてた」

「えっ——」

グイッとレオンの顔が近づいてきた。

一瞬だけ色々とあつて、気持ちの整理がつかないモネは愛用している眼鏡みたいに目をぐるぐる回しながら去っていく男の背中を見送った。

「……愛と情熱の国、か」

モネはそつと呟く。

雪を司り、冷酷に、一途に主に従うのみだった女の胸には、何か暖かいものが生まれていた。

ワノ国編

お酒が全部悪いですよね？

前回までのあらすじ。

色々あつて天竜人を殺ししまった俺はドフラミンゴパイセンのお陰で七武海になることができたのだった。ちゃんちゃん。

さて、七武海入りしたことによって政府と海軍大将から追われることがなくなつた俺はモネちゃんデートしたり、浮気がバレて能力全開で襲い掛かれたり、キリアつてことがバレて大騒ぎになったり、なんやかんやありつつもドレスローザで平和に過ごしていたはずなのだが――

「……………うん……………？ どこだ、ここ……………？」

目が覚めると全く知らないところにいた。

記憶が飛ぶくらい飲んで翌日ゴミ箱の中だったことは偶にあるが、どうやらここはゴミ箱ではないらしい。

ドレスローザに来てからは滅多に羽目を外していないので実に久しぶりな感じだが、さて誰と飲んでいたんだったか。

何にせよ、酷く喉が渴いている。

「――つて、痛ッ！ あー！ クソ！ 頭痛エ！ なんだよこれ!!
痛エ！ 痛すぎるッ!!」

こうなつた経緯を思い出そうと頭を回転し始めたその瞬間、地獄のような頭痛が襲ってきた。

文字通り頭が割れるほど痛い。

能力者になつてこの方、ほとんどのダメージが軽減されているのでここまでの痛みは久しぶりだ。

初めて黄猿師匠の全力蹴りを側頭部に受けた時くらい痛エ！

いや、下手したらその時以上かも。

「ぐっ……………誰だ？ 俺にここまでのダメージを通したのは……………！ 酒か!?!」

ガンガン五月蠅い頭を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

辺りを見渡すが、本当に全然知らない場所だ。

どこかの建物だということは分かるが……それ以上はさっぱり。

おいおい、どこで酒飲んでたんだ俺。

ていうか、なんか日本酒臭いな。俺、ラム酒が好きなのに。

「……………あゝ、クソ頭痛エ……………」

悪態をつきながらゆっくりと壁に手をつきながら明るい出口を指す。

目の前の壁に大きな穴が開いているので、多分あそこから突っ込んできたんだと思う。

それか、思いつきり吹っ飛ばされてきたか。

「やべえ、なんも思い出せねエな……………いったい何だっつんだ……………痛ツ！　なんだ今の？」

ぼやきながら自慢の金髪を整えるために触っていると不意に手に静電気が走った。

ただの静電気ならもはや痛みを感じることもすらないと思うが、なんか妙に痛い。

「……………なんだ、この悪寒は。俺、相当ヤバいことやらかしたんじや……………」

背筋が嫌な汗をかいているのが分かる。

生まれてこの方俺を裏切ることとはなかった生存本能がレッドアラートを脳内で鳴らし、鍛え上げた見聞色が急いでこの場を離れろと訴えてくる。

ヤバい。これ、ほんとにヤバい時の奴。

具体例を出すと、運悪く天竜人を殺つちやつたと気が付いた時と同じくらいのヤバさを全身で感じているナウ。

おいおい、海軍大将でも飛んでくるのか？　笑えねエぞ、それ。

「……………こういう時はあれだ。本能に逆らつちやいけないんだ」

逃げれば一つ、進めば二つ手に入る。

でも多分、逃げないと命を失うので、俺は逃げます。

そうと決まれば話は早い。

俺は背中に竜の翼を展開し、天井をぶち破って自由な大空に飛び立

とうと——

「あれ、もう動けるのか。凄いな君は！ あのクソ親父の全力を受け
てもこれだけピンピンしているなんて！」

耳に心地よい凜とした美声が飛んできた。

ゆつくりと顔を上げるとそこには、可憐な鬼が一匹。

ああ——なるほど。理解した。俺が今どこにいるのかを。

銀、エメラルド、水色のグラデーションを描く美しい髪。

こめかみ辺りから生える2本の赤い角。

好奇心旺盛な瞳。

幼さと色気と勝気が同居した美しい顔立ち。

この世の存在とは思えない絶世の美女が男勝りな笑みを浮かべて
こちらに近付いてくる。

……生存本能君、すまん。いったん待機モードでよろしく。

「えーと、君は誰だ？」

俺は知らないふりをしながら尋ねる。

白い和服に嵌められた手錠を鳴らし、金棒を手に彼／彼女は堂々と
名乗った。

「僕の名前は光月おでん！ 君と同じく、カイドウを倒すべく戦って
いる者だ！」

いや、俺はカイドウ倒すつもりなんてないから違うけどね……多
分。

記憶が飛んでるから何とも言えないけど。

さて、目の前にいるのは皆大好き、鬼娘のボクッ娘で男装の麗人の
箱入り息子のお嬢様にして敵のボスの「息子」。(by pixiv)

カイドウの実の息子(娘) ヤマトさんである。

でも、ご本人は大の光月おでんファンにつき、そちらの名前を名

乗っておられる。

「ここは慎重に対応しないとな。」

「おでんさんね。俺の名前はレオ——ま、この島で隠す意味もないか。俺はキリアだ。よろしく。実は色々記憶が飛んでいてね。良ければ状況を教えて欲しいんだが」

「——」

「……どうしたの？」

何やら固まってしまったヤマト坊ちゃん改め——光月おでんに尋ねる。

彼女は何やらプルプルと震えた後、金棒を放り出して俺の右手を両手で掴み、感極まったような表情で言った。

「僕のことを、光月おでんと認めてくれるのか!？」

「認めるも何も、自分で言ったんじゃないか……」

聞いてもないのにヤマト呼びするわけにもいかないし。

「くう〜！ そうか、そうか。外の世界から来た人だから疑うってことを知らないんだな！ いや、でも疑う必要もないんだ。僕は——僕こそが光月おでんだから！」

そう言っただきなおっぱ——胸筋を張るおでんさん。

今まで自分の憧れを肯定されたことがなかったから嬉しくて仕方ないんだろう。

大丈夫。俺はそういうの否定しないタイプだから。

憧れは大事だよな？ 止まれないよね？ 分かる分かる。

「あ〜、話を進めてもいいかい？ おでんさん」

「おでんさん!! ……ゴホン。ああ、もちろんだキリア君」

咳ばらいをしてから低い声で話し始めたヤマト坊ちゃん改め光月おでん。

可愛いな。

「えーと、まず初めに、ここはどこ？」

「どこって……それも思い出せないのか？」

正直、彼女に爆発する錠が付いている時点で場所は一つしかないのだが、ここは敢えてとぼけておくことにする。

「ああ。正直、なんでここにいても思い出せない。すぐに思い出すとは思うけど」

「表面上は平気でもやっぱクソ親父のが効いていたのか……よし！じゃあ、教えるよ。ここは鬼ヶ島。カイドウのクソ野郎が治める島だ」

「……ですよー」

「？」

信じたくはなかったが……まあ、それしかないだろうとも思っていた。

俺の頭が割れそうになるほど強烈な攻撃。

髪の毛に残っていた痛みを感じるほどの電気。

日本酒。

そして、止めにヤマト。

さて——問題は、だ。

「ええと、おでんさんはさつき言っていたよね。〃クソ親父〃って。で、俺はそいつに吹っ飛ばされたと……つまりおでんさんのお父さんって」

「——ああ。認めたくはないが、カイドウだ」

「そうか。で、あんまり聞きたくはないんだけどさ、俺とカイドウの間で何があったのか知ってる？」

俺が何をやらかしたかだ。

「なについて——そりゃあもう、傑作だったよ！ 思わずお腹抱えて大笑しちやったからね！ キリアは面白い人なんだな」

「ええ……？」

楽しそうに笑うおでんは魅力的だが、俺は現在生きた心地がしない。

おいおい、マジで何をやらかしたんだ、俺。

「……本当に何も覚えていないんだね」

「残念ながら。……今はもう、思い出さない方が幸せな気がする……」

知らない方が幸せなこともある。

多分、俺は今回もやらかしてしまったのだろう。

よりによって、あのカイドウ相手に。

クソが。だから来たくなかったんだ鬼ヶ島なんて。パイセンめ

……

「あっ——」

「? どうしたのキリア君」

「ちよつと思ひ出したかもしれない。そうだ。俺はこの島にパイセンに誘われて——」

「パイセン?」

「ねえ、おでんさん」

「さんはいらないよ。僕も君のことはキリアと呼ぶことにするから」
ではお言葉に甘えて。

「じゃあ、おでん。金髪にクソダサイサングラスをしていて、目を疑うようなピンク色の羽毛ジャケットを羽織ったファッションセンスが死んでる38歳のフツフツおじさん知らない?」

「ああ、そういえばそんな感じの人が君と一緒にいたような気がする。僕が宴会会場を覗きに行ったのは騒ぎになってからだから良く分からないけど」

「死んでる?」

「いや、生きてるとは思うけど……」

「それは良かった。復讐の機会がなくなるところだったから」
????

これで俺がカイドウに殺されたら化けてでてやる。

覚えていろよ。多分、悪いのは俺なんだろうけど。

「何のことだかよく分からないけれど、とにかく今はここを早く脱出して人目がないところに移動しよう、キリア」

「そういえばここはどこだ……?」

「鬼ヶ島の中にある宴会場とは別館の建物だよ。凄い勢いでクソ親父に殴り飛ばされてここまで飛んできたんだ」

「マジかよ……よく生きてたな俺」

「僕も不思議でならないよ。目立った傷があるようにも見えないし。君の身体、何でできているんだ? ——って、そんなこと言ってる場

合じゃなかった！ 早く移動しよう！ クソ親父の部下たちがやってくる！」

「お、おう」

先行して走りだしたおでんの背中を追いかける。

そういえば彼女、どうして俺に対してこんなに好意的なんだろう。いずれ来るエースの弟、ルフィのことを待ちわびていたんじゃないのか？

「ねえ、おでん」

「なんだい？」

「どうして俺を助けてくれるんだ？」

「どうしてって——」

彼女は走りながら俺に満面の笑みを見せて言った。

「あんな啖呵を切られちゃあ、助けないわけにはいかないじゃないか！
?????」

「一緒にカイドウをぶっ飛ばそうじゃないか！ キリア！」

「……マジで何したんだ、俺」

拜啓過去の自分へ。

未来の私です。あなたのことが怖くて仕方ないです。

一体何をやらかしたんです？

「そこだ！ その裏口から外に出られる！ カイドウの攻撃に耐えられる君の身体は素晴らしいけれど、今は戦力を整えるのが先だろう？ 悔しいかもしれないが、今は逃げに徹しよう！」

「言われなくても！」

カイドウなんて逃げの一択である。

頼りになるおでんの背中を追いかけて、俺たちは一先ず建物を出て海岸沿いに出てきた。

「よし。港までもうちよつと走るよ！ 体力は大丈夫かい？」

「ああ。（逃げるための体力なら）有り余っているくらいさ」

「それは頼もしいな！ 僕に付いてきてくれ」

「この地形を完璧に把握しているおでんは敵が探しに来そうな場

所を回避しながら俺を幾つかの船が泊まっている港の近くまで連れてきてくれた。

二人で岩場に身を隠しながらそーっと港を覗き込む。

「さてキリア、君は一体どの船で来たんだ？」

「なんか、異常に興味が悪いピンク色の船が泊まっていないか？」

「いや……ここからは見当たらないな」

「じゃあ、あのスーパーハイパークソダサヌマンシア・フラミンゴ号に乗ることは避けられたのか……」

「外の海にはそんな変わった名前の船があるのか……」

「ああ。本当にダサイんだ」

しかし、参ったな。

「適当な船を盗んで逃亡するしか……いや、飛んでいくのが早いかな。最初からこうすれば良かったんだ」

俺は再び竜の翼を展開させた。

「わあ！ 凄い！ 最初に会った時も広げていたよね！ その翼カッコいいな〜！」

「えっ、そう？ 照れるなあ〜」

「これで飛べるの？」

「もちろん！ 飾りじゃないよ。ほれ」

「凄い！ めっちゃ動いてる！」

なんて二人で遊んでいたのが良くなかった。

「——しまった！ これはクソ親父の気配！」

おでんが振り向いた先を見る。

そこには巨大な青龍が空へと昇っていく強烈な光景が広がっていた。

うわあ……強そう……勝てんでしょ、あんなの。

あんなのに挑む奴の気が知れないぜ。

「カイドウ！」

あつ、なんか唐突に記憶の一部が蘇って——

「テメエ、女々しく泣いてんじやねエぞ自殺願望のクソ迷惑野郎がア！ いい歳したおっさんが……キモいんだよ!!」

……なるほど。

「すまない、おでん」

「？」

「俺の墓にはカイドウと勇敢に戦い、散ったと書いておいてくれ」
「どうした急に!?!」

多分、死んだなこれ。

俺はゴロゴロという雷鳴と共に天気が変わり始めた曇天の空を眺めながら辞世の句を考え始めていた。

暴力は良くないですよね？

時はキリアとヤマトが出会う数日前まで遡る――

「おい、キリア。出かけるぞ」

「だからパイセン、部屋に入る時はノックを……もう、いいや」

パイセンのお陰で俺が七武海になってから約1か月ほど時間が経過した。

ここ最近は……まあ、色々あったが、モネちゃんには告白して無事にOK貰ったし、ドレスローザのご飯は美味しいしで概ね幸せだった。

……まあ、過去形からも分かってもらえると思うが、色々あったんだ。

「出かけるつてどこへ行くんです？」

「鬼ヶ島だ」

「絶対に行きませんからね」

死んでもお断りだ。

「ていうか、どうして俺と一緒に行かないんです？」

「カイドウがお前に会いたいんだとよ」

「はあ!? どうして俺に……」

「この間、電伝虫で俺が面倒見ていることを伝えたら、是非会いたいから連れてこいだとよ」

「つまりアンタのせいじゃねえか!?!」

「そうかもな」

そうかもな……じゃねえわアホンダラ!

俺は絶対に行かないぞ。

「……おい、何を警戒しているのは知らねエが、俺は別にカイドウと戦いに行くわけじゃねエぞ」

「えっ、そうなんすか?」

『俺が四皇になる』とか訳の分からないことを言っていたの？

「当たり前前だろう。今回はあくまでも商談で、久々に会うからってことで宴をするらしい。そこにお前も招待されているだけだ」

「宴かあ……」

「ここ最近のやらかしのせいでちよつとした軟禁状態にあるので、久々に宴会に行くのは悪くないのかもしれない。

でもカイドウかあ……」

「一応言っておくが、テメエに拒否権はないからな」

「はあ？　なんでです？」

「——おいテメエ、もう忘れたのか？　うちのモネを泣かせたことをよ」

「……」

「テメエの頭の中はどうなってるんだクソ色猿め。おまけに喧嘩でドレスローザの街中を破壊しやがって……お前、本来ならうちのファミリーに土下座で謝罪すべきなんじゃないのか？　ああん？」

「……」

「こればかりはマジで俺が悪いので何も言い返すことが出来ない。

(まったく、恨むぜコアアラちゃん)

俺が彼女を見つけたのは偶然だった。

なんか、凄く可愛い子がナンパされてるなあ、なんて思いながら近づいてみたら驚くことに革命軍の魚人空手お嬢さんじゃないですか。

えっ、なんで革命軍!?

確かにモンキー・D・ドラゴンとはドンキホーテ・ドフラミンゴの武器密輸ルートの調査に手を貸す契約を交わしたが、こんなに早く動き出すとは聞いていない。

俺、時期が来たら連絡するって言ったよね!?

ただ思い返せば俺の方にも落ち度はあつて、ちよつと事細かにドレスローザの内情を話しすぎたかもしれない。あまりにも悲惨な状況に居ても立っても居られなくなったというところか。

ドラゴンめ……3年後に俺たち麦わらの一味が綺麗に解決するんだから、余計な手出しをするなつての。

コアラちゃんはまだ革命軍としての活動歴が浅いのか、その可憐な容姿を上手く隠せず男たちにナンパされており、さらに魚人空手を繰り出す寸前ときた。

こんなところで騒ぎを起こしたらとんでもないことになる。

仕方がないので俺の十八番である「品がないな」というクソカッコいい台詞から助けに入ったのだが――

「――何をしているんですか？ レオンさん」

その場面を運悪くモネちゃんに見られており、現場は地獄の修羅場と化した。

何とかコアラちゃんには小声でお説教をしたうえでドラゴンの元へ帰るよう伝えておいたが、その後が大変のなんのって……。

モネちゃんには能力は発動されたうえでナイフでめつた刺しにされるし、姉を泣かされたと言つてシユガーちゃんも出動するし、護衛役のトレーボルも笑いながら襲ってくるし、コロシアムの休業日で暇だったディアマンテも理由分かってなくせに殺しに来るし。

仕方がなく俺も応戦し、街中大パニック。

パイセンが急いで駆けつけた時には大号泣のモネ、俺を玩具にしようとう鬼の形相で追いかけてくるシユガー、能力発動させて襲い掛かってくるトレーボル&ディアマンテ、そして腹部から大量出血する俺というカオス極まりない状態だった。

まあ、混乱に乗じてコアラちゃんがバレずに逃げられただけでもOKでしょう。

例によつて暗い路地裏で帽子被っていたから顔も見られていないはずだし。

その後、なし崩し的に俺が新しく王下七武海となったキリアとして皆に紹介され、客人として手を出さないようパイセン直々のお達しが下った。

だがパイセンのフォローが入ろうとも既に手遅れで、俺はドンキホーテファミリーの中で「モネを口説いておきながら秒で浮気した最低最悪のクズ野郎」ということになっている。

おまけにパイセンの客人と言うこともバレたので「若様に多大な迷

惑を掛けている王下七武海の我がまま新入り」という目でも見られている。

評価は最底辺にいたると言ってもいいだろう。

まあ、誤解や理不尽で嫌われて追い回されることには慣れているので特に問題はない。

それよりも、革命軍がドレスローザに潜入しているという事実がバレなかったことのほうが重要だ。

俺が革命軍と繋がりがあろうことはくま先輩のこともあつてパイセンも承知の上だが、流石に未来でドレスローザをひっくり返すつもりとは思っていないだろう。

コアラちゃんはドラゴンから俺のことなんて聞いていないだろうが、念には念を入れておく必要がある。

シユガーの能力に掛ければ、秒でゼロっちまうからな。

まあ、そんなこんなで今後もコアラちゃんのことには浮気ってことで言い訳はしないつもりだ。

俺の評判より、3年後のドレスローザの未来の方が大事なのは麦わらの一味として分かっているつもりだ。

◆◆閑話休題◆◆

だが、それはそれとして現状居候としてお世話になっている俺としては流石にパイセンの頼みを無下にするわけにもいかない状況なわけだ。

「――で、どうするんだキリア？」

普通だったら何の迷いもなく断っているが、流石にパイセンに迷惑を掛け過ぎた。

絶対に行きたくないが、今回ばかりは仕方がないだろう。

「はあ……わかりました。行きますよ。でも、本当に戦いだけはなしですからね！」

「当たり前だ。奴とはまだお互いに商売相手だからな。いずれ縁を切る予定ではあるが、今はこの関係を利用して奴の戦力を測るつもり

だ。——お前から吹っ掛けない限りは安全だろう」

「何を言ってるんですかパイセン——」

俺は意味の分からない世迷い言を口にするパイセンに呆れながら言った。

「俺がカイドウに喧嘩を売るはずないでしょ」

◆◆ワノ国——鬼ヶ島◆◆

数日後、俺とパイセンは鬼ヶ島に到着していた。

途中の島まではパイセンのスーパーハイパークソダサヌマンシア・フラミンゴ号で移動していたんだが、流石に公に四皇と七武海が合うのはまずいらしく、立ち寄った島で地味な船に乗り換えを実施。

迎えに来ていたカイドウの手下の案内の元、正規のルートで大して苦勞することもなく鬼ヶ島へ入港を果たした。

そして驚くことに、到着した港にはわざわざ四皇が迎えに来ていた。

「ウオロロロ！ 良く来たな、ジョーカー！ 随分と久しぶりじゃねエか！ ちょっと雰囲気変わったか？ 堅っ苦しい恰好してよ」

「よお、カイドウ。ちょっととした心境の変化だ。景気はどうだい？」

「お前の話次第だな。百獣海賊団の財布を握ってるのはお前なんだぜ？」

「よく言うぜ。ワノ国の武器でしこたま儲けているんだろう？」

「ウオロロロ！ 否定はしねエ！ ——で、隣のそいつが噂の新人か」

「ああ。おい、キリア。挨拶しろ」

「キリアです。どうぞよろしく」

俺は前世のことを思い出しながら、極力人の記憶に残らなさそうな無難な挨拶をした。

カイドウはジロジロと俺を遠慮なく眺めた後、つまらなそうな顔で感想を口にした。

「……天竜人を殺ったっていうわりには随分とまともそうな奴じや

ねえか。つまらねえなあ」

「ハハハハハ、よく言われます」

どいつもこいつも俺に幻想を押し付けやがって。

だが、ここは印象に残らない方が大事なのでカイドウの反応は俺的には正解だ。

「……ちッ、まあいいか」

さて、初対面のカイドウだが——ヤバいなコイツ。

正直、マジで勝てる気がしない。

負けない戦いが得意な俺でも余裕で力負けするだろう。

それくらい威圧感と底知れない生命力を感じる。

パイセン、いつ決行するのか知らないけどコイツに喧嘩売るのだけは止めておいた方がいいと思うよ？

ていうか、カイドウさん既に酒臭いんですが……絶対待ちきれなくて先に飲んでいたらろ……。

「さーて、こつちへ来い。もう大看板や飛び六胞の連中は呼び寄せている。一緒に楽しく飲もうじゃねエか！ ヒック……」

大看板に飛び六胞ね。

名前を聞くのは3年後になるかと……ってちよつと待て！

「ああ。行くぞ、キリア」

「ちよつ！ ちよつとパイセン……！」

「あん？ なんだ急に小声で」

「どうして敵幹部が勢ぞろいなんです？！ これ、もしかして邪魔なパイセンを罠り殺しにするための罠なんじゃ……」

「馬鹿。どうせ、俺たちをダシに使って気持ちよく飲みたいだけだろ？ いいからシヤンとしてろ」

「……」

そう言つて颯爽と身に纏ったスーツにピンクジャケットを翻し、先に進んでいくパイセン。

……おいおい、パイセン、どうちまつたんだよ。アンタ、もつと小物臭のするどうしようもないクソ野郎じゃなかったのか？

俺は困惑しながらもパイセンの背中を追いかけ、鬼ヶ島内の城に用意された宴会会場へと足を踏み入れるのだった。

◆◆鬼ヶ島——宴会会場◆◆

「ウオロロロ！ 俺たちの大事な商人ジョーカーと、ついでにコイツの七武海入りを祝して——乾杯ッ！」

「「「乾杯——ッ！」」」

大看板や飛び六胞たちとの挨拶もそこそこに（何故かキングは凄い目で睨みつけてきたが……）目の前の酒を前に待ちきれなかったのか、カイドウの一声ですぐに宴会が始まった。

今回は幹部連中が中心に集められているらしく、そこまでモブ兵士の姿はなかった。

だからといって目の前で十億の賞金首たちが酒を飲んでいるので全く油断できるような状況ではない。

「ウオロロロ！ 飲め飲め！ 今日は無礼講だ！」

カイドウとパイセンは近くの席で一緒に飲んでおり、俺はその隣でチビチビと周りの様子を伺いながら出された酒を無言で飲んでいる。

用意されたステージではクイーンとその部下たちがライブで会場を盛り上げており、宴会場はなかなかいい雰囲気だ。

「おいどうだ七武海の新入り！ うちの酒は！」

「うん。美味しいですよ」

上機嫌なカイドウに同意しながらワノ国の酒——前世で言うところの日本酒を飲む。

前世からおっさんが飲むもんだって苦手意識があって避けていたけど、スイスイ飲めるし美味しいし、意外といけるかも……。

「ウオロロロ！ そいつは結構！ ——で、ジョーカーよ。例のあれの開発状況はどうだ？」

「ああ、実はその件で大事な話があるんだ」

しっかし、隣の隣とはいえ、やっぱりカイドウの威圧感尋常じゃないな……。

パイセンもよくまあ、こんな化け物相手に商売できるもんだ。

「実は——開発に失敗したと連絡があつてな」

「失敗？」

「理論に致命的な欠陥があつたとか何とかで……悪いが結論だけ言う
と人造悪魔の実は作れないことが分かつた」

「なにッ!」

普段は（自分で言うのもなんだが）結構コミュニケーション能力が
高い俺だが、流石にこの鬼ヶ島ではアウエーが過ぎる。

ただ、元から百獣海賊団とは仲良くするつもりもないので、このま
ま大人しく酒を飲んで大した印象に残らない奴としてここを去ると
するか。

にしても、本当にこのお酒美味しいなあ〜

「ふざけるなッ!」

「おい、落ち着けよカイドウ」

何やら急にカイドウが怒りだしたが、どうせ酔っ払っただけだろ
う。

現に周りの奴らも大して気にしてないし。

じゃあ、俺はもつと飲もう。「そこのお姉さん。お酒のおかわりく
ださい。ヒック」

「これが落ち着いていられるかッ! テメエ、どう落とし前を付けて
くれるんだ! ああん?」

「落とし前も何も、俺は作れる可能性があると言っただけで、アンタか
らこの件で金を貰った記憶はねえぞカイドウ。——ビジネスの世界
にや、こういうこともつきものだ。アンタだつてよく知っているだろ
う?」

「ぐう……畜生めッ!」

あつ、その酒も美味そう——つて、カイドウが一気に飲み干した!?

「うお——ん! クソツタレめ〜」

うわっ、びっくりした。急に泣き出すなよ、もう。

先程まで怒っていたカイドウは急に大粒の涙をこぼしながら大号
泣をし始めた。

「どうしてだよオ、ジョーカーアアア！一緒に誓いあつたじゃねえか！暴力の世界を實現し、最高の戦争を始めるつてよオオオオオ！」

「本当にすまねえな、カイドウ」

「うお——ん！どうにもならねえのかよそれえ！」

「世界屈指の科学者である俺のパートナーが無理だと言つたんだ。悪いが、どうしようもねえ」

カイドウは泣いている。世界最強の生物と讃えられる四皇の一人が泣いている。

……なんか、苛立つなあ……酒飲んでエ……

「おい、そのやつ、もつと酒をくれ。それだ！お前が今運んでいる酒がいいな」

「ああ？おいおい、馬鹿言つてんじゃねえよ酔っ払い。これはカイドウ様のお気に入りだ。これから持つていくところなんだからお前には渡せねえよ」

「五月蠅い」

「ガツ——」

その瞬間、ソレを感知できたのは絶賛酔っ払い中のカイドウや宴会を盛り上げるのに忙しいクイーンではなく、一步引いた場所で宴会を眺めていたキングだけだった。

（今のは……霸王色の覇気。気が抜けた男のふりをして、こんなものを隠し持っていたか。流星は天竜人殺し。腐つても七武海というところか）

天竜人を殺した男。カイドウに絶対の忠誠を誓っているキングではあるが、それでも世界のルールなどお構いなしに大暴れする新人には期待を寄せていたのだ。

だというのに、鬼ヶ島に現れたのはどこか気の弱そうな優男。

内心の失望を隠せなかったキングではあるが、今の覇気は評価を改めるに十分なものだった。

（一人だけを狙い撃ちにする精度も悪くなかった。うちの精鋭が勢揃いしている中で暴れ出すとは思えないが、これは警戒しておいた方が

いいかもしれないな)

もう見慣れた光景として皆スルーしているが、カイドウの泣き上戸は続く。

「俺アよ、ジョーカー。ず——つと楽しみにしてたんだぜ？ テメエが提案してきた人造悪魔の実の力で俺の軍勢を強化するその日をよオ！」

「ああ、知ってるよ。だから謝ってるんだ、すまねえ」

「うう……クソ！ なんでだよ！ なんでこう上手くいかねエんだよ！ なんて俺ばつかりこんな目に遭うんだよお！」

……俺ばつかり？ コイツ今なんつった？

「ああ、クソ！ これだから生きるってのは面倒なんだ畜生め！ やってられねえぜ。もう死にてえなあ」

死にてえだあ？

「——五月蠅い」

何を言ってるんだ。この馬鹿は。

「うん？ どうしたキリア？」

嫌な予感がしたドフラミンゴがキリアに声を掛けるが、もう遅かった。

「テメエ、女々しく泣いてんじやねエぞ自殺願望のクソ迷惑野郎がア！ いい歳したおっさんが……キモいんだよ!!」

楽しく盛り上がったいた宴会会場の空気が凍り付いた。

さーつとドフラミンゴの顔から血の気が引いていく。

真っ青な表情でぎこちなく動かした視線の先には、顔を真っ赤にして目の焦点があつていないクソ馬鹿の姿があつた。

不意に以前の酒盛りで馬鹿と交わした会話が脳裏に過る。

『なんだ、もう飲まねえのか？ キリア』

『いやー、自覚はないんですが、俺ってかなり酒癖が悪いらしくて、悪酔いする前に止めることにしているんですよ』

『確かにこの間フラフラと外に出歩いてゴミ箱に顔突っ込んだ時は何事かと思つたが……』

『ああ……あれも驚きですが、あれは寝ぼけているだけです。酔つた

ら本当に厄介らしくて、二度と飲むなって知り合いに怒鳴られたんすよ』

『どんだけだよ』

その場は笑って流していたが……

(クソツタレ！ ワノ国の酒が飲みやすいからって度数が高いのも知らずに飲み過ぎたなあのアホッ！ 確かにスマイルの件でカイドウを怒らせてこのアホをぶつけるつもりではいたが、これはまずいだろ！)

「お、おいキリア……お前ちよつと飲み過ぎたな。ほら、あつちで休もう。こつちへ来い」

「ああん？ 俺は酔ってねえよ馬鹿野郎！ いいからあつち行つてろ41歳」

「おい、だから俺は38——ぶげらッ!」

「ういゝゝゝ知るか」

((ドフラミンゴを裏拳で殴り飛ばしたあゝゝ?!))

「うお——ん！ ジョーカー！ 殴り飛ばされて可哀そうに！

ひとえにテメエが弱いせいだが……それでも不憫だ！」

「あれ……これ、もう空になつちまった……おい、その酒美味そうだな。俺に寄越せ」

「それは俺の酒だぞお！ スマイルだけじゃなくて酒も俺から奪うのかよお！ 勘弁してくれよおゝゝ」

「ああん？」

キリアは竜の翼を生やし、カイドウの頭の位置まで飛ぶと、彼の立派な牛のような角を掴み、大声で怒鳴った。

「馬鹿が！ ねエもんはねエんだ！ まーだわかんねえのかこの馬鹿は！ おい馬鹿この野郎！」

「……」

無言で俯くカイドウ。

百獣海賊団の部下たちはあまりの暴拳に震えつつも内心で笑っていた。

あのキリアとかいう馬鹿な野郎、 “死んだな” と。

「うお——ん！ すまねえ！ 俺ア……馬鹿なんだアア！」

(((((まだ泣き上戸だった——!!)))

カイドウ、泣き上戸継続。

貴重なストツパー（ドフラミンゴ）を自分で殴り飛ばしたキリアは止まらない。

グイッとカイドウから無理やり奪った酒を流し込み、キリアは吠える。

「そうだ！ お前は馬鹿だクソツタレ！ 馬鹿カイドウがよお、暴力の世界？ 最高の戦争？ 思春期の男子みたいに恥ずかしいこと言ってるじゃねエぞ馬鹿たれが！」

「うううう……恥ずかしいなんて言うなよおお……」

「いいや、恥ずかしいね！ 俺ア、誰の憧れも否定するつもりはねエが、テメエみたいに自暴自棄の反動を憧れや目標にすり替える奴は大っ嫌いなんだツ！」

「そんなこと言ってもよお……俺にはもうこれしか残ってねエんだよお！」

「ああ、もう鬱陶しい奴だな！ 黙って俺の酒を飲めこの野郎！」

「うう……グスつ、いただきます」

カイドウに無理やり自分の（カイドウから奪った）酒を飲ませるキリア。

アルハラも真つ青な光景にカイドウの部下たちが軒並み思考停止に陥る中——

「おい——」

唐突にキリアの怒りが弾けた。

「何勝手に俺の酒を飲んでんだテメエ！ 殺すぞゴラア！」

キリアはカイドウに無理やり飲ませていた酒の器を引っぺがし、思いつきりカイドウの頭に叩きつけた。

(((((ええ~~~~!! 理不尽ツ!!)))

もう滅茶苦茶だった。

余りの無茶苦茶さにクイーンはサングラスを割って目ん玉が飛び出し、飛び六胞たちは唾然とし、キングでさえも白目を剥いている。

「うお——ん！　酷いことするなよお！　酒が勿体ないじやねエか！」

「うるせえー！」

カイドウの胸ぐらを掴み、黄金の瞳で四皇を睨みつけながら言った。

「泣くな！　泣いて同情してもらって、それで満足か?!　泣いたら亡くしたものが帰ってくるのか?!　いちいち腹立つ野郎だなア……テメエを肯定できるのはテメエだけだろうが！」

「あ、兄貴……」

眼をトロンとさせ、うるうると泣きそうな表情になるカイドウ。

((((今度は甘え上戸だあ——!!))))

「フフフ……馬鹿な奴だ。だが、それでも愛そう」

その子供のように純粋な瞳に絆されたのか、キリアは少しだけ優しい表情になった後

「——って、誰が兄貴だ！　キモいんだよおっさん!!」

「ぶげらっ!!」

容赦なくカイドウの顔面を巨大な竜頭に変化した右腕で殴り飛ばした。

((((やっぱり理不尽——!!))))

もう本当に滅茶苦茶だった。

長らくカイドウの酒癖の悪さと付き合ってきた部下たちだが、それでもこれまでの記録を全て抜き去るような暴挙に啞然とするほかない。

「うう……もう放っておいてくれよ！　どっか行ってくれよおおおとおおー！」

(ま、まずい！　泣き上戸のカイドウさんが金棒を持ち出してきたぞ！)

殴り倒されたカイドウが立ち上がった時、その手には自慢の金棒が握られていた。

しかし、まだ酔いが醒めないキリアは真っ赤な顔で挑発を続ける。

「なんだ！　困ったらまた暴力か？　本当にどうしようもねエ奴だな

お前は！」

「うお——ん！ もう黙ってくれよおおおお——！」

「黙るのはテメエだ！ いいからさっさと泣き止め餓鬼がツ！」

カイドウが金棒を振りかぶる。

キリアが竜頭の右腕を振りかぶる。

「雷鳴——」

「竜王——」

尋常ならざる覇気が込められた金棒と拳に部下たちが急いで避難を始める中、容赦なく両者の一撃が炸裂した。

「——八卦！」

「——鉄槌！」

カイドウの金棒がキリアの顔面にのめりこむ。

キリアの竜頭拳もまたカイドウの顔面にのめりこむ。

威力の差は歴然。

キリアはカイドウの圧倒的な力によって吹き飛ばされた。

しかし——

「カイドウさんが……殴り倒された?！」

カイドウもまた、キリアの一撃によって床に伏せていた。

騒然とする宴会会場。

皆が怒涛の展開についていけず固まっている中、どさくさに紛れて宴会会場から脱出していたドフラミンゴは吹き飛んでいったキリアを見ながら内心こう思っていた。

あの馬鹿、このまま死んでくれねエかな？ と。

憧れは止められないですよね？

時は再びキリアとヤマトの出会い後まで移る――

「クソ親父め……空からキリアのことを探すつもりだな……よし！
キリア、こつちへ来てくれ。今は一先ず隠れることを優先しよう！」
「お、おう。分かった」

青龍と化したカイドウを見たおでんはそう言っただけで俺の手を引いて
駆け出した。

確かに彼の言う通り、今船を奪えば間違いなくカイドウに見つかっ
てしまうだろう。

俺はおでんに案内してもらって鬼ヶ島の中にある彼の隠れ家的な
ところに匿ってもらったことになった。

まあ、隠れ家といっても岩場を無理やり貫いて作った洞穴のような
ものだが。

「ごめんね、狭くて」

「いやいや、こうして隠れる場所を提供してもらえただけでもありが
たいよ。寧ろ、君の方は大丈夫なのかおでん？」

「僕の心配をしてくれるのか？ 優しいんだな、キリアは。……心配な
いよ。僕は腐ってもカイドウの息子だからね。仮に見つかったとし
てもある程度言い訳はつく。今は君の命の方が大事だ」

真つすぐな瞳でそう言ってくれるおでん。

なんて……なんていい奴なんだ……

「ありがとう……おでん。この恩は一生忘れない」

「……大丈夫だ。僕も昔、同じように恩を受けたことがある。だから
気にしないでくれ」

そう言っただけで親切なおでんは食べ物まで提供してくれた。
つくづくありがたい……

ちなみにおでんが先ほど宴会会場にいたのは食べ物を盗むため
だったらしく、幾つか酒もくすねてきていた。

「ぶはー！ どう？ キリアも飲むかい？」

「いや……暫く酒は止めておくよ」

「ええ？　またあの酔っぱらった君を見たかったんだけどなあ」
ニヤニヤと笑うおでん。

よっぽど酔っぱらった状態の俺を気に入ったらしい。

「なんか、とんでもないことを言った記憶は思い出したんだが、やっぱり全部は思い出せないなあ……」

「思っていたより脳へのダメージが深刻だったのかもしれないね……」

「……正直知りたくはないんだが、どんな感じだったか教えてくれな
いか？」

「いいよ！　では、この僕が君の大立ち回りを再現するでしょう！
まず、いきなりクソ親父に啖呵を切った君は——」

そうして始まったおでんによる俺のやらかし解説。

彼の熱演込みで語られる暴挙の数々。

これまで散々カイドウに痛めつけられてきたおでんは俺がカイドウをボコボコに言いくるめている場面が大層お気に入りらしく、俺の台詞を一字一句全て覚えているほどだった。

「——というわけで、君はうちのクソ親父をこう、思いつきり殴り倒したんだ！　いやあー、あの時はスカツとしたなあ！　最高だったよ
！」

「……」

「あれ？　どうしたの？　顔色悪そうだけど」

「……」

残念ながら——非常に残念ながら、全部思い出してしまった。

そうだった……日本酒を浴びるように飲んだ結果、理性のブレーキが効かなくなつてとんでもないことをやらかしたんだ……。

ヤバいなあ、これ。カイドウに殺されちまうよ……。

何より、パイセンにも殺される気がする。

「えーと……俺が殴り倒したとかいうカイドウはその後どうだった？
やっぱり怒ってた？」

「いや、僕はすぐに君を助けに会場を抜けたからアイツが怒っていたかどうかはちよつと分からないなあ……」

「そうか……」

反応が分からないのが一番怖いんだが。

しかし参ったなあ……まさか四皇になるとか世迷い言を口にしていたパイセンより先に俺がカイドウに喧嘩を売ることになるとは。

「そういうえはおでん。君は会った時に言っていたな。俺と同じく、カイドウを倒すべく戦っている者だって。どうしてカイドウの息子である君が父を倒そうとするんだ？」

「それを説明するにはまず、光月おでんという侍について話す必要があるね」

「おでん？ 君と同じ名前だな」

事情は知っているものの、突っ込まないのは不自然かと思ったので聞いてみた。

するとおでんは俯き、顔を曇らせながら言った。

「……キリア。これまで黙っていてごめん。おでんというのは僕の本当の名前ではない。僕が憧れている、偉大な侍の名前なんだ」

「そうだったのか……でも謝る必要なんてないよ。君がおでんと名乗りたいのであれば俺はそれを肯定するだけだから」

「……君は立派な人だな。でも、そんな君にだからこそ本当の名前を伝えておきたい」

そう言っておでんは立ち上がり、金棒を地面に突き刺して仁王立ちに。

俺の目を真摯に見つめながら威風堂々とその真名を語った。

「生まれはワノ国鬼ヶ島。父は外道の海賊なれど、この国を支配する一匹の龍。生まれてこの方、鬼の子として生きてきた。——僕の名はヤマト！ いずれ父を倒し、この国を開国して光月おでんとなる者だッ！」

「ヤマト……それが君の名前か」

「ああ。今まで騙していてごめんね」

「いや、だから謝る必要なんてないよ。これからはヤマトと呼んだ方がいいかい？ それともおでんって？」

「……君におでんと呼んでもらえるのはとても光栄なことだったけれ

ど、それでもこの国を救えていない以上、僕はまだヤマトだ。だから、これからはヤマトと呼んでくれ」

「ああ、分かった。それが君の意志なら尊重しよう。改めてこれからよろしく頼む。ヤマト」

「ああ！ もちろんだ！ キリアー！」

そして俺たちは固い握手をかわした。

出会ってまだ数時間しか経っていない俺たちだが、そこには確かに友情のようなものが芽生え始めていた。

◆◆閑話休題◆◆

「さて、僕がカイドウと戦っている理由だが、さつきも言ったように光月おでんという侍について知ってもらう必要があるんだ。そして彼については僕の聖書バイブルに全てが記されている」

「聖書か……実は俺にも聖書があるんだ。103巻くらい」

「多いな?! いったい、どんな聖書なんだ?」

「とある男と彼の仲間たちの冒険譚だ。本当に面白くてね……読むだけで心が震えたのを覚えているよ」

「冒険譚?! なんてこった! 偶然にも僕の聖書バイブルも同じなんだ! 正確には航海日誌なんだけど、でもこれは紛れもなく彼の冒険譚! これ、これ! 見てくれ!」

大興奮のおでんは大事なものを大人に自慢したい子供のように可愛らしい挙動で懐から取り出した聖書を俺に手渡そうとしてくる。

「これが君の聖書バイブルか……すまない。ちよつと手が汚れているかもしれないから洗ってきてもいいか?」

「ッ?! 聖書バイブルの取り扱いにも気を遣うその姿勢……君はなんて素晴らしい人なんだ?! しまった! 僕にも君みたいな心があれば、この聖書バイブルを僕の手垢で汚すこともなかったのに……!」

「ヤマト、大丈夫だ。これは君の聖書バイブルだ。君が汚す分には問題ないんだ。ただ、俺が君の聖書バイブルに敬意を払いたいただけだから——」

「ッ! ……君のことを心から尊敬するよ。その奥に進んだところへ

沸騰させた綺麗な水を貯めてあるんだ。良かったら使ってくれ」

「ありがとう」

というわけで、手を丁寧に洗った後、彼の聖書を拝見することになった。

「では、失礼して——」

「ゴクリ」

何やらお互いに緊張しながらゆっくりとページをめくっていく。

ふむ、ふむ、ふむ……これが光月おでんの記した航海——いや、その壮大な人生の記録か。

一通りページを捲り終えた俺は聖書を汚さないように気を遣いながらヤマトに返却した。

「すまない。全然読めなかった……」

「……いや、僕の方もごめん。それはワノ国の言葉なんだから、読めなくて当然のことだったんだ……つい興奮してしまって」

「でも、これが一人の男が命を懸けて書き記した価値あるものだということは十分に分かったよ。よければ、君の口から聞かせてくれないか？」

「！……もちろんだー！」

そしてヤマトは語り出した。

ワノ国の閉ざされた鎖国の歴史。そこで窮屈そうにしていた自由な侍、光月おでん。

九里の大名となった彼が偶然にも出会った白ひげたちの船に（強引に）乗りこむことよって始まった波瀾万丈な冒険譚。

興奮したヤマトはゴール・D・ロジャーの夢の果ても語ろうとしたが、それは流石に止めた。

それは未来の俺がルフィから直接聞くものだから、今の俺が知っているいいものじゃない。

「——というわけで、おでんは僕の父によって処刑されてしまったんだ……」

「……」

「僕が戦う理由、分かってもらえたかい？」

「……ああ。十分すぎるほど分かったよ」

「そうか！ それは良かった——「ヤマト」」

俺は不意に昔のことを思い出していた。

「つらいよな。父親を誇りに思えないのは」

「いいキリア。お父さんを誇りに思いなさい」

「……君の過去に何があったかは聞かない。だが、ありがとう。君と気持ちを共有できて嬉しいよ」

「ああ……」

酒は飲まないと言ったが、少しだけしんみりした空気を払拭するためにヤマトと一杯だけ乾杯した。

「——それにしても、長く語りすぎたね。クソ親父のせいで天気がいまいち分らないけれど、多分そろそろ夜なんじゃないかな？」

「カイドウも流石に探索を打ち切ってくれているといいんだが……」

「そういうえば、君と一緒に来たという桃色衣装の男は大丈夫なのかな？」

「あく、パイセンか。ま、多分生きているでしょ。俺にくつつけてある糸が切れてないし」

「？」

「おつ、噂をすれば何とやら。パイセンがこっちに来たみたい。それに……船の気配も感じるな」

「あつ、待ってよキリア！」

俺はこちらへ迫ってくるパイセンの気配を察知し、立ち上がって入り口まで向かう。

ちなみにくつつけてある糸というのは目覚めた時に気が付いたものだ。

ドレスローザでやらかしてから監視用としてパイセンが俺の位置を把握するために引っ付け始めたのだが、まさかこんな形で役に立つとはな。

「おつ、来た来た。おっい！ パイセン！ こつつす！」

空を飛んでくるお馴染みのピンクジャケットを見た俺は手を振ってパイセンに位置を知らせる。スーツ姿のパイセンは糸で飛行して

いるという特性を生かして不自然な軌道で俺の元に急降下し、拳を思いつき振りかぶつて——!!

「色々と言いたいことはあるが、取り敢えず一発殴らせろツ!!」

「ぶべらツ!!」

武装色の覇気を纏った右ストレートを顔面に食らわされたのだ。た。

「キ、キリア~~~~!!」

驚いたのはヤマトである。

急に立ち上がったキリアが表に出たと思ったら、空から降って来た桃色衣装の男に思いつき殴り飛ばされたのだ。

防御態勢も取れなかったキリアは岩場に衝突して思いつき伸びていた。

「ハア……ハア……テメエはいつもいつも人に迷惑ばかり掛けやがって……」

ドフラミンゴは地面に着地し、たった今自分で殴り飛ばしたクソ馬鹿に向かつてぼやいた。

「ちよつとカイドウと力比べさせて、ついでに百獣海賊団の内部調査に出していた俺のスパイたちを回収するだけの予定だったのによお……テメエのせいで随分と目論見が外れたじゃねえか。クソツタレめ」

「おい！ お前！」

「ああ？」

「いきなりキリアを殴り飛ばしてどういうつもりだ！ 彼の友達じゃないのか!!」

「お友達じゃあ、ねエよ」

ビツクリするぐらい怖い顔で言われ、思わず固まるヤマト。

「だ、だが！ 彼の味方ではあるんだろう!! それなのにいきなりこんなことをして……恥を知れ！」

「恥はそのアホが知るべきだが……まあ、待て。そいつの肩を持つお前は誰だ？」

聞かれたからには名乗らねばなるまい。

鬼の娘は金棒を地面に突き刺し、再び堂々と名乗った。

「僕の本当の名は光月おでん！ またの名をヤマト！ あのクソ親父、カイドウの息子だ！」

「カイドウの息子!? ……いや、ちよつと待て。ヤマトだと」

その瞬間、ドフラミンゴの脳裏にクソアホが放ったある台詞が浮かび上がった。

『宇宙戦艦ヤマトって知ってます?』

居場所が分からない古代兵器。

その正体は戦艦。

奴が口にした「ヤマト」という名前。

そして目の前にいる女の名は——ヤマト。

「……偶にはやるじゃねえか、キリア。分かったぜ、つまりはそいつがキーマンってわけだ」

「……」（アホ気絶中）

「おい、女！ そのアホを連れて俺についてこい！ もうすぐ俺のスパイたちが近くの海岸沿いに船を回してくる！ 今は俺の糸分身で上手く錯乱できているが、バレるのも時間の問題だ！」

「僕は女じゃない！ ワノ国の侍、光月おでんだ！」

「どうでもいいから！ さっさとそいつを連れて一緒に船に乗れつつつてんだ！」

「……それはできない」

「ああん？」

「この錠が見えるか？ これはこの島から離れようとする爆発し、僕を殺すんだ」

「……」

「だから、一緒には行けない」

何をバカなことを、とドフラミンゴは思ったが、ヤマトと名乗る女の深刻な表情を見て考えを改めた。

カイドウの息子とは言っていたが、薄汚れた衣服やキリアを助けた様子から見て、何やら訳ありなのだろう。

「ちつ、しょうがねエなあ。じゃあ、その馬鹿だけでもこっちに寄越

せ。この国を脱出するからよ」

「それもできない!」

「なんでだ!?!」

「いきなり僕の友達を殴り飛ばした奴を信用なんかできるか!」

「友達だあ? お前ら、今日会ったばかりじゃねえのかよ?」

「友情に時間は関係ない! 僕は僕の憧れを否定せず、父を殴り飛ばしたこのキリアという男のことが好きだ! 尊敬している! だから、彼を害そうとするものは、すべからく僕の敵だ! 覚えておけ!」
「……呆れたぜ。カイドウにこんな頭のネジが外れた餓鬼がいたとはな……」

ドフラミンゴは心底呆れた後、これ以上話がこじれるようだったら排除することも考えそつと右手を動かす。

それを見たヤマトも金棒を握って臨戦態勢を取る中、一つの声が両者の意識を乱した。

「……なに……言っただよ、ヤマト」

「キリア! 傷は大丈夫?」

「ああ……あんなへなちよこパンチなんて全然痛くないよ」

「おい」

「カイドウのダメージが頭に残っていたせいでちよつと気を失っただけだ」

「それは良かった……!」

ふらつきながらも何とか立ち上がったキリアは真つすぐな瞳でヤマトを見つめた。

「それよりも聞こえたぞ。海に出るのにその錠が邪魔なんだって?」

「……ああ、僕はこの爆発する錠に縛られているせいでこの島から出られないんだ。本物のおでんのように海に出ることもできず、クソ親父に支配されるこの国の人たちを救うこともできない」

「……」

「でも、君という希望がやってきてくれたお陰でもうちよつとこの島の中で耐えられそうだよ。ありがとう、キリア。君と出会えて良かった——」

「違うだろ」

「えっ？」

ヤマトの言葉を遮ったのはキリアの力強い言葉だった。

「思ってもいないことを口にするのは良くないよ、ヤマト」

「お、思ってもないことを言うわけがないだろう!! 僕はここから来るべき時を待つから、君は早くここから逃げて——」

「違う!」

「なにが違う!?!」

「君がどうしたいかを言うんだヤマト! 俺たち友達なんだろう!!」

「——」

「……うう……出たいよ」

「なんだって?」

「この錠を外して、この島を出たいよ! 自由になって、おでんのように冒険がしたいよ!」

「よく言った!」

「えっ」

キリアは力強く頷き、ヤマトを縛る鎖を見つめた。

「憧れは止められない……こんなもので止められていいはずがねえんだ」

「キリア……」

「その錠がお前をこの島に繋ぎ止めているのなら、俺が断ち切つてやる! 手を前に出してくれ」

「でも……この錠は十何年も僕を縛っていた錠で、何をやっても壊せなくて……」

「だから——」

怪物と恐れられる男は言った。

「それを壊す男が目の前に現れたんだ。これは運命だ! いいから、俺を信じろ」

「……うん! 分かった! 好きにやってくれ!」

ヤマトはたった数時間前に会ったばかりの友人に自分の命を預ける覚悟を決めた。

「ありがとう、ヤマト。君の期待に応えてみせるよ」

さて——皆さんご存じの通り、この錠を壊すには内部にダメージを通す流桜の覇気が必要だ。

非常に難易度が高く、ワンピース本編でも使用している人間は限られた実力者だけだったことを覚えている。

だが、俺だって伊達に大将2人を相手に生き残っているわけではない。

覇気の応用編は、既に何度かこの身で体験している。

大将黄猿、大将青雉。

頼りになる師匠たちが俺に教えてくれた。（※教えてはいない）

纏う防御の覇気ではなく、物の核を破壊する攻撃の覇気。

「ふう——ハアツ!!」

俺は全意識を集中させ、以前に何度か成功していた流桜の覇気をヤマトの錠に流し込んだ。

「凄い！ 錠に亀裂が！」

ヤマトの言う通り、錠には亀裂が入っていた。

しかし、ダメだ。これでは内部の破壊が完了していない。

（しまった！ 浅かったか……!）

焦るな。焦りは俺を殺す。

まだ数秒時間はある。俺は意識を集中させてさらに覇気を込めた。

制御が難しい覇気だが、約束を守るのが男というものだ。

「クソツタレ……外れろオオオオ！」

バキンッ!

もはや流桜と呼ぶには力技が過ぎだがしかし、

「は、外れた——!」

ヤマトは長年自分を縛っていた錠が外れ、感動に打ち震えていた。

だが、ゆっくりしている暇はない。すぐに投げ飛ばさねば、錠は爆

発してしまう……かもしれない。

「キリアー! 早く錠を——えっ……っ?」

突如キリアに突き飛ばされたヤマトは啞然とした表情でその光景を眺めていた。

自分を突き飛ばしたキリアの左手。

何故か既に爆発の兆候を見せている錠。

そして、錠を飲み込もうとする竜の頭に変化したキリアの右腕。

「キリ——」

この距離では回避は間に合わない。

ヤマトの表情が青ざめる中、父が娘に掛けた錠は情け容赦なく爆発した。

本編ではビッグママさえ吹き飛ばした強烈な爆風は、轟音と共にヤマトの身に降りかかる——ことはなかった。

「——うし、無事に外れて良かったな、ヤマト」

「ううう………ひつく………えぐ………」

「おい泣くなよ。上手くいったんだから」

「でも！ でもお………！ キリア………」

ヤマトは自分を庇い、爆発する錠を飲み込んでダメージを一手に引き受けた彼の右腕があった場所を見つめて叫んだ。

「腕が!!」

「安いもんだ。腕の一本くらい……無事でよかった」

「キリアアアアア——!!」

ようやく自由になれた喜び。

父が本当に自分を殺そうとしていたことへの深い悲しみ。

友人への計り知れない感謝。

そして、自分のせいで右腕を失った彼への罪悪感。

ヤマトは泣いていた。

ぐちゃぐちゃになった心のままに、ただキリアに縋り付いて泣き続
けていた……。

「……いや、どうせ生えてくるだろお前」

キリアの尋常ならざる回復力を知っているドフラミンゴの至極
まっとうなツツコミはしかし、自分たちの世界にいる2人には届かな
いのであった。

勘違いは良くないですよね？

「ちよつとキリア！ 腕治るならもつと早く言つてよく！ 本当に心配したんだからな！」

「いや、ごめん、ごめん。右腕が丸ごと吹っ飛ぶ経験なんてなかったから、再生することすっかり忘れてたよ」

俺は現在、ヤマトに抱き着かれながらすぐに生えてきた右腕を彼（いや、本人がヤマトで認識しろと言うから彼女なのか？）に両手の指ですりすりと触られていた。

くすぐつたいな……。

流桜が下手なせいで思っていたよりも錠の破壊に手間取り、ヤマトだけでも守ろうと咄嗟に右腕を犠牲にしたときは俺もこれからシャクスカか……なんて激痛の中で高揚と共に思ったが、その後普通に再生してきてビックリした。

便利だなこの身体。

でも右腕を吹っ飛ばすのは二度とごめんだ。

男の意地ですまし顔をしていたが、マジで痛かったからな。

「……そっか。無我夢中で僕のことを助けてくれたんだね」

「当たり前だろ。友達なんだから」

「……ありがとう。本当に、感謝している。この恩は一生忘れないよ」

ヤマトは錠が嵌められていた自分の手首を触った後、最後にもう一度俺の右腕に触れてから熱っぽい瞳でそう言った。

「ヤマト……」

「おい、気は済んだか馬鹿ども。キリアも回復したならさっさと立ち上がって俺について来い」

そんな感じでヤマトと友情を深めていたら、急にパイセンが水を差してきた。

その空気の読めなさへの怒りもあるが、それ以上に先ほどいきなり殴られたことに対してまだ何も謝罪を受け取っていない。

文句を言おうと立ち上がるが、俺よりも先にムツと怒りの表情を浮

かべたヤマトが立ち上がり、パイセンに人差し指を突きつけた。

「おいお前！」

「ああ？」

「いきなりキリアに殴り掛かったことといい、それへの謝罪がないことといい、一体何様のつもりなんだ！ 僕の恩人に対して失礼だろう！」

「……お前にじっくりとそこにいるクソ馬鹿のやらかしを説明してやってもいいが、今は時間がない。おい、キリア！ さっさとそのアホ女を連れて俺について来い」

「アホ女とはなんだ!! 僕は——」

「あく、ちよつと落ち着けヤマト。あれでも俺の恩人なんだ。今は俺の顔を立てると思って我慢してくれないか？」

「キリアの恩人……？ 分かった。我慢する」

俺が言えば大人しくなってくれるヤマトを連れ、パイセンの背中を追って駆け出す。

ちらりと上空を見てみるが、カイドウの姿は見当たらない。

パイセンの糸分身が健闘しているか、それなりに時間が経過したから一度探索を打ち切ったかのどちらかだろう。

何気に俺が爆風と爆音を抑え込んだことも貢献している……と思いたい。

海岸沿いまでやって来た俺たちは船の姿を探すが、酷い嵐で船の姿なんてどこにも見当たらないような状況だ。

パイセンは苛立った様子で腕につけている小型の電伝虫に向かって怒鳴った。

「おい、応答しろ！ 船はどうなっている!!」

『……ザザ……すいません……海流の流れが激しすぎて……海岸沿いまで近づけるのは……無理です！』

「ちっ、そういやこの辺りの海流は異常なんだったな」

舌打ちしたパイセンだが、次の瞬間には思いつきり悪い顔をしながら舌なめずりをした。

「守りは盤石。難攻不落のワノ国か……ますます欲しくなるじゃねエ

か……!」

「パイセン、舌なめずりははしたないですよ」

「そうだ、そうだ。汚いぞ」

「……コイツら、海流に巻き込まれて死なねエかなあ」

ドフラミンゴはぼやきながらどうやって脱出したものかと思案する。

その一方、クソ馬鹿2人は呑気に会話をしていた。

「あつ、そういえばヤマト。一緒に俺たちと鬼ヶ島を出るってことで良かったのか?」

「うん。君たちが強いのは分かるけれど、流石に戦力差が大きすぎるからね。ワノ国の頼りになる侍たちも今は殆どいないから。外から戦力を集めなくちゃならない」

あー、そうか。今は原作開始前だった。

赤鞘九人男たちはまだ時空の狭間か。

「確かに戦力差は如何ともしがたいよなあ……パイセンの仲間たちじゃ力不足だし」

「誰の家族が力不足だった?! あと、もうちよつと真面目に脱出の手段を考えろ馬鹿どもが!」

「脱出か……ヤマト、どう?」

「ちよつと待つてね。うーん……今なら大丈夫なんじゃないかな?」

「うし。じゃあ、パイセン。そういうことなんでよろしく」

「???」

ドフラミンゴは首を傾げた。

「何を言ってるんだ? テメエ」

「いや、だから——ヤマトに敵の気配が近くにないかどうか聞いて、いないといったから今なら多少派手なことをしても居場所はバレないと思いますよ、船の人たちに連絡よろしく——って言ったんです。ね、ヤマト」

「うん」

「なんだコイツら気持ち悪っ」

ドフラミンゴは本気で引いた。

なんで出会って数時間で熟練の相棒みたいに主語抜きの会話をしているのか。

地道に人との関係を築き上げてきたドフラミンゴには心底理解できない人種たちだった。

「ま、まあ……近くに追手がいないならいいか。——こちらジョーカー。聞こえるか？ 船の位置を信号弾で知らせろ。上陸できないならこちらから飛んでいく」

『ザザ……了解しました』

ちよつと間を置いて、少し遠くの方で赤い信号弾が打ちあがったのが見えた。

「あそこか……よし、飛んでいくぞキリア。そのアホ娘はお前が背負っていけ」

「だから誰がアホだ！ 桃色野郎！」

「どうどう、落ち着けヤマト。俺が背負って行ってやるからさ」

「うん！ よろしく！」

「……なんでだろうな。俺アこの先、驚くほど苦労するような気がしてならねエよ」

変なことを言いながらパイセンは一足先に糸を雲に引っかけて浮かび上がり、鬼ヶ島から信号弾の船まで飛び始めた。

「さて、俺たちも行くとするかヤマト」

「うん！ あの竜の翼で飛んでいくんだらう？」

「ああ。——でも、それだけじゃあ芸がないな。折角だから俺の変身を見せてやるよ！」

というわけで、久々の変身だ！

能力の覚醒に伴って手に入れた頭が三つある形態は流石に怖がられるかなと思っただので、最初期に使っていた胴体の殆どが獅子で、後ろ脚が山羊、そして竜の翼と蛇の尾を持つ形態に変身した。

「わあ〜！ 凄い！ カッコいいよキリア！」

『ありがとう。あんまり人に褒められることがないから嬉しいよ。さあ、俺の背中に乗ってくれ』

「では失礼して——おお、この毛、モフモフだ」

そういやパイセンはキモイとか酷いことを言っただけで、人を背中に乗せるのは初めての経験かもしれない。

結構テンション上がるな。

『よし、それじゃあ準備はいいかヤマト』

「……………うん」

『……………どうした。何か思うところがあるなら遠慮なく言っただけだぞ』

「君は鋭いなあ……………いや、この島を出ることに迷いはないんだ。ただ、不思議な縁だと思っただけで」

『不思議な縁?』

「君のことさ。僕を外へ連れ出してくれるのがまさか、竜の翼を持つ百獣の王とはね……………」

『百獣の王というには色々と混ざりすぎている気はするけどな。でも、そんなもんだろう。不運の連続、予期せぬ出会い……………戸惑いこそが人生だよ、ヤマト君』

「……………そっか、そうだね!　これが人生だ!」

ヤマトは後ろを振り向き、そつと心の中で言った。

「行ってきます。僕を生かしてくれた皆。たくさんの味方と一緒に必ず父を討ちに帰ってくるからね」

『さあ、行くぞ!　ヤマト!』

「ああ、行こう!　キリア!」

竜の翼が羽ばたき、百獣の王の身体が空に浮く。

ヤマトは生まれ育った故郷に一時の別れを告げ、自分を鎖から解き放った男の背中に乗って自由な海へと飛び出した。

◆◆船中◆◆

嵐が酷くなかなか厳しいフライトとなったが、こと空中において俺が遅れを取るはずもなく。

『お先〜!』

「じゃあな——!」

「クソ餓鬼どもが……!」

ヤマトを背中に乗せた俺は悠々とパイセンを抜き去り、信号弾を打ち上げた船へと辿り着いたのだった。

「へえ、これが僕の初めての冒険の船か!!」

眼をキラキラさせながら割と大きな(元百獣海賊団の)船を見渡すヤマト。

俺は遅れて到着したパイセンに言った。

「結構いい船を盗んできたんですね、パイセン」

「盗んできたのは潜入していた俺の部下たちだがな。テメエのせいで城の中は混乱の極みだったから、海に搜索に出るとか適当な言い訳をつけたら簡単に出港できたんだとよ」

「じゃあ、俺の手柄ですな」

「今すぐ海に突き落とすぞ元凶が」

パイセンの冗談はいつも通り聞き流すとして。

ヤマトは初めて乗る船に興奮を隠しきれないらしく、船のあちこちを動き回っては俺やパイセンの部下にあれこれ聞いてくる。

今まで憧れを止められていたんだ。その反動でこうなるのも仕方がないことだろう。

「——で、これからどうするつもりなんです？ ドフラミンゴ先輩」

ヤマトがいる手前頑張つて意地を張っていたが、カイドウの一撃にパイセンのパンチに右腕の消滅&再生とそれなりに消耗していた俺は船室に設置されたソファに座って一息ついていた。

ああ、今すぐにもベッドで寝たいな。

パイセンは早速船に常備されていたワインボトルを開けて直にボトル飲みをし始めた。

ちなみにヤマトはまだ甲板ではしゃぎまくっている。

「さっき俺が言った話ですけど、冗談でもなんでもなくパイセンの部下たちじゃあ、百獣海賊団には太刀打ちできないと思いますよ。それは系分身を戦わせたパイセン自身が一番分かっているんじゃないですか?」

「……」

無言でワインをがぶ飲みするパイセン。

「それに一番の問題のカイドウ。あれ——ヤバいですよ」

「……一撃食らってどうだった？」

「次食らっても何割威力が落とせるか俺にも分からないです。雷鳴八卦だったかな？ あの技は。まあ、感覚的に雷鳴八卦くらいまでは落とせるかもしれないですが……」

「じゃあ、あと三発くらえばノーダメージだな」

「俺はサンドバックじゃないっすよ」

分かっているとは思うが、一応補足を入れておく。

……えっ、分かっているよね？

「それから、あくまでも耐性がつくだけであって、ノーダメージになることなんてないですからね」

多分、雷鳴二卦くらいまではダメージ入るんじゃないかな？

「……正直に言え。俺とお前の二人掛かりで勝てるか？」

「無理です。——少なくとも、今のままじゃ」

「そうか……」

パイセンは再びワインをがぶ飲みしてから額に手をやって考え事を始めた。

こうなったら長いからな。俺は疲労回復のために仮眠でも——

「——って、ちよつと待て。おいキリア。お前、カイドウと戦う気になつたのか？」

「何をいまさら。もちろん戦いますよ」

「……あれだけ戦うことを渋っていた男とは思えねエな。どういう心境の変化だ？」

「決まっているじゃないですか」

俺は甲板で楽しそうにはしゃいでいるヤマトを見ながら言った。

「友達のためですよ」

「……お前、本当にキリアか？」

「あのね、俺のことなんだと思っていたんです？」

「傍迷惑鬼畜珍獣サイコパス」

「罵倒のオンパレード——!!」

しかもこれをパイセンに真顔で言われるとかいう屈辱！

だけど、俺ってマジで普通に友達のために命張れる男なんだけどなあ……今まで友達いなかったから知らなかっただけで。

「……まあ、動機はなんであれ、テメエがやる気になったのはいいことだ」

「驚いたのは俺も同じですよ」

「あん？」

「ドフラミンゴ先輩、本気でカイドウの首を狙っているんですね。あの一撃を見ても、なお」

「当たり前だ。もう腹は括った。後はどうするかを考えて実行するだけだ」

「ヒュ、カッコいい」

「茶化すな。お前にも死ぬほど働いてもらうからな」

「でも、具体的にどうするんです？ 一旦ドレスローザに帰ります？」
「ああ。ファミリーにもきっちりと今後の方針を伝える必要があるからな」

「怒り心頭のカイドウが急に攻め込んできたりしないですかね？」

「流石に世界政府加盟国でかつ七武海の領土に攻め込んでくることはねエだろ。それに——」

甲板ではしやぎ疲れたのか、2人がいる船室に入って来たヤマトを見ながら言った。

「いざとなったらこっちにはカイドウの息子にして、プルトンの鍵を握る人質がいる。カイドウも下手に手出しはできねエだろうさ」

「……プルトン？」

「ああ？ テメエが言ったんだろが。なんたら戦艦ヤマトってよ」

「……」

記憶を巻き戻し中。

『……宇宙戦艦ヤマトって知ってます？』

あつ、

『……宇宙戦艦ヤマトって知ってます？』

うーん……

『……宇宙戦艦ヤマトって知ってます?』

言った……ねえ……

「……パイセン」

「なんだ?」

「それ、パスでお願いします」

「なんだそりや?!」

かくかくしかじか。説明終わり。

パイセンは俺の胸ぐらを掴み、額に血管を浮かび上がらせながら迫力満点の顔で言った。

「つまりなんだ、テメエはこう言いたいわけだ。ヤマトって名前が出たのは偶然で、何故かワノ国にいたこのヤマトとかいうクソガキはマジでプルトンとは何の関係もねエ、と」

「……あい」

「ぶっ殺されてエのかテメエ?!」

「……いえ」

パイセンマジギレ。

久々に見たかも、ここまでキレている姿。

するとタイミング悪くやって来たヤマトが怒りながら俺とパイセンを引き離れた。

「おいお前! キリアに何をしているんだ!」

「お前にこのクソ馬鹿がどれほど傍迷惑な馬鹿か教えてやってもいいが、今はテメエにも腹が立ってんだクソが! ヤマトとかややこしい名前しやがって! カイドウのネーミングセンスはどうなってんだクソツタレが!」

「僕の名前はヤマトじゃなくて光月おでんだ!」

「じゃあキリアが呼んでいるテメエの名前は何なんだ?!」

「正式なおでんになるまでの僕の名前だ!」

「……じゃあテメエの名前じゃねエか! あと、正式なおでんとやらには絶対にツッコまないからな!」

「僕はワノ国も救えていない未熟な身。でもいつかきつと、父を倒し、光月おでんになってみせるんだ」

「だから！ 聞いてねえんだよテメエの身の上話は！ クソアホ女が！」

「誰がクソアホ女だ！ いいか良く聞け！ 僕の名前はヤマトだ！」

「……………ヤマトじゃねえか!!」

まあ、ヤマトだよな。

2人とも仲良さそうで安心した。

じゃあ、俺は疲れたんで寝ます。

お休みなさい。Zzzz。

「お、おい！ 寝るなキリア！ テメエ、俺をこの頭おかしい女と2人きりにするつもりか!?!」

「誰が頭おかしい女だ！ 桃色野郎！」

「誰が桃色野郎だ！ いいか、俺の名前はドン——」

「フッフ、やめろよ船長……………それは俺の肉だつて……………むにやむにや」
悪のカリスマ。

怪物狂人。

侍に憧れる鬼姫。

色々とバラバラな3人を乗せ、船は進む。

疲労困憊のドフラミンゴはギャーギャーやかましい女を相手にしながら思うのだった。

あーあ、コイツらマジで死んでくれねえかなあ、と。

修羅場とかお呼びじゃないですよね？

さて、ワノ国からエターナルポースを辿って航海すること数日。

俺たちはパイセンの拠点であるドレスローザへの帰還を果たした。

道中は一向に分かり合えないヤマトとパイセンの喧嘩が絶えず非常に騒がしかったが、それ以外は平和なものだった。

カイドウとの戦いに向けて考えなければいけないことは山ほどあるが、今はドレスローザでゆつくりとしたい気分だ。

「へえ、ここがドレスローザ！ 確かにキリアの言う通り綺麗なところだね！ それにとってもいい匂いがする！」

自分が支配する国を褒められて嬉しかったのか。

パイセンがドヤ顔で言った。

「ちなみに国王は俺だ」

「お前が?! 嘘をつくんじゃない！」

「フッフッフッフ、ほらキリア。言ってやれよ、事実を」

「パイセンが国王なわけないじゃないですか」

「テメエら永久に出禁にするぞ」

パイセンの戯言はいつも通り無視するとして。

待ちきれない様子のヤマトが急かしてくるので俺たちは一足先に船を飛び降り、港へと着陸した。

「うゝゝん……とても美味しそうな匂いがするね！ なんの匂いだろこれ……」

「パエリアじゃないかな？」

「ぱえりあ？」

「この国の名物料理さ。凄く美味しいんだ。せっかくだ、俺が奢つてやるよ」

「本当?! キリア大好き！」

ヤマトはぎゅつと俺に抱き着いてきた。

俺の身長は185cmでヤマトの身長は263cm。

結構身長差があり、抱き着かれるとその……まあ、そういうことだ。

でも、本人が男になりたいと言っているのです。そこは尊重しなければならぬ。

邪念退散！ 邪念退散！

「ハハハ、大袈裟だなヤマトは——」

そもそも、ワノ国出身のヤマトがこの国の通貨を持っているはずもない。

ここは俺が（パイセンからもらった金で）奢ってやるのが筋というものだろう。

この国の料理はマジで美味いからな。

ワノ国ではまず出てこないような味付けの料理ばかりだろうし、色々食べてみて欲しいなあ。

「あら、随分と楽しそうじゃない」

「えっ？ そりゃあ、楽しいつすよ。人に美味しいものを紹介するのは気分がいいからね」

「そう。じゃあ、私にも美味しいパエリア料理を紹介してもらえないかしら？ ねえ、レオンさん」

「レオンさん？」

「……」

とある1名にのみ名乗った名前と呼ばれ、背筋が凍ったのが分かった。

まずい。これは非常にまずい……！

ゆっくりと壊れかけの玩具みたいに声が聞こえた方向を見ると、そこには見覚えのある緑髪の美女様の姿が——

「——すまん、ヤマト。至急俺から離れてくれ」

「どうしたのキリア？ 急に凄い汗かき始めて……」

「いや、何でもないんだが、とにかく離れてくれ……」

「あら、熱でもあるのかしら？ 私が冷ましてあげましょうか？ レ

オン——いえ、キリアさん？」

「なに?! 熱があるのかキリア!」

「いいから一旦離れてくれヤマト！ ちよつとだけ話がややこしくなるから!」

そつと抱き着いているヤマトを引き離し、俺はつい先日大喧嘩をしたばかりの彼女と向き合った。

何故ここにいるのかと思つたが、港に着くとパイセンが連絡を入れて健気にも迎えに来てくれたのだろう。

なのに、船から出てきたのは長身の和服美女に抱き着かれる男の姿。

正直言つて、過去一ヤバいかもしれない。

俺は脳みそをフル回転させながら言葉を紡ぐ。

「ま、待つてくれモネちゃん！ 誤解だ！ 非常に大きな誤解が俺たちの間にあるんだ！」

「へえ？ それじゃあ、聞かせて。貴方の愉快的言い訳を」

琥珀色の瞳を細め、鋭利な笑みを浮かべるモネさん。

ヤバい。これ、マジで怒っている時の奴だ。

この間の滅多刺し事件からそんなに時間経つてないのに色々と畳みかけすぎだろ！ 誰のせいだこの野郎！ ——俺だったわ馬鹿野郎！

い、いかん！ 焦るな！ 落ち着け！ 焦りは俺を殺す。

言い訳、言い訳……いや、言い訳も何も今回は大丈夫じゃね？

「——よし、落ち着いて聞いてくれモネちゃん。彼の名前はヤマト！ 若様と一緒に遠征に行った先で出会った友達なんだ」

「彼？」

「ああ、そうだ！ 実は彼はとある高名な侍に憧れていてね。その強い憧れへの衝動から男として生きることを決意したんだ！ そうだよな、ヤマト！」

「えっ、まあ……そうだけど……」

そうだ。ヤマトは男だ。

そして俺は彼と友達になった。

つまりは何の問題もない。OK？

俺は自信満々の表情で言った。

「聞いただろモネちゃん。そういうわけで、俺と彼は立派な友達なんだ！ 断じて君が想像しているような関係ではないからね」

「ふーん……ねえ、そのあなた。キリアさんが言っていることに間違いはない？ あなたは男の人なの？」

「あ、ああ……確かに僕は光月おでんに憧れ、男になった。名はヤマトだ」

はい勝った。完。

「そういうわけでモネちゃん、良かったらこの後3人でパエリアでも——」

「モネと言ったな」

「ヤマト？」

急に口を挟んでどうした？

「お前、キリアのことをレオンと呼んだり、帰ってきたばかりで疲れているキリアに怒ったり、一体何なんだ」

「私はただの女で——その口が軽い薄情者の恋人よ。一応、ね」

「モネちゃん……」

「キリアが薄情者だと……？」

「ヤマト、ちよつと抑えて——」

あれ、この流れ凄く嫌な予感が……

「僕を救ってくれた人のことを馬鹿にするなッ！ 僕はこの人のためなら自分の命を懸けられるぞ！ 恋人だかなんだか知らないが、お前はどうかんだ女！」

「ヤマトさん!!」

「……いい度胸じゃない。キリアさん、なかなかいい女の人とお知り合いになれたみたいね？」

えっ、え？ なになになに？ 何事？ なんで？

「モネちゃん！ 落ち着いて！ ヤマトもだ！ 急に喧嘩腰になってどうした!!」

あまりの急展開に脳みそが追い付けない。

「——だいたい、おかしいと思っていたのよね。なんで男同士なら私に見られただけで露骨に慌てていたのかしら？ 何かやましいことでもあるのでは？」

「やましいことなんてないよ！ なっ！ ヤマト！」

「ああ、もちろんだ。僕とキリアの間にやましいものなんて何一つない！ 僕たちは運命で出会い、強い絆で結ばれているんだ！」

「ようし分かった！ ちょっと暫く君に話を振るのは止めておく！

モネちゃん、取り敢えず俺の話を——」

「運命……？ 随分と軽々しくその言葉を使うのね。あなたも、キリアさんも」

情熱の国、ドレスローザに吹雪が吹く。

「僕もキリアもその言葉を軽々しく使ったことなんてない！ お前の方こそ何か勘違いしているんじゃないのか？」

ヤマトの姿が人ならざるものに変化していく。

イヌイヌの実 モデル 大口真神（オオクチノマカミ）。

モネちゃんと同じく冷気を操る彼の力が全身からあふれ出し、さらにドレスローザの気温を下げっていく。

「言うじゃない……！ ぼつと出の野良犬風情が！」

「言葉が過ぎるぞ……！ 誇る血筋ではないが、僕は鬼の子だ！」

完全に臨戦態勢に入った2人。

「ちよ、ちよつと待て2人とも！ こんなところで争いなんて——」

「五月蠅い！ 最低最悪のクソ浮気野郎！ ここで死になさい！」

モネちゃんはどこにそんな力あったの!! っていうレベルの大技を繰り出し、当然反撃できるはずもない俺を庇ってヤマトが応戦。

結果的に冰雪系悪魔の実最強を決める戦いが勃発してしまった。

最強はヒエヒエの実と決まっているのだがそれは置いておくとして、戦いはもちろん終始ヤマトが圧倒。

逆に俺がモネちゃんを傷つけないよう彼を必死に抑えていたくらいだった。

しかし、遅れて港に迎えに来たドンキホーテファミリーたちが合流したことにより、事態はさらに悪化することに。

「このクソやろう！」

再び姉を裏切ったと大激怒のシュガーちゃんは俺を玩具にしよう

と鬼の形相で迫ってくるし、護衛役のトレーボルも笑いながら参戦。今日はロシアム営業日だったのでディアマンテはいなかったが、代わりに暇だったらしいピーカやグラディウス、さらにはベビー5まで参戦し、地獄の大喧嘩が開始されることとなった。

モネちゃんやシユガーには反撃できない俺だが、流石に便乗してきただけの幹部連中には黙ってもらおうとヤマトと並んで応戦を開始。

2人で大立ち回りを演じ、一般市民に被害が出ないよう人気が少ないところへ誘導しながら幹部連中を圧倒し続けた。

だが、それでもやっぱり建物への被害は抑えられず――

何やら船内で電伝虫越しに誰かとやり取りしていたらしいパイセンが急いで駆けつけた時には既にドレスローザの街中は結構破壊されていた。

「……よし」

そして――

あまりにも悲惨な状況を見たこの国の国王より正式に通達がなされたのだった。

「お前ら2人、ドレスローザ出禁だ」

◆◆グリーンビット◆◆

「……悪いなヤマト。俺のせいで」

「いや、僕の方こそごめん。人の国なのに考えなしに暴れてしまつて……」

「いやいや、お前は俺を庇ってくれただけだ」

「友達を庇うのは当然のことだ！ ……でも、こうやって謝りあつていても埒が明かないな。今回はお互いに悪かったということで手打ちにしよう」

「ああ、そうだな。そうしよう」

ドレスローザを追放された俺たち2人は北に浮かぶ島、グリーンビットで暫く生活しているよう謹慎処分が下った。

折角ヤマトに文明的な生活を体験してもらいたかったのだが、俺のせいで再び野宿だ。

もう謝るなどは言われたが、非常に申し訳ない……。
モネちゃんにも色々と申し訳ない……。

ずーんと沈む俺のことを気に掛けてくれたのか、ヤマトは敢えて明るい声で言った。

「でもまだ生き物の気配がある島で良かったじゃないか。さつき通つて来た橋から見えた海にはデカイ魚がいるし、森には動物がいる。果物もある。飢えることはなさそうだね」

「ああ、飢えだけは本当にキツイからね……」

2人でうんうんと頷く。

どんな拷問よりもアレが一番堪えるんだよな……。

「じゃあ、暗くなってきたし早速狩りにいかないか？ キリア」

「いいね。せっかくだ、競争しないか？」

「賛成！ 負つけないぞー！」

特に小さな気配には注意するようヤマトに伝えつつ、早速始まった狩り。

俺もヤマトも長年誰かから逃げ回りながら自給自足をしていた経験からか、サバイバル技術はかなりのものがある。

途中まではお互いによく勝負をしていたが……悪いねヤマト。

武器の指定をしなかったことが君の敗因だ。

発動！ 霸王色の覇氣！

「——というわけで、俺の勝ちだな」

「ズルだ！ ズルだぞキリア！」

「いやいや、霸王色使用禁止なんてルールはなかったからな。ズルじゃない」

「ふう〜〜〜！ 僕は聞いてないぞ！ それが使えるなんて！」

「まあ、こういう時くらいにしか使わないからな。戦闘でも使えるらしいんだけど、どうやっても上手く出来ないんだよなあ……」

「そうなんだ。キリアさえ良ければ僕が教えようか？」

「本当?! それは助かるなあ。是非お願いするよ。でも一先ず今はこ

の肉を食おうか」

「大賛成！」

というわけでグリーンビツトで2人、BBQをすることになった。流石はヤマトというべきか。ワノ国から乗って来たあの船に積んであった酒を幾つかくすねてくれていた。

肉、酒、そして満天の星空。

最高やで〜。

2人で色んな話で盛り上がる。

彼の憧れの光月おでんの話。

そして、俺の憧れの話。

「今はまだ時期じゃないが、時が来たら俺は必ず彼の船に乗るんだ……！」

「それがキリアの憧れか……キリアにそこまで言わせるとはさぞ凄い男なんだろうな」

「ああ！ 本当に偉大で——何よりも自由な男なんだ！ 決して力を誇示するわけでもなく、束縛も否定もしない。でも、誰も彼もがその魅力に逆らえない。俺は彼の船に乗って、彼の役に立つことが夢なんだ……！」

「ふむ……なあ、キリア。もしかしてその男はおでんなんじゃないか？」

「えっ？ いやいやいや！ 何を言ってる——」

「でも、君の言う男の特徴はそっくりそのままおでんに当てはまるんだ！ この海で自由を愛し、誰もが彼を好きになる。ほら、おでんじゃないか！」

真剣な眼差しでヤマトは語る。

その瞳は冗談を言っている瞳じゃなかった。何か顔は赤かったが。それくらいは現在酔っぱらっている俺でも良く分かる。ヒック。

「……俺の憧れの男が、おでん？」

「そうだ。おでんだ」

「おでん？」

「おでん」

まさか——ルフィはおでんだった？

「そうか……つまり、全てはおでんだったのか」

「ようやく分かってくれたかキリア。そうだ。全てはおでんだったんだ。おでん足りうるということはそれ即ち、きみのおでんもまたおでんということなんだ」

「これが……おでん」

「嬉しいよ、キリア。君もおでんに目覚めてくれて」

「俺こそ礼を言うよヤマト。これがおでんということなのか」

「ああ、おでんはおでんを志す者の心に宿る。おでんはおでんという概念なんだ」

「おでん、か」

「……何の話をしてるんだテメエらは」

突如上から降って来た声に俺とヤマトは同時に顔を上げた。

そこには宙に浮いている桃色男が。

「なあ、ヤマト。あれはおでんか？」

「いや、あれはおでんじゃない」

「だから何なんだテメエらは！」

ドフラミンゴは思った。

シンプルにコイツらと話すの嫌だなあ……と。

修業は少年漫画の基本ですよね？

「あれ？ おでん……じゃなくてパイセンじゃないっすか。ういっす」

「僕たちを追放しておいて、今更何しに来たんだ桃色野郎」

「……着いて早々に問題を起こしたお前らを処分なしなんて出来るわけがねエだろうが。俺の立場も考えろ」

盛り上がっていた俺たちの前に現れたパイセンは島に着陸すると焚火を囲んでいる俺たちの横にドカツと座り込み、焼いていた肉を勝手に取って食い始めた。

「あつ、おい！ それはキリアの肉だぞ！」

「テメエらの後処理で飯を食う時間もなかったんだ。全く、ふざけやがって……！」

そう言っただけでパイセン。

まあ、確かに迷惑を掛けた自覚があるので反発しているヤマトを諫めつつ、肉を焼いて渡していく。

一通り食って満足したのか、ドレスローザから持ち込んだらしい酒を飲みながらパイセンは語り出した。

「——先に言っておくが、テメエらの追放を取り消すつもりはねエ。そうしねエと俺の家族たちに示しがつかないからな」

「分かっています。……ところで、モネちゃんはどんな様子でした？」

「パエリアをやけ食いしてたぞ。お前らがドレスローザに入るの禁止だが、向こうから来る分には禁止にしている。ま、そのうち会いに来るんじゃないか？ その時にしっかり話し合っておけよ。テメエらの痴話げんかで振り回されるのももううんざりだ」

「……了解っす」

「……」

今回ばかりはパイセンの言うことが正しい。

そろそろモネちゃんとしつかり話し合わなくちゃいけないな。

今後のことについて。

「それから俺のファミリーには明日、カイドウとの戦いについて話す

予定だ。お前たちはそうだな……適当に修業でもしてろ」

「扱いが雑っ！」

「もつと僕らのことを尊重しろ！」

「ブーメラン発言って知っているか？」

◆◆翌日◆◆

ドレスローザを追放されているとやはり暇なもので、ヤマトも人と接触できない以上は戦力の増やし方がない。

仕方がないのでパイセンが言っていた通り、俺とヤマトは朝から晩まで2人で修業に明け暮れていた。

まあ、修業と言っても俺とヤマトで戦っていただけだが。

「やっぱり強いなヤマトは！」

「キリアもね！ クソ親父を殴り飛ばしただけのことはある！」

お互いにリスペクトできる友人同士での修業とはここまで捗るものなのか。

俺たちは時間も忘れてひたすらに戦っていた。

気が付けばもう夜だ。

「でもやっぱり覇王色の纏いは難しいなあ……どうなっているのかさっぱり分からない」

「僕も原理がどうこうは良く分かっているんだ。クソ親父の技を真似して力を籠めたら自然とこうなったというか……」

再び2人で肉を焼き、かつ食らいながら今日の反省を行う。

今話している通り、覇王色の纏いは全く身につかない。

これが使えればかなりの戦力になると思うんだけどなあ……。

「肉寄越せ」

「うわ?! ビックリした！ 急に上から降ってきてどうしたんですパイセン?」

「疲れたんだよ。いいからさっさと肉を寄越せ」

そうやってヤマトと話しているとまたしても突然空から肉寄越せ妖怪がやってきた。

アンタ、そんなに腹減っているならドレスローザで食ってから来いよ……。

暫く無言で肉を食っていたパイセンだが、やがて満足したのか持ち込んだ酒をグビツと飲み干した。

「——で、フアミリーへの説得はどうでした？」

「予想に反して随分と苦労したぜ……殆どの奴らは最初から俺に賛同してくれていたが、トレーボルとアイツの派閥がやけに反抗的でなア……こんな時間になるまで話し合いが長引いた」

「トレーボル……ああ、あの上昇志向が低そうなキモいおっさんですか」

「おい！ 俺の家族をバカにするんじゃないやねエ！ おおよそ合っているがな！」

あらら。こりゃあ、深刻に揉めたみたいだな。

冗談口調とはいえ、普段だったら俺の言葉に同調なんてするはずもないのに。

よっぽどトレーボルと酷い言い争いをしたんだろう。

「でも説得には成功したんですよね？」

「ああ。だが、ちと考えなおす必要がある点も見つかった」

「最近少しだけマシになったパイセンのファックションセンスですか？」

「……トレーボルの俺への態度だ」

ドフラミンゴは思い出す。

あのサングラス越しに見えたトレーボルの視線を。

馬鹿なことを言い出した子供を見下すような、賢い大人ぶったあの視線を。

「——改めて教えてやる必要があるな。誰がこの組織のボスなのかを」

組織のボスを立てられない組織に待つのは崩壊の道だけだ。

ドフラミンゴは静かに怒りの炎を燃やしながら今後の部下たちへの対応を真剣に検討していた。

「——ところでキリア、今更だがこのヤマトとかいうアホ女は戦力として使えるのか?」

「なんて失礼な奴なんだ!! キリア、コイツからやってしまおう!」

「どうどう、落ち着いてヤマト。パイセンも、そんな煽るような言い方しちやダメですよ。ヤマトの血筋を忘れたんですか?」

「カイドウの娘だろう? だが、それだけじゃあなア……」

「むっ、言っておくが僕は、数えきれないくらいあのクソ親父と戦い続けて鍛えられてきたんだ! 生半可な奴には負けないぞ! 特にお前のような奴にはな!」

「上等だ。そろそろお前に礼儀つてやつを教えてやりたいところだった。その細い金棒を構えろ、クソ餓鬼が」

「ちよ、ちよつと落ち着いて2人とも……」

なんでこの2人はこんなに相性が悪いんだ?

顔を合わせれば喧嘩している印象しかないぞ……。

「でもキリア! コイツが!」

「おい、キリア。本当にこの女、使えるんだろうな?」

2人いっぺんに話しかけないでよ……聞き取れるけどさ。

「ああ、ヤマト。一旦落ち着いて? ね?」

「パイセン。ヤマトの実力は本物ですよ。なにせ、霸王色の纏いも習得しているくらいですからね。俺も今、教えてもらっている最中です」

「霸王色の纏いだあ……? いや、それも気になるがそれ以前にテメエ、霸王色使えんのか?」

「あつ——」

かくかくしかじか。説明終わり。

パイセンは俺の胸ぐらを掴み、額に血管を浮かび上がらせながら迫力満点の顔で言った。

「つまりなんだ、テメエはこう言いたいわけだ。これからカイドウに挑もうっていう一蓮托生の仲間にも関わらず、見せ場がないから俺の前では披露しなかったと……!」

「……あい」

「戦いを舐めてんのかテメエは！」

「……いえ」

パイセンマジギレ。

久々に見たかも、ここまでキレている姿。

いや、つい先日船の中で見たばかりだったわ。

パイセンは暫く血管を浮かせて怒っていたが、やがて無意味な怒りであることに気が付いたのか、掴んでいた俺の胸ぐらを離した。

「……おい、ヤマト。キリアの話は本当か？」

「とうとうっ！」

「霸王色の纏いの話だ。本当にお前は人に教えられるのか？」

「……正直言つて、人に教えられる自信はないよ。僕だって数えきれないくらいクソ親父と戦う中で技を盗んで覚えたものだからね。でも、だからこそ実戦の中で見せることは出来る。後は君たち次第だ」

ようやく名前で呼び、さらに真剣なドフラミンゴ先輩の雰囲気を感じ取ったヤマトもまた真剣にそう答える。

「そうか……確かにカイドウと戦い続けたとかいうその経験は役に立つかもな……」

例によつて暫く無言で考え込んでいたパイセンだが、持ってきたボトルに残っていた酒を一気に飲み干すと俺とヤマトに向かって告げた。

「——おい、明日から俺も参加する。3人で修業をするぞ」

「はい？」



さて、そういうわけで翌日より俺、パイセン、ヤマトの3人による修業が始まった。

急に自分も修業をされると言い出した時はビックリしたが、そこにはしつかりとしたパイセンなりの理由があった。

「よくよく考えてみると、お前たち2人はカイドウを想定した敵役としてこれ以上ないほど適任だ。キリアの理不尽な防御力。そしてヤマトの霸王色纏いに、数えきれないくらいカイドウと戦って得たとかいう戦闘知識。どうせ他の技も盗んでんだろ？」

「……」

「正直、お前ら2人を足した程度じゃあ、カイドウには遠く及ばねエが、それでも能力的には似たようなものだろう。キリアは混ざりものとはいえ竜でもあるしな」

俺はヤマトと顔を見合わせ、頷いた。

「……パイセンにしてはいい案ですね。確かに俺は防御力の面だけで言えばカイドウと似たようなものかもしれないです。仰る通り、竜でもありますしね」

「……桃色——ドフラミンゴに同意するのは癪だけど、確かに理にはなっている。それに言われた通り、僕はカイドウの技をある程度コピーしている。威力までは真似できていないけどね」

考えれば考えるほど俺とヤマトは対カイドウ戦においてこれ以上ないほど最高の練習相手だったのだ。

俺がもつカイドウ並の防御力に、ヤマトがもつカイドウの攻撃から盗んで学んだ攻撃力。

俺に関しては混ざりものとはいえ竜でもあるし、空中戦も可だ。

ヤマトならカイドウの戦いの癖なんかも知っているだろう。

この3人で訓練することが、どれほど意味のあることなのか。

俺は背筋に震えが走ったのを感じた。悪寒じゃない。武者震いだ。

俺たちは、きつともつと強くなれる——！

「——でもパイセン、もうちょつと頑張ってくれないと訓練にならないっすよ?」

「もう終わりか?」

「ハア……ハア……やかましいぞ、クソ餓鬼どもが……なんでテメエ

ら、会って間もないのに連携が完璧なんだよ……!」

「なんでって言われてもなあ……ヤマト」

「ああ、キリア」

「俺／僕たち、友達だし」

「テメエらの友達の定義はどうなってるんだ……! ハア……ハア……」

肩で息をしながら文句を言うボロボロのパイセン。

俺たち単体ならともかく、流石に2人同時に相手にするのはかなり堪えたらしい。

あと、ドレスローザで引きこもって余裕の黒幕顔かましているうちに鈍ってしまったところもあるのだろう。

「パイセンの攻撃は目に見えにくいし、殺傷能力も高めだとは思いますが、如何せん攻撃力がちょっと物足りないですね」

「そんなんじゃないやあ、クソ親父の皮膚に傷をつけることもできないと思うよ?」

「俺ももう慣れちゃいましたしね。どうにかして攻撃力を高めないとカイドウと戦うのは厳しいと思いますよ」

「……分かってる。今のままじゃあ勝てねエことくらい、分かってんだ」

一度は疲労のあまり座り込んだパイセンだったが、すぐに立ち上がるとトレードマークであるピンクジャケットを脱いで木の枝に引っかけ、黒いシャツを腕まくりして両腕を露わにさせた。

「もう一回だ。来い、クソ餓鬼ども」

「……いいガッツじゃないですか。見直しましたよ」

「……次はもつとカイドウの動きに寄せていくぞ」

ドフラミンゴ先輩が糸を操る。

俺は竜形態で襲い掛かる。

ヤマトが金棒に覇気の雷を纏わせながら突撃する。

グリーンビットが衝撃に揺れた。

さて、そんなわけで俺たち3人はグリーンビットで修業に明け暮れていた。

パイセンは自分の部下たちへの鍛錬も強制し始めたらしく、時折俺たちのところに幹部を連れてきて強制的に戦わせたりしている。

まあ、俺たちの圧勝なんだけどね。

さらに幹部たちを鍛えなおすだけではなく、武器工場やらそこら辺に割っていた人員も全員戦闘要員に転換予定なんだとか。

……大丈夫？ ストライキとか起きない？

けど、そこは流石のカリスマ。

全員文句ひとつ言わずにきっちり訓練をこなして戦闘要員は着々と増えているらしい。

人員配備をこんなに簡単に変更できるとか、内政チートかよ。

そんなわけでパイセンは色んな調整事項があり、毎日ドレスローザとグリーンビットを行き来して忙しそうにしている。

俺&ヤマトのコンビに結構ボコられているはずなんだが、どこからあんな体力が湧いてくるんだか……原作読んでいた時もあったが、本当にタフだなあの人。

ちなみに、俺とヤマトも修業だけしているわけではなく、2人でドレスローザから持ってきてもらった用紙を使って鬼ヶ島の見取り図を作ったり、対カイドウ相手の作戦を練ったりしていた。

……あと、修業を始めて一週間くらい経った頃にモネちゃんがグリーンビットに来てくれた。

ヤマトがいるとまた話がこじれそうだったので、見聞色で彼女の気配を察知した瞬間に今日の夕食確保をお願いして森へ狩りに行ってもらっている。

「……久しぶりね、キリアさん」

「久しぶり。モネちゃん」

こうして静かな場所で2人きりになるのは本当に久しぶりだ。

少し時間を置いたことで落ち着いていたのか、モネちゃんの顔に怒りは

なかった。

……少し? せてしまったようだが。

「ちよつと、歩こうか」

いつかのドレスローザみたいに2人で肩を並べてグリーンビツトの砂浜を歩く。

さて、どう話したのかと思案していると、モネちゃんの方から先に口を開いた。

「……ねえ、キリアさん」

「なに?」

「あなたは本当に不思議な人ね。そうして黙っていればどこにでもいる男の人だけど、本当は七武海で、名前もキリアで、至るところで波乱を巻き起こしている超問題児。うふふ、若様が振り回されているのも納得ね」

「……」

「私、あなたのそういうミステリアスなところも含めて好きになったわ。正体が分からなくて、余裕綽々としているあなたのことが」

確かにモネちゃんに全てを隠して近づいた時の俺は正体不明の怪しい男にしか見えなかっただろう。改めて振り返るとよく付き合ってくれる気になったなど驚くほどだ。

「……でも、こうして恋人になった今は思うの。ミステリアスさなんて要らない。本当のあなたのことが知りたいの」

「本当の俺?」

「ねえ、教えてキリア。あなた、何を考えているの? 私のこと、どう思っているの?」

「……」

2人同時に歩みを止める。

「……今はカイドウを倒すことしか考えていないよ」

「それはあのヤマトとかいう女のため?」

「……彼は男だ。そして、友達だ」

「友達? 前にも言っていたけれど、それは本当に……」

「友達だよ。ヤマトは自分を男と言った。だったら俺はその意思を尊

重する。憧れは止められないし、止めちゃいけないんだ」

モネちゃんの瞳を真つすぐに見つめて俺はそう言い切った。

暫く見つめ合っていたが、やがてモネちゃんは溜息をついてから視線を外した。

「……あなた、軽薄に見えてたまに恐ろしいくらい律儀ね」

「俺はいつも律義さ」

「おー、おー、浮気男がよく言うじゃない!」

「いひやいです……すいまひえんでした……」

モネちゃんに思いつきり右の頬をつままれて説教される。

「ていうか、あの浮気はなんだったのよ?!」

「いや……あれは、暴漢に絡まれていたところを助けよう……」

「じゃあ、私を助けた時と全く同じ台詞回しだったのはどういうことかしら?! なに、テンプレートなの? これ言つとけば女落とせるだろうとか甘いこと考えていたんじゃないでしょうね?!」

「……すいまひえん。考えてました」

「ツ! 最低!」

「ぶべらっ!」

死ぬほど痛いビンタを食らわされた。

まあ、これは甘んじて受けておくしかないだろう。

「まったくもう! ……まあ、のつぴきならない事情があることは何となく分かったけどね」

「えっ」

「……後から思い返してみたのだけど、あの時のあなた、相当凄い顔色だったわよ。その上手な口を回す余裕がないくらいにね」

「……」

「いいわよ。答えられないなら。……そんな顔されちゃ、どうにもできないうじゃない」

そう言つてそっぽを向くモネちゃん。

……ヤバいな。モネちゃん、いい女すぎる。

思わず衝動的に全部ぶちまけたくなるが、流星に革命に関わる大事なので何とか口を噤んだ。

「……モネちゃん、実は俺からも大事な話があるんだ。今後のことについて」

「……」

「君のことは変わらず好きだ」

「——っ、相変わらず、腹立つくらいストレートね！」

「でも、ずっと一緒に居られないとも思っている」

赤くなったモネちゃんの顔色が元に戻る。

すつと海賊団の幹部らしい顔になったモネちゃんが尋ねてくる。

「……それは、私たちの敵になるかもしれないという話のこと？」

「そうだ。そう遠くない未来、俺は君たちと敵対することになる」

「……それはなぜ？」

「どうしても、海賊王にしたい男がいるんだ。それこそ、君にとっての若様のような男がね」

これだけは譲れない。

ルフィを海賊王にするのであれば、ドンキホーテ・ドフラミンゴとの対立は必須。

俺はパイセンとの今の関係を悪くないと思っているが、それでも憧れは止められない。

「……そう。確かにそれは、対立は避けられないでしょうね……」

「だから、本当は君を俺の側に引き込みたかったんだ」

「……それが私に近付いた目的ってわけ？」

「それだけじゃないが……まあ、それはおいておくとして」

「気になるわね。今教えて」

「可愛かったからです」

「……スルーすることにするわ」

赤面するなら聞かなきゃいいのに。

ゴホン、と咳払いしてから話を元の軌道に戻す。

「君は俺の想像を遥かに上回るドフラミンゴへの忠誠を見せた。……無礼を承知で聞くが、俺と若様、どちらのために死ぬる？」

「当然、若様よ」

「……悔しいが、見事だ」

一点の曇りもない忠誠心を見せられてはどうしようもない。

彼女はきつと、今ここでドフラミンゴに命令されたら俺を殺しに来るのだろう。

彼女は既にドフラミンゴのものだ。

それはきつと、変わらない。

俺に向けられている感情はきつと、ドフラミンゴに捧げているところとは別のところにあるものなんだろう。

「……だからさ、モネちゃん」

俺は無茶を承知でその願いを口にした。

「俺たちが敵になる日まで、俺と一緒に居てくれないか？」

「――」

啞然。

正しくそういう顔をしていた。

「……あのねえ、あなた相当無茶苦茶なことを言っている自覚はある？」

「あるよ。嫌なら嫌と言ってくればいい」

「……ズルい」

はあ、と深い溜息をついたモネちゃんはドレスローザ本土を眺めた。

「……ねえ、あなたが私をドンキホーテファミリーから引き抜こうとしたのと同じように、私があなをこちらへ寝返らせることもありよね？」

「好きにすればいいよ。でも、俺が揺らぐことはない」

「……意地悪を承知で聞くけど、私とその男、どちらのために死ぬる？」

「その男のためだ」

「……不思議な話ね。お互いに本命が別だなんて……どうして私たち付き合っているのかしら？」

「さあ？　好き合っているからじゃない？」

「……ばか」

すつとモネちゃんが近づいてきたのでそつと抱きしめた。

まあ……なんだ。

色々と曖昧なままだが、一先ずは仲直りOKってとこかな？

「ああ、そういえば、もう1つ教えて欲しいことがあるの」「なに？」

俺の胸に顔を埋めていたモネちゃんが上目遣いで言った。

「あなたが最初に名乗った偽名……レオン。あの名前に由来はあるの？ 七武海とバレたくなかったから適当に考えた偽名ならそれでもいいのだけれど……」

「……」

「いい？ キリア。お母さんのこのお腹に向かって呼んでみなさい」

「さつき教えてくれた名前のことー？」

「そうよ。彼はね、あなたをお兄さんにしてくれる人。私の大事な息子で、あなたの大事な――」

「弟だ」

「弟さん？」

「ああ……生まれてくることができなかつた俺の弟の名前だ」

「……そう。教えてくれてありがとう」

優しく微笑むモネちゃん。

こうして、一応俺たちは仲直りすることができたのだった。

さて、モネちゃんは落ち着いてさえいれば、人の話をしっかり聞いてくれる人だ。

相変わらずコアラちゃんのごとは俺の一時の気の迷いということでごり押すしかない状況だが、ヤマトのごとは彼の鬼ヶ島での境遇も含めて色々と言明をした。

父親に爆発する錠を取り付けられ、長らく束縛されていたこと。錠を外した俺にえらく懐いていること。

侍に憧れていることは本当のこと。

打倒カイドウを掲げ、俺と修業中のこと。

「……色々と言ありの子だったのね」

俺の説明の末、モネちゃんはヤマトのことを極度の世間知らずで、身体だけ大きくなった子供と認識してくれた。

あながち間違いないんだけど、本人が知ったら怒りそうだな……。

まあ、そんなわけで仲直りもできたわけだし、子供に優しい（原作だと変なベクトルに、だが）モネちゃんはヤマトに対する態度を軟化させた。

向こうの態度が柔らかくなれば、ヤマトも困惑はしつつも突っかかることはしない。

2人は少しずつ歩み寄っていく。

さらにはこんな感動的なイベントまであった。

「はい。プレゼントよ、ヤマト」

「……これは何だ？」

「いいから、開けてみなさい」

修業を始めて約2週間後。

ちよくちよくグリーンビットに顔を出していたモネちゃんだが、ある日小包を抱えてやって来たかと思うと、それをヤマトに差し出した。

困惑しながらも袋を開けたヤマトは驚きながら震える手でそれを取り出した。

「こ、これは……日誌と筆と墨？」

「こっちでは羽ペンとインクというのよ。あなた、おでんという侍に憧れて航海日誌を読み込んでいるんでしょう？ 憧れるのはいいけれど、どうせなら自分でも日誌を付けてみたらいいんじゃないかと思ってる……」

「モネッ!!」

「きやつ」

ヤマトは大事に日誌とペンを抱えながらモネの右手を両手で握っていた。

その目には感動で涙が浮かんでいる。

「ありがとう！ 一生絶対必ず大事にするよ！」

「お、大袈裟ねえ……」

顔を赤くしながら照れるモネちゃん。

ヤマトは余程嬉しかったのか、グリーンビットの砂浜を駆けまわりながら大はしやぎしている。

「そうだ！ どうして思いつかなかったんだろう？ 偉大なるおでんは自分の辿って来た旅の記録を記して後世に伝えていたじゃないか！ であれば、後を引き継ぐ僕も同じように記録を残しておく必要がある！ よーし、早速今日から日誌をつけていくぞ！ 僕の伝説を書き記していくんだ！」

確かにヤマトの言う通り、俺の方も完全に盲点だった。

憧れを止めない手段としてこういうものもあったとはな……。

ここら辺は生真面目で自身も日誌をつけているモネちゃんらしい配慮だったと言えるだろう。

「ありがとうモネちゃん。俺じゃあ、こういう気の利いたプレゼントは思いつかなかったよ」

「どういたしまして」

そういつて完璧なウインクをするモネちゃん。

うーん……美しすぎるんだが。

「——なんだ、随分と盛り上がっているじゃねエか」

「若様！」

「うつつ、パイセン。モネちゃんがヤマトにプレゼント持ってきてくれたんですよ」

「そうか。気が利くな、モネ」

「そ、そんな……若様、過分なお言葉です」

なんか、俺に褒められた時より喜んでない？

まあ、モネちゃんの中では恋人へ若様らしいから仕方がないことなのかもしれないが……ちよつとムカつくな。

「おい、ヤマト！ 今からパイセンをボコるぞ！ 今日徹底的にこうー！」

「了解だ！ よーし、最初の日誌は相棒と一緒に桃色を討伐、でいくか！」

「ああ？　おい、どうした？　急にやる気を出して――」

「覚悟！」

「ちよ、ちよっと待――」

そうして充実した修業期間を送っていた俺とヤマト（ついでにパイセン）。

このまま順調に力を蓄えていくものだと思っていた。

何事もなく、グリーンビットで楽しくやっていたのだと思い込んでいた。

しかし。

そんな俺たちの油断を嘲笑うかのように、その災害は突如飛来した。



修業開始から約1か月後。

その日の天気は曇時々雷。

竜巻も発生し、不用意に外へ出るとかまいたちが襲い掛かってくるでしょう。

市民の皆さんは十分にご注意ください。

「ウオロロロ！」

ドレスローザ上空。

「俺の息子は無事なんだろうなア、ジョーカー」

そこには、怒れる青龍が座していた。

四皇 百獣のカイドウ

突如ドレスローザに飛来した龍——四皇の一人である百獣のカイドウはドレスローザ中に響き渡る大声で言った。

『どこにいるジョーカー！ 俺の息子を連れて行ったのはお前だろう!? さっさとヤマトを俺の前に差し出せ！』

まさかの四皇登場に一気にパニックに陥るドレスローザの市民たち。

確かに今日は避難訓練があるとは聞いていたが、本物の災害が来るとは聞いていない。

カイドウが放つ圧倒的な覇気に怯え、恐怖が伝播していく中、彼らの不安を払拭するかのように王宮から飛び出した1つの人影が天へと昇っていく。

「見ろ！」

「あれは……国王様?!」

「ドフラミンゴ様だ！」

「俺たちの国王様が四皇の説得に出向いてくれたぞ！」

国民たちの期待を背負い、桃色のコートを羽ばたかせながらドフラミンゴはカイドウの目の前で静止した。

「よお、カイドウ」

『ジョーカー……』

思いがけず冷静な様子のだフラミンゴに目を細めるカイドウ。

ドフラミンゴは泰然自若とした態度で告げる。

「そんなに慌ててどうした？ この間の酒の席の件なら今度手土産を持って詫びに行こうと思っていたんだ」

『俺の声が聞こえていなかったのか？ 俺の息子はどこにいるかと聞いてんだ。テメエか、もしくはあの傍迷惑な新人の仕業なんだろう？』

今なら半殺しで済ませてやる。いいからさっさとヤマトを俺の前に連れて来い』

「だからヤマトってのは誰だ？ この国には俺の部下と民たちしかい

ねエよ。息子探しに協力したいのは山々だが俺も忙しくてなア……
悪いが他所をあたってくれ」

その堂々とした態度は何も知らなければ彼の言葉が本当に正しい
と思い込んでしまうほど立派なもの。

しかし、カイドウは優れた見聞色の覇気と部下たちの報告から確信
していた。

息子を誘拐したのは彼らであることを。

『——そうか。それがお前の誠意か。ジョーカー』

「ああ、これが俺の誠意だ」

『良く分かった。テメエと話していても埒が明かねエな』

天を覆いつくさんばかりの巨体が蠢く。

いつでも熱息を撃てる体勢になったカイドウが吠えた。

『おい！ 聞こえているんだろうやマト！ どうやって錠を外したの
かは知らねエが、もう帰るぞ！ テメエに拒否権はねエ！ 従わない
ならこの国を滅ぼし更地にしてからテメエを連れて帰るぞ！』

「ああ？ 何言つてんだカイドウ。勘違いで俺の国を滅ぼされちゃ
あ、困るぜ」

『黙れジョーカー！ テメエの虚言はもう聞き飽きた！ 取引は凍結
！ ヤマトを差し出さないならこの国を更地にして奴を連れ帰るだ
けだ！』

「……随分と息子思いなんだな、カイドウ」

『馬鹿を言え！ これは体面の問題だ！ 仮にもこの俺の息子がどこ
ぞの海賊に誘拐され、あまつさえ匿われるだと？ ふざけるんじや
ねエ！』

怒りと共に無差別に放たれた霸王色の覇気が市民たちの意識を奪
う。

さらにカイドウの機嫌を表すかのように空模様もまた荒れていく。
天災そのもののような理不尽な存在感を示しながら龍は最終通告
を行う。

『これが最後だヤマト！ いいからさっさと俺の前に姿を見せろ！
これは遊びじゃねエ！ 俺は本気だぞ！』

「奇遇だな。僕も本気だ」

空に響き渡る息子の声にカイドウが反応する。

咄嗟に声の方向に頭を向けるとそこには獅子、山羊、竜の3つ頭を持つ化け物の背に乗って空を駆け、金棒を振りかぶるヤマトの姿が――

「……僕を庇ったというだけで一体何人の命を奪えば気が済むのか……だが、その暴虐も今日までだ」

「ッ!?」

息子の金棒に宿る雷の覇気を見たカイドウは目を見張った。

一か月前に見た時よりも遙かに洗練されているその力。

自分を縛り続けた親に向かってヤマトは離別の一撃を放つ。

「雷鳴八卦!」

「ぐう!?」

カイドウの顔面にクリティカルヒットするヤマト渾身の一撃。

怒り、失望、覚悟、信念。

様々な思いが寄せられたヤマトの一撃は物理的なダメージを超え、カイドウの防御をすり抜けて芯にダメージを与えた。

さらに攻撃はそれで終わりではない。

『この間は失礼したね。――でも、今日も失礼をするからもう謝らな
いでおく』

ヤマトを乗せて飛ばたいいた怪物がいけしやあしやあとと言ってのけた後、獅子と竜の口が大きく開いた。

溢れ出す膨大なエネルギーは収束し、2つの熱線となって放たれる。

『獅子竜王双砲』

「ぐわあああああ――!」

ヤマトがダメージを与えた箇所を狙い撃ち、強烈な攻撃がヒットする。

たまらず吹き飛ばされるカイドウ。

だが、それでも攻撃は終わらない。

ドレスローザの市街地に落ちてくるカイドウの巨体。

あんなのに踏みつぶされてしまえばただの一般人たちに生き残る術はない。

さらにカイドウの覇気で気絶させられ、身動きがままならない者たちも多数いる。

それを阻止すべく、ドレスローザの大地が隆起する。

カイドウの巨体には及ばないものの、巨人と呼ぶに相応しい大地の守護神が市民を守るべく君臨する。

『くらえ四皇！』

大地と融合し、巨人と化した岩人間、ピーカが放った強烈なアツパーがカイドウの顎に直撃した。

まさかの一撃に虚を突かれたカイドウはグルグルと回る視界の中で何とか体勢を立て直そうとする。

だが、彼らの攻撃はまだ終わっていない。

「やれやれ、ドファイもどうして俺みたいな奴に四皇への攻撃を任せたのか……」

「……これ、俺が言わなきゃダメなやつか？」

「おい、どう思うグラデイウス」

「はあ……アンタにしか頼めないからボスも任せたんだと思っぜ」

「馬鹿を言うんじゃない。俺には無理だ、こんな大役……」

「いや、アンタにしかできないと思う」

「よせよ、人を天才みたいに……」

「そうか、じゃあ辞め……」

「そこまで言うなら引き受けよう!!」

(めんどくせー……)

攻撃力が高いという理由でコンビを組まされたグラデイウスは内心溜息をつきながらカイドウの首を掴んでいるピーカの腕を進みながらディアマンテの背中を追う。

「殺し合いは好きか四皇？ コロシアムの英雄の剣技を食らっていい！ ——半月グレイブ！」

「パンク岩 スーパーアリーナ」

謙虚さと傲慢さが混ざり合った奇妙な性格でありながらその実力は本物。

ディアマンテの強烈な剣技が炸裂し、さらに事前の打ち合わせ通りピーカの岩腕を爆裂させたグラディウスの攻撃が追撃でカイドウを襲う。

そして、最後の攻撃。

「正当防衛だ。悪く思うなよ、カイドウ」

ドレスローザの国王にして王下七武海が本気を出す。

「ゴッドスレット
神誅殺」

クソ馬鹿に教わった内部破壊の覇気を纏わせ、凶悪さを増した16発の聖なる凶弾がカイドウに直撃した。

「ぐわあああああ——！」

数々の連撃を食らったカイドウは当初の予定通りにドレスローザの郊外へと吹き飛ばされた。



予想外だった。

全てがカイドウの予想外であった。

ドフラミンゴが人造悪魔の実が造れなくなったことも、死ぬほど厄介な新人を連れて大暴れされたことも、息子がいつの間にもやら錠を外して逃げ出したことも、そして自分がこうして倒れ伏していることも。

「……ウオロロロ」

人型に戻ったカイドウはゆっくりと立ち上がってから自分を追ってやって来た敵たちを眺めた。

その覚悟を決めた瞳を見て予感確信に変わる。

「おい、テメエら……俺が来ることを知っていたな？」

「何のことだ？」

「とぼけるんじゃないやねエ！ この配置、連撃、明らかに俺を仕留めるために用意されたものだ。ジョーカー、テメエ……見聞色でも鍛えたか？」

「さあ、どうだろうな」

ドフラミンゴは不敵に笑う。

そう——カイドウが来ることは分かっていた。

それは、ドンキホーテファミリーの一員であるヴァイオレットが持つ超人系ギロギロの実による千里眼の力もあるが、それ以上に（主にキリアのせいだが……）あれだけのやらかしをしてカイドウが黙っているはずもないというドフラミンゴの読みもあった。

敢えて回収しなかった百獣海賊団に潜入させているスパイからの報告もあり、ドフラミンゴは今日が襲撃日であることを事前に把握していた。

……それでも、連撃が殆ど効いていない様子には内心驚愕していたが。

「——で、どうするカイドウ？ うちにいるのはおでんとかいう頭のおかしな女だけだ」

「僕は女じゃない！」

「いいから黙ってる！ ……ここで立ち去るなら見逃してやってもいいが？」

「ほざけ」

カイドウはドフラミンゴの戯言を一言で切って捨てながらも内心笑っていた。

息子の癩癩に頭を痛めつつも錠を外した者に興味がわき、先日の無礼も含めて少しお礼参りに来たただけだったが……随分と面白いことになっている。

「……始める前に一応聞いておくが……テメエら、俺が誰か知って挑んでいるんだろうな？」

「知るか」

「百獣のカイドウだろう？」

「四皇に挑むのが俺のようなもので本当にいいのだろうか？」

「カイドウ」

「正直名前、ダサイよね」

「逆に俺が誰か知ってるのか？」

「……」

6人同時に喋ったので全然聞き取れなかった。

あと誰だ？ 名前ダサイって言ったの。

でも、何となくニュアンスは伝わったと思ったのでカイドウは金棒を構えた。

「時世じゃねエがよ……死は人の完成だ。そうだろう？」

「五月蠅いんだよクソ親父」

「そんなわけあるか」

「俺は死にたくない……なんて小心者なんだ」

「俺は死なん！」

「あつ、くしやみ出そう」

「くだらねエな」

「……」

やっぱり6人同時に喋ったので全然聞き取れなかった。

カイドウはぶちぎれた。

「テメエら……一人ずつ喋れよツ!!」

こうして、後に世界を大きく変えるきつかけとなるドレスローザ事件は始まった。



カイドウ襲来を確信した時、ドフラミンゴには2つの選択肢があった。

1つはこのドレスローザで迎え撃つこと。

そしてもう一つはドレスローザから逃げて一時的に姿を隠すこと。この一か月間、死に物狂いで修業に励んでいたドフラミンゴたちではあるが、流石にこれだけでカイドウに勝てると思いがっているわけではない。

現実的に考えれば即ドレスローザから逃げ出してヤマトと共に身を隠すのが最善手だったはずだ。

しかし、そうになると今度はドフラミンゴたち目当てにドレスローザに攻め込んできたカイドウが何をしでかすか分からない。

相手は四皇で、見せしめに国を滅ぼすくらいは容易にやってのけると想像がついた。

ドフラミンゴにとってもドレスローザは拠点として重要な場所だ。国民からの支持も含め、まだ失うわけにはいかない。

よってドフラミンゴは決断した。

カイドウと戦うことを。

計画を立て、万が一の時の秘策も用意し、ドレスローザ市民には避難訓練と伝えて危機感を煽り、万全の態勢で迎え撃った。

初撃があまりにも上手くいったため、ドフラミンゴの中にも少しだけ油断があったことは否定できない。

このままいけば勝てるんじゃないかという思いが芽生えたことも事実だ。

しかし、やはり四皇は異常だった。

「ヤマト！ もう一回だ！ カイドウの動きを止めろ！」

「分かった！」

ドフラミンゴの指示でヤマトが人獣形態で氷を放つ。

ほんの一瞬だけ動きが止まるカイドウ。

その隙を逃さず突撃するキリアとディアマンテ。

「竜王鉄槌！」

「半月グレイブ！」

カイドウは以前の酒の席で自身を殴り倒したキリアの技を警戒し、そちらを優先的に武装色で対処。ディアマンテの技は素の耐久力で受け止めて見せた。

(堅っ!? コイツの身体、どうなつてやがんだ……!)

「ウオロロロ……この間は油断したが、テメエじゃまだまだ俺には及ばねエよ、新人」

「ぐっ……!」

「前みたいに吹き飛びな! 雷鳴八卦!」

雷を纏わせたカイドウの金棒がキリアを殴り飛ばし――

(あん? なんだ、この手ごたえは……)

その場にギリギリでとどまったキリアに違和感を覚えた。

以前よりも明らかに堅い。

それに、気のせいではなければ一瞬雷が吸われたような感覚があつたような……

だが、多勢を相手に気にしている余裕は流石のカイドウにもない。動きが止まったキリアを金棒を握っていない左腕を使って全力で殴り飛ばし、効かないながらも目障りな剣士に目を向けた。

「そここのひらひら剣士、鬱陶しいな」

「ッ!」

凄まじい速度で移動したカイドウが金棒を振り上げる。

「ディアマンテ!」

ギリギリで危険を察知できていたドフラミンゴがディアマンテに糸を絡ませ、後ろに思いつきり引いた。

カイドウの一撃が地面に大きな亀裂を生む。

何とか無傷で回避できたディアマンテは内心冷や汗を掻きながら主君に礼を述べた。

「すまねえ、助かったぜドファイ」

「礼を言っている場合じゃねエぞ。さっさと次に備えろ!」

ドフラミンゴの指示が飛び、ディアマンテは剣を構えなおした。

「おいキリア! テメエさっさと戻ってこい!」

「……人使いが荒いつすよ、先輩」

竜の翼で吹き飛ばされた先から戻ってきたキリアは文句を言いながらも再び最前線へと突撃していく。

そこへヤマトも合流し、ピーカとグラディウスのタッグも岩と爆裂

のコンビ技を合間に浴びせていく。

(今のところ、何とかカイドウを抑え込めてはいる。だが……決定打に欠けるな)

金棒を振り上げたカイドウの右腕を超過鞭糸オーバーヒートで絡めとって僅かながらもカイドウを押しとどめながらドフラミンゴは思考する。

現在、カイドウ迎撃組のフォーメーションは指揮官であるドフラミンゴを中心に以下のようになっていた。

タンク：キリア、ピーカ。

足止め：キリア、ヤマト、ドフラミンゴ。

アタッカー：キリア、ヤマト、ドフラミンゴ、ディアマンテ、グラデウス。

キリアだけ役割が多すぎる気がするがそれは置いておくとして、基本的にはカイドウの攻撃をキリアの耐久力とピーカの岩で受け止めつつ、ヤマトの氷や人獣形態によるキリアの馬鹿力、ドフラミンゴの糸で動きを鈍らせ、その隙に全員で攻撃という形になっていた。

しかし、知つての通りカイドウの防御力は異常だ。

当然攻撃が通らず、逆にカウンターを食らう場面も増えていく。

仲間が危機に陥れば即ドフラミンゴが糸で引っ張り、撤退させながら自身も突撃して何とか習得が間に合った流桜の力を使って格闘戦に挑む形で何とか均衡を保っていたが――

「……ウオロロロ、まあ、待てよお前ら」

突如強烈な覇王色の覇気を放ったカイドウによつて有利に進んでいた戦況は一旦仕切り直しとなった。

「まずは謝罪するぜ。正直言つて、テメエらのことを舐めていた。この俺を相手に中々いい戦いをするじゃねエか。おいヤマト！ お前の入れ知恵か？」

「………だつたらどうするっ？」

「どうもしねエよ、単純に褒めてるのさ。俺の動きをよく調べ、そしてきっちり共有できている。統率も取れていて、連携も悪くない。良くここまで鍛え上げた」

国を滅ぼすと言った口で急に自分たちを絶賛し始めた四皇に全員

が戸惑う中、カイドウは寛大に笑いながら告げた。

「ついでにはテメエらに提案だ。俺の仲間にならねエか？ 今ならこれまでの無礼は全て水に流そう！ 特にその怪物野郎！ テメエには酒の席で随分とコケにされたが、全部なかったことにしてやる！ どうだ？ 俺と一緒に世界を取らないか！」

「「「「「」」」」」」

その圧倒的な強さ。無礼を全て水に流すと言い切る器の広さ。飽くなき力への渴望。

各自色々と言いたいことはあるが、それでもこれだけは認めるしかなかった。

この男——百獣のカイドウは間違いなく四皇に相応しい男である
と。

「返答は如何に——！」

だが、ここに集ったのは相手が四皇と認めたくえでなおそれを超えていくと決意した者たちだ。

1人は野心のために。1人は友のために。1人は憧れと正義のために。

そして3人は忠義のために。

返答は決まっていた。

「「「「断るッ!!」」」」」

6人が口を揃えて断言する。

カイドウは誘いを無下にされたにも関わらずどこか嬉しそうに笑った。

「そうか——残念だ！」

改めて互いの立ち位置が明確となったところで、カイドウは本腰を入れることを決めた。

戦力にすれば真打はおろか、大看板たちの地位も脅かすほど強力な人材たちだったが、従わないのであれば仕方がない。

今は恥を晒し続けるドラ息子への対処が先決だ。

「その選択を後悔しないことを祈るぜ……」

(あの姿は……!!)

カイドウの姿が変化していく。

巨大な龍の姿でもなければ、人型でもない、異形の姿へと。

「まずい！ 人獣形態が来るぞ！ みんな、構えろ！」

「ウオロロロ……もう遅い。世界最強の武力を見せてやるよ」

唯一その姿の危険性を知るヤマトが大声で警鐘を鳴らす、カイドウの言う通り勝負はもう付いていた。

「まずは1人」

「あつ——？」

見聞色の覇気でも見切れないほどの圧倒的な速度で移動したカイドウは、雷を纏わせた金棒を思いつきり移動した先にいたディアマンテの頭上に叩きつけた。

「ディアマンテ！」

遅れて気づいたドフラミンゴが視線を向けた先では、大事な家族が白目を剥きながら地面に倒れていく様子が映っていた。

脳天が割れ、溢れてはいけない液体が溢れ出ている。

間違いなく、致命傷だ。

(すまねえ……ドファイ……)

言葉を発することもできないディアマンテは薄れゆく意識の中で主君への謝罪を述べる。

「2人目」

本編において未来予知の見聞色を手に入れたルフィでさえ完全に避け切れることは難しいとされる高速移動にてカイドウが次の獲物までたどり着く。

「避ける！ グラディウス！」

「ツ——！！」

キリアもヤマトも優れた見聞色の使い手ではある。

しかし、一人で戦い続けてきた経験からか、どうしても自分への危機には敏感だが、他の人間をカバーしながら戦う方法には慣れていない。

仲間を思う気持ちからか、二人よりも早く反応したドフラミンゴが声を上げるが、こちらにも既に手遅れだった。

「雷鳴八卦」

「がつ——」

本気の一撃がグラディウスの脳天に叩きこまれる。

キリアの馬鹿げた耐久力のせいで認識が甘くなっていたが、この技は本編において麦わらのルフィを一撃で失神させた必殺の一撃である。

グラディウスとて決して弱いわけではないが、四皇の一撃を食らって無事で居られるはずもない。

ぐちゃり、と何かが潰れた音を発しながら静かに地面に倒れこんだ。

「3人目」

「おい！ 次はピーカだ！ キリア、ヤマト！ ピーカを守れ！」

カイドウが見聞色の習得が甘く、戦闘能力が低い面々から潰していることに気が付いたドフラミンゴが必死に指示を出しながら自身も空を駆ける。

指示を受けたキリアとヤマトは自分たちを狙っているわけではないカイドウの気配を探り当てることに苦戦しつつもピーカの元へと駆け寄ろうとする。

だが、やはり手遅れだった。

「テメエの核はそこだな？ 雷鳴八卦」

難なく岩と同化していたピーカの本体を探り当てたカイドウは岩ごと雷鳴八卦で打ち砕き、一瞬でドレスローザの守護神を打ち砕いた。

3人。

一瞬で、ドフラミンゴの部下たち3人は瞬殺された。

それは、口にするのも憚られるほどの圧倒的な力の差だった。

ディアマンテ。

グラディウス。

ピーカ。

ドフラミンゴの大事な家族たちが瀕死の重傷を負いながら無惨に横たわっている。

ブチッと何かが切れる音がした。

「クソ——ツタレがアアア!!」

激怒したドフラミンゴは空中を駆ける。

糸を使った切断攻撃や味方の救出、足止めがメインだった彼が我を忘れて接近戦を挑んできている。

「やめておけ、ジョーカー。テメエの拳は俺には——」

油断していたわけではない。

だが、人獣形態のカイドウは攻撃力、防御力ともに世界トップクラスだ。

糸を操るしか能がないドフラミンゴの攻撃など効くはずがないと心のどこかで慢心していたのだろう。

バチバチ、と奇妙な気配を纏いながら放たれたドフラミンゴの拳は確かにカイドウの顔面を歪ませ、数歩後ろへとその巨体を後退させた。

(今のは……覇王色……?)

極一部の強者にのみ許された覇王色の纏い。

この一か月間、キリアとヤマトの2人とどれほど鍛錬を積んでも習得できなかったそれが不格好ながら僅かに顕現していた。

普通であれば喜ぶべき場面であっただろう。

だが、今はタイミングが最悪だった。

「ふん……覇王色か」

未だに頬にめり込んでいるドフラミンゴの右腕をがっちり掴み、カイドウは矮小な人間に怒りの感情を向ける。

霸王など何人でもいるのだと主張するかのようにあちこちで現れる節操のない王の覇気。

「……いらねえんだよ。霸王は一人で十分だ!」

カイドウは強烈なボディブローをドフラミンゴの腹部に叩きこみ、吐血した彼を宙に放り出した。

「先輩——」

嘗てない悪寒と全身にのしかかる圧倒的なプレッシャーにキリアが叫ぶ。

まずい。あの技は本当にまずい。

ヤマトの氷がカイドウの脚を凍らせるが、何の意味もなさずに一步を踏み出される。

キリアの獅子竜王砲が炸裂するも、気合で持ちこたえられる。

そして、カイドウはその一撃を宙から降って来たドフラミンゴにぶちかました。

「大威徳雷鳴八卦」

世界が壊れたような音がした。

圧倒的な覇気と膂力が込められた一撃がドフラミンゴを捉え、彼の身体を野球ボールか何かのようにドレスローザ市街に吹き飛ばした。

「ツ！ ヤマト！ 合わせろ！」

「あ、ああ！」

原作において能力が覚醒したルフィですら明確にダメージを負わされた雷鳴八卦の強化版だ。

当たりどころが悪ければ最悪……。

脳裏に過った嫌な予感を振り払うように大技を放った直後で硬直しているカイドウに2人は駆ける。

「雷鳴八卦！」

「竜王鉄槌！」

「ああ……。ダメエらもいたなア」

ここで、キリアは幾つか致命的な誤算をしていた。

1つは大技の直後は硬直するという勝手な思い込み。

憧れであるルフィの戦いを多く見過ぎた影響か、彼の中では必殺技とはそれなりにリスクを背負って放つものというのが固定概念として存在していた。

実際にカイドウの大技として体力の消耗が激しいなどリスクが存在しないわけではないが——ここでもう1つの致命的な勘違いに繋が

る。
誤算その2。このカイドウは連戦というほど連戦をしておらず、体力も有り余っている状態である。

「大威徳——」

(嘘だろ?! 間髪入れずにもう一発撃てるのか?!)

優れた動体視力が次のカイドウのモーションを捉え、キリアは内心で悲鳴を上げた。

このままいけば自分たちはあの技の餌食となってしまう。

この瞬間、キリアの中には2つの選択肢があった。

チラリと、自分の少しだけ先を走るヤマトの横顔を見る。

(……しようがない、か)

「ヤマト! ごめん!」

「えっ——」

ヤマトは突如後ろから聞こえてきたキリアの謝罪に驚き——そして、自分を抜かしたキリアによって横に突き飛ばされたことに驚いた。

「キリ——」

あの鬼ヶ島を出る時に見た光景と重なる。

そうだ、あの時も彼が自分を助けるために右腕を犠牲にして爆弾を抑え込んでくれたんだ。

(待って! もうこんなのは嫌——)

咄嗟に伸ばした手の先が酷く遠い。

「——雷鳴八卦」

そして、その一撃はキリアに放たれた。

伝説の男

「……なア、ヤマト。テメエはいつになったら学習するんだ？」

「ハア、ハア、ハア……」

場所と時間は移り、ドレスローザ市街地。

カイドウは地面に突き立てた金棒に縋り付くことで何とか立っている息子を呆れた様子で眺めていた。

キリアとかいう新人七武海をドフラミンゴと同じドレスローザ市街方面へ全力で殴り飛ばした後——カイドウも見たことがないほど錯乱した様子のヤマトは命をかなぐり捨てるような自暴自棄の突撃を繰り返した。

久々に楽しい戦いになるかと期待していたカイドウだったが……こうなってしまうばいつも通りの親子喧嘩だ。

ヤマトの攻撃を受け止める度に酷く興奮ぎめしていくことを自覚したカイドウは息子の顔面を掴み、思いつきドレスローザの市街地まで投げ飛ばした。

投げ飛ばされたヤマトはその後も暫くは自暴自棄の攻撃を続けていたが、すぐにどうして戦場がここに移されたのかを悟った。

『ウオロロロ……そら、考えなしに暴れていいのか？ テメエを庇ったジョーカーと新人がそこら辺に埋もれているはずだぞ。息があるかどうかは分からねエがな』

「ッ——!!」

卑劣な、と罵ったところで意味がないことはこれまでの人生で悟っている。

ヤマトは2人とさらに市民たちも庇いながらの戦いを強いられることになった。

カイドウは弱者を守りながら戦う自身の息子の姿に内心苦々しい感情を抱えつつも、これが息子にとって一番の罰になることも理解しているからこそ卑劣極まりない戦い方を続ける。

そして時間は経過し、現在。

ヤマトは満身創痍の状態で何とか意識を保っていた。

「……俺ア、テメエの素質に期待をしているんだぜ？ 間違いなく俺の血を引いているその武力と器にな」

「ハア、ハア、ハア……」

「だがテメエときたら、よりによって俺に敵対する侍に憧れ、俺を殺すと息巻いてやがる。ふざけやがって……そんなんじやあ、せつかくの霸王色も宝の持ち腐れだ」

「ハア、ハア……余計なお世話だ！ 僕はお前の言う通りにはならない！ おでんの意志を継ぎ、お前を討ち取ってワノ国を開国するんだ！」

「ウオロロロ……なかなか面白い夢だが、お前の夢に巻き込まれた連中はどうなった？」

「ッ！！」

威勢よく啖呵を切っていたヤマトの表情が曇る。

自分を助けたばかりに死んでいった優しい人たちの顔が脳裏に過る。

その人たちの命を無駄にはしたくない——してなるものかと今まですつと一人で戦い続けてきた。

絶体絶命のピンチを迎えている今でもその気持ちは変わっていない。

だが、そんなヤマトの心を見透かしたかのようにカイドウは言う。

「いいか、良く聞けヤマト！ お前がいるから人が死ぬ！」

「ッ——」

「お前を庇って人が死ぬ」

「……違う」

「お前が息をしているから人が死ぬ」

「違う！ 僕のことを信じてくれた人たちをお前が——」

「俺が殺したか？ だが、お前を庇わなければ俺も手を下すことはなかった」

それは単なる屁理屈だ。

しかし、カイドウからすれば揺るがない事実である。

そして、心をへし折られ続けてきたヤマトにとってもそれは認めたくない真実であった。

「テメエは鬼の子——関わる奴らは片っ端から死んでいく運命なんだ」

運命を受け入れろとカイドウは言う。

弱きを救う心を捨て、一匹の修羅になればと父は諭す。

それはカイドウなりの息子への思いやりだったのかもしれない。

だが、ヤマトにとっては耐え難い苦痛である。

永遠に分かり合えない価値観の溝がこの親子の間に広がっていた。

(……僕のせいで誰かが死ぬのは……嫌だ)

金棒に縋り付きながらも何とか体勢を保っていたヤマトが揺らぐ。

数えきれないほどカイドウと戦ってきたからこそ分かる。

もうこの状況は詰みだ。

ここでヤマトが意地を張って自分の意志を突き通したところでカ

イドウは悪戯にこの街を破壊して回るだけだろう。

それは、物理的なダメージよりも遥かにヤマトの心をえぐる。

(もう……諦めるべきなのか？ 僕はまたあの忌々しい鬼ヶ島で鎖に

つながれて飼い殺しにされるしか道はないのか……?)

カイドウが襲来するまでのこの一か月間を思い出す。

キリアとドフラミンゴとの修業の日々。

初めて会う人たちとの交流。

1人じゃないご飯の時間。

人生で一番楽しかった……あの日々を。

「その眼……ようやく現実を受け止めたか。さア、帰るぞ、ヤマト」

「……」

徐々に気を失っていくヤマトの瞳を見たカイドウは懐から何の変哲もない錠を取り出した。

爆発するわけでもなければ海桜石が使われているわけでもないが、

今のヤマトにはこれだけで十分だと判断したからだ。

錠を見たヤマトの頭の中でキリアが右腕を犠牲にして自分を救ってくれたあの光景が蘇る。

実父が自分を殺そうとしていたあの瞬間のことを。

(ああ……やっぱり——)

自分を迎えに来てくれた時はもしやと思ったが、やはりこの父は何も変わっていない。

何もかもを力尽くで自分のものとする暴君だったのだ。

(やっぱり嫌だな。また鬼ヶ島に戻るのは、嫌だ)

『なあ、ヤマト』

不意に、修業中にキリアから掛けられた言葉が蘇る。

『さつき、鬪魚を追いかけて海に落ちかけていただろう？ 何とかなって良かったけど、どうして俺を呼ばなかったんだ？』

『どうしてって……キリアだって能力者じゃないか。それにあのモネとかいう女のご機嫌取りで忙しそうだったから、迷惑を掛けたくなかったんだ！ ふん！』

『なんで不機嫌そうなんだよ……まあ、確かに俺は能力者だけど、蛇の尾を伸ばして助けたり、ロープを持ってきたりとか、助けにはなれたと思うぞ？』

『……助けなんか要らないよ』

『いやいや、絶対に必要になるから。俺なんて何回助けを呼んだか分からないくらいだぜ？ ……まあ、誰も来てくれなかったんですけどね。フッフ』

『ふーん、そんなに強いキリアでも助けを呼ぶことがあるんだ』

『そりゃあ、もうしょっちゅう。だからヤマトも遠慮なく助けが必要なら呼んでくれ』

『……どうやって？』

『そんなの簡単だよ』

助けの求め方なんて知らなかった少女は全力で叫んだ。

『俺の名を呼べ』

「……助けてよお！ キリアアアア！」

「どこまで恥を晒せば気が済むんだテメエは。アイツらは死んだ。俺が殺したんだ！ いいからさつきと鬼ヶ島に——」

「おい、一体誰が——」
「——死んだって?」

2つの影がヤマトの後方より飛来する。

驚愕で目を見開いたカイドウの顔面に2つの拳が突き刺さった。
思わぬ不意打ちでたまらず吹き飛んでいくカイドウ。

地面に着地したその頼れる背中はヤマトが良く知る2人のものだった。

「ハア、ハア……あれ、パイセン生きてたんすか?」

「ハア、ハア……テメエの方こそまだくたばってなかったのか」

「ツ! 2人とも! 無事だったのか!」

「当たり前だ!」

ヤマトは2人に後ろから抱き着き、肩を組んで再会を喜んだ。

だが、喜びのあまり涙目になっている彼は気が付かなかった。2人が抱き着かれた際に顔を歪めたことに。

はしやぐヤマトを尻目に復活したキリアとドフラミンゴの視線が絡み合う。

2人は言葉を発さずお互いの状況をアイコンタクトで伝えた。

(おい、お前大丈夫か?)

(大丈夫じゃないっす。パイセンは?)

(正直、ヤバイ)

キリアは超速再生で、ドフラミンゴは糸の縫合で何とか体面を保っているが、正直かなりのダメージが体内に残っている状況だ。

そして——

「掛け値なしの本気だったが生きていたとはなア……嬉しいぜ、王下七武海」

全くダメージを受けている様子のない絶好調の四皇が目の前にいる。

状況は何一つ改善していない。

引き続き、最悪のままだった。

「……おい、キリア。例のアレ、できるか?」

「ドレスローザが滅びても良ければ」

「却下だ。——ツチ、もつと早くにやらせておくべきだったか……」

「悔やんでも仕方ないっすよ。取り敢えず今は、時間を稼ぎましょう。

——まあ、時間を稼いだところで本当に来るかどうかは分からないです
すが」

「全くだ。俺としたことが……こんなに分の悪い賭けに乗ることになる
とはな」

「リスクを取らずに海賊は名乗れないでしょう」

「フッフッフッフ、言うじゃねエか」

「おい、2人とも僕を置いてけぼりにして何の話をしているんだ?!」

「あれ、一昨日説明しなかったっけ? ……ああ、そういうえばヤマト話
の途中で寝てたかも」

「アホ女は放っておけ。今はあの化け物を押しとどめるのが先決だ」

アホ女とはなんだ! と猛抗議するヤマトを鎮めるキリア。

もう一人除け者にされていたカイドウは金棒を構えながら笑った。

「ウオロロロ……威勢のいい連中だ。こういう骨のあるやつと戦うの
は久しぶりだ」

「おいカイドウ! ここは人目が多すぎる! ちょっと場所を移さ
ねエか?」

「断る。これはそこにいるバカ息子への罰も兼ねているからなア」

大海賊 百獣のカイドウは凶悪な笑みを浮かべて言った。

「弱者が大事なら守って見せろ! できるもんならなア!!」

「こんのクソ親父がア……!」

「……ここまで徹底した悪役は久々に見たな」

「ダメか。それじゃあ、仕方がねエ」

カイドウが金棒を構える。

ドフラミンゴが霸王色の感覚を掴みかけている拳を握り、

キリアは竜頭の拳を構え、

ヤマトが金棒を構える。

「さあ、始めようか。戦争を!!」

ドレスローザの街中で4人の化け物たちが激突した。

◆◆ドレスローザ市内◆◆

「こつちー・こつちよー・さあ、早く避難して!」

億超えの怪物たちが大暴れしているその頃、ドレスローザ市内ではドンキホーテファミリーによる市民たちの避難活動が進められていた。

市民たちを先導するのは自ら志願したヴァイオレットであり、旧リク王軍の兵士たちが積極的に市民たちを誘導しながら地下に設けられた避難場所まで案内していく。

ヴァイオレット以外のファミリーメンバーも(セニョールピンクを除いて)やる気はないながらも若様の命令ならと避難活動に協力してくれている。

避難活動の合間に千里眼で戦況を確認しているヴァイオレットは人知れず唇を噛み締めた。

(とんでもない化け物をドレスローザに呼び込んでくれたものね……!)

ここ最近のドファイの様子がおかしかったことに気が付いたヴァイオレットはコッソリと能力を発動させることでこの騒ぎの元凶が誰にあるのか既に知っていた。

(怪物キリアー! この上なく厄介な男ね。あのドフラミンゴの手にも負えないなんて……)

数々の理不尽を体験してきた身ではあるが、あそこまで意味不明な男はヴァイオレットも見たことがない。

おまけにあの無茶苦茶さで実力があり、千里眼で頭の中を覗こうとしても逆に探知されて気づかれかけたこと数知れず。

最近のヴァイオレットの頭痛の種だった。

（でも……一瞬だけあの男の警戒が緩んだ瞬間に見えた。ドラゴン”という単語とあのコアラとかいう女の子……間違いない。あの男は革命軍と繋がっている。もしうまく利用できれば、この国を——救えるかもしれない）

ヴァイオレットは己の心のうちに刃を隠し続ける。

来るべきその日が来るまで。

だが、今日だけは——

（勝ちなさいよ……ドファイ）

四皇と王下七武海の支配。

どちらも地獄であることに変わりはないが、ヴァイオレットは今日だけあの男の勝利を祈った。

◆◆ドレスローザ地下◆◆

「……凄い揺れね。地上はどうなっているのかしら？」

カイドウの覇王色の覇気にあてられることを恐れたドフラミンゴの指示でドレスローザの地下深くでトレーボルと共にシユガールの護衛を命じられたモネは度々伝わってくる振動から地上の様子を詮索していた。

「……おねえちゃん、あのクソやろうのことが気になるの？」

「クソ野郎って……確かに否定できないところはあられるけれど、もう仲直りしたって言ったでしょ？」

「……でも、アイツは絶対にクソやろうだもん。おねえちゃん、はやく別れたほうがいいよ」

「べへへ！ んねー、アイツと別れた後は俺の恋人になれよお」

「嫌です。あと近いです。トレーボル様」

「おねえちゃんに近付くな菌」

「ついに人間扱いすらされなくなった!?! お前、護衛役に対してその態度はねエだろう！」

「うるさい。あの金髪を道連れに2人で仲良く死ねばいいのに」

「だから死んで護衛はできねエだろう!」

四皇襲来という緊迫した状況下でありながらもいつも通りの2人を見てモネは少しだけ落ち着きを取り戻した。

(若様……キリア……ヤマト……)

今、四皇に挑んでいるであろうモネの大切な人たちを思い浮かべる。

圧倒的な武力を持っているわけではないモネには四皇に挑むというこのスケールの大きさを本当の意味で理解できるわけではない。

だが、それでも誰か命を落としてもおかしくない戦いだということだけは理解できていた。

(お願い皆……どうか無事でいて……)

モネは祈る。

心より敬愛し、己の命を捧げている絶対の主君に。

友人となった活発な少女に。

そして——この世界の常識を真正面から打ち破っていく無敵の恋人に。

◆◆ドレスローザ市街◆◆

「ウオロロロ! どうした! この程度か! 七武海つてのは!」

破壊され尽くされたドレスローザの街中で上機嫌に笑うは四皇。

何とかその進軍を押しとどめようと必死に抵抗を続ける3人は肩で息をしながらも決して屈することなくカイドウを睨み続ける。

「ハア、ハア……やっぱり化け物だな」

「ハア、ハア……おいキリア。テメエ、異名が“怪物”なんだからもつと頑張れよ……!」

「それを言うならパイセンなんて“天夜叉”じゃないすか。もつとこう、頑張ってくださいよ……!」

「ハア、ハア……2人とも元気だな……僕にも異名を付けてくれないか? 鬼姫以外で」

「アホ女」

「死ね、桃色」

悪態をつきながらも3人はお互いをカバーしあい、何とかカイドウとの戦いを生き延びていた。

だが、3人ともダメージが蓄積していく一方なのに対し、カイドウには有効打を与えられておらず、体力の底が見えてこない。

「そら！ 休んでいる暇があるのか?! 大威徳雷鳴八卦ツ!!」

「またそれかよ?! パイセン!」

「分かっている! お前らも手伝えよ! ——オフホワイト盾白糸!」

「竜王鉄槌!」

「雷鳴八卦!」

既にボロボロになって修復不可能な建物を覚醒した能力で糸に変え、ドフラミンゴは強靱な盾を作り出す。

無論、これだけでカイドウの攻撃を防げるはずもないのでキリアとヤマトの必殺技も合わせることで何とか威力を相殺した。

先程から幾度となく繰り返されている攻防戦だ。

だが——

「ウオロロロ……テメェら、随分と疲れてきているようだな。威力が落ちてるぜ?」

「ッ!!」

カイドウの言う通り、とつくに体力の限界が来ている3人は技の精度も落ちてしまっている。

「おらァ!」

カイドウの筋肉が膨張する。

世界屈指の膂力が本気で解放され、たまらず弾け飛ぶドフラミンゴの盾。

さらに威力が増大した技はキリアとヤマトも合わせて吹き飛ばした。

文字通りの力技で全てを粉碎したカイドウは雷を纏わせた金棒を振り上げる。

「まずはお前からだ。ジョーカー」

「そうはいくか!」

絶体絶命のピンチを迎えたドフラミンゴは秘策を切り出すことにした。

ヤマトと一緒に吹き飛んでいったキリアを糸で掴み、強引に回収。彼の身体をカイドウと自分の間に盾のようにスライドさせた。

「キリアシールド！」

「いや、ちよつ——」

「雷鳴八卦！」

「ぶげらッ!?!」

カイドウの一撃をまともに食らったキリアは渾身のエネルギーを晒しながら吹き飛ばされていった。

「……なんだ、今の人権全て無視したような技は」

「気にするな。アイツに人権はない」

「おいこら桃色！ お前、キリアになんて酷いことをしているんだ！

キリア、大丈夫かい？」

「……は、犯人は……ドンキホーテ・ドフラミンゴ……41歳……じやなくて、38歳……」

ドレスローザの地面にきっちりダイイングメッセージを書きながらキリアはガクツツと息絶えた。

「キリア——!?!」

「おい、そのクソ馬鹿ども。茶番をしてないでさっさと戻ってこい」

「なーにが茶番だ！ 人を盾にしゃがって！ 人の心はねエのか!?!」

「あつ、キリア。無事だったんだ。良かった！」

こうしている間も紙一重でカイドウの攻撃を躲していたドフラミンゴは合流した怒り心頭のキリアとヤマトを上空から見下ろした。

「このままこっちの体力が尽きるまでちまちま戦っていても埒が明かねエ。次で決めるぞ」

「盾の件は……もういいや。確かに、このままじゃあ罠り殺しにされて終わりですからね」

「……正直、僕も次に大技を放てば暫くは動けないと思う。桃色の案に乗るのは癪だけど、やるしかないだろう」

3人は覚悟を決めた。

「ウオロロロ……なんだ、死ぬ覚悟を決めたか？」

「フッフッフッフ、いいや、テメエを殺す算段をつけたところだア！」

ドフラミンゴの言葉を合図としてキリアとヤマトが駆ける。

お互いにここで力を使い果たす覚悟で覇気と力を籠め、お互いの呼吸を合わせながらカイドウへ肉薄する。

「いいぜ、来いよ！ テメエら全員纏めて地獄送りだア！」

対するは全力でそれを受け止めるべく、金棒を回してから不動の構えを取った。

決して舐めているわけではない。これは彼なりの敬意の形だ。

防御も逃亡も小細工も必要ない。

ただ単純な力だけで成り上がった四皇の巨体が若人を飲み込もうと凶悪な覇気を放つ。

微塵もそれに怯えることなく3人は必殺の技を繰り出した。

「氷諸斬り——！」

「獅子竜王炎拳！」

ゴッドスレッド
「神誅殺」

3つの攻撃はカイドウに直撃し——



「こっちはダメだ！ 国王様と四皇が戦っているんだ！」

「嘘だろ?! さっきまでは市街地の中心で戦っていたじゃないか?!」

「それが急にこっちまで戦闘範囲が広がって来たんだよ！」

「クソ！ とにかく、もつと海に近い方まで逃げるしか……」

「……な、なあ。なんかこっちに飛んできてないか？」

「ああ？ 何言ってるんだ。いいからさっさと避難を——」

「いいや見間違いないじゃねえ！ 人がこっちに飛んでくるぞおおおおお！」

そして次の瞬間、彼らがついさっきまで避難場所としていた建物に

吹き飛ばされてきた誰かが着弾した。

破壊された建物から土煙が舞う。

「ゲホッ、ゲホッ……一体誰が——って、国王様!?!」

「ほ、本当だ! ドフラミンゴ様だ! どうしてこんなところに?」

「おい待て! さらに追加で人が飛んでくるぞ!」

警告した男の言葉は正しく、その後立て続けに2つの影がボールかなにかのように吹き飛ばされてきた。

「これは……誰だ?」

「いや待て、俺あ知ってるぞ……! この人は王下七武海だ! 新しく七武海になったっていう怪物キリアだよ!」

「う、嘘だろ?! なんで七武海がもう一人この国にいるんだ……?」

「そのえらく美しい女性は誰だ?」

「いや……分からねえなあ……」

それぞれの場所で倒れている3人を心配する市民たち。

しかし、すぐに人のことを心配している余裕はなくなる。

「ウオロロロ……どけよ、雑魚ども」

「「「ツ!?!」」」

声にならない叫び声をあげる市民たち。

彼らの前には突如この国を襲撃してきた四皇、百獣のカイドウが立っていた。

「お、おいお嬢さん……! 今は動かない方が……」

「……下がっていきなれ」

「なんだ、まだ動けたのかヤマト」

「ハア、ハア、ハア……その君、いいから後ろに下がっていきなれ」

「ああ? どうした。その男が目障りなのか?」

唐突に金棒を振り上げるカイドウ。

あまりの恐怖に腰抜けとなつてただ振り下ろされる凶器を見つめることしかできない男性は四皇の情け容赦ない一撃で脳天をがち割られて——

「……お願いだから、下がっていきなれ」

そうなる前に碌に動けない身体でありながら金棒を受け止めたヤ

マトによって何とか一命を取り留めることができた。

「あ、ああ……悪かった……!」

必死に逃げていく男性の背中を見送ったヤマトはカイドウの拳を受けて再び地面に倒れこんだ。

「……分かんねエな。昔から、お前のことが分からねエ。どうしてあんな奴を庇う? どうして俺に盾突くんのだ?」

カイドウは心底理解に苦しむといった表情で己の息子に尋ねる。

「……哀れな人だな、アンタも。分からないから錠をつけて、自分の言うことを聞くまで虐めるのか。人間は……犬じゃないんだぞ」

「……くだらんことを聞いた。おい、これが本当に最後だヤマト。俺と共に鬼ヶ島に帰ってこい」

ぺつ、と血の唾を吐き捨て、ヤマトは爛々と輝く宝石のような瞳で言った。

「絶対に……断るッ! 死んでもごめんだ……!」

「———そうか」

失望したような目で自身の息子を見た後、カイドウは言った。

「いいぜ、ヤマト。じゃあ、こうしよう」

カイドウの視線がようやく意識を取り戻し、何とか立ち上がろうとするドフラミンゴとキリアを捉える。

「お前も、キリアとかいう餓鬼も、ジョーカーも!」

あまりの恐怖に腰を抜かし、避難することもできずにただ怯えている市民たちを見る。

「この街の住人も!」

ああ、くだらない。

全部くだらない。

「全員纏めて皆殺しだア!」

非道の宣告はなされた。

頼みの綱の七武海たちが限界を迎えつつある中、これから始まるのは一方的な虐殺だ。

(……ごめん、みんな。でもせめて、心だけは——)

心の中で巻き込んでしまった全ての人に謝りながらヤマトは父を

睨む。

確かに自分たちは負けた。全力を尽くして、それでも負けたのだ。でも、それでも侍たちに貰ったこの心だけは屈したくない。

最後の最後まで気高くあろうとするヤマトにカイドウの金棒が迫り――

「わしの目の前で市民を皆殺しとはよう言うたもんじゃのお、青二才が！」

カイドウの真横に突如現れた男は丸太のように太い腕を振りかぶり、その拳でカイドウの顔面を文字通り殴り飛ばした。

「があ――?!」

凄まじい勢いで吹き飛んでいくカイドウ。

何が起きたのか分からず啞然とその光景を見守る市民たち。

ヤマトは琥珀色の瞳を見開きながらその男の背中を見つめていた。

誰だ？ あの男は一体誰だ？

皆の視線を集めながら地面に着地する筋骨隆々の男性。

遅いその背中が背負うは「正義」の2文字。

吹き飛ばされたカイドウは痛みに耐えながら立ち上がり、驚愕と共に怒鳴った。

「ぐっ……なぜテメエがここにいるんだ?!」

一方、市民たちはようやく現れた真の救い主に歓喜し、一斉にその名を呼んだ。

「」「英雄ガープツ!!」「」

海兵の英雄。

生ける伝説。

史上最も眩い正義の体現者が堂々たる立ち姿で市民たちの前に立っていた。

ガープは破壊の限りを尽くされた市街地を憮然とした表情で眺める。

「こうも大暴れしていて海軍が駆けつけないと思っておったのか？」

海賊どもが勝手に殺し合うのはどうでもいいが、市民にまで影響が出るのであればわしらが黙ってはおらん！」

海兵の鑑であるガープの言葉に感動する市民たち。

さらにガープは間髪入れず後ろに控えていた大勢の海兵たちに号令を出す。

「おい、海兵たちよ！ 市民を安全な場所へ避難させい！ 軍艦を使っても構わん！ わしはこれから仕置き時間じゃ」

「「「はっ！」」」

練度の高い海兵たちが素早い動きで市民たちを誘導していく。

ガープはカイドウに睨みを利かせながら瓦礫に埋もれているドラミンゴに視線をやった。

「……おい、わしを呼んだのはそこに転がっておるピンクで間違いないな？」

「ああ、そうだ。まさか英雄様のご登場とはなア……フッフッフッフ、俺の運もまだ尽きていなかったか」

「確かに運はもっておるようじゃな」

ギロリ、とガープの視線が何故か大興奮しているクソ馬鹿を捉える。

「わしが来たのはその怪物も絡んでおるからじゃ」

「えっ？ 俺？」

「そうお前」

ハア……と溜息をつきながらガープはぼやいた。

「……確かにセンゴクには次何かあったらわしが出るとは言ったが、七武海入りから数か月ですぐに問題を起こすとはのお……お前、馬鹿なんか？」

「キリアは馬鹿じゃないぞ！ 訂正しろ！」

「やめろヤマト！ 絶対に噛みついちゃいけない相手だ！」

「なんじゃ、この女は。お前も海賊か？」

「僕は女じゃない！ 侍だ！」

「おお、そうじゃったか。すまん、すまん。海賊じゃないならいいわい」

「いいのかよ?!」

「ふん、分かればいいんだ」

「ヤマト、この御仁には絶対に喧嘩売らないでね？ いや、ほんとマジで」

何やら相性良さそうなヤマトとガープを見ながら珍しくツツコミ側に回るキリア。

「ウオロロロ……そうか、確かにここは世界政府加盟国だったな」

「そして国王は俺だ。国の長が救援要請を出したんだ。海軍が無視するわけがねエとは思っていたが……随分と遅かったな」

「連絡を寄越すのが遅いんじゃ。それでも飛ばしてきたんだから、文句を言うなクソピンク」

「クソピンク……!!」

「はいはい、パイセンも抑えて」

血管を浮かび上がらせながらぶち切れ寸前のドフラミンゴを抑えるキリア。

「なんだ、随分と余裕そうじゃねエか。海軍の中将が駆けつけた途端に勝ちムードか？ あアん!!」

怒りと共に放たれた霸王色の覇気がドレスローザの大地を揺らす。

膨大な覇気を目の当たりにしたガープはすっかり皺が増えた目尻を動かしてから溜息をついた。

「……年は取りたくないもんじゃのお……あのカイドウのクソ餓鬼がやたらと強く見えるわい」

「おい英雄ガープ。分かっているよな？ 俺たちは……」

「あーもう、うるさい奴じゃのう。分かっとなるわい。七武海じゃろう？ わしは貴様らに手は出せん」

いまいちやる気がなさそうなガープに焦ったドフラミンゴが声を

掛けるが彼とて自分の立場はわきまえている。

「本来七武海とはいえ海賊は海賊。わしが手を貸す道理など欠片もないのだが——」

玩具になった市民たちを困惑しながらもしつかりと避難させる海兵を横目に見ながらガープは考える。

(きな臭いのお……この国は、どっか匂うわい)

海賊が治めているという時点で嫌な予感がしていたが、ガープの優れた直感と海兵としての経験はこの国が危険ということを察知していた。

だが——

「市民は別じや。七武海が治める国であれ、市民は市民。わしの守るべき命じや」

この国に何が潜んでいるにしろ、守るべきものはガープの後ろにいる。

であれば、彼がここで引く理由など何一つとして存在していなかった。

「ガープ！ 手を貸せ！」

ガープは一瞬、忌々しいあの事件を思い出した。

憎つくき宿敵と肩を並べて最悪の海賊と戦ったあの事件のことを。

「やれやれ、また海賊と肩を並べることになるとはお……気に食わんが仕方がない。手を貸せい、七武海」

「……そうこなくちやなア」

「お前が指示を出すな！」

「いいから噛みつくなヤマト！ 今感動的なシーンだから！」

狂犬ぶりを発揮しているヤマトを諫めつつ、キリアは自分が七武海だったことに心底安堵していた。

カイドウに加え、こんな化け物を相手にするなんてとんでもない。

「なんだ？ ゴッドバレーの再来か？ テメエが七武海とはいえ海賊と手を組むとはな」

「どいつもこいつもあの事件を持ち上げすぎじや。わしはわしの義務を全うする。それだけじや」

「老兵風情が四皇を相手に何ができる……!!」

「わしがただの老兵かどうかはこれから確かめるがいい」

両手の拳を鳴らし、海軍の英雄は悪魔のような笑みを浮かべる。

「……さア、始めようか。小僧共」

この老兵を侮るなかれ。

その拳は数多の海賊を沈め、今なお色褪せることない武功を打ち立てた鋼の勲章。

「わしの拳はちと痛いぞ?」

最強の伝説が今、ここに降臨する。

鬼の子、人の子

流石に強いな。

カイドウは素直にそう思った。

突如援軍として参戦してきたガープは七武海たちと手を組み、早速カイドウに襲い掛かって来た。

既に齡75の老体でありながら目を見張るほどの俊敏さで動き、鍛え抜かれた武装色の拳で容赦ない打撃を浴びせてくる。

言わずと知れた何の工夫もない戦闘スタイルだが、シンプルを突き詰めたが故にその威力は絶大だ。

油断など欠片もないカイドウはしっかりと武装色でガードをしたうえでこれを迎え撃った。

ガトリング砲のように繰り出されている拳だが、その1つ1つが途轍もなく重い。

それは極致に達した人間だけに許された本物の拳だ。

「ぐう……！」

ニヤリとカイドウが笑う。

だが、耐えられないほどではない。

目の前の伝説の全盛期を知っているカイドウからすれば些か拍子抜けするほどの攻撃力だ。

「なんだ、随分と衰えたんじゃねえか?! ガープ！」

ガープの殴打を覇気と持ち前の頑丈さで強引に振り払い、カイドウは金棒を振り上げる。

「おっと——」

「——俺たちがいるのを忘れてもらっちゃ困るな」

しかし、ガープをカバーするように後ろから飛び出してきたキリアとドフラミンゴが攻撃を放つ。

「竜王鉄槌！」

「五色糸！」

「馬鹿が！ くたばりかけのテメエらの攻撃なんざ——」

効かねエ、と言い掛けたカイドウの口が閉じる。
ズシリと身体に響くキリアの殴打。

肌を切り裂くドフラミンゴの糸。

それは間違いなく、戦い始めた時に彼らが発揮していた威力に他ならない。

(なぜ体力が回復している——!?)

驚愕するカイドウだが、彼らの攻撃はまだ終わらない。

「ひよっこどもに庇われるほど老いてはないわい！ 食らえツ!!」

「があ——!?!」

怒りと共に放たれたガープの一撃がカイドウの顔面に突き刺さる。

先程の連撃とは比較にならない重い一撃。

(なんだ、このふざけた威力は——!?)

世界最強の生物と畏怖され、本人も絶対の自信を持っている防御力が揺らぐ。

顔面に巖のような拳をめり込ませながらも何とか耐えていたカイドウだったが、ガープの筋肉がさらに隆起したのを横目で視認した瞬間には踏ん張りも効かずに呆気なく吹き飛ばされた。

軽々と四皇を吹き飛ばした海軍中將は地面に着地すると困ったように自身の拳を見た。

「やれやれ……最近のパワーが落ちていかんわい」

(……あれで?)

キリアとドフラミンゴは内心でツツコミを入れつつ戦々恐々としていた。

衰えてあの威力だったら、全盛期はどうなっていたのか……。

自分たちが七武海であることに心底感謝している2人をガープは不機嫌そうに睨みつけた。

「というか貴様ら、動けるんか！ 倒れたふりをしてわしだけ働かせようとは、これだから海賊は嫌いなんじゃ！ もっと老人をいたわれ！」

「……悪いが、これは一時的な処置だ。妖精のお姫様の力を借りているだけで、あと数分で俺たちは使い物にならなくなる」

老人をいたわれ、の部分は全力でスルーしてドフラミンゴは復活の理由を答える。

原作開始前であることに加え、特にスマイルを製造しているわけでもないためトンタツタ族の姫を攫う必要もなかったドフラミンゴ。

そんな中、グリーンビツト滞在中にキリアとヤマトがトンタツタ族の姫様、マンシエリーと偶然仲良くなったため、国を守るために戦うので力を貸してほしいとお願いしてチュチュの実の力を借りたのだ。

「ヤマト、大丈夫?」

「……すまない。実はもう腕も動かせないんだ。良ければマンシエリーから貰った薬を飲ませてくれないか?」

「……分かっているとは思いますが、これは寿命を——」

「大丈夫だ。僕は侍だぞ? そんなことよりも、ここでじつと戦いを眺めている方が苦痛だ」

「——分かった」

キリアはヤマトに彼の懐から取り出した小さな小瓶に入った液体を飲ませた。

「ん〜、よし! 復活ツ!!」

次の瞬間、元気いっぱい立ち上がったヤマトは金棒を拾い上げて肩に乗せると不敵に微笑んだ。

「さて、力強いお爺さんも来たことだし——決着をつけようか」

「ウオロロロ……あまり調子に乗るんじゃねエぞツ!」

瓦礫を吹き飛ばし、カイドウが復活する。

「相変わらずいいパンチを撃つが……反応速度は鈍ってんだろぅが!」

人獣形態のカイドウが消える。

視認することも難しい異常な速度でカイドウは真っ先にガープを狙いに行く。

(さア、どうする老兵!)

「だーかーら、俺がいること忘れないでよ」

「ッ!」

カイドウは金棒を振り上げた状態で驚愕する。

ガープを守るように怪物キリアが立ちふさがっていた。

「邪魔を——してんじゃねえ！」

「竜鱗」

怒りと共に振り下ろされる雷鳴八卦。

しかし、キリアは焦ることなく自身の皮膚を頑丈な竜の鱗に変化させ、カイドウの攻撃を完璧に受け止めた。

（堅いつ！ さつきから何なんだコイツは!! 俺の攻撃が効かなくなっていく……!）

「さあ、ぶちかましてくださいよ。英雄殿」

「よくやった小僧！」

キリアの後ろから飛び出したガープが拳を握りこむ。

「クソ！」

「愛ある拳に防ぐ術なし！」

弓なりにしなる強靱な肉体からカウンターパンチが放たれた。

「があ——?!」

（前から疑問だったんだ……!）

やはり踏ん張りが利かず文字通り殴り飛ばされながらカイドウは思考する。

（どうしてコイツの打撃は霸王色も纏っていないのにこんなに痛エんだ……?!）

聞かれたところでガープは「愛ある拳に防ぐ術なし！」と理解不能なことを言つて煙に巻くのだろうが、ガープの殴打の神髄はその「芯」を捉えることにある。

積み重ねてきた研鑽と生来のセンス、そして流桜の原理にも近い武装色のコントロールと、並外れた怪力。

その全てが合わさることで唯一無二のゲンコツとなっていた。

さらにアタッカーは他にもいる。

「恐ろしい威力だな、ゾツとするぜ」

「おい桃色！ しっかり合わせろよ！」

「分かつてる！」

ドフラミンゴとヤマトが駆ける。

「羽撃糸！」

「神速 白蛇駆！」

千本の矢がカイドウを追撃し、さらに凄まじい速度でカイドウに接近したヤマトの霸王色を纏った一撃が炸裂する。

「小癩な……！」

言いながらも顔を顰めるカイドウ。

これまで息子であるヤマトの手前強がってはいたが、七武海クラス3人の攻撃を受け止め続けていたカイドウの身体にはそれなりのダメージが蓄積されている。

(認めるしかねエか……)

カイドウは突進してくるグループとその周りを固める3人を見ながら内心で呟いた。

(コイツら、相当厄介だ)

異常な頑丈さでカイドウの攻撃を受け止め続ける盾役、キリア。

この中で最も対カイドウ戦に優れているであろう攻撃役兼足止めのヤマト。

状況を把握し、的確に指示を出しながら自身も強烈な攻撃を繰り出す万能型のドフラミンゴ。

そこに超火力のグループが加わったことにより、対カイドウのパーティは完成へと近づいている。

だが――

「この程度で俺に勝てると思ってんのか!! 四皇舐めんじやねエ！」

人獣形態から龍へと姿を変えたカイドウは熱息ホロプレスの体勢を取る。

範囲攻撃でキリアたちの連撃を終わらせ、一度仕切りなおすつもりなのだろう。

ここで自分たちのペースを失うわけにはいかない。

「キリア！ 撃たせるな！」

「了解！」

人獣形態で竜の翼を生やしたキリアが空を超速で駆ける。

「馬鹿が！ まずはテメエからだ！」

「ッ!!」

ぐるりとカイドウの巨体が素早く動き、突進してくるキリアをターゲットに捉えた。

想像以上に素早いカイドウの方向転換についていけないキリア。
(貰ったアー！)

内心ほくそ笑むカイドウだったが、そこからキリアが異次元の挙動を見せる。

——月歩——

直進速度が速すぎる物体は急には曲がれない——という法則を無視するかのよう空中で器用に体勢を切り替えたキリアは山羊のそれへと変形している脚で宙を蹴った。

(六式だと……！)

本来自前の翼で空を飛べるキリアには習得する意味のない技だ。

だが、鬱陶しく追いかけてくる海軍と政府のエージェントと戦い続けたキリアは気が付けば最も適性があったその技を盗んでいた。

断崖絶壁を易々と乗り越えていく異常な脚力を持つ山羊の脚を活かし、ほぼ直角に進行方向を切り替えたキリアはそのまま不規則に宙を蹴りながらカイドウの懐に飛び込む。

「おいおい、確かに速いが——未来が見える俺相手じゃあ、鈍足だぜ？」

しかしカイドウは鍛え上げられた見聞色を操る。

キリアの軌道の先を読み、するりと巨体を動かして対応する。

「おっと、そこには網を張っている。気を付けな、カイドウ」

「ッ!!」

ドフラミンゴの不敵な声が響く。

キリアだけに集中し過ぎたカイドウを嘲笑うかのように仕込まれた糸がほんの一瞬だけ四皇の動きを止めた。

「速度は重さ——食らっていきなよ、四皇」

竜の翼による超速と月歩による繰り返しの加速。

速度は加算され、重さを増す。

「山蹴り」

キリアの強烈な蹴りを顔面に食らい、ポロプレス熱息を強制的にキャンセル

させられたカイドウは呻き声を上げながら後退する。

さらにその巨体をドフラミンゴが糸で縛り、ヤマトが氷で固めればお膳立ては完了だ。

「さーて、もう一発じゃッ!!」

再び炸裂する超火力の拳。

デカくなったお陰で当てやすくなったと笑いながらガープは全力の一撃を龍の巨体に叩きこんだ。

「ぐう……!」

たまらず吹き飛ぶカイドウ。

さらなる追撃を加えようと3人が動くが――

「調子に乗るな! 龍巻壊風!」

カイドウはぐるぐると回る巨体を利用し、かまいたちが付属した巨大な竜巻を発生させた。

「クソ! 竜巻か!」

「離れろヤマト!」

追撃を中止し、咄嗟に距離を取る3人。

一方、ガープはというと鬱陶しそうに瓦礫を破壊する竜巻を眺めた後、

「ええい、邪魔じゃあ!!」

強烈なアツパーで強引に竜巻を打ち消して見せた。

((な、なんでもありかよ?!))

自然現象すらも拳一つで強引にねじ伏せるガープにドン引きする3人。

本気を出せばこの3人でもどうにか出来るのだが、流石に齢75歳の老人が邪魔の一言と共に拳で竜巻を消し去る光景は衝撃だった。

「ウオロロロ! まだまだ元気じゃねエか。だが――」

的になるだけと判断したのか、再び人獣形態に戻ったカイドウはどこかイラついた表情で金棒の先をガープに向けて言った。

「らしくねエなア! そいつらの影に隠れてチクチク攻撃とは……随分とつまらねエ戦い方をするじゃねエか! ガープ!」

「ふん。若いだけが取り柄の連中と違って、こつちには余生が控えと

るんじや。ギャーギャー騒ぐな」

どこか冷めた瞳でガープは四皇を見据える。

「キリアたちが積極的に盾になっているとはいえ、確かにカイドウの言う通り、現在の戦い方はガープの印象からは大きくかけ離れているものかもしれない。」

昔の彼であれば盾役のことなどガン無視して1人で突撃し、全身全霊で理不尽のままに暴れまわっていたことだろう。

(分かっとなるんじや。——老いには勝てないことくらい)

だが、これが今のガープなりの全力だった。

普段から無鉄砲で、歳を感じさせないわんぱくさを見せているガープだが、それでも彼なりに老いというものは自覚している。

パワー、スピード、体力——その全ての能力低下。

人間として生まれた以上、それは逆らうことが出来ない必定のものだ。

だからこそ、それに抗うのではなく自覚したうえで立ち回ることをガープは意識していく。

嘗ては軽々で行えた大技の連発をするのではなく、防衛と足止めを人に任せ、小まめに体力管理を行いながら決定的な隙を狙う。

まだ現役でやれると「正義」のコートを羽織り、市民たちの前に英雄として立っている以上は悪党への勝利こそが何よりも重要だ。

全盛期のガープが競技の枠に収まらない本物の魔人だったとすれば、今の彼はまるでタイトルを懸けて戦うプロボクサーのようであった。

「……ふん。あの英雄ガープといえども歳を取れば保守的になるか。罪深いなア、老いてやつは」

「お前もこの歳になれば分かるわい。まあ、もつとも——わしの歳になるまで海賊をやっつけていられるかどうかは疑問じゃがな」

「言うじゃねエか老兵……!」

怒りながらも笑うという器用なことをしながら人獣形態のカイドウが腰を落とす。

「気を付けろ! 来るぞ!」

「馬鹿が！ 分かっているでも避けられねエから脅威なんだ！」

ヤマトの警告を嘲笑うカイドウが踏み碎いた地面を残して消えた。再びガープを狙うつもりかとあたりをつけたキリアだが、その狙いは外れることになる。

「まずはテメエからだ！ ヤマト！」

「しまっ——」

「大威徳雷鳴八卦！」

「ゴボツ——！！」

強烈な一撃を腹部に叩きこまれ、思わず吐血するヤマト。

実の息子にも容赦ないカイドウは金棒の先でだらんと力を失ったヤマトをガープの方へと投げ飛ばした。

ガープが優しくヤマトを抱きとめたことを確認したキリアはその場を飛び出した。

「このツ……い！ よくもヤマトを……い！」

「テメエの防御力は厄介だが——見せたことがない技に対しては無力だろう？」

激昂し、感情のままに突撃するキリアに対し、冷静なカイドウは既にキリアの理不尽な防御力の正体に気が付いていた。

大きく息を吸い込み、炎を本来の技のように身体に纏わせるのではなく熱息のように口から放出した。

「火龍——！！」

「ッ！！」

カイドウの口から放たれた巨大な火炎の龍が襲い来る。

真正面から突撃していたが故に避けることもできず炎に飲み込まれるキリア。

さらにキリアを飲み込んだだけでは飽き足らず、攻撃の余波が他の3人も襲う。

ドフラミンゴは空へと逃れたが、他2人はそういうわけにもいかない。

「こりゃあ、まずいのう！」

咄嗟にヤマトを庇ったガープは自分の懐に彼女を庇いながら正義

のコートに武装色を纏わせて防御する。

瓦礫を焼失させる圧倒的な大火力の技が通り過ぎた後、その場には黒焦げで倒れているキリアとヤマトを庇って火傷を負ったガープが残されていた。

「だ、大丈夫かお爺さん……？」

「ぶわっはっは！ これしきなんてことないわい。お前さんの方こそ大丈夫か？ 随分といいのを貰っていたようだが」

「僕も大丈夫だ。あんなクソ親父の攻撃なんて——」

ガープの懐から抜け出し、無理やり立ち上がったヤマトの身体がガクンと傾く。

「あれ……？」

自分の脚で立っていられなくなったヤマトは地面に倒れ込み——

「おっとつと。大丈夫ではなさそうじゃの。向こうで休んでおれ」

その寸前でガープに抱えられ地面に頭を打つことだけは避けられた。

(しまった……！ 時間切れか……！)

マンシエリーに貰ったチユチユの効果が切れたことを悟ったヤマトは咄嗟に視線を隣に動かす。

「ハア、ハア…………！」

「ハア、ハア……タイムオーバーか……！」

そこにはヤマトと同じく時間切れを迎え、さらに全身に負った大やけどで苦しんでいるキリアと空に留まることもできなくなったドラミングゴがそれでも何とか立っている姿があった。

「……どいてくれ。僕も戦う」

「おいおい、その怪我ではもう無理じゃ。安静にしておれ。カイドウはわしが——」

「ダメだ！」

予想外に強い拒否にガープは目を細めた。

「あの……クソ親父だけは……僕の手で……」

「……お前らの親子喧嘩に興味はねエが、そのまま戦い続けていたら死ぬぞ。いいから休んでおれ」

「……死んだ方がマシだ。僕だけ助かるなんて、もう嫌だ！」
「……」

「僕は鬼の子だけど、人として生きて、死にたいんだ……！」
不意に、ガープの脳裏にそばかすだらけの小さな少年の姿が浮かび上がる。

(なぜ、今アイツのことが……)

「ウオロロロ……だから言ったんだ。ヤマト」

カイドウは死に掛けのドフラミンゴを容赦なく金棒で殴り飛ばし、ヤマトの方まで悠々と歩みを進める。

「ぐっ……やめろ！」

「いいや、やめねエ。お前がいるから人が死ぬ」

カイドウは凶悪な表情でどうして生きているのかも分からないキリアの頭上に金棒を振り上げる。

「やめろオオオオ！」

「友情に意味はねエ。人は裏切るぜ？ ヤマト。現にコイツもお前を裏切つて先に死ぬ」

「ハハっ……面白い冗談だな、カイドウ……！」

「……まだ虚勢を張れるのか。大した根性だよ、怪物野郎。だが、お前は死ぬんだ」

そして容赦なく金棒が振り下ろされ、キリアは白目を剥いて地面に倒れ込んだ。

「キリアアアアアア！」

「いい加減俺の言葉を受け入れろヤマト。お前は俺の息子だ」

「クソ親父がアアアア！」

「……やれやれ、狂犬に育てた覚えはねエんだが、なッ！」

強引にガープの腕の中から飛び出したヤマトがキリアに駆け寄ろうとする。

カイドウはその姿を眺めながら無情にも金棒を振り下ろした。

「——おい、テメエの出る幕か？ ガープ」

金棒を片手で掴み、ヤマトへの攻撃を阻止したガープにカイドウの胡乱な瞳が向けられる。

「……侍なんじやろ？ そいつは。海賊じゃないならわしの守るべき者じゃ」

「屁理屈をツ！」

ガープの突き出した拳がカイドウに突き刺さるが、カイドウもまた金棒を握っていない左腕でガープの顔面に強烈なクロスカウンターをお見舞いする。

両者はその場で少し踏ん張った後、同時に後ろへと吹き飛んだ。

「……やれやれ、小僧の癖になかなかいいパンチを撃ちよる……！」

「ぐう……なぜだガープ！」

口元の血を拭いながら笑うガープに対し、瓦礫を力づくで吹き飛ばしたカイドウは怒りのままに吠えた。

「そいつは俺の息子！ 鬼の子だ！ いつか海賊おにになる奴を、海兵のテメエが手助けするのか!？」

「……」

「テメエらの基準で言えばそいつは生きていちやあ、いけない奴だ！ お前が庇うべき相手じゃねエだろうが！」

「僕は鬼の子だけど、人として生きて、死にたいんだ……！」

その言葉は――

「俺は、鬼の子だ」

確かに――

「おれは……生まれてきてもよかったのかな……」

ガープの逆鱗に触れた。

「鬼の子は鬼だと……？ ふざけたことをぬかすな青二才が！ 鬼の子も人が育てれば人の子よ！」

鬼の子として生まれ、人の子として愛し、それでも海賊となったとある馬鹿のことが脳裏に浮かぶ。

「未来は分からん！ この娘が海賊になればわしの敵、ならなければ貴様の敵！ 認めたくなくとも、餓鬼どもの未来は、餓鬼ども自身が選択していくもんじゃ！ いいから黙ってすっこんどれッ！」

激昂したガープが突撃してくる。

それを真正面から迎え撃つべく金棒を構えたカイドウはそこで己

の身体に起きている異変に気が付いた。

(なんだ？ 身体が痺れて……)

力が入りにくい。

まさかガードの一撃で足腰抜けたわけでもあるまい。

困惑していたカイドウはふと、誰かが笑っている気配を感じ取った。

咄嗟に視線を向けた先にいたのは、気絶した筈の怪物キリア。

「まさか——！」

「体内はガード出来ないよな？」

不敵に笑うキリアの背後で尻尾として生えている蛇が蠢く。

熱息の際に開いたカイドウの口内に忍ばせていた布石が最悪のタイミングで発動していた。

(毒か!?)

遅効性の麻痺毒がカイドウを蝕む。

(だが、この程度の毒で俺が怯むと思うな……!)

足止めがなんのその。

その全てを力で粉碎してきたからこそ世界最強の生物。

だが——

「フッフッフッフ——そこでじつとしてな、カイドウ」

同じく気絶していた筈の天夜叉が笑いながら手を翳す。

幾重にも張り巡らされた糸のトラップがカイドウの身体を縛る。

(う、動けねエ……!?)

それでも何とか拘束を解こうとしたカイドウだが、

そんな彼の脚を止めたのはバカ息子の氷——

「偶にはお前がゲンコツを食らえ。クソ親父」

七武海2人と息子の足止めを受け、完全にカイドウが止まる。

本来の彼であればものの数秒で解けるような拘束だ。

しかし、今はその数秒が致命的だった。

「カイドウツ!!」

「ぐう……クソツタレがアアアア!!」

叫ぼうとも拘束を解くには時間が足りず、魔人の突進は止められそ

うもない。

せめてダメージを抑えようと武装色で全身を強化するカイドウ。

“おれは……生まれてきてもよかつたのかな……”

走るガープの脳裏でそばかすだらけの少年が言う。

あの時の自分は何と言ったんだったか。

“そりやおめエ……生きてみりやわかる”

そうだ。そう言ったんだった。

ガープは後悔などしない。

あの時は言葉の通り、自分で生きて、自分で実感を得ることが大事だと思つたからこそそのものだった。

実際のところ、海賊の道を選んだのはエースの意志であり、ガープに落ち度は殆どない。

それにサボの件があつた以上、エースが海賊の道を選ぶのは必定であつた。

でも、それでも、ガープは何かもつと自分から言つてやれたんじゃないかと思うことがある。

(じゃが、過去は過去だ)

過ぎたことはどうしようもない。

ならばせめて、今の自分に出来ることを。

そう、例えば——泣きながら人として生きたいと叫ぶ子供の手助けくらいはしてやりたいと、ガープは思うのだ。

悲鳴を上げる肉体を強靱な意志の力でねじ伏せながら老体が駆ける。

老いたとカイドウは言うが、ガープから見れば彼らが若いだけだ。忘れてしまったらしい小僧に教えてやらねばなるまい。

自分が誰であるかを。

嘗て海賊たちを恐怖に陥れたこの一撃を。

「ウオオオオオオオオオオオオ——!!」

放たれる一撃必殺の拳。

そして――

「ガッ――」

伝説が蘇る。

山を砕き、海賊王と渡り合い、悪党を恐怖させた悪魔の一撃がカイドウに直撃する。

恐らく、カイドウを知る者であれば驚愕するであろう。

白目を剥き、吐血しながらボールのように吹き飛ばされていく彼のように。

「……思い知ったか。これが人の拳じゃ」

老いたガープではあるが――その一撃だけは間違いなく全盛期のそれであった。



「――ハッ！ ハア……ハア……ゴホッ！ ハア……ハア……」

どうやら数秒だけ意識を失っていたらしい。

眼を覚ましたカイドウは腹部に刻まれた殴打の痕を見た後、苦しそうに咳き込んでから吐血し――

「ウ、ウオロロロ……面白い」

笑った。

全身から発せられた霸王色の覇気が周囲の建物を吹き飛ばす。

カイドウは金棒を地面につきながら立ち上がり、天に吠えた。

「面白れエー！ 面白れエじゃねエか！ あの爺、まだあんな力を持つてやがったのか！」

ドレスローザ中に広がる凶悪な覇気が市民のみならず海兵の意識も奪っていく。

「英雄ガープ……いいねエ、全盛期の奴でなければ意味がないと思っていたが、伝説は健在だったか……！」

狂喜乱舞。

カイドウは全身全霊で一瞬だけ蘇った嘗ての伝説を喜び、歓迎する。

強い奴がいればいるほど血が滾り、底のない戦意が込み上げてくる。

ドレスローザの大地を踏み碎き、尋常ではない跳躍力で吹き飛ばされた地点からガープの場所まで戻って来たカイドウは笑った。

「疲れ切っちゃいねエだろうなガープ？　もうテメエの盾役はいねエぞ？」

「ふん。わしに盾など必要ないわい。さつきと掛かってこい小僧」

「ウオロロロ……その言葉、後悔するなよツ！」

ダメージが蓄積しつつも狂喜乱舞しているカイドウとサポートを失ったガープが構える。

時代を代表する怪物2人が本格的に戦いの火蓋を切ろうとしたその瞬間――

プルルルル、プルルルル、プルルルル、

「ああ？」

（これは確か出発前にクイーンから渡された緊急連絡用の電伝虫……）

調査の結果、本格的にヤマトが攫われたことが発覚し、単独で出発しようとしたカイドウを急いで押しとどめて渡されたことを思い出す。

カイドウの性格をよく知っているクイーンのことだ。

余程のことがなければ鳴らすはずがない。

だが――

（悪いなクイーン。俺ア、こっからが本番なのよ）

完全に連絡を無視することに決めたカイドウは鬱陶しく鳴り続ける電伝虫を握りつぶそうと手に力を籠め――

「……」

だが、やはり性根にある真面目さが部下からの緊急電伝虫を無視す

るという選択肢を取れなかった。

「どうしたクイーン。俺ア、今、最高に楽しい——」

『カイドウさん！ 大変だ！』

機嫌よく電伝虫に出たカイドウではあるが、対するクイーンは焦りを隠せない様子で言った。

『大将だ！ 急に飛び出したアンタをキングと追いかけてきたんだが、何故かドレスローザ周辺にいた大将たちの軍艦に襲撃されているんだよ！』

「ああ？ 大将だア？ どいつか知らねエが、大看板のお前なら問題ねエだろう？」

『違うんだカイドウさん！ 大将が2人來ているんだよ！ 青雉に海を凍らされてこれ以上前に進めない上に黄猿のビームで狙撃されて艦隊は壊滅寸前だ！ 場所と相手が悪すぎる！』

『おいクイーン。 テメエ、カイドウさんに連絡するなど言っただらうが……！ ここは俺たちだけで抑えるんだ』

『アホキング！ 被害状況をもつとよく確認しろ！ このままじゃ俺たちはともかく、とんでもない数の兵力を失うことになるぞ！』

『……チツ』

クイーンの電伝虫に割り込んできたキングはきつとカイドウの手を煩わせることを拒んだのだろうが、クイーンの言葉を否定できない様子から見て大将2人に相当苦戦させられているのは間違いないだろう。

（大将が2人だア？ 英雄ガープといい、やけに用意周到じゃねエか。本格的に俺の首を取りに来たのか？）

思わぬ強敵の登場に興奮して沸騰していたカイドウの熱が部下からの報告で冷めていく。

冷静な思考回路を取り戻したカイドウはまだ立ち上がろうとしているボロボロの男を見て先程の推測を否定した。

（いや、違う。俺だけじゃねエ。コイツが原因か）

王下七武海の新人。

世界情勢を大きく塗り替える可能性を持つ男——怪物キリア。

カイドウの推測は正しく、海軍はとあることを恐れていた。
それ即ち——怪物キリアの四皇接触。

実際はそんなことないのだが、海軍はキリアが王下七武海を辞めてカイドウと結託し、本格的に世界を滅ぼすべく動き出す最悪のシナリオを恐れていた。

「——で、どうするカイドウ。まだやるってんなら相手になるが？」
「……」

自分たちに風が吹いてきたことを感じ、無理やり立ち上がったドフラミンゴがカイドウを挑発する。

本当は力の限り暴れ回りたいカイドウではあるが、絶妙なタイミングで差し込まれた電伝虫のせいで興がそがれてしまった。

それに、部下たちのことも気掛かりだ。
彼らは来るべき最高の戦争の為に必要なカイドウの戦力だ。

自分の我儘のせいで海軍にいいようにされるのは気分が悪い。

「潮時か」

フツとドレスローザ全体を押さえつけていたカイドウの覇気が消えた。

臨戦態勢を解いたカイドウはくるりと背を向けた。

「なんじゃ、喧嘩はしまいか？」

「ウオロロロ……強がるんじゃねエよ、ガープ。テメエがまだ強いのは良く分かったが、それと俺を倒しきれるかどうかは別だろう？」

「……生意気な小僧じゃ」

「言ってる。——さて、俺ア野暮用が出来たんでもう帰るが……テメエら。四皇に挑戦状を叩きつけたこと、忘れるな」

「望むところだ」

ギロリと向けられたカイドウの視線にドフラミンゴが挑む。

暫く睨みあっていた両者だが、やがて視線を外したカイドウは焰雲を生み出し、部下たちの元へ向かうべく空を駆ける——

「ああ、それからヤマト」

と、その寸前にふと思い出したように息子の方へと向き直った。

「……なんだ」

「テメエは、その道を行くってことでいいんだな」

思いも寄らない言葉に固まるヤマト。

ただの一度だって自分の道を認めもしなかった父がそんなことを言うなんて……。

ヤマトは自然と隣にいるガープに視線をやった。

彼は静かに頷くだけ。

気が付けば彼は力強い瞳で宣告していた。

「——ああ。僕はこの道を行く」

「……分かった。精々強くなれ。決着はまた付けるぞ」

「望むところだ」

そして、四皇百獣のカイドウは1匹の龍となってドレスローザを去っていった。



「やれやれ、ようやく去っていったか。傍迷惑な奴じゃ」

「ご苦労だったな、英雄ガープ。もう帰っていいぞ」

「——なんじゃ、用済みになったらさっさと出て行けと？ 随分と急かすのお」

「感謝はしてるさ。海軍には後日、礼の品を送っておく」

「わしはいらんわい。それよりも、壊れた街の修復を手伝ってやろう。あと、パエリア食べせろ」

「結構だ。アンタらに頼んでいるのは外敵の排除であって復興作業じゃない。それはこつちで解決するさ。パエリアは好きに食っていい」

「せっかく海軍が手伝ってやると言っておるのに、意固地な奴じやのう。なんじゃ——」

ガープの瞳がカイドウと戦っていた時のそれに切り替わる。

「わしに見られたら困るものでもあるのか？」

「どうだろうな」

英雄と天夜叉の視線がぶつかり合う。

両者ともに譲ることのない睨みあいが続く。

「……復興作業は手伝う。これはわしの趣味じゃ。文句あるか？」

「……趣味、か。じゃあ仕方ねエな。だが、分かっているとは思うが――」

「あー、もううるさい奴じやのう。分かつとるわい。あまり好き勝手に動くなというんじやろう？」

「そうだ。世界政府加盟国の長からのお願いだ。無下にはできねエだろ？」

「どうせうまいこと隠しているくせに用心深いやつじゃ」

呆れたように溜息をつきながらガープは背を向ける。

早速復興作業を手伝いに行くのだろう。

「――クソピンク」

「俺の名前はドン――もういいか。なんだ？」

「今回は市民たちのための復興作業が重要だから多くを詮索するつもりはないがお……」

底冷えするような瞳がドフラミンゴを射抜く。

「牙をむいた猛獣がいつまでも大人しくしていると思うな」

その瞳は言っていた。隙を見せれば次はカイドウに向けられたあの拳がお前に向くぞと。

「……覚えておこう」

「ああ、それからその娘」

「僕はヤマトだ」

「そうか。ヤマト、お前に言っておく」

「なんだ？」

あのバカと面影が重なることを自覚しながらガープはあの時言つてやれなかったことを告げた。

「鬼の子も人の子もない。生まれてきたことが罪な者などいない。それだけは覚えておけ」

「……ああ。ありがとう。覚えておくよ」

「海軍に入りたくなったらわしに言え。いつでも歓迎するぞ」

「うーん、多分ないかな？」

「ぶわっはっは！ また振られてしもうたわい！」

快活に笑ってからガープは手を振って部下たちの元へと歩いていく。

こうして、ようやくドレスローザ事件は幕を下ろした。



「——で、パイセンどうするんです？」

「……どうすつかなあ」

完全に一歩も動けません状態のドフラミンゴとキリアはドレスローザの地面に横たわりながら言葉を交わす。

ちなみにヤマトは一足先にドレスローザの病院へと運ばれている。放っておけば勝手に回復するキリアと自身で内部を縫合している最中のドフラミンゴはあらかた回復してから病院へ向かうことにしていた。

「カイドウはまた攻めてきますよ」

「だろうなあ……」

「しかも、次は大看板とか連れて」

「ああ……」

「俺たち、次こそ死にますよ？ それともまた海軍呼びます？ もう次は見逃してくれなさそうですけど」

「そうだなア……」

「というわけで、今までお世話になりました」

「薄情すぎだろテメエ」

ぼんやりと空に浮かぶ雲を眺めながらツツコミを入れるドフラミンゴ。

だが、彼もキリアの言葉が正しいことは分かっていた。

恐らく次はない。完全に英雄ガープに目を付けられてしまった以

上、ドレスローザのことを隠し通すのは不可能に近いだろう。

「……キリア」

「なんだ、天夜叉」

「だから見切りをつけるのが速いんだよテメエは」

いきなり赤の他人面し始めた後輩にツツコミを入れつつ、ドフラミンゴは言った。

「色々考えたんだが……やはりドレスローザは防衛には向いてねエ」

「でしようね」

「……正直、もう潮時だとも思っている」

「インペルダウンでも元気にしていてください」

「その時はテメエも道連れだ」

話をあちこちに飛ばすクソ馬鹿に苛立ちつつ、ドフラミンゴは話を続ける。

「防衛戦は圧倒的に不利と分かったからなア……次はこっちから攻め入る番だ」

「……戦力は？　こっちからの討ち入りじゃあ、海軍は手を貸してくれないですよ」

「別の連中を使う」

「……ちよつと前に話していたのは覚えてますけど、まさか本当にやるつもりなんですか？」

「ああ、条件は整った。使えるものは全て使うさ」

ドンキホーテ・ドフラミンゴは言った。

「王下七武海を招集する」

人に迷惑掛けちゃいけませんよね？

四皇 百獣のカイドウ ドレスローザ襲撃。

そのニユースは瞬く間に世界中を駆け巡った。

どこぞの国が四皇の気まぐれで滅ぼされるといふニユースは度々報じられるも、今回は襲撃された国が国だ。

ドレスローザ。

そこは世界政府加盟国にして——七武海 天夜又ドンキホーテ・ドフラミンゴが治める国である。

カイドウはそこまで深く考えていなかったが、これは世界政府および七武海に喧嘩を売ったに等しい行為だ。

……まあ、その事実には思い至ったところでカイドウは気にも留めないだろうが。

この事態を受け、ドレスローザ国王にして七武海であるドンキホーテ・ドフラミンゴはカイドウの蛮行を強く非難すると同時に世界政府を通じてとある号令を出した。

【王下七武海招集】

一癖も二癖もある連中をどうやって纏め上げるつもりなのか。

そもそも招集に応じるような面子なのか。

分かっていることが一つだけ。

ドレスローザ事件をきっかけにして発足したこの会議の結果が今後の世界の行く末を大きく左右するものであるということだけである。

◆◆ドレスローザ事件より一週間後◆◆

新世界に浮かぶとある島。

気候が素晴らしく、波も穏やかで、素晴らしい豪邸が立っているその島は、とある大富豪の所有物として界限では有名だったが、つい最近とある国の国王が買い上げたことでさらに有名になったリゾート

地である。

更なる改良が加えられ、9人掛けの円卓を備えたその豪邸には現在、ドフラミンゴ、キリア、ヤマトを除き、5名の人物が滞在していた。

「……で、気まぐれなお前さんが顔を出すとはいったいどういう風の吹き回しじゃ？」

「王下七武海 海侠のジンベエ」

「そういうお前こそどういった要件だ？」

「王下七武海 鷹の目のミホーク」

「キシキシシシ……俺はテメエらよりもっと珍しい奴が来ていることにビックリしているけどなア！」

「王下七武海 ゲツコー・モリア」

「……」

「王下七武海 暴君バーソロミュー・くま」

「……なんじゃ、その不快な視線をわらわに向けるな、下郎」

「王下七武海 海賊女帝ボア・ハンコック」

世界に名を轟かせる悪党たち。

しかしながらその所属は世界政府。

7人のみが選出され（例外的に今は8人だが）世界の均衡を保つ巨大戦力と認識されている化け物たち——それが5名も。

頂上戦争が起きていない今の海において、それは異様な光景であった。

政府管轄の海賊でありながら滅多に招集に応じることがない彼らがここに集っているのには訳がある。

「不動の『女帝』が現れるとは……七武海の称号でも惜しくなったか？」

「海峡のジンベエ。わらわにはわらわの理由がある。詮索は止せ」

ジンベエがそう言うのも無理はない。

彼らの元に届いたのは下記の招集状だったからだ。

【王下七武海 各位

四皇 百獣のカイドウと交戦すべく七武海連合結成会議を実施す

る。

同封のエターナルポースを辿り、直ちに指定の島まで直行されたし。

なお、天夜又ドンキホーテ・ドフラミンゴと怪物キリアは既に連合への参加に同意している。

今回の招集に応じない場合、王下七武海としての役割を放棄しているとみなされる場合が——以下長文」

「キシキシシ……ドフラミンゴと噂の新人がドレスローザでカイドウとやりあつた話は聞いていたが、称号を盾に俺たちも招集するとはなア！」

「いよいよ四皇との本格的な戦争を政府が決意したということかおう……」

ジンベエが思考を巡らせる中、唐突に彼らが招待された円卓の間の扉が開いた。

「よお、皆さんお揃いで」

逆立てた金髪に不気味なサングラス。

ビシツと決めた赤いスーツの上からトレードマークのピンクジャケツトを羽織り、遅れてこの会議のキーパーソンが登場した。

「王下七武海 天夜又ドンキホーテ・ドフラミンゴ」

以前と違うファツションや雰囲気面に識があつた面々が戸惑う中、鷹の目のミホークは目を細めた。

(……気配が強くなっているな)

以前の軽薄な気配は見る影もない。

どうやらこの男に何かしらの転換点が訪れたらしい。

ジロジロと観察されていることを気にも留めずドフラミンゴは円卓の席を見渡してから溜息をついた。

「やはりワニ野郎は欠席か。つたく、何が忙しいだ。暇なくせによ」

唯一の欠席者となつたクロコダイルを愚痴りながら自分の椅子を引き、腰掛ける。

「……おい、天夜又の」

「アン？ ジンベエか。久しぶりだな」

「ああ、そうじゃの。ところでお前さんと同盟を組んでいるとかいう新人はどうした？」

「どうしたんだろいうなア……どういうわけか部屋にはいなくてな。まあ、そのうち来るだろう。それよりも——」

ドフラミンゴは円卓に座る面々を見渡した。

「うちの同盟相手以外は面子が揃っていることだし、先に謝罪だけ済ませておくか」

「謝罪じゃと？ 何の話じゃ」

「招集状の件さ。称号剥奪がどうのこうの、ややこしい書き方をして悪かったと思つてな」

「ややこしい書き方じゃあ……？」

ドフラミンゴの言い方が気になったジンベエは急いで懐から自分向けの招集状を取り出してもう一度じっくりと読み込んだ。

不必要なほどに文章が長く、おまけに字も小さくて分かりにくい。そこにはジンベエが危惧している単語は一つも乗っていないかった。

「ま、まさか……！」

「ああ。別にここへ来なくても称号剥奪なんてことはなかったんだ。あくまで七武海としてのスタンスについて書いてあるだけだからな」
ぐしやりと招集状を握りつぶし、ジンベエは首謀者を睨みつけた。

「では貴様！ わしらを騙したのか!!」

「フッフッフッフ、人間の悪いこと言うなよジンベエ。書き方は紛らわしかったが、文章をきちんと読めば分かったはずだぜ？」

「ぐう……！」

こういわれてしまつては言い返す術がない。

現に丁寧に書面を読み込んでドフラミンゴの意図に気づき、この場を欠席したのがクロコダイルであった。

「称号剥奪など欠片も気にしなすさそうな奴らも来ていることには驚いたが……どうせここに集ったお前たちの目的は2つあるうちのどちらかだろう？ カイドウか、怪物キリアか」

円卓に座る七武海を順番に眺めていく。

誰も否定はしない。

称号？奪を恐れてやって来たジンベエですら、怒りの表情を浮かべながらも否定はしない。

そして、不動のボア・ハンコックすらも。

ドフラミンゴの言う通り、ここにいる面々の殆どは各自に届いたその2つの名のどちらかに——或いは両方に興味を持ってここに集った。

(相変わらず人気者だねエ、うちの後輩は)

「……ドフラミンゴ」

「なんだ？ ボア・ハンコック」

「ジンベエと違ってわらわはしっかりと招集状の中身を読み込んできた。そこに記載されている内容によれば、今回の招集に応じたからと言って四皇との戦いに同意したとみなすわけではないとあったが」

「ああ、その通りだ。別にここに来ただけじゃあ、四皇との戦いに同意したとはみなされない。……それはジンベエも含め、全員が知っているようだな」

「当たり前じゃ」

「結構。……不思議そうな顔をしているな、ボア・ハンコック。だが俺からすれば当然のことだ。やる気のない七武海なんざ戦力には数えられねエ。今回の戦争に半端な奴はいらねエんだ」

「……貴様、何が目的じゃ？」

「目的はその招集状に書いてある通りだ。俺は戦力が欲しい。だから、参加するかどうかは俺たちの話を聞いてから決めれば——」

「ああ？」

その時、ドフラミンゴの話を遮るかのように彼の懐から電伝虫の音が鳴り響いた。

「ちよつと失礼。どうしたヤマト。ああ？ なんだ泣いてんのかお前？ 何を言ってるのか分からねエよ。ちよつと席を外すから待て」

七武海の面々に断りを入れてから立ち上がって円卓から離れたドフラミンゴは少しの間電伝虫越しに誰かと会話をしていたが——

「……おい、それは本当か？ あのバカが……」

何の報告を受けたのか。

何かに耐えるようにプルプルと身体を震わせると、次の瞬間には身体の底から絞り出した大声で吠えた。

「あのクソ馬鹿がッ!!」

怒りのあまり放たれた霸王色の覇気が部屋を揺らす。

この場には彼の覇気で気を失うような者はいないがしかし、以前よりも格段に威力が上がっているその力に何名かは驚いたように目を見開いた。

「——失礼。テメエら、ちよつと茶でも飲んで待つていてくれ」

そう言つてドフラミンゴは風のような速さで部屋から出ていった。

そして数分後——

「おい、いいからそれを持ってこつちへ来いヤマト!」

「うわーん! キリアがアアアア!」

「みつともなく泣いてんじやねエ! ったく、テメエらはいつもいつも……! 俺の面子つてもんを考えたことあんのか?!」

「うわーんああああああん! そんなのないよおおおおお!」

「だろーうな!」

「……なにやら騒がしいな」

扉の向こうから聞こえてくる騒々しい声にミホークが反応する。

5人の視線が集まる中、円卓の間の扉が開いてドフラミンゴと銀髪の美女が部屋に入つて来た。

何故か泣きわめいている美女の両腕には大事そうに奇妙なものが抱きかかえられている。

「おい、ここにそれを置け!」

「うわーん! キリアが! キリアがあああああ——!!」

泣きながらもドフラミンゴの指示に従つて美女が両腕で抱えていたそれをそつと置く。

「——石になつちやつたあああああああ!」

そこには、目にハートを浮かべた状態で石化している男の姿があった。

「「「「……………」」」」

部屋の中が沈黙に包まれ、全員の視線がとある女性に集まる。

視線を向けられた彼女は震える指で石像を指さして言った。

「……………」これが、怪物キリアじゃと?」

クソ馬鹿を石化させた張本人、海賊女帝ボア・ハンコツクの信じたくないと言った様子の問いかけに対し、ドフラミンゴは神妙な顔で頷いて言った。

「ああ、これが怪物キリアだ」

「「「「……………」」」」

〃王下七武海 怪物キリア〃

こうして、円卓の間に七武海連合結成会議のメンバーが揃った。



「キリア! 無事でよかった!」

「おっとっと。どうした急に? しかも泣いてるじゃないか!!」クソ

! 一体誰がヤマトを泣かせやがったんだ!」

「「「「……………」」」」

「つていうか、あれ? ……どここだ? 俺はさっきまでヤマトとジエ
ンガをしていたはずなのに……………今度は何をやらかしたんだ俺?」

「いつも通り馬鹿をやってたんだクソ馬鹿が。すまねえなハンコツク。コイツに代わって謝罪させてもらうぜ。どうせコイツが口説いてきたんだろう?」

「……………ああ、その廊下ですれ違った際にな。鬱陶しかつたので反射的に石にしてしまったが、まさかこれがあの怪物キリアとは……………」

何とも言えない表情でキリアを見るハンコツク。

その瞳には失望の感情が浮かんでいる。

ドフラミンゴは深く頷いた。

分かる。分かるぞ、ボア・ハンコツク。

コイツのファーストコンタクトはだいたい人を失望させることから始まるからな。

「うわっ!! めっちゃ人いる……しかもよく見たら俺の先輩方じゃないですか……」

石化された前後の記憶は飛ばされてしまう。

キリアからすれば目を開けた瞬間には何故か円卓の間にいたようなものだろう。

さらに集まっているのが王下七武海の面々であることに気が付いたキリアはこの島にやって来た理由を思い出すと同時に、とある可能性に思い至った。

「いや、待てよ。七武海の後輩ってことはもしかして——」

キヨロキヨロとキリアの視線が動き、やがてとある女性をロックオンした。

「あ、あなたはまさか! せ、世界一の美女!! ボア・ハンコックさんではありませんか?! う、美しすぎる……! ああ……神よ! 俺が七武海になったのはこの時のためだったのですね! 感謝し、存分に口説かせていただきます! というわけで、ミス・ハンコック。良ければ俺とお茶でも——」

ガチンツ

再び元に戻ったはずのキリアの身体が石化した。

ハンコックによって石化が解除されてから実に30秒後のことだった。

全員の視線がまたとある一人に集中する。

「「「「……」」」」

「す、すまぬ。つい反射的に……」

謝罪するボア・ハンコックという非常に珍しい光景が見れたが、誰も彼女を責めることはしない。

ただ一人の猪武者を除いて。

「キ、キリア……!」

再び石になってしまった相棒を見て嘆くヤマト。

これが誰の仕業か分かった彼女はさすがかとボア・ハンコックへ歩

み寄っていく。

「おいその女！ キリアになんてことをしてくれるんだ！」

「待てヤマト。これは100%そのアホが悪い。また迷惑を掛けてすまねエがハンコック、コイツをもう一回元に戻してくれないか？」

「……」

滅茶苦茶嫌そうな顔でキリアを見るボア・ハンコック。

「……言っておくが、次またふざけ倒すようなら石化させた上で砕くからな」

「ああ、次は大丈夫だ。俺に任せておけ」

「……」

澁々無言で石化を解除する。

頼りになる先輩と海賊女帝の慈悲で再び野に放たれた害獣はキョロキョロと辺りを見渡し、首を傾げた。

「あれ？ 俺は何を——」

「キリア！ 無事でよかった！」

「ヤマト！ ところで、俺はここで何を——」

状況を確認すべく辺りを見渡していたキリアの視線がとある女性をロックオンする。

眼がハートのマークになり、お約束のようにボア・ハンコックに駆け寄っていく。

「あ、あなたはまさか！ せ、世界一の美女!! ボア・ハンコックさんではありませんか?! う、美しすぎる……! ああ……」

「……モネ」(ボソツ)

「お初にお目にかかります、ミス・ハンコック。俺の名前はキリア。以後お見知りおきを」

「……」

ドフラミンゴに小声で何かを吹き込まれたキリアはスツと真顔になって凜々しく挨拶をした。

そしてハンコックに背を向け、ドフラミンゴの方へ振り向く。

「やあ、ドフラミンゴ先輩」

「よう。ちなみに今日のごことはしつかりモネに伝えておくからな」

「もく、先輩、冗談キツイつすよ?」

「冗談じゃないが?」

「……本っ当に申し訳ありませんでしたああああああ!」

土下座も辞さない覚悟で頭を下げる七武海の新人。

「……これが、怪物キリア……」

「気持ち分かるが気にするなハンコック。コイツはこういう奴だ」

「……そうか。期待をしてここへやって来たわらわが愚かであったということか」

失望と共にそう呟いたハンコックはスツと席から立ち上がった。

「おい、どこへ行く気だ?」

「——興醒めだ。帰る」

「ちよ、ちよつと待て! まだメインの話を聞きちやいねえだろ?

それとも本当にその馬鹿だけが目的だったのか?」

「貴様にわらわの目的を話したところで何になる?」

「……なあ、確かにコイツはお前の期待したような男じゃないかもしれない。だがな、ちよつと気に食わないことがあっただけで早々に評価を決めつけるのはどうかと思うぜ?」

「……」

「おい、キリア。お前から弁明をだな——」

「これで許してください」

「土下座はやめろ!」

ドフラミンゴはプライドをかなぐり捨てて土下座をしているクソ馬鹿を全力で蹴り飛ばした。

「ハア、ハア……馬鹿が! セっかくの俺のフォローを台無しにやがって……!」

「ふん、やはりな。下劣で、プライドがなく、卑しい。……わらわは帰るぞ」

「おい! ……って、もうフォローもしきれねエか」

完全に機嫌を損ねてしまった海賊女帝は円卓の席を立ち、扉へと向かう。

如何にドフラミンゴといえども、今の彼女を引き留めるだけの言葉

は持っていなかった。

「あれ？ もう帰るんですか？ ミス・ハンコック」

「……そこをどけ、下郎」

蹴り飛ばされたキリアがちょうど扉の前にいたため、退出しようとするハンコックに見下ろされる形となる。

軽蔑に満ちた瞳で睨まれたキリアはのんびりとした調子で起き上がった。

「おっと、すみません。どうぞ」

そそくさと立ち上がり、ハンコックに道を譲る。

その誰にでもへりくだっていいような態度にも腹が立つ。

「……ふん」

ハンコックは歩き出す。

（……何が怪物じゃ）

ギリつと唇を噛み締め、行き場のない怒りを堪えながら出口へと向かう。

（……何が、天竜人殺しじゃ……！）

背中に刻まれた竜の蹄が疼く。

何故か酷く裏切られたような気分だ。

怒りと同時に悔しさすら感じる。

（……こんな男じゃったとはな……失望したぞ）

出口へ向かう海賊女帝と円卓へ向かう怪物がすれ違う。

お互いに視線を合わせることもしない。

だが、2人の身体が並行に重なった時、怪物はハンコックだけに聞こえる小さな声でポツリと呟いた。

「——レイリーよろしく」

「ッ？」

ピタリ、と迷いなく扉へと向かっていたハンコックの脚が止まる。

この男、今何と言った？

「……貴様——」

「帰りにシャボンディ諸島に寄ったら伝えておいてもらえませんか？

あの時はよくも見捨ててくれたなって」

「……」

ハンコックの聞き間違いではなかったらしい。

間違いなくこの男は冥王シルバース・レイリーを知っている。

いや、もつと正確に言うのであれば――

ハンコックがレイリーと関りがあることを知っている。

(こやつ……)

レイリーやシャツキーが簡単にハンコックたちのことを喋るとは
思えない。

(どこまで知っている?)

ハンコックの中に疑念が生まれる。

事と次第によってはこの男を――

「あれ? お帰りにならないんですか? ミス・ハンコック」

「……貴様、何を考えている?」

「さあ? 逆に何を考えていると思います?」

「……ふざけた男だ」

「よく言われます」

ニツコリと爽やかな笑みを浮かべる怪物。

「そうか……では、質問を変えよう。何を知っている?」

「何を、とは? 抽象的でいまいちよく分かりませぬ」

「……レイリーからわらわたちのことを聞いたのか?」

「いいえ、違います。正確に言えば俺はまだ彼と出会ってませんから」

「意味の分からないことを――」

「ああ、でも。あなたのことなら知っていますよ」

「……だから、何を知っているのかと聞いておるのじゃ」

「全てを」

「ッ!」

全てを知っていますよ。

怪物はそう言った。

殺さねばならない。

コイツは絶対に殺さなければいけない。

反射的に怪物の首を撥ねようと脚を動かしかけたハンコックだが

（なんじゃ……その眼は……）

気持が悪いほど透き通った黄金の瞳を前に動きを止めた。

反射的に石化させた時と同じく、美しいものを前に純粋な喜びを表しているようなその瞳。

邪気の欠片もなく、ハンコックが臨戦態勢に移ったことも分かって
いるだろうに敵意の欠片もない。

これでは動揺している自分が愚かに見えてしまう。

「……」

この男が何を考えているのかさっぱり分からない。

そして、「全て」とは言っていたが何を知っているのかも今の段階
では不明だ。

洗いざらい吐かせてやりたいところだが、ここは人が集まりすぎて
いる。

ハンコックは警戒心をそのままに臨戦態勢を解いた。

「……後で話がある」

「2人きりで？ ……これは期待してもいいですか？」

「石にするぞ下郎が」

「あなたにならされてもいいです」

（もう2回しているが……）

ただこの不可解な男との会話でこの場でこれ以上の問答は無用と
判断したハンコックは喉まで出かかっていた言葉を押しとどめた。

「楽しみにしてますね、ミスハンコック」

「……」

ボア・ハンコックは踵を返し、先ほどまで自分が座っていた円卓の
席まで歩いていく。

（何を知っているにせよ……）

背中に刻まれた竜の蹄がまた疼く。

ハンコックですら美しいと思うあの黄金の瞳。

キラキラと輝くあの瞳には――

(わらわに対する軽蔑は、なかった)

その事実には酷く安堵して……海賊女帝は静かに円卓の席に腰を下ろした。

「キリア、お前……」

「さあ、先輩。僕たちも席に座りましょう」

2人の間でどのような会話が合ったのか知らないドフラミンゴは困惑した様子で後輩を見る。

キリアはニツコリと笑って着席を促すのみ。

(詳細は良く分からねえが……ボア・ハンコックを引き留めるとはよくやった。――いや、追い出しかけたのもアイツだからよくやったも何もないが……)

いまいち釈然としない思いを抱えながらドフラミンゴは自身の席に着いた。

後はキリアとヤマトが席に着けばようやく会議を始められる。

「失礼いたします。飲み物をお持ちしました――」

その時、扉が開いてお盆に飲み物を乗せた使用人が入室してきた。

「……男か」

「女だったら良かったのか？」

恨めしそうな表情で使用人を見るキリア。

呆れた様子でドフラミンゴは早く席に着くようキリアに言う。

七武海たちの席にそれぞれ飲み物を置いていく使用人は明らかに気合いを入れて作ったであろうカクテルをボア・ハンコックの前に置いた。

「ボア・ハンコック様。こちら、当島自慢のスペシャルカクテルになります」

「……ああ」

「是非ハンコック様にご賞味いただきたいと思っております」

「……ああ」

「アイツ、ミス・ハンコックに媚び売ってやがる……!」

「いいから早く座れ」

どこか上の空なハンコックはそれでも老若男女を魅了する妖艶な仕草で運ばれてきたカクテルを一口。

「ふむ……なかなか美味じゃ。褒めて遣わずぞ、男」

「お気に召されたようで何よりでございます」

「アイツ、ミス・ハンコックに褒められてやがる……!」

「早く座れ」

ぶーぶーと唇を尖らせるキリアにドフラミンゴが言う。

渋々席に着くべく移動するキリアはハンコックに媚びを売っている使用人を見てあることに気が付いた。

(……あれ、コイツ……)

「さて、皆様もドリンクのご希望がありましたら私にお申し付けください」

(……いや、それも気になるけど、それ以上にコイツ……!)

「お呼びいただく際にはそちらのベルを鳴らして頂ければ——」

(モブの分際で腹立つくらいにイケメンだ……!)

「……おい、お前」

「はい。どうされましたか?」

「——俺以外のイケメンはいらねえんだよ」

「は、はい?」

「きやつ、急にどうしたのキリア?」

何故か近くにいたヤマトを抱きしめたキリアは彼を庇うようにしながら凄まじい眼力で使用人を睨みつけ、何の躊躇もなく王の力を発動させた。

「失せろッ!!」

「ひっ!!」

突如放たれた霸王色の覇気に皆が驚愕する。

顔を青くした使用人は急いで敬礼をしてから立ち去った。

「……急にどうしたお前?」

「いや、何となく」

七武海たちを代表して尋ねたドフラミンゴに素っ気なく答えるキリア。

彼は現在20歳。

絶賛、シャンクスごっこに嵌っているお年頃である。

「……もういい。頼むから黙って席についてくれ。それだけでいいから……」

「うい」

「あつ、キリア。この椅子凄いい座り心地いいよ！」

「マジか！ 俺にも座らせてくれ！」

「円卓は全部同じ椅子だボケどもツ！ いいからさっさと座れツ！」

ドフラミンゴ必死のツツコミ。

彼はもう叫びすぎて喉が枯れそうだった。

必死の訴えが届いたのか、ようやくキリアとヤマトは席に着く。

紆余曲折（主にキリアのせい）であつたものの、これで行く円卓の8席が埋まった。

「ふう、これでようやく会議を始められるぜ……なんだ teme 等、その眼は」

「……いや」

集った七武海たちは思った。

今後はドフラミンゴにはちよつとだけ優しく接しよう。

どうせ皆さん暇なんですよ？

「さて、色々ハプニングがあったが……改めて、ここへ集まってくれたことに礼を言う」

仕切り直しを兼ねてドフラミンゴが挨拶を行う。

「俺のことは知っているだろうから自己紹介は省くが、俺の隣に座っているコイツが噂の新入りだ。挨拶しろ、キリア」

「お初にお目にかかります先輩方。王下七武海に新しく加入したキリアです。以後お見知りおきを」

キリアとて常時ふざけているわけではない。

真剣な雰囲気の中で普通に会話をする分には問題ないタイプの狂人だ。

急にまともになった男に戸惑いを隠せない様子の七武海たち。

ドフラミンゴは内心で七武海たちの反応に凄い共感しながら次にキリアの隣に座るヤマトを紹介した。

「そして、コイツの名前はヤマト。——カイドウの息子だ」

「なにッ!？」

「カイドウの息子だとお!？」

「……娘じゃなくてか?」

「わらわには到底及ばぬが中々美しい顔をしておる」

各々思うことはあれど、やはりカイドウの息子というインパクトはかなり大きいらしい。

驚きの表情を浮かべている者がほとんどだ。

「全てはこのヤマトと鬼ヶ島で出会ったことから始まった」

本当はクソ馬鹿が酔っぱらってやらかしたせいだが、そこは説明しないでしようがないので端折っていく。

これ以上キリアの好感度を下げたら本当に全員帰りがねない。

「カイドウの息子と言ったが、コイツ自身はカイドウと敵対し、長年殺し合ってきた仲だ」

「ほう?」

「カイドウと……」

「親と殺し合いとはのお……」

「……」

七武海たちが各々反応を見せる。

「本人たつての希望でな。コイツから自身の生い立ちとワノ国の現状について説明をしてもらおうことにする。ヤマト」

「ああ、分かった」

ドフラミンゴからバトンを手渡されたヤマトは立ち上がり、改めて七武海たちを相手に名乗りを上げた。

「改めて僕の名はヤマトだ！ ドフラミンゴが言った通り、僕はカイドウの息子として生まれ、そして父と対立することを選んだ。でも勘違いをしないでほしい。これは単なる親子喧嘩ではないんだ！ 僕とカイドウの対立には、ある侍が関わっている」

ヤマトはチラリと隣を見た。

頼りになる相棒は静かに頷く。

（そうだ。僕はカイドウを倒す戦力を集めるためにあの島を出たん
だ）

聞けば、彼らはドフラミンゴやキリアに匹敵する力の持ち主だという。

是が非でも仲間にしなければならない。

「どうか聞いてほしい！ ワノ国で起きた悲劇と我が父、カイドウの非道を！」

ヤマトは語り始めた。

ワノ国にいたおでんという偉大な侍の話を。

そしてワノ国の歴史と、そこに現れた傍若無人の悪党にして実父であるカイドウの話を。

鬼ヶ島に囚われ続けていた自分の話を。

熱を込め、時には激情のあまり涙も流しながら必死に訴える。

カイドウを倒したい、と。

ワノ国を救いたい、と。

でも自分だけでは力が足りない。

侍たちの無念を晴らすには圧倒的に戦力が足りない。

いきなり現れて命を懸けるといふことがどれほど無茶苦茶なことか理解はしているけれど。

——それでも一緒に戦ってほしいと訴える。

「お願いだ！ 僕たちに力を貸してほしい！」

「……」

七武海たちは誰も口を挟むことなく最後までヤマトの話聞き終えた。

さて、果たして何人が賛同してくれるのか。

初めて外の世界の人間に自分から勧誘を掛けたヤマトはドキドキしながら彼らの反応を待つ。

しかし、現実には世間知らずの小娘に対して非常に冷酷だった。

「——で、わらわたちには何があるのじゃ？」

「……えっ？」

熱くなっていたヤマトに冷水を浴びせるかのように冷たい声が響く。

海賊女帝は無表情でこてんと首を傾げた。

「カイドウを倒すことでわらわたちには何のメリットがあるのじゃ？」

「め、メリットって……ワノ国の人たちを救うことが……」

「それは貴様のメリットであろうが、小娘。わらわたちには何が提供されるのかと聞いておるのじゃ」

「ッ」

冷酷にヤマトの熱弁を切って捨てるボア・ハンコック。

しかし、彼女だけではない。

他の面々も殆どが同じように興味がないといった顔をしている。

(こ、これが……これが海賊だっていうのか……!!)

少なくとも、ヤマトがおでんの日誌から知った海賊とはこういう薄情な連中ではなかった。

彼らは仁義の世界の中で人との縁を全力で大切にし、船員たちと笑い合い、理不尽を見過ごせない——そういう者が海賊であるはずだったのだ。

(いや……いきなり会ったばかりの人間に命を懸けて戦ってくれと言われたところで賛同してくれるはずもないか……僕は、馬鹿だ)

失意と無力な自分への怒りでさらなる涙が溢れてくるヤマト。

そんな彼の肩にそつと手を乗せながらキリアは目を伏せた。

やはり、情に訴えかけるだけではダメか――

「その話、乗った」

力強い声が円卓の間に響く。

顔を上げたヤマトの先にいたのは威風堂々たる魚人族の益荒男。

「海侠の、ジンベエ」

席を立ったジンベエはヤマトの前までやってくると、彼の肩にそつと手を置いて言った。

「お前さんの思いはよう伝わった。今まで長い間、1人でよう耐えてきたのお……微力ながらこの海侠のジンベエ、助太刀させていただけ」

「……僕の話を、信じてくれるのか？」

「信じるとも。お前さんの声に、涙に、嘘などなかった。仁義を欠いてこの海は渡れん。お前さんのように一本筋が通った侍をどうして見捨てられようか」

「ジ、ジンベエ……!」

「それに、お前さんの話に出てきたおでんという侍……確か白ひげのおやつさんが言っていた元2番隊の隊長じゃろう?」

「白ひげ海賊団を知っているのか?」

「知っているも何もわしの大恩人じゃ!」

ジンベエは男気溢れる笑みを浮かべて言った。

「おでんの無念を晴らすこと、それは白ひげ海賊団への恩を返すことに繋がるとわしは考える。どうか手助けをさせてくれ、侍よ」

「うん……うん! お願いします!」

「わっはっは! よろしく頼むぞ!」

王下七武海 海侠のジンベエ

参戦決定。

「なんて……」

「うん？」

「なんていい奴なんだ！ 海侠のジンベエ！」

急に大声を上げる怪物キリア。

何事かと困惑するジンベエに右手を差し出し、理解不能の狂人は満面の笑みで言った。

「気に入った！ 握手してくれ！」

「あ、握手？ まあ、別に構わんが……」

「ムフフフ……今後とも、是非よろしくお願いしますよ！ 新世界の荒波は厳しいですからねエ……！」

「???」

言っていることは1mmも理解できなかったが、多分、理解しようとしてもできないタイプの人種と悟ったジンベエは深く考えるのを止めた。

（ああ……未来の操舵手と握手してるう……麦わらの一味としてちゃんと出会うことになるのは3年後だけど、その時はよろしく頼むぜ！

ジンベエ！）

ジンベエとの握手を堪能したキリアは満足げに頷いた。

「……まあ、コイツは良く分からないから放っておこう。さて、ジンベエの他に四皇との戦争に参加してくれる奴はいるか？」

「キシキシシ……質問がある」

「なんだ？ ゲッコウ・モリア」

「仮に俺たち全員でカイドウに挑むとして……勝算はあるのか？」
「当然だ」

「本当かア……？」

怪訝そうな表情でドフラミンゴを見ながらモリアは語る。

「聞いた話によればテメエら3人、ドレスローザでカイドウを迎え撃つたらしいが……海軍の力も借りてようやく撃退した程度だったそうだなア？ しかもカイドウは幹部も連れずに単騎だったそうじゃねえか」

「……」

「自分たちだけじゃあ勝てねエから俺たちを招集するって考えは分かるなくもねエが、次にぶつかるのはカイドウではなく百獣海賊団だろう？ 本当に勝ち目が——」

「ある」

きつぱりと言い切ったドフラミンゴの言葉には確かに絶対なる自信が込められていた。

「策があるんだ。俺たちが手を組めば四皇なんざ敵じゃねエ」

「その根拠は？」

「こっちはカイドウの手の内を知り尽くしているからだ。なア、ヤマト？」

「……カイドウの息子」

「ドフラミンゴの言葉は嘘じゃない。僕は百獣海賊団のことを知り尽くしているし、カイドウとは数えきれないくらい戦ってきた。役に立てるはずだ」

「敵の能力、数、鬼ヶ島の構造……全て情報は揃っている。それに俺の送り込んだスパイたちがまだ百獣海賊団内に潜入している。最新の動向を掴むことも可能だ」

「……」

「そして確かに俺たちはカイドウに敵わなかったが、それはあそこが俺の国だったからだ。次に戦う時はこちらから直々に鬼ヶ島へ殴り込みを掛ける。何の躊躇もなく全力で暴れてやるさ」

「……余程自信があるようだな」

モリアの言葉を受け、ドフラミンゴは不敵に笑った。

「まあ、別に参加したくないなら構わねエぜ？ それならこっちも別の手を打つだけだ。ただ——テメエがカイドウにリベンジする機会は二度となくなるけどな」

「……」

嘗て百獣海賊団と鎬を削っていたゲッコウ・モリア。

大事な仲間たちを全員失ってからは他力本願になり、新世界に足を踏み入れることもなくなったが……恐らく集った七武海たちの中で

最も「カイドウ」の名に導かれてここに来たことを否定はできない。
「キシシシシ……戦いの中で生まれた死体は全て俺に寄越せ。それが条件だ」

「いいだろう。好きにしろ」

王下七武海 ゲッコウ・モリア

参戦決定。

「条件」って話で思い出したが、これも説明しておこう。今回の戦争に参加するメリットとして、戦いに参加した奴らはカイドウ撃破後に七武海の地位をさらに向上させる報酬が用意されている」

「随分と曖昧な報酬じゃな」

「噛みつくなよハンコック。条件は今世界政府側と擦り合わせている最中だ。だが、そう悪くない報酬にはできそうだぜ？」

「……」

報酬の存在を仄めかしつつドフラミンゴはまだ参戦を決めていない面々に語る。

「キリア、七武海が存在理由を言ってみろ」

「海軍大将から逃げるためです」

「そうだ、その通り。この新世界に君臨する四皇どもに対抗するためだ」

(((((……言ったか?))))))

心の中で疑問府を浮かべる七武海たち。

だが、細かいことにツツコミを入れていたら話が前に進まないことは何となく分かったのでドフラミンゴに舵取り役を任せ、話の続きに耳を傾ける。

「世界は四皇・七武海・海軍のバランスで成り立っている。それはカイドウだって認識していたはずだ。だが、奴は何の断りもなく俺の——七武海が治める国へと侵略してきた。これが意味するところが分かるか?」

両腕を広げ、天夜又は大仰に語る。

「四皇は舐めてやがるのさ! 七武海程度、恐れるに足りんとな!」

安い挑発ではあるが、何名かが反応したのを見逃さず語り部は続ける。

「テメエらが秩序や海軍の思惑に興味がないことは知っている。だが、それでもこうして手に入れた七武海の座が——延いては自分を低く見積もられるのは我慢ならねエだろ?」

「……低く見積もられたのは貴様だろう、ドフラミンゴ」

「いいや、違うぜ鷹の目。七武海だ。七武海が甘く見られたんだ。こうして招集を掛けたところで誰も来やしねエだろうと……集まったところで勝てやしないだろうとな」

「……」

「四皇に教えてやらなきやならねエ。何のための均衡かを。何のための七武海かを」

それに、とドフラミンゴは不敵に笑った。

「俺たちは海賊だ。世間から政府に飼われていると罵倒されようがそれは変わらない。だからそろそろ手綱を握っているつもりでいる連中に教えてやらねエか? テメエらがどういう化け物たちを雇っているのかを」

「」「……」「」

七武海たちは各々考え込む。

実際のところ、ドフラミンゴの話には筋が通っていた。

このまま四皇に舐められたままでは七武海解体とまではいかなくとも、今後の方針について政府が見直しを図る可能性はある。

「ドフラミンゴ」

「なんだ? 鷹の目」

「俺たちを焚き付けようという貴様の意図は良く分かった」

ドフラミンゴ、キリアにとつての大本命である世界最強の剣士が口を開いた。

「正直に言っつて、四皇との戦いに興味がないわけではない」

「ほう?」

「だが、この鷹の目を動かそうというのだ。それ相応の対価を差し出す必要があるのではないか?」

「対価……対価か。意外に強欲なんだなア、鷹の目」

「その海賊女帝と同じく七武海の地位向上などという曖昧な報酬では満足できないという話だ。他に見返りはないのか？」

予想以上にやる気を見せているミホークに内心期待しつつ、ドフラミンゴは思案してから答えた。

「手に入れたカイドウの縄張り、ワノ国から好きなものを持っていけばいい。特に鷹の目、テメエだったらワノ国に眠っている伝説の妖刀やら名刀やらに興味あるんじゃないかねエのか？」

「……興味がないといえば嘘になるな」

「それにワノ国には侍とかいう大層強い連中がうじゃうじゃいるらしい。鷹の目に限った話じゃねエが、ここ最近の海は平和でいけねエ。テメエらも七武海に相応しい実力を維持するために偶には運動した方がいいと思うぜ？ なア、モリア」

「なぜ俺を見る！」

「テメエの膨らんだ下っ腹に聞いてみな」

「舐めやがって……！」

ギャーギャーと騒ぐドフラミンゴとモリアを尻目にミホークは思考する。

七武海の地位向上、四皇との戦闘、ワノ国の刀。侍と名乗る戦士たち。

(……ここら辺が妥協点か)

「——いいだろう。その話、俺も乗ることにする」

「鷹の目！」

「ほろっ？」

「……」

「わっはっは！ お主が加わるなら百人力じゃのう！」

随分とあっさり参戦を決意したミホークは席を立った。

「おい？ どこへ行く気だ？」

「決行日が決まったら呼べ。それまでは自由にやらせてもらうぞ」

一方的にそう言い残すとミホークは歩き出し——キリアの席の後ろで立ち止まってから彼の耳元でそつと囁いた。

「……良い眼を持っている。よく気が付いたな」

「……連中には詳しくてね。でも、アンタも大概いい眼をしているよ」
「侮るな。俺は鷹の目だ」

2人だけにしか分からない会話を交わし、世界最強の剣士は円卓の間を立ち去って行った。



円卓の間を出て廊下を歩くミホークは先程キリアが霸王色で追い払った男が次の飲み物を持っていくべくこちらへ歩いてくるのを発見した。

「おや、ジュラキュール・ミホーク様。もうお帰りですか？」

「……」

使用人の問いには答えず、ミホークは一瞬で抜刀した黒刀「夜」を喉元に突きつけた。

「ひっ!?!」

「……貴様、何者だ？」

「な、なにを……!?!」

「歩幅が妙だった。それに懐に何か隠しているな」

「……」

「政府のエージェントか？ 上に言われて監視にでも来たか」

「クソツ！」

咄嗟に逃げ出していくエージェントを……ミホークは追わなかった。

恐らく七武海連合の話聞き、監視役として送り込まれてきた諜報員なのだろう。

懐に隠していたのも盗聴器の類に違いない。

(あの一瞬で政府のエージェントを見抜くとは……なかなかやる)

夜を納刀したミホークは自身の小舟へ歩きながらあの怪物につい

て考える。

騒々しく、破天荒で、人を無意識に振り回すタイプ。
自由奔放に見えるが——ああいう手合いこそ油断ならないことを
ミホークはよく知っている。

それに、すれ違った一瞬にミホークを睨みつけたあの黄金の瞳。

「……怪物、か」

世界最強の剣士は良い暇潰しになりそうだと楽し気に笑った。

王下七武海 鷹の目のミホーク

参戦決定。

◆◆円卓の間◆◆

ミホークが立ち去った円卓の間にてドフラミンゴは内心狂喜乱舞
していた。

なにせ、大本命のミホーク参戦が決まったのだ。

正直、これだけでもこの会議を開いた意味はあつただろう。

さらにはやる気を漲らせているゲッコー・モリアに、こちらは意外
だったが最強の魚人であるジンベエまで参戦するという。

上手くいきすぎて怖いまであるが、いい流れは彼としても大歓迎
だ。

「さて、残るは——」

ボア・ハンコックとくまだ。

だが正直、この2人に関しては勧誘を半ば諦めてもいた。
なにせ、どちらにも参戦する理由がなさすぎるからだ。

ジンベエのように義理人情と白ひげへの恩返しもなければ、

ゲッコー・モリアのようにリベンジマッチの理由もなく、

ミホークのように戦闘狂的な気配もない。

(さて、どうしたもんかな……)

ドフラミンゴはどうやって説得したものかと後ろを振り返り——
「くま先輩、参戦してくれますよねっ。」

「……ああ」

2秒で参戦が決まったくまを見て白目を剥いた。

「あざーっす。じゃ、そういうことで」

「……ああ」

「ちよつと待て!!」

いくら何でも話が早く進み過ぎである。

地道に説得をしていたドフラミンゴが馬鹿みたいだ。

「おい、待てくま！ テメエ、今までだんまり決め込んでいたくせに急に参加するとはどういうことだ？」

「……七武海の地位向上は俺にとっても必要なことだ。だから参加を決めた。それだけだ」

「本当にそれだけか？」

「では俺は参加しない方がいいのか？」

「……ツチ」

無論、くまも参加してくれるならそれに越したことはない。

ただ、いまいち腑に落ちないところがあるというだけで。

「おいキリア。テメエ、くまに何を吹き込みやがった？」

「何も吹き込んでなんかないっすよ。くま先輩がパイセン先輩より優しかっただけです」

「なんだそりやあ？」

「……俺も失礼する」

「ちよつと待てくま！ 話はまだ終わってねエぞ！」

ミホークと同じく円卓の扉に向かうくまはキリアの席の後ろで立ち止まり、彼の耳元でそつと囁いた。

「……ドラゴンとの契約、忘れるなよ」

「もちろん」

2人だけにしか分からない会話を交わし、暴君は円卓の間を立ち去って行った。

王下七武海 暴君バーソロミュー・くま

参戦決定。



「……ええ、はい。そうです。七武海たちは本気で同盟を組んで百獣のカイドウに挑むつもりの方で……」

七武海たちが滞在する屋敷の中でコソコソと電伝虫に話しかけている男がいた。

使用人の格好をしているこの男はイケメンだからと霸王色で部屋から追い出され、ミホークに夜を突きつけられるなど散々な一日を過ごしている最中だ。

「このまま連合を結成させてもよろしいのでしょうか」

「……構わん。カイドウと七武海たちが勝手に殺し合ってくれるならそれに越したことはないだろう」

電伝虫の向こうにいる老人が答えた。

それだけで男は安堵する。

あんな化け物揃いの中に飛び込んで連合を阻止するなど至難の業だったろうから。

『だが——』

今度は別の老人が口を開く。

『確実に死んでもらわなければならぬ男が1人いる』

電伝虫越しでも相当な怒りが伝わってくる。

この老人たちをここまで怒らせるとは相当だなと内心思いながら男は耳を傾ける。

『奴は調子に乗りすぎた』

『ああ。超えてはいけない一線を越えたのだ』

『だというのに世界を引っ掻き回して強引に七武海の座につくその凶々しさ』

『非常に目障りだ』

『以前は革命の流れが邪魔だったが、今となっては奴も革命軍の裏切り者』

『死んだところで革命が燃え上がることもないだろう』

男は静かに問い掛けた。

「(指示を)」

『連合結成の邪魔はせんでいい。代わりに、奴がカイドウと当たった際に——』

『——確実に殺せ』

そして電伝虫は切れた。

「……あんな怪物を殺せって？」

尋常ではない覇気と一瞬で自分の正体を見抜いた黄金の瞳を思い出す。

「……人間に任せていい仕事じゃないだろう」

男は乾いた声で笑った。

◆◆円卓の間◆◆

くまが立ち去った円卓の間にてドフラミンゴは内心さらに狂喜乱舞していた。

なにせ、七武海4名の参戦が決まったのだ。

正直、これだけでもこの会議を開いた意味はあっただろう。

「さて、残るは——」

この場にはいないクロコダイルを除けばボア・ハンコックのみだ。

(さて、どうしたもんかな……)

ドフラミンゴはどうやって説得したものかと後ろを振り返り——

ガチンッ

「……本当にしつこいな、下郎」

「キ、キリア——!!」

「……」

「ど、どうしよう桃色！ キリアがまた石になっちゃった！」

「……」

何故かまた勝手に石化したクソ馬鹿がいた。

ヤマトは涙目で焦り、ボア・ハンコックは心底呆れた表情で溜息を

ついでに。

ドフラミンゴは思った。

このままこの石像叩き割りてえなア……と。

海賊女帝ボア・ハンコック

◆◆円卓の間◆◆

「……おい、なんでコイツはまた勝手に石化しているんだ？」

「わらわの身体をジロジロと眺めてきた挙句、再び鬱陶しい求婚をしてきたのでな。つい石にしてしまった」

「……」

「うわーん！ キリアああああああ！」

完全に自爆だった。

どうしてコイツは絶対に踏むなど書かれてある地雷を自分から踏み抜きにいくんだろうか……。

「ハンコック。悪いが、もう一度だけ元に戻してやってくれねエか？」

「……」

「お前とキリアの間に何があるのかは知らねエが、何か話したいことがあるんだろう？ そのままじゃあ、話し合いもクソもねエぞ」

「……」

ハンコックは目にハートを浮かべ、だらしない顔で固まっているキリアを鬱陶しそうに一瞥した後、渋々といった様子で言った。

「……これが本当に最後じゃからな？」

「ああ、分かっている。次に馬鹿やらかしたら全員でコイツを殺そう」

さらっと物騒なことを言うドフラミンゴ。

「まったく……さっさと砕いてしまえばいいものを……」

そう言いながらもハンコックは今この場で真剣に石像を破壊することを考えていた。

こんな狂人に自分の秘密を握られているかもしれないと思うと気が気ではない。

勝手に自滅してくれたのだから、これは絶好の機会だろう。

「いや、それは止めておけハンコック」

「なぜじゃ？」

「そいつ、砕いた先から無限に増殖してくるだろうから」

「気持ち悪っ」

ドン引きしているハンコックがキリアの石像を眺める。

(ミス・ハンコック！)

(なんて美しいんだ……！)

(デートしたい！)

(こつち向いてくださいよ！)

(おばーい)

「……」

なんか本当に増えて復活しそうだったのでハンコックは大人しく石化を解除することにした。

(……何を知っているのかは知らんが、その気になればいつでも石化できる。どこで情報を入手したか吐かせたらさっさと石にして海に捨ててしまおう)

こうもひよいひよい石化できるところを見るに、ハンコックが彼を殺すのはそこまで難しくはなさそうだ。

慢心と共にハンコックはキリアの石化を解除させた。

「……あれ？ 俺は何を……？」

「また馬鹿を……もういいか。色々あったんだよ」

「そうですか」

大して興味なさそうに答えたキリアはボア・ハンコックに向き直った。

「それじゃあ、残る七武海はミス・ハンコックだけですし、個室で秘密の会話といきましょうか。ぐへへへ」

「いい加減学習しろ馬鹿が！」

ハンコックの蹴りとドフラミンゴの拳とヤマトの金棒がキリアに突き刺さる。

凄まじい勢いで吹き飛ばされたキリアは円卓の間の扉を破壊し、廊下まで放り出された。

「痛てて……パイセンとハンコックさんはともかく、なんでヤマトまで？」

「あれ……ご、ごめん。なんかノリでつい手が出ちゃった……」

「そうか。ノリか」

じゃあいいや、と寛大な態度でヤマトを許してからキリアは立ち上がった。

「さて、それじゃあミス・ハンコック。真面目な話をしましょうか。パイセン、この先の部屋を借りますよ」

「ああ、好きにしる。大して期待してねエから」

「酷いなあ……」

ヘラヘラと笑いながらキリアが歩き出す。

「さあ、ミス・ハンコック。こちらへ」

「……」

ボア・ハンコックはキリアの背中を追いながらここへ来たきつかけを思い出していた。



七武海連合結成会議より数か月前——怪物キリア七武海加入のさ
らに前の話。

その日、女ヶ島に激震が走った。

「男が天竜人を殺した……!?!」

「本当じゃ。この紙面を見よ!」

言葉に出すのも信じられないことがニヨン婆の口から飛び出し、驚きを隠せないボア・ハンコック。

さらにそこに記載されていた内容を見て、彼女は失神寸前の衝撃を受けた。

【天竜人を5名殺害。海軍大將が追跡も未だに捕まえられず】

「海軍大將が追っているにも関わらずこの男はまだ生きておるのか？」

「それは今朝の紙面じゃ。少なくとも今の段階では死んではないニヨだろう。……明日の紙面で死亡記事が載る可能性が高いがな

……」

「……」

ハンコックは今亡き大恩人のことを思い出していた。

(こんな大馬鹿者がまだこの海におったのか……)

いや、大馬鹿などと言う単語では済ませられない。
完全に狂人の類だ。

「……明日、また紙面を持ってくる」

「……ああ。頼む」

気を遣ってくれるニヨン婆の言葉に頷きつつ、ボア・ハンコックはいつまでもその紙面の字を脳裏に焼き付けていた。

そこからは毎日の新聞が待ち遠しいやら、怖いやら……。

新聞には様々な島で起こった男と大将の戦いが記されていた。
街を半壊させたあの、幾つかの海賊が戦闘の余波で沈没していったのだの。

やはり世界に喧嘩を売っただけあつて確かな実力を備えているらしい。

ハンコックは男が生きているという紙面を見るだけで少しだけ嬉しくなった。

だが、男の無茶苦茶な快進撃は留まるところを知らない。

「また1人天竜人を殺したじゃと……!!」

「ああ。特に奴隷への扱いが酷かったことで有名な天竜人を躊躇いなく殺し、さらに脚でその遺体を踏みつけたのじゃとか」

「く、狂っておる……」

傍若無人の海賊として名が知れているハンコックをして顔面蒼白になるほどの蛮行。

「聞けばこの男の追跡に海軍大将が2名派遣されているらしい。流石にもう、コヤツの快進撃はここまでじゃろう……」

ニヨン婆はそう言って俯いた。

ここ最近のボア・ハンコックは紙面が届くたびに嬉しそうにしていたから、こういうった形で希望が途絶えるのは非常に残念だ。

「明日から紙面はもう取り寄せないことにする」

「いや、待てニヨン婆」

ようやく現れた彼女の過去を払拭してくれるであろう男に期待を寄せていただけに、死亡記事を見せるのは酷な話だろう。

自分のところで情報を止めておこうと決心したニヨン婆だったが、ハンコックが待ったを掛ける。

「明日からも引き続き紙面を提出してくれ」

「……本当に良いのか？ 辛くなるだけかもしれないぞ？」

「構わぬ。わらわはこの男の行く末を最後まで見届けたいのじゃ。それに——」

「それに？」

ハンコックはどこか遠くを見つめながら言った。

「わらわは確信しているのじゃ。この男は絶対に死なない、と」

「……そうか」

この場ではハンコックを立て、余計な口出しをしなかったニヨン婆だが、それでも内心では男の死亡記事が来ることになるだろうと予想していた。

（海軍大將はそこまで甘い存在ではない。世界を維持する最高戦力2人に襲われて生き残れるはずもないのじゃ、蛇姫よ）

だが、ニヨン婆の予想は大きく外れることになる。

「ほら！ 言っただであらう？ 男は死なんとな！」

「あ、ありえぬ……こんなこと、あり得るはずが……」

笑うハンコックの言葉は正しく、男は平然と次の日も生き残っていた。

「……じゃが、明日には……」

その次の日も生き残っていた。

「なぜじゃ？ なぜ死なないのじゃコイツは……」

その次の日も生き残っている。

「……これは世界が荒れるぞ。絶対のルールに逆らっても生き残り続ける男など、世界政府が許すはずがニヤイ！」

その次の次の次の次の日も生き残り続けている化け物の記事を見ながらニヨン婆は呆気にとられる。

あり得ないものを見るような目で紙面を眺めるニヨン婆に対し、ハンコックの方はずっとご機嫌だった。

そうして機嫌が良いハンコックのお陰で平和な生活が続いていた

ある日、彼女の元に政府から知らせが訪れる。

「王下七武海の招集じゃと？ 何のためじゃ？」

「なんでも、大将2人掛かりでも仕留めきれないから新たに戦力を投入するとのことじゃ」

「……」

黙り込むハンコックを見たニヨン婆は彼女の背中を押すように言った。

「行ってきたらどうじゃ？ 蛇姫。どのような男なのか以前よりずっと興味があつたのじゃろう？」

「……じゃが、これは討伐命令じゃぞ」

「だからこそだ。お主が出れば七武海の枠は1つ減ることになる。――

――上手くやれば、その男を守ってやれるやもしれぬぞ」

「……」

ハンコックは決断した。怪物キリアの討伐に参加することを。

結果的に距離の問題からハンコックの参加はなくなったが、それでも彼女の中にはこの怪物と会って直に話をしてみたいという欲求が生まれていた。

そして、今に至る。



「いやー先ほどは失礼いたしました、ミス・ハンコック」

「全くじゃ」

こじんまりとしながらも美しい海を眺めることができる部屋に移動したキリアはボア・ハンコックに椅子を勧めつつ、笑いながら謝罪をした。

「貴様、普段からあんな調子なのか？」

「ええ。これはもう性分みたいなものでして。でも、ミス・ハンコック程の美人であれば――」

「その呼び方は止めよ」

「はい？」

「その『ミス・ハンコック』という呼び方じゃ。そこはかたなく馬鹿

にされている気になる」

「そんなつもりはないのですが……」

参ったな……と頭を掻きつつ、彼女の呼び方を考えていたキリアは脳裏に浮かんだシンプルな言葉を口に出した。

「では、〃女王〃とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「……悪くない。これからは敬意を込めてそう呼べ」

「承知いたしました」

先程までのふぎけつぷりが嘘のように礼儀正しく、大人しくなったキリアはハンコックに尋ねた。

「何か飲み物でも用意しましょうか？　女王」

「いらぬ。それよりも早く本題に入れ」

毎度毎度あちらにペースを握られていては話が進まない。

話をせかすハンコックを尻目にゆっくりと着席したキリアは口を開いた。

「ではまず最初にこちらからお聞きしたいことがありますて」

「なんじゃ？」

「私が七武海に入る前、海軍大将2人に容赦なく追い掛け回されていたことはご存じですよね？」

「……ああ」

「でもなかなか私を殺せないことに業を煮やした海軍と世界政府は大将を休ませるために七武海を招集したと聞いています。その際招集に応じたのは3人だったとか。ドンキホーテ・ドフラミンゴとバートロミュークまと、そして——」

黄金の瞳が海賊女帝を見つめる。

「あなたです、女王」

「……どうやって情報を仕入れたのかは知らぬが、確かにわらは貴様を討伐する政府からの要請に是と返事をした。結局、招集自体がなかったことになったがな。それで？　何が聞きたい？」

「あなたは七武海の中でもとびきり自由な方だと聞いています。そんなあなたが俺の討伐にだけ興味を示した。考えられる理由は2つです。俺を殺したいか、俺に興味を湧いたか」

「……どっちじゃと思う?」

「後者であつてほしいですね」

食えない笑みを浮かべる金髪の優男。

(こやつ、この海賊女帝と腹芸をするつもりか……!)

内心怒りを感じつつもハンコックは興味なさげな素振りです答えた。

「……理由としては後者にあたるかもしれんな」

「では俺に興味を?」

「思いあがるな下郎! 単なる気まぐれだ。そう深読みするでない」

「そうでしたか……俺はてつきり——」

怪物は笑いながら核心を突いた。

「天竜人殺しの俺に興味があつたのかと」

スツとハンコックの目が細められる。

無意識に放たれた霸王色の波動が部屋を揺らした。

「……貴様、何を知っているのじゃ?」

「先ほど言ったように全てを知っています」

「……どこで知つた」

キリアは「レイリーじゃないですよ。彼のことを知つたのは偶然で

すから」と前置きしつつ語り始めた。

「七武海になる前の俺の過去をご存じで? 何でも、史上最悪のテロ

リスト”って言われているらしいですよ? 天竜人の暗殺を何度も

試みたことから、そういう名前で呼ばれることになったそうです」

「……」

「で、ここからが本題なんですが——実は天竜人について調べる中で

奴隷リストなるもの入手しまして、そこには興味深いことが書かれ

てあつたんですね」

「……」

「なんだつたつけない? ああ、そうだ。確か……緑の髪と茶髪、そして

黒髪の3姉妹に悪魔の実を与え——」

「死ね」

ハンコックの強烈な右足の蹴りが炸裂する。

接触部分を丸ごと石にして砕く算段である。

だが――

「……あんだだけ石にされてもまだ完全に耐性つかないのか。凄い能力ですわね」

「ツッ!」

難なくキリアの左腕に止められていた。

接触部分が石化しているが、まるでハンコックの能力に逆らうかのよう石化していた肌が元の色に戻っていく。

「貴様……わらわの能力に耐性を……」

「ええ。流石に3回も食らえばある程度は免疫ができますから」

「……では、あのふざけた求婚も演技だったということか」

「いえ、あれはガチです」

「そこはガチでなくて良いわ」

スツと右足を下ろしたハンコックは両手を前に突き出し、お馴染みのハートマークを作った。

「もう貴様のふざけたやり取りに付き合うのはウンザリじゃ。ここで死ぬ」

「物騒だなあ。話は最後まで聞いてくださいよ」

「知るか。貴様は今、ここで殺す。わらわが決めた」

「まだ何も重要な話をしていないのにですか?」

「貴様の話に価値など――」

「天竜人どもを地に引きずり墮とす策があるといってもですか?」
「――」

何を言っているのだ、この男は。

ハンコックはとんでもないことを言っただけの男の目を見つめる。

キラキラと輝く黄金の瞳には一切の曇りなく、心底それが実現可能と信じ切っているように見える。

(なんなのじゃ……コイツは)

己の背中と心に刻まれた恐怖を思い出す。

今でも彼女を縛っている竜の蹄。

誰にも知られないように、必死に隠してきたその印。

ハンコックは先程のキリアの言葉を内心で復唱した。

(天竜人を、引きずり墮とす……)

その言葉は何故か酷く甘美で——ハンコックはいつでもキリアを殺せるよう油断ない状態で腕を下ろし、椅子に座りなおしてから長い脚を組んだ。

「話してみよ、下郎。わらわが気に食わなければここで殺す」

「……なんか、パイセンと初めて会った時もこんな会話したっけなあ。王様ってのはみんな物騒でいけない」

「いいからさっさと話せ。貴様の今の態度でわらわはまた1つ貴様を殺す理由が増えた」

おーおー、物騒なことって。

キリアは内心おどけながら直球で本題を切り出した。

「革命軍ってご存知ですか？」

「……存在はな。で、それがどうした？」

「彼らは現世界政府の腐敗を糾弾し、不平等な社会を正すべく戦いを挑んでいる真の戦士たちです。そして、腐敗の対象には天竜人もいる」

「……」

「長々と話しているとあなたに殺されそうなので簡潔に言います。俺は革命軍と繋がっています」

「ッ———!!」

ハンコックの瞳が驚愕で見開かれる。

世界情勢にはあまり詳しくないハンコックではあるが……それでもこれが意味するところの恐ろしさは良く分かる。

世界をひっくり返そうと目論んでいる連中と、実際に世界をひっくり返しかねない大事件を起こした男が繋がっている。

しかも男は現在、七武海の地位を得て悠々と暮らしているではないか。

ハンコックは内心キリアへの評価を改めた。

コイツ、想像以上にヤバイ。

「さて、この時点で私もリスクを掛けました。お互い世界にバレたくない生命線がテーブルの上に乗っている。条件はイーブンでしょう」

「？」

「イーブンじゃと？ よく思ってもいないことをペラペラと話せるものじゃ……だが、良いだろう。貴様の話にも興味が湧いてきた」

ボア・ハンコックは頬杖を付き、怪物の目を真つすぐに見つめる。

「——わらわの弱みを握り、貴様の秘密を明かした上で何の話をしようというのじゃ？」

「勧誘です」

「勧誘だと？」

「ええ——」

キリアは楽しそうに笑いながら言った。

「俺はあなたと革命軍との間にコネクションを築いてほしいのです」

「……それはつまり、わらわに革命軍に入れということか？」

「いいえ、あなたは誰の下にもつくつもりはない。そうでしょう？」

「当然じゃ」

「だから、嫌だというなら別に構いません。見つけたリストは既に焼却処分しましたし、生涯話さないことを誓う誓約を締結しましょう。

ただ、私の話を聞いたうえで判断してほしいのです」

「……止めたところで勝手に話すくせに面倒な男じゃ」

「少々長くなりますが聞いていただけますか？」

「勝手に話せ」

女王の承諾を得たキリアは話し始めた。

革命軍の活動内容と、その目的を。

自分が革命軍のトップと繋がっており、実際にこれまでも情報提供などしてきたことを。

頬杖をつき、大して興味なさげに聞いていたボア・ハンコックだったが、話が天竜人に関する事になっていくと眉間に皺が寄り始める。

天竜人にトラウマを持っているということもある。

だが、それ以上にキリアの語り口が気に食わなかった。

何の罪もない市民がこれこれこういう目に遭ったのだの。

天竜人の命令一つで街が滅んだのだの、どうのこうの。

弱者たちにはなすすべがないだの、どうのここの。

(……下らん話だ)

過去の——忌々しい自分がフラッシュバックしそうになるのを必死に抑えつけながらハンコックは強がる。

もうあの時の無力な自分とは違う。

自分は強くなった。

七武海にまで上り詰め、海賊として、強者として生きている。

だが、そんなハンコックを嘲笑うかのように怪物は言った。

「——というわけで、彼らは天竜人に虐げられ、不当にもその人生を狂わされた人たちを救うべく立ち上がっている戦士たちなのです。女王、天竜人に恨みがあるのであれば是非とも彼らの力に——」

「ふざけるなッ!!」

我慢しきれずついにハンコックは激昂した。

怒りのあまり椅子から立ち上がり、燃え上がる瞳でキリアを睨みつける。

「わらわを虐げられし弱者と一緒にするなッ！ わらわは強い！ もう誰にも支配されぬ！」

「だが今でも天竜人を恐れている」

「ッ！」

それは決定的な一言だった。

「……貴様、余程死にたいらしいな」

「いいえ。ですが、事実ではないのですか？」

「違うッ！」

ハンコックは強い言葉で否定をした。

「わらわは忌まわしき過去をなきものにしただけじゃ！ 断じて奴らを恐れてなどおらぬ！」

「過去と今は繋がっているのですよ、女王。誰も過去からは逃れられない」

「分かったような口を利くな！ お前に何が——」

「分かりますよ」

そつとハンコックに寄り添うような声でキリアは言った。

「私には分かりません」

「……」

ハンコックだって何も調べずにここへ来たわけではない。目の前の男が辿って来た壮絶な過去については知っている。

「……そうじゃな。貴様であれば、分かるやもしれん」

冷静さを取り戻したハンコックは椅子に座りなおした。

「ですから女王、過去が消せないなら今と未来を変えてしまいましょう」

「……言っておくが、革命軍とやらに接触したところでわらわは誰の命令も受けぬぞ」

「構いません。どうせ、誰もあなたに命令はしないし——あちらもあなたの命令は聞かない」

スツとキリアがハンコックの耳元まで近づいてくる。

不敬として殺すこともできたが、何故かできなかった。

海賊女帝の耳元で怪物が囁く。

「あなたは表向き、ただの七武海として海賊を討ち、彼らから武器と金を巻き上げるんです。誰もそれを不思議には思わない。だってあなたは誰もが知る理不尽な海賊女帝だから」

「……」

「でもその武器と金はあなたたちが使うわけじゃない。人知れずどこかへ流れていくんです。でも、どこへ？」

「……」

「そう、革命軍です。このクソツタレな世界をひっくり返そうとしている彼らにどこからか武器が流れ、金が流れ、彼らの活動は過激になっていく」

「……」

「時代はうねり、姿を変え、やがては1本の槍となって彼らの喉元へと突きつけられる。彼らが誰か——もうお分かりですよ？　女王」

「……本気で世界をひっくり返せると？」

「少なくとも私はそう信じています。天竜人が支配するこの世界が変わるとね」

黄金の瞳が爛々と輝く。

ボア・ハンコックはどうして世界政府が血眼でこの男を追い掛け回していたのか、理由が分かった気がした。

(この男は怪物だ)

正しく異名の通り。

この世界を作り上げている常識を笑いながら踏みつぶし、絶対の法則を無情に殺し、本気で世界を変えられると思っていて、この海賊女帝すら利用しようとしている。

「……では、お主はこう言いたいわけじゃ。実を結ぶかも分からない連中の活動を支援するために、わらわにリスクを負えと」

「失礼ながらリスクを負わずに海賊は名乗れないかと。それに——あなたほどの方がいったい何を恐れるというのです?」

「……」

「表向き、世界は何も変わりません。ですが、水面下では確実に時代が動いています。彼らが地に堕ちてくる日も近い。だからいざやってくるその日まで——」

キリアは真つすぐに女王を見つめながら言った。

「あなたが裏からこの世界をかき乱すのです、女王」

「……口が良く回る男だ。それに王の立て方を良く分かっておる」

ボア・ハンコックに褒められ、ニコリと微笑む優男の美男子——の皮を被った怪物。

世界政府も厄介な奴を敵に回したと内心愉快に笑いながらハンコックは尋ねる。

「条件は?」

「おや、ここにお呼びした理由をお忘れで? 女王」

「……四皇との戦争か」

「是非ご尽力いただきたく」

虐げられる人々を救うためではない。

ただ——気に食わない連中を天より引きずり降ろし、その脚で踏みつけるためだけに。

ボア・ハンコックは決断した。

「いいじやろう……お前の口車に乗ってやる」

彼が自分を利用する気にいることは重々承知の上。

だが、それを不快に感じさせない見事な話術と世界転覆のシナリオに興味を湧いた。

「ありがとうございます女王。実を結ぶまでに数年時間は掛かるでしょうが、後悔はさせませんよ」

「うむ」

「いやー、安心しました。どうやって契約を果たすべきか悩んでいたもので」

ドラゴンへのいい手土産ができたときリアは笑った。

「何のことかは分からぬが、期待しておるぞキリア」

「はい。女王陛下」

「ところで、わらわの方からも話があるのだが良いか？」

「なんででしょう？」

不敵に笑い、女王は告げた。

「そなた、九蛇に来るつもりはないか？ わらわの臣下に加えたい」

「えっ……」

「ドフラミンゴと同盟を結んでいるのであろう？ 七武海内で派閥を

作ってはならないという法はなかったはずじゃ。それに、臣下になつてはいけないという決まりもな」

持っている情報量、戦闘能力、頭のキレ、ハンコックたちの事情を知った上でそれすらも利用していく胆力。

そして、本当に世界をひっくり返しかねない絶対的な運命力。

無礼を働かれたにも関わらず、ハンコックはこの底が知れない男のことを気に入りはじめていた。

「光栄なお誘いですが……残念ながらお断りさせていただきます」

「なぜじゃ？」

「私には入りたい海賊団がありませんので」

「……フッフ、わらわを前にして他の海賊団に入りたいとはな……つくづく失礼な男じゃ。だが許そう。気が変わったらいつでも声を掛けるがよい」

寛大に笑い、ボア・ハンコックは席を立った。

「しかし、世界とは不思議なものじゃ。お主のような男が現れるとは」
「——いずれ、私よりもさらに滅茶苦茶な男がこの世界にやってきますよ」

「ほう？ それは確信か？ それとも迷信か？」

「確信ですよ。この世界には救世主が現れます。——あなたの前にもね、女王」

「……くだらん世迷言と切り捨てたいが、お主の言葉じゃ。胸に留めておこう」

キリアは自然な動きで率先して扉を開き、先にボア・ハンコックを退出させる。

廊下で向かい合った2人は視線を交わし合い——すぐに背を向けて別々の道を歩く。

必要な時期に接触はするも、普段は関わりのない者同士として過ごす。

そういう取り決めだ。

キリアと別れ、1人廊下を歩きながらハンコックはポツリと呟く。

「……天竜人」

背中に刻まれた竜の蹄が疼く。

それは忌々しい過去への恐れから——ではない。

「天竜人……！」

世界一の美貌が復讐に燃え、さらに美しく——壮絶に歪む。

「全員纏めて血祭りに上げてくれる……！」

ふと、廊下で立ち止まったハンコックは後ろを振り返り、ヤマトとかいう女と楽し気に話しているキリアを見てニヤリと笑った。

「——キリア、今は貴様に乗ってやる。精々わらわを楽しませてくれ」
海賊女帝ボア・ハンコック

参戦決定。



「あつ、パイセン。ボア・ハンコックさん説得できました」

「はあッ!？」

ドフラミンゴは久しぶりに——本っ当に久しぶりに思った。
意外とやるなコイツ……。

七人の海賊

七武海連合結成。

そのニユースは瞬く間に世界中を駆け巡った。

自身が治める国を襲撃されたドフラミンゴが招集を掛けたことは周知の事実だったものの、まさか本当に七武海による連合が実現するとは誰も予想できず、世界は大いに盛り上がった。

当然、その知らせはカイドウの元にも伝わり、ドレスローザ周辺海域に攻め入ろうとも堅牢な守りを維持する海軍に手を焼いていた彼は楽しくなってきたと大いに喜んでからワノ国へと引き返していった。

世界中が注目する四皇VS七武海の戦い。

一体どちらが勝つのか。

開戦の狼煙はいつ上がるのか。

どこが戦場となるのか。

あれやこれやと噂が飛び交う中、件の七武海連合は結成から一週間後に再び円卓の間に集まっていた。



「作戦を説明する」

連合の盟主であるドフラミンゴが円卓に座る面々を見渡しながら話を切り出す。

「まずカイドウが保有する戦力についてだが、本船の戦力数は少なくとも2万は下らないという話だ。さらにワノ国を牛耳っているカイドウの協力者であるオロチとかいう奴の戦力も加算すると3万も超えるらしい」

さらに百獣海賊団の恐ろしい点はその勢力がただの寄せ集めではなく、きっちり戦力として機能しているところだ。

原作のゾロをして「数が多いだけじゃなく、層も厚い」と言わせた戦力は伊達ではない。

ただ、原作の相違点としてドフラミンゴがSMILEを生産していない為、能力者の数は圧倒的に減少しているが。

「だからこそ開戦前にある程度厄介な連中の戦力は削っておくことを考えている。まあ、こっちは俺とモリアの部下たちで何とかするからテメエらは気にしなくていい」

「……少しいいか、ドフラミンゴ」
「なんだ？」

急に話に入って来たヤマトを怪訝な表情で見るドフラミンゴ。

彼は覚悟を決めた強い眼差しで言った。

「オロチたちを制圧するなら僕も同行した方がいいと思うんだ。鬼ヶ島に長い間閉じ込められていたけれどワノ国の地形は頭の中に入っているし、それに何よりおでんに苦痛の限りを与えたオロチの野郎は僕の手で討ちたいんだ……！」

「……そうか。ワノ国に派遣する面々はモリアと相談してある程度決まっている。そこにテメエも加わるってことでいいんだな？」

「ああ。構わない。それに、上手くやればカイドウと敵対している侍たちを味方にできるかもしれない。……カイドウの息子である僕が言ったところで意味はないのかもしれないけどね」

「侍か……確かに戦力は幾つあってもいい。潜入させている俺のスパイたちにもコンタクトを取るよう命令しておこう」

こうしてヤマトはワノ国に潜入してから鬼ヶ島の討ち入りに参加することが決まった。

「さて、次に決行時期だが、ちょうどいいタイミングがある。ヤマト」
「ああ。実は今からちょうど一か月後に『金色神楽』と呼ばれる年に一度の大騒ぎがあるんだ。カイドウの部下たちが勢ぞろいし、さらにオロチの配下たちも合流して大騒ぎする祭りの日。狙うならここがいいと思う」

「さつき言ったようにワノ国から来る増援はヤマト主導で無効化させる。俺たちの敵はカイドウと幹部、そして2万の兵力と考えればいい。……まあ、2万とは言ったが幹部以下はヤマト、俺とモリアの部下たちが合流すれば何の問題もなく片付けられるだろう」

それを可能とするだけの恐ろしい能力者たちが七武海傘下に揃っている。

これもまた七武海連合が恐ろしい理由の一つである。

「さて、次に幹部連中との戦いについてだが——」

「ちよつと待つてください、パイセン」

「ああ？」

話しに割り込んできたキリアを見て露骨に嫌そうな顔をするドフラミンゴ。

彼は知っていた。

コイツがこういうタイミングで口を挟む時は大抵ろくでもないことを言うつもりだと。

「鬼ヶ島に攻め込む時の船はどうするんです？」

「どうって……普通に俺の船か、他の連中の船でいくつもりだったが……」

「パイセンの船で!? 正気ですか——!!」

何故かぶち切れ寸前の表情で叫びながらキリアは懐から取り出した写真の束を円卓に叩きつけた。

「——あつ、女王。それ人数分印刷しておいたんで隣に回してください」

「うむ」

「デメエ、いつの間に……」

変なところで用意周到な狂人に頭を痛めつつ、一周して隣のヤマトから回って来た写真に目を通すドフラミンゴ。

「……って、こりゃあ俺のヌマンシア・フラミンゴ号の写真じゃねエか!?」

「ええ、そうです。あなたのスーパーハイパークソダサヌマンシア・フラミンゴ号の写真です」

「どんだけダサイと思ってんだお前……」

内心ちよつと落ち込むドフラミンゴだが、スイッチが入ってしまったキリアの勢いは止まらない。

彼は立ち上がると手元の写真をバンバン叩きながら七武海の面々

に向かって言い放った。

「いいですか皆さん！ 我々は七武海です！ 世間より四皇の抑止力として期待されている最高戦力です！ だというのに討ち入りの際に使用するのがこんなピンク一色で、自分の名前が『ドフラミンゴ』だからフラミンゴにしておこう、的な安易な考えでデザインされたおまる同然のクソほどダサイ船でいいのでしょうか!？」

「おい」

「いや、良くはない！ だからどうか皆さんの感想をお聞かせいただきたい！ 俺の美的感覚が間違っているのであればヌマンシア・フラミンゴ号に謝罪しましょう！」

「俺への謝罪は？」

「皆さんもまた俺と同じ感想なのであれば、ワノ国へ乗り込む船は再度検討する必要があるということですよ。——さあ、お聞かせください！ 皆さんの率直な意見を！」

「……」

キリアの言葉を受け、再度手元の写真をじっくりと見つめる七武海たち。

さあ、ヌマンシア・フラミンゴ号の評価は如何に——!!

「ダサイな」

「なんじやこの美しさの欠片もないデザインは」

「うーむ、コメントに困るのお」

「俺をこの船に乗せる気か？」

「ダサッ」 ↑キリア

「……」

ボロクソに言う七武海たち。

まさかここまで批判を食らうことになると思っていなかったドフラミンゴは啞然としつつもう一度手元の写真を見る。

(……そんなにダサイか、これ?)

ピンクで統一されたデザインと言い、優雅なフラミンゴの形といい、完璧なデザインだ。

しかし、彼自身がいいと思っけていても今回は同盟相手が相手だ。

乗りたくないと言う船に無理やり乗せていっても途中で下船されかねない。

「……」

ドフラミンゴは思った。

船買い換えようかな、と。

◆◆鬼ヶ島◆◆

時は流れ、一か月後。

鬼ヶ島は年に一度のお祭りにて大いに盛り上がった。

「ウオロロロ……飲めよ teme ぇら! 今日は無礼講だ!」

機嫌よく酒を呷るカイドウ。

彼とて七武海が連合を結成し、四皇討伐に向けて動き出したことは知っている。

だが、警戒したところでどうにかなるわけでもなし。

そもそもどれほど劣勢に陥ろうともその腕っ節一本で状況をひっくり返してきたカイドウだ。

七武海が束になろうとも負ける気はしなかった。

「ちよつと飲み過ぎじゃないすか? カイドウさん」

「ウオロロロ! 金色神楽で飲まずにどうするってんだ! 今日は無礼講だつて言っただろう? いいからお前も飲んで歌え! クイーン!」

「うっす」

完全に宴が始まる前から酔っぱらっているカイドウにぞんざいな対応をするクイーンだが、カイドウは気にも留めない。

(やれやれ……今日は潰れるまで飲む気だな……)

呆れるクイーンだが、正直カイドウの気持ちも分からないでもな

かった。

ここ最近はドレスローザ周辺でいまいち盛り上がりには欠ける海軍との戦いに追われていたこともあり、皆ストレスが溜まっていたのだ。

こうして羽目を外せることは非常にありがたかった。

「……おい、クイーン」

「なんだアホキング」

「お前ももう知っていると思うが、七武海たちが連合を組んだそうだが、カイドウさんを倒すためにな」

「ああ、なんか聞いたことはあんなあ……でも、連合つたってどうせ数人だろ？ カイドウさんと百獣海賊団おれたちなら問題ねエだろ」

「確かに問題ないだろうが、妙な胸騒ぎがする。警戒だけは怠るなよ」
「はいはい。俺はこれからライブで忙しいからよ、お前が勝手に警戒しておけキング」

「おい！ 待てクイーン！」

「年に一度の金色神楽で羽目を外せないとは哀れな奴だぜ！ 一生そこでシリアス顔晒しときな！」

「……ツチ、あの間抜けめ」

舌打ちをしたキングは誰も彼もが気を抜いている金色神楽の中で一人、神経を尖らせることに集中し始めた。

自身の右腕がすっかりと警戒を怠らない中、べろんべろんに酔っぱらった百獣海賊団の総督は至極幸せな気持ちで宴を謳歌している。

そんな中、部下の一人が何らかのリストを手を駆け寄って来た。

「カイドウさん！」

「ああ？ なんだく？」

「このリストに記載がある黒炭オロチと言う方がまだ到着されていないようですが……」

「ああ、オロチだあ？」

カイドウは心底不思議そうに首を傾げた。

「誰だそいつは？」

今まで一度もそんな名前を聞いたことがない。

頭の中に靄が掛かっているような違和感はあるが、酔っぱらっているカイドウはどうでもいいことだと切り捨てて再び宴会に戻っていった。



百獣海賊団が金色神楽で有頂天になる少し前。

鬼ヶ島に向けて進む一隻の巨大な海賊船があった。

それは王下七武海であるゲッコウ・モリアが所有するスリラーバークを小型化させたような巨大な船で、掲げられている海賊旗には七つの骸骨が描かれている。

乗船者は七武海連合の面々とその傘下にいる者たちが何名か。

過剰なほどの戦力を乗せたその巨大な船の名は「Seven Pirates」。

モリアのスリラーバークの一部を切り離し、ウオーターセブンにて世界政府特権とドフラミンゴの大金によって無理やり完成させた七武海連合専用の船である。

「見えてきたぞ。あれが鬼ヶ島じやろう？」

海から船に乗り込んできた魚人——海侠のジンベエが船内の面々に通告する。

「ご苦労だったなジンベエ。お前のお陰で簡単に入国できそうだ」

「わっはっはー！ この船は能力者が大半だからのお。わしがやるしかなかったのじやから気にするな！」

ジンベエは快活に笑ってここまで連れてきてくれた鯉たちに礼を述べた。

圧倒的な大きさを誇るSeven Piratesだ。

当然、鯉が一匹や二匹で足りるはずもなく、魚人であるジンベエの力も活用した上で計30匹の鯉が必要となった。

「……それじゃあキリア、予定通り僕は先に行くよ。一緒に討ち入りの瞬間に立ち会えないのは残念だけど、すぐに合流するから」

「ああ。気をつけてな、ヤマト」

キリアとヤマトは固い握手を交わした後、がっちりと抱き合っ
て互いの体温を感じ合った。

「……覚悟は決まったか。カイドウの息子」

「僕の名前はヤマトだ。今は、そうとだけ呼んでくれ」

「……分かった。他のメンバーも準備はいいか？」

くまは後ろを振り向き、先行でワノ国へ突入する面々へ確認する。

「ホロホロホロ！ いつでもいけるぞ！」

「ワノ国か……どんな美女がいるんだろうなあ……」

「おいアブサロム。お前、蛇女に石にされたこと忘れたのか？ 妙な
こととして私の足引つ張るんじゃないぞ！」

「分かってるさペローナ。モリア様に迷惑は掛けねえよ」

スリラーバーク四怪人より招集されたペローナとアブサロムが愚
痴を言い合いながらもモリアからの命令を忠実に実行すべく肩を並
べる。

さらに追加で船室から現れた人影が四名。

「……早くおねえちゃんを迎えにいかなくちゃ」

「シュガーお嬢ちゃん。そう肩に力を込めていても時間は先に進ま
ねえんだぜ？ ドーンと構えておきな。大丈夫、モネは強い女だ」

「セニョール・ピンク……」

「若様に滅茶苦茶必要とされた！ これは私の出番ってことでいいの
よね！」

「だくすくやくくん！ 若様のお役に立ってみせるだすやん！」

ドンキホーテファミリーより選出された4名。

シュガー、セニョール・ピンク、ベビー5、バッファロー。

本当はグラディウスやピーカなど圧倒的な攻撃力を持つ面々を
ピックアップしたかったドフラミンゴだが、生憎と未だに復活できる
目途がない状況の為、上記のメンバーが選出された。

「では行くぞ」

気合十分の面々を見たくまは手袋を外し、その手でヤマトに触れ—
—その瞬間、彼の身体は一瞬で消えた。

さらにペローナ、アブサロム、シュガー、セニョール・ピンク、ベ

ビー5、バツファローにも順番に触れ、ワノ国へと飛ばしていく。

「キシキシシシ……くま、俺の物を飛ばすのを忘れるなよ」

「ああ。鬼ヶ島のドーム上に飛ばせばいいんだな」

「そうだ」

ゲッコー・モリアの指示を受けたくまは小型スリラーバークの中央で嚴重に封印されていたそれを希望通り鬼ヶ島のドーム上に飛ばした。

「……しっかし、恐ろしい作戦を立てるなあ、パイセンも」

原作と共に彼らの能力を知っているキリアは飛んでいった面々を見つめながらそつと呟いた。

この面子で何をしようというのか。

ドフラミンゴが考えた作戦は下記の通りだ。

まずは優秀なスパイであるモネをワノ国に潜入させ、現地のスパイと合わせて情報収集。

敵の行動パターンを把握したうえでワノ国の勢力合流を防ぐべく、増援無力化チームを投入。

投入された面々のうち、アブサロムが透明になってシユガーを運び、誰にも気づかれぬように敵勢力を玩具にして無力化。

気配を悟られかねない強者はペローナがホロホロの能力で一時的に無効化してしまえば玩具にしてしまうのはそう難しくない。

異変に気付かれてもヤマトという超火力のアタッカーやビー5 & バツファローがいる以上、ほぼ盤石と言ってもいいだろう。

玩具にした連中はセニョール・ピンクを始めとするドレスローザ陣営で回収し、ワノ国に着艦予定のSeven Piratesに搭載されている海桜石の牢屋にぶち込み、今度は鬼ヶ島に上陸する予定となっている。

決して気絶させてはいけないシユガーを連れてくることに抵抗がなかったといえば嘘になるが、カイドウに感づかれぬよう戦力を削るという意味で彼女は必要不可欠だった。

それにドレスローザは英雄ガープに目を付けられたこともあり、既

に危機的状況にある。

ドフラミンゴはワノ国を手に入れた後は、全員でこちらへ移住することを計画していた。

「後はアイツらが上手くやるのを祈るだけだな」

「ヤマトがいるし、現地にはモネちゃんが待機しています。問題ないでしょう。俺たちは中で合図を待ちましょう」

「ああ……」

嵐の中、船頭に立ち鬼ヶ島を睨みつけていたドフラミンゴを室内へと誘うキリア。

2人は他の七武海たちも待機している豪華客船のように贅の限りを尽くされた船内へと移動し、くつろぎ始めた。

これから四皇との戦争だというのに、彼らには一切緊張している様子は見受けられない。

このメンタルの強さは流石王下七武海というべきか。

そうして各々暇を潰しながら待つこと一時間後。

『キリア聞こえているか？　こちらヤマト』

「ああ、聞こえているよヤマト。首尾はどうだい？」

『順調だよ。花の都はあらかた制圧した。幾つか用事を済ませたらそちらへ合流するよ』

「分かった。こっちも行くよ」

『ああ——武運を祈っている』

「ヤマトもね」

電伝虫の通話を終えたキリアは顔を上げ、こちらを見つめていたドフラミンゴと視線を合わせ、静かに頷いた。

準備は整った。

あとは本丸に乗り込むだけだ。



「さて——行くか」

連合の盟主であるドフラミンゴが号令を発すれば船内でくつろいでいた彼らが重い腰を上げて立ち上がり、嵐が吹き荒れる甲板まで出てきた。

天夜叉ドンキホーテ・ドフラミンゴ。

怪物キリア。

海賊女帝ボア・ハンコック。

鷹の目のミホーク。

海侠のジンベエ。

暴君バーソロミュー・くま。

ゲッコー・モリア。

七人の海賊が揃い踏み——

時は夕刻 嵐が吹き荒れる海の真ん中であってその影は揺らぐことなく。

七つの骸骨旗を掲げ、鬼へと戦いを挑む。

彼らにはこの国に思い入れなどない。

ワノ国に生まれたわけでもなければ、縁者がいるわけでもない。

野心、友情、革命、戦闘、人情、契約、再戦。

ただ己の我欲の為だけに今日、この場所へ集った。

四皇への抑止力として招集された選りすぐりの強者たち。

世界は彼らのことをこう呼ぶ。

王下七武海、と。

「やれ、くま」

ドフラミンゴの命を受けたくまが各自を一人ずつ能力で鬼ヶ島へと飛ばす。

完璧に制御された能力で鬼ヶ島の入り口に続々と着地する七人の海賊。

左からゲッコー・モリア、ジンベエ、ボア・ハンコック、ドンキホーテ・ドフラミンゴ、キリア、ミホーク、くまと圧巻の面子。

揃った彼らは横一列に足を揃えて前進し始めた。

「おい、なんだテメエら……!」

「今は金色神楽の最中だ! 邪魔をするんじゃない」

見張り役たちが彼らを押しとどめようとするが、ドフラミンゴの隣を歩く怪物キリアが一睨みすれば意識を失って倒れていく。

さらにキリアの反対側から出てきた監視役もドフラミンゴの隣を歩くハンコックが一睨みするだけで意識を失って倒れていく。

生半可な連中では彼らの前で意識を保つことさえままならない。

誰も彼らを止めること叶わず、七人の海賊はドフラミンゴを真ん中に堂々と歩みを進める。

「待たせたな ゴミクズ共オ——!!!」

やがて海賊たちはクイーンが盛り上げている宴会会場へと辿り着いた。

今日は年に一度の大騒ぎ。

大いに盛り上がっている百獣海賊団たちは監視役が強引に気絶させられたこともあり、まだ彼らの存在には気が付かない。

ならば教えてやろう。

誰が来たのかを。

「——ツ!!」

ドフラミンゴ、キリア、ハンコックの3名が同時に霸王色の覇気を発動させた。

放たれた3つの王の力は共鳴し合い、大きな波紋となって会場を包み込む。

屈強な百獣海賊団も3つ連続で押し寄せる霸王色にはなかなか対応しきれない。

続々と気を失って倒れる部下たちを見たクイーンはライブを止めて乗り込んできた面子を見てサングラスを割るほど驚き、ここ最近のニュースから彼らが今日攻め込んでくることを予期していたキングは静かに刀へ手を掛けた。

そして――

百獣海賊団総督、百獣のカイドウは笑った。

「随分と遅い到着じゃねえか。待ちわびていたぜ、テメエらをよ」
「悪いな。出航準備に手間取っちゃった」

不敵に笑って答えるドフラミンゴ。

まだ何とか意識を保っていた百獣海賊団の船員たちが武器を構える中、七武海たちは特に臨戦態勢を取ることもなく自然体でいる。

「ウオロロロ……流石に壮観だな。七武海が勢ぞろいとは」

正確にはこの場にいない七武海が1人いるが、本質的に七武海は七名からなる組織だ。

戦力的には既に申し分ない域に達している。

決して揃うことはないとされてきた七武海たちが七人横並びで立っているその姿は、確かに世界の均衡を保つといわれるだけの威風に満ちていた。

だが、百獣のカイドウが彼らを恐れるはずもなし。

「始める前に一応聞いておこうか……テメエら、何をしにきた？」

傲慢の金棒を握り、七武海たちへ問いかける。

自分を倒しに来たことは分かっているが、それでもこうしてドフラミンゴや怪物以外の面々が顔を揃えていることは不自然だった。

「何をしにきたってお前エ……俺たちは海賊だぜ？」

ドフラミンゴは七武海連合の盟主として――何より海賊として、宣言した。

「この国を奪いに来た」

開戦

七武海たちを従え国盗りに来たと宣告したドフラミンゴに対し、カイドウは真剣な表情で言った。

「この国を奪いに来た、か。まさかワノ国の弱者どもを哀れんで……ってわけじゃあなさそうだな」

「当たり前だろう」

「では何故この国を欲する？」

不敵な笑みを浮かべドフラミンゴは答えた。

「野心のため」

七武海連合の盟主が突きつけるあまりにも真つすぐな欲求。

ある意味で、この場にいる誰よりも強欲で、海賊らしいその言葉を聞いてカイドウは笑った。

「ウオロロロ！ いいぜ！ 良く言った！ それでこそ海賊だ！ だが——」

横並びの七武海を前にそれでも四皇は笑う。

「テメエ、相手が誰だか分かってんのか？」

圧倒的な覇気が鬼ヶ島を支配する。

シユガーがこの場に居れば間違はなく意識を失っていただろう。

世界最強格の力を戦わずとも見せつけてくるカイドウを前にしかし、ドフラミンゴは落ち着いていた。

「分かっているきやここにはいねえよ。テメエは俺が七武海であることを知りながらうちの国に攻め込んできた。世界の均衡を保つ俺たち七武海が舐められたんだ。このまま黙って終わるわけにはいかねえだろ？」

「だから俺の国に討ち入りか。ウオロロロ……確かに理には適っているが、テメエ一つ計算違いをしてるぜ——雑魚七人揃えた程度で四皇に勝てるわけねえだろうが」

ゾツとするほど冷たい瞳でカイドウが七武海を睨みつける。

舐められたと感じているのは彼とて同じ。

この程度の戦力で百獣海賊団に太刀打ちできると思われていることに憤りを感じていた。

「ふん、俺たちが雑魚か……おいカイドウ！ もうちんたら話し合うのは止めようぜ。ここまで来たんだ。さっさと始めようッ！」

「ウオロロロ……その意見には同意だ。野郎ども！ 宴は延期だ！ コイツらを皆殺しにしてから仕切り直しにするぞ！」

「両軍の大將は口を揃えて宣言した。」

「開戦だッ!!」

鬼ヶ島内が歓喜と狂気の声で埋め尽くされる。

七武海を圧倒する数と言う名の力。

しかし少数である七武海たちは誰一人として動じることなく真つすぐに四皇を見据えている。

誰が仕掛けるのか。

今すぐにでも押し寄せてきそうな百獣海賊団の大軍を前に戦いの幕を切つて落としたのは意外な人物だった。

「頼むぜ、鷹の目」

「心得た」

世界最強の剣士が背中の大剣に手を伸ばす。

（百獣のカイドウか）

世界最強の生物と名高い四皇が一人。

相手にとって不足なし。

一瞬で抜刀した鷹の目ミホークは「夜」を真つすぐにカイドウへ振り下ろした。

世界最強の斬撃が飛び、遠距離武器のようにカイドウへ一直線に伸びていく。

原作の頂上決戦と違い、四皇までの距離はそこまで遠くない。

カイドウが誇る最強の肉体か、ミホークが誇る最強の斬撃か。

誰もが気になる矛盾の答えはしかし、まだ明らかにはならない。

「さっせんー！」

カイドウを守るように奇妙な黒い影がミホークの斬撃に割り込んできた。

その影は世界最強の斬撃を真つ正面から受けてしかし——倒れない。

「ウオロロロ……どうだったキング。世界最強の斬撃は」

「確かに重いが……俺に傷を負わせるほどじゃないな」

黒い翼に黒い衣装。そして背中から噴き出す炎。

異形の塊のような彼こそが大看板を背負うカイドウの右腕。

“火災のキング”である。

堂々と立つ四皇最高幹部を目にしたキリアは思わず叫んだ。

「いきなり“キング”は取れねエだろうよいツ!!」

「「「「「「?????」」」」」」

鬼ヶ島内が沈黙に包まれる。

四皇たちだけでなく味方の七武海まで首を傾げる地獄のような空気が形成される中、ドフラミンゴは渋々口を開いた。

「……お前、突然どうした？」

「いえ、なんか言わなきやいけない気がしたんで」

「ふざけんなー!」

せつかくドフラミンゴが討ち入りの台詞をカッコよく決めたのにこれでは全部台無しである。

「なあ、頼むから思い付きで何でもかんでも口にする癖直せよ!」

「うっす」

「つたく、この空気どうすんだよ……」

場に弛緩した空気が流れる。

折角の戦闘ムードをぶち壊されたドフラミンゴが嘆くが、こういうギャグよりの空気に左右されない頼もしい人材が居た。

「安心しろ。テメエらはここで俺が殺すツ!!」

空気などお構いなくミホークの斬撃からカイドウを庇ったキングがプテラノドンの姿に変身し、凄まじい速度でドフラミンゴ目掛けて突進を仕掛けてきた。

軽い空気になりながらも油断などしていなかったドフラミンゴが構えるが、それよりも先に七武海の列から飛び出した男がその突進を食い止めた。

「鷹の目のミホーク……!」

「俺の斬撃が効かなかったとはプライドが傷つくな。貴様の首で慰めにするでしょう」

プテラノドンに変身したキングの嘴を難なく剣で受け止めながら世界最強の剣士が笑う。

「調子に乗るなツ!」

空中で身を翻したキングは自慢の蹴りを放つが、見事な体捌きでそれを躲したミホークは一呼吸で冰山をも切り裂く斬撃を繰り出した。

「ぐっ……!」

キングの種族特性による防御力は絶対だ。

無論、今の斬撃でも傷を負ったわけではない。

しかし桁違いの威力に踏ん張りが利かず、キングはボールのように吹き飛ばされた。

「ふむ……やはり堅いな。不自然なまでに堅い」

軽々と四皇最高幹部を吹き飛ばしたミホークは不思議そうな表情を浮かべながら愛刀を眺めた。

世界最強の剣士として君臨するミホークに斬れないものなど存在しない——否、存在してはならない。

戦闘を欲してこの島に降り立った男はニヤリと不敵に笑った。

「面白い。斬りがいのある者がいるな」

「……おい、鷹の目。盛り上がっているところ悪いが作戦忘れてねエ

よな?」

「分かっている。すぐに終わらせて後で合流するからお前たちは先に
行っている」

四皇最高幹部をすぐに倒すと宣告しながらミホークは吹き飛ばし
たキングを追って「夜」を手に悠々と歩みを進める。

しかしそんな彼の行き先に巨大な影が立ちふさがった。

「おいこら鷹野郎! テメエ、好き勝手やってくれるじゃねエか!」

「……疫災のクイーンか。そこをどけ。貴様に用はない」

「ああ? 随分と舐めた態度取ってくれるじゃねエか! この百獣海
賊団のアイドルクイーン様を前によオ!」

ミホークの前に立ちはだかり、分かりやすい挑発をしながらもク
イーンの頭の中は冷静だった。

海兵狩りとして名を上げ、遂には世界最強まで上り詰めた人類の最
強格。

目の前の男の危険度を把握しているからこそキングが復活してく
るまでの時間を稼ごうとしていたのだ。

そんな中、キリアはのんびりとハンコックに話しかけた。

「あつ、女王。ちよつといいですか?」

「なんじゃ?」

「あのクイーンとかいうデブ、自分こそがこの世で一番美しい女王
だってこの間言っていましたよ?」

「ほう?」

「ボア・ハンコックなんて屁でもないって」

「——そうか」

コソコソと話し合う怪物と女王など眼中にないクイーンは見聞色
でキングの様子を探りながら挑発を続ける。

「鷹野郎。テメエ、剣士と戦うことに随分と執着しているらしいじゃ
ねエか。どうだ? 俺だって剣士だぜ? 一戦交えて行けよ」

「その玩具のような剣でか? 貴様に剣士としての誇りは感じられ
ん。いいからそこをどけ」

「剣士としての誇りだア? ムハハハ! 馬鹿を言うんじゃねエ!

そんなもんはキングだつて持ち合わせちやいねエよ！」

ミホークの発言を鼻で笑いながらクイーンは抜刀した。

「馬鹿正直に真正面から乗り込んできたことを後悔させてやるよ！七武海ども！」

「——そこをどけ、下郎」

「ぶげらッ!」

強烈な蹴りを腹部に受け、見事なエネルギー顔を晒しながら吹き飛んでいくクイーン。

ミホークと同じく強烈な一撃で四皇最高幹部を吹き飛ばす武力を見せつけた彼女は美しく地上に着地した。

「げほっ……いきなりこの俺を蹴り飛ばすとはとんだ礼儀知らずがいるなア！ しかも鷹の目となかなかクールなやり取りをしている最中に攻撃を仕掛けてくるとは空気の読めねエ野郎だぜ。一体この誰が——海賊女帝ボア・ハンコック!」

クイーンは目ん玉を飛び出しながら驚いた。

ハンコックは絶対零度の視線を向けながら告げる。

「許可なくわらわの名を呼ぶな」

「おいおい、随分と冷てエじゃねエか。仲良くいこうぜ？」

「わらわの許可なく立ち上がるな」

「おお、キツイぜ。だが……世界一の美女つてのは誇張じゃなかったらしいなア。ん〜！ 美しいぜ！」

「許可なくわらわを見るな」

「ところで海賊女帝さんよ、テメエどうしていきなり俺を蹴り飛ばしたんだ？」

「わらわの許可なく口を開くな」

「よおし！ 良く分かった！ テメエ、性格最悪だろツ!!」

何も許してくれない海賊女帝のあまりの理不尽さにクイーンがツッコミをいれる。

ミホークは鬱陶しいクイーンをぶっ飛ばしたハンコックに意外そうな視線を向けた。

「珍しいな海賊女帝が出陣か」

「貴様に言われたくはないわ、鷹の目。——こやつはわらわが始末しておく。さつきと先に行け」

「……どういふつもりかは知らないが、頼んだぞ」

ハンコツクにクイーンを任せ、鷹の目のミホークが先へと進んでいく。

「おいこら！ 待て！」

ミホークのことを止めようと動くクイーンだが、そんな彼の全身に強烈なプレッシャーが襲い掛かり、思わず動きを止めてしまう。

悠々と歩みを進めるミホークの背を睨みつけていたクイーンだがゆっくりと霸王色を放ったハンコツクの方を振り向いた。

「——おい、ちよつと調子に乗りすぎなんじゃねえか？ 女王さんよ。テメエら雑魚の分際で誰の許しを得て好き勝手にやがるんだ？」

「ほざけ！ わらわは何をしようと許される！ なぜなら——」

見下しすぎて逆に上を見上げながらハンコツクは堂々と確たる真実を口にした。

「わらわは美しいから!!」

「……それは理由になつてんのか？」

冷静にツツコミを入れながらクイーンが構える。

ハンコツクは怒りのままに突撃し、その強烈な足技を放つ。

女王の名を持つ2人が衝突した。



「ウオロロロ！ 盛り上がって来たじゃねえか！」

「おいおい、大事な部下が七武海に蹂躪されようとしているのに随分と呑気じゃねえか、カイドウ」

「馬鹿を言え！ アイツらの強さは俺自身が良く知っている！ そう簡単にやられはしねえよ」

自分の部下たちを称賛しながらカイドウは残る七武海たちを睨みつけた。

「さて、残ったテメエらは俺が相手を……と言ってやりてえが、俺以外

にも戦いたくてうずうずしている連中がいるようだなあ」

「——その通りだぜ、カイドウさん」

カイドウの後ろから一步を踏み出し、姿を現したるは最後の大看板、早害のジャック。

彼は怒りの表情を浮かべながら七武海たちを睨みつける。

「ここまで百獣海賊団を舐められて大看板の俺が黙っているわけにはいかねエ。七武海だか何だか知らねえが、ここで全員始末してやるよッ！」

愛用の刀を取り出し、二階の宴会会場から飛び降りたジャックが連合の盟主であるドフラミンゴの首を狙う。

ドフラミンゴは応戦する前に鷹の目やハンコックのようにキリアが率先して幹部を倒しに行ってくれないか期待しながら横を見るが

「ん？」

「……」

肝心のクソ馬鹿が呑気に鼻をほじっていたので仕方なく自分で対処すべく糸を張り巡らせた。

「死ねえ——！」

「させんッ！」

だが、どこぞの馬鹿と違って気が利く人材がまだ七武海には残っていた。

突撃してくるジャックとドフラミンゴの間に割り込んでくる一人の漢。

振り下ろされた双刀を武装色でコーティングした両腕で弾き、漢は固く握ったその拳を解放させた。

「五千枚瓦正拳ッ！」

炸裂する魚人空手の技。

血の滲むような研鑽を重ねることによって完成させたその拳は凄まじい巨体を誇るジャックを易々と吹き飛ばして見せた。

「ジンベエ……」

「早速鷹の目たちが勝手に動きよったせいで作戦は台無しじゃが……」

盟主のお主が幹部に討ち取られるのはまずいじゃろう？ あいつはワシが相手をする。お前たちは先に行け！」

「俺がアイツに負けるとは思えねえが……その気遣いはありがたく貰っておこう。頼むぜ、ジンベエ」

「心得た」

仁義によつてこの国へやつて来た漢が力強く頷く。

一方、他の大看板たちと同じように吹き飛ばされたジャックは瓦礫を吹き飛ばして立ち上がった。

「海侠のジンベエ……！ 随分といいパンチを撃つじゃねエか！ 流

石は魚人族の中でも最強と称されるだけのことはある」

「その割には納得のいつてなさそうな顔じゃな」

「あたり前だ。俺ア、こう見えても魚人の血が流れていてなア……最強の座を好き勝手にされるのは気に入らねエんだッ！」

「そうか……ならばその腕で示してみるがいい、お主の力を。だが覚悟するんじゃな」

七武海入りの理由も政治的な意味合いが強いジンベエではあるが、その実力が七武海に相応しくないかと言うと、決してそんなことはない。

寧ろタイヨウの海賊団として暴れ、海軍に危険人物と認定されたその実力は本物だ。

さらに彼は日々鍛錬を怠ることなく、今もまだ強くなり続けている。

「唐草瓦正拳ッ！」

「ッ！」

見た目にそぐわない俊敏な動きで移動したジンベエはジャックへと強烈な正拳突きを食らわせた。

「わしは強いぞ」

最強の魚人が牙をむいた。



「ジャックも行っちゃったか……こうなると、残るは俺と」

カイドウはぐるりと首を動かして宴会会場内を見渡した。

「俺の可愛い部下たちだけだな」

「「「おおおおおおッ!!」「」」」

会場を包み込む百獣海賊団の雄たけび。

ドフラミンゴ、キリア、ハンコックの霸王色を受けて半分以下に数は減ったものの、七武海に比べ多勢であることに変わりはない。

さらに大看板たちは戦闘を開始してこの場を離れたが、まだ彼らが残っている。

真打と呼ばれる精鋭たち。

その中でも特に秀でた実力者として一目置かれている強者。

その名を――

“飛び六胞”

「おいテメエら！ 勝手に人の家に入り込んで何をしているでござるか！ ぶつ殺りんすよー！」

動物系古代種リュウリュウの実 モデル “パキケファロサウルスの能力者。”

懸賞金・4億ベリー。

うるティ。

「ぶつ殺りんすって何言葉だよ……」

その弟にして同じく動物系古代種リュウリュウの実 モデル “スピノサウルスの能力者。”

懸賞金 2億9000万ベリー。

ページワン。

「うふふ、言葉遣いが変わるティちゃん可愛い♡」

吠えるうるティを見て妖艶に微笑む巨体の美女。

動物系古代種クモクモの実モデル “ロサミガレ・グラウボゲリイ”の能力者。

懸賞金4億8000万ベリー。

ブラックマリア。

さらにその後方には同じく飛び六胞の一人であるササキが率いる

鉄壁の装甲部隊が控え、さらに残り2人の飛び六胞たちも血を求めて目をぎらつかせている。

この分厚い戦力を突破することは容易なことではない。

しかし、ドフラミンゴに焦りはなかった。

「……旅行するならどこへ行きたい？」

一瞬で飛び六胞たちの前に現れた巨体の男が今にも消え入りそうな声でそつと呟く。

暴君バーソロミュー・くま。

契約に基づきこの場に参戦した男は自分の仕事を全うすべく、手袋を外しながら律儀に問い掛ける。

ギロリとくまを睨みつけたうるティは不機嫌そうな表情で答えた。

「天気が良い南国でござす。ここはカイドウの馬鹿のせいで曇りが多くて嫌いじゃ」

「おい！　なんてことを言うんだ馬鹿姉貴！　あと流石に語尾がブレすぎだ！」

「馬鹿とは何でありんすかペーたん！」

「敵の前でペーたん言うなッ！」

ガヤガヤとやかましく喧嘩をしながらも百獣海賊団が誇る姉弟コンビは油断することなく不気味な七武海を前に臨戦態勢を取る。

すっかりやる気になった同僚を見た飛び六胞の一人、ブラックマリアは困ったように色っぽく溜息をついた。

「あらら、二人ともすっぴんやる気になっちゃって……じゃあ、私の相手はそこのあなたかしら？」

「キシキシ！　ゾンビにすればいい戦力になりそうな女だな！」

「あら、こんな美女捕まえてゾンビだなんて。趣味が悪いわね」

「全くだぜ！」

突如モリアの横から割って入って来た男が大声でブラックマリアの言葉を肯定する。

眼をハートにしながら現れた馬鹿の名を怪物キリアという。

「あら、あなたは……」

「お初にお目にかかります。俺の名はキリア。そこの馬鹿はモリアと

「います」

「おい」

「ああ、噂は聞いているよ。随分と滅茶苦茶な男なんだって？」

「ハハハ、照れますね」

「褒めてはないけどねえ」

「それにしても、あなたのような美女をゾンビにしようだなんて……うちの同僚が失礼いたしました。お嬢さん」

「まあ、お嬢さんだなんて！」

何やら照れている様子のブラックマリアにニツコリと微笑みかけながらキリアは後ろを振り向いた。

「おいモリアー！ テメエ何を考えてんだ馬鹿野郎！ こんな美女をゾンビにするだとか、セクハラって言葉知ってるか？ 今のご時世ハラメントに厳しいんだからそこら辺もっと考えろよ馬鹿野郎！ アニメで放送できなくなんだろうが！ 俺に殺されてエのかテメエは!?」

「……おい、ドフラミンゴ。コイツは味方つてことで良かったよな？」

「いや、戦いが終わった後なら殺してゾンビにしている」

「分かった」

先輩七武海たちの発言を華麗にスルーし、キリアは再びブラックマリアの方を向いた。

「大変失礼しましたお嬢さん。この馬鹿には俺の方からきっちりと言い聞かせておきましたので」

「あら、話の分かる七武海もいるのね。ということとは……私の相手をしてくれるのはあなたかしら？ イケメンのお兄さん♡」

「はい！・ そうです♡」

「テメエじゃねえよ」

喜ぶキリアの首根っこを掴み、ドフラミンゴは馬鹿を引きずっていく。

「ああ、そんなあ！ 俺はあの美女と戦うんだ！ 離してよパイセン！」

「馬鹿を言うんじゃない！ テメエはカイドウと戦うんだよ！」

「嫌だよ！ どうしてあんな髭面メンヘラ拗らせ中年露出狂酒臭おじさんと戦わなきゃいけないんだ!! 嫌だよ！ カイドウキモいよおおおおお！」

「……」

「馬鹿！ 俺だって同意見だが、アイツと戦うって決めただろうが！

男なら腹くくれ！」

さらっとキリアの言葉に同意してカイドウに精神ダメージを与えていくドフラミンゴ。

「あとは任せたぞ、モリア」

「ああ。テメエもそいつを任せたぞ」

「……ああ」

こうして飛び六胞たちはくまとモリアが相手をする事が決まった。



大看板たちは宴会場を離れ、飛び六胞たちもまた戦闘を開始している。

宴会会場を覆いつくしていた圧倒的な数の戦士は今や無惨……!! キリア、ドフラミンゴ、ハンコックの覇王色でかなり人数が削られていた。

覇王色に耐えて残っている強者たちもいるが、彼らとてこの2人を前にしては雑魚も同然だろう。

悠々と歩みを進めた最後の七武海であるドフラミンゴとキリアは宴会会場の2階にて悠長に酒を飲んでいるカイドウを見上げた。

流石にここまで来てふざけるほどキリアの頭は終わってはいない。ドフラミンゴと共に鋭い視線で百獣海賊団の長を睨みつけている。

二人の視線を真っ向から受け止めながら酒を一升飲み干したカイドウは酒臭い息を吐き出してから言った。

「髭面メンヘラ拗らせ中年露出狂酒臭おじさんで悪かったな」

「根に持ってたのかい。意外と女々しいんだな、お前」

「流石に言っていることと悪いことがあるだろうが」

「否定はできない」

カイドウの性格が女々しいことに驚きながらもドフラミンゴは言い過ぎの馬鹿を横目で睨む。

馬鹿は極めて真剣な表情でカイドウを睨みつけながら鼻くそをほじっていた。

「……まあ、この馬鹿のことは無視するとして。俺たちもそろそろ始めようじゃねエか、カイドウ」

「ウオロロロ……なんだ、本当にテメエら2人だけで俺を相手にするつもりか？ この間のドレスローザでは手も足も出なかったくせに」
「確かにこの間は不甲斐ない戦いをしちゃったが……前までの俺たちと同じと思ってもらっちゃ困るな。あれから一か月経った。俺たちだって何もしなかったわけじゃねエんだぜ？」

「たった一か月で俺と張り合えるくらいにまで強くなれるんなら苦労はしねエんだよ！ だがまあ、テメエら以外に戦う奴らが残ってねエのも事実か……あまり気乗りしないが仕方ねエ。ついて来い」

そう言ってカイドウは巨大な青龍の姿になって天井を突き破り、鬼ヶ島ドームの屋上へと昇って行った。

「……行くぞ、キリア」

「うつつ」

カイドウと同じく飛行能力を有している二人もその背中を追う。

キリアが竜の翼を羽ばたかせ、ドフラミンゴが糸を操りながら屋上に到達した時、カイドウは満月の光を浴びながら佇んでいた。

その圧倒的な存在感は神話上の生物と言っても過言ではないほどだ。

『ウオロロロ……今宵は満月か。テメエらを殺したら月見酒と洒落こむか』

「余裕かましていいいいのか？ 飲みたいなら今のうちに飲んでおくことを勧めるよ」

『デカイ口を叩くじゃねエか、新人。すぐに楽にしてやるからそう生き急ぐな』

「こつちは善意で言っただけだ」

『ふん、相変わらず舐めた野郎だ。……始まる前に一つ聞いておきたい。怪物野郎、テメエさつき霸王色を使っただけか？』

「ああ、使ったよ。なんだ？ 羨ましいのか？」

『ほざけ！ 俺が聞きてえのはどうしてテメエのようなちやらんぽらんに霸王の資質が宿っているのかだ！ テメエ、アホの振りをしてるだけで実は王の座を狙っているのか？』

「さあ、どうだろうね？ 一発殴らせてくれたら教えてあげてもいいよ」

「ウオロロロ……やっぱり読めねエ奴だ」

龍の姿から人の姿に戻ったカイドウはキリアの読めない言動に多少イラつきながらも戦いを始めるべく自慢の金棒を握った。

「俺ア、強い奴が好きだ。さつきは部下たちの手前雑魚といったが、テメエらのことだって結構好きなんだぜ？ だからよお——」

全身に凶悪な覇気を巡らせながらカイドウは牙をむいて笑った。

「頼むからテメエらのこと、嫌いにさせないでくれ」
臨戦態勢に入った四皇の前にキリアが構える。

竜の翼を展開し、右腕を竜頭に変化させ、脚を山羊のそれに変化させる。

同じように臨戦態勢を取るドフラミンゴは指揮者のように両腕を持ち上げた。

「安心しろ。失望はさせねエよ。やれ！ キリア！」

「おうー！」

「ッ！！」

開戦は突然だった。

ドフラミンゴが両手を翳した瞬間にカイドウの身体が一瞬だが硬直させられる。

(会話の最中に仕込んでやがったのか……！)

だが、以前にもこの糸による拘束は経験している。

難なくドフラミンゴの糸から力づくで脱出したカイドウは視線を上げて驚愕した。

「開戦っていったらやっぱりこれだよなア！」

(なんだコイツ！ 前より早エ……！)

凄まじい速度でカイドウへ接近していたキリア。

彼は不敵な笑みを浮かべながら竜に変化した右腕を振り上げる。

そのまま覇気を込めて殴りつけるだけであればいつも通りの攻撃ではあるが——今回は少し違った。

(悪いな、船長。アンタの技、ちよいと借りるぜツ！)

竜の口が開き、火炎を吐き出す。

その炎を竜頭の拳全体に纏わせる。

正史の世界において、かの麦わらの男が横たわる侍たちを目にし、怒りと共にカイドウへ放った拳。

慢心する四皇たちの目を覚まさせた未来の海賊王の一撃。

技の威力も、戦う理由も、背負っているものも、何もかもが違う。

しかし、その拳を構えるキリアに一瞬だけ麦わら帽子を被る太陽のような男の影が重なった。

「業火竜拳ツ——!!」

炎を纏った巨大な拳がカイドウの顔面に突き刺さる。

(なんだ、この威力は……！)

顔面を歪ませながらも何とか持ちこたえていたカイドウだが、遂には踏ん張りが利かず殴り飛ばされた。

地面に頭をめり込ませながらも致命傷には至っていないのか、ゆっくりと顔を上げるカイドウ。

だが、その瞳には油断の色など欠片も残っていないなかった。

地面に着地したキリアは自慢の金髪を整えながら事前の問答通り、殴らせてくれた四皇に向かって口を開いた。

「王の座を狙っているのかって言ってたね。悪いけど、俺は王になんて欠片も興味はないよ。ましてや海賊王なんて本当に心底どうでもいいんだ」

「……」

「でも、アンタを倒せるならなってやってもいいよ？ 王様に」

「……なんの王にだ？」

百獣のカイドウにキリアは答えた。

「怪物の王に」

霸王の資質を持つ七武海の異端児が不敵に笑う。

鬼ヶ島の各地で巻き起こる戦い。

こうして後世まで語り継がれる七人の海賊の伝説——百獣海賊団との大戦争がここに開戦となった。